

石布合攻

置碁必勝法

上

795.
Ka4880




六段雁金準一著

布石
攻合
置道
碁基
必勝
法

東京大阪屋號發行
斯文館

795
Ka4880
(A)



六段雁金一

Text in the right page, including faint vertical characters and a circular stamp. The stamp contains the text: 書, 國會, 38.8.-5, 圖書編纂部.



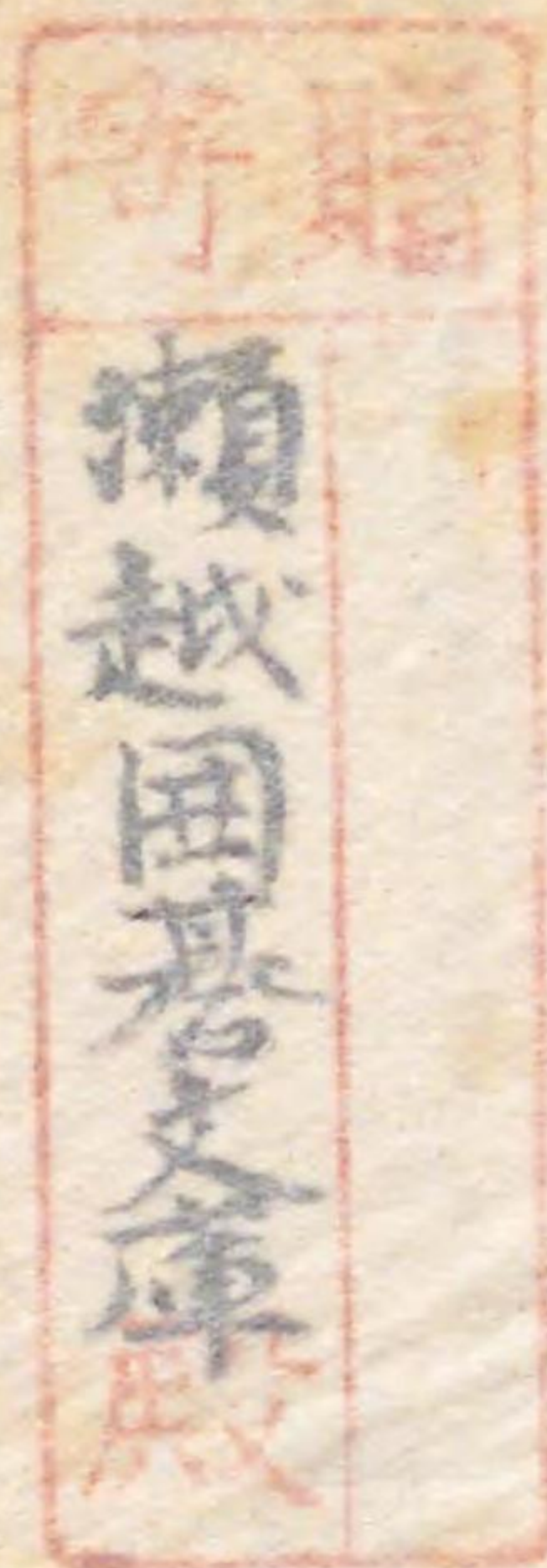
贈
瀨越國基文庫

617233

795
Ka488o
(1)



六段雁金準一



617233

緒言

置碁の本源は四五子に在り、而して其本領とする所は守勢を主とするに在り、何となれば黒は既に四隅に割據し以て天下併呑の勢ひを成せばなり。又何を苦みて漫に攻勢を取るの要あらんや。之に反して白は寡を以て衆と戦ふ、勢ひ黒の根據地に向つて攻勢を取らざるを得ず。併しながら攻むるにも自ら法あり、守るにも亦た自ら法なくんば非ず。是れ古來定石ある所以なり。然れども定石必ずしも定石に非ず。形勢に因つて變化するを知らざれば終に趙括の運命を免かるゝ能はざるべきなり。善く泳ぐ者は溺れ、善く走る者は躓くに非ずや。

本書は此に鑑みる所あり、古來の碁書の如く、單に攻勢對守勢の形式的布石のみに止めずして、更に黑白攻防の手段及び侵分の手順

に至るまで、十數局を掲げ以て圍碁兵法の要領を明示し、加ふるに實戰圖に就て、極めて親切に布石、攻防、侵分の利害得失を詳解したるものにして、古今無類の珍書なり。其局數實に七十餘局、日子を費すこと實に三年、六段雁金準一氏が畢世の一大新著述と謂ふも過言に非ざるなり。世の碁家たるもの善く之を會得し、善く之を應用して過たずんば、則ち毎戰必勝を得ること疑ひある可らず。之を以て緒言と爲す。

大正五年九月

編者識

布石
攻合
置碁必勝法目次

第一局	▲黑白の手段	▲黒十六のおさへ	自一…至三
	▲黒二六と二八の急所	▲黑白攻守の勢を轉ず	
	▲黒四の挟み肝要	▲白△の詰め肝要	
第二局	▲黒白の振替り	▲黒十六の手段	自四…至六
	▲黒※印の詰め肝要	▲白一のつけ妙ならず	
	▲黒力の並び善し		
第三局	▲黒白擲手しらべ	▲圍中の活策九	自七…至一二
第四局	▲黒白の小手しらべ	▲白五△二子逃掛の駄賃	自一二…至一五
第五局	▲兩裾あきは棄て置き	▲黒二の振替り手段	自一五…至二〇
	▲黒白兩軍の繩張り	▲印裾明と左上隅の戰略	
第六局	▲白三策濫用の祟	▲黒白の敵本戰略	自二〇…至二四
第七局	▲黒子の蜻蛉形は楔子抜け	▲黒ほは紛雅の碁か	自二五…至三〇
第八局	▲黒四十の三策		自三〇…至三五
第九局	▲乙圖黒十三、十五の兩下り		自三五…至四〇
第十局			自四一…至四五
第十一局	▲白兵戰	▲白※印打込の利害	自四五…至四九
	▲白六九窮寇を追はず	▲白※印駄目詰めの妙手	
第十二局	▲黒幾度か勝利の機會を逸す		自五〇…至五三
第十三局	▲白二三の一大失策	▲黒八六自殺的惡手	自五四…至五五
第十四局	▲砲彈距離外の砲臺	▲黒×印の刃	自五五…至五七
	▲黒三たび打込む機會を失す		
第十五局	▲黒二二は蝮蛇的惡手	▲黒八一着天下の形勢	自五八…至六〇
第十六局	▲うち手の呼吸	▲黒十八功成り名遂げた一將	自六〇…至六二
	▲黒三六戰略を誤る	▲勝敗の決四六の一手にあり	
第十七局	▲十二、十六の武者振り	▲狡兎狩出しの戰略	自六三…至六七
第十八局	▲搦み攻めの戰略	▲黒三十閑門をめて味方を苦む	自六五…至六七
第十九局	▲黒八八の切三たび好機を逸す	▲黒イの聯絡を困殺す	自六八…至七〇
第二十局	▲黒二二の手順を誤る	▲黒三三の敵を追立つ	自七〇…至七一
	▲黒三四絶地弄兵	▲黒六二敵膽を寒からしむ	
第二十一局	▲黒三六計應用の場合	▲黒七二蝮蛇を驅り出す	自七二…至七三

第二十二局	自七三…至七五	第三十二局	自九六…至九八
▲黒十三の跳めと隅の死活		▲十八と裾明き	▲二八の戦略
第二十三局	自七五…至七九	▲九六、九八の自滅的行動	
▲十四は啊呷の存する處	▲四三を顧みて他を曰ふ	第三十三局	自九八…至九九
▲六十風聲鶴唳に驚く		▲九四以下は金鵝勳章	
第二十四局	自七九…至八一	第三十四局	自九九…至一〇〇
▲四閑地に兵を弄ぶ	▲散地二十と領地二一の交換	▲五六と※印の交換	
▲三九は則ち敵本主義	▲十六と天秤策	第三十五局	自一〇一…至一〇二
第二十五局	自八一…至八四	▲十八のボウシヲ摧人手段	▲五一は急所
▲黒△印侵略の絶好機會	▲敵地侵掠の利害	▲白九無理手段の大成功	
▲黒七十は夏の蟲	▲酣戦中に裏木戸の用心	第三十六局	自一〇三…至一〇三
第二十六局	自八四…至八七	△白※印の覗きを逸す	
▲二二以下圍地に活を貪る	四四▲空しく大軍を失ふ	第三十七局	自一〇三…至一〇四
▲七五の一手忽ち勝敗顛倒		▲黒四三の打込み肝要	
第二十七局	自八七…至八八	第三十八局	自一〇五…至一〇六
▲強硬なる三四の打込み	▲黒イ變に處する作法	▲五一の苦肉策	▲黒四八の鐵壁利用策
第二十八局	自八九…至九一	▲鐵壁の効果	
▲蜻蜓形の安普請	▲黒※印の敵本戦略	第三十九局	自一〇六…至一〇八
▲五二駄目詰の失策		▲七の任務	▲六一は敗因の一
第二十九局	自九一…至九二	第四十局	自一〇九…至一一〇
▲六は危険區域	▲黒四六は蟬の脱殻	△白二七の戦略	▲黒二六の小修繕
▲黒イの備へ肝要		▲二四以下打廻し善し	
第三十局	自九三…至九四	第四十一局	自一一〇…至一一一
▲黒六五の搦み攻め	▲二八の犬死	▲×印の飛びと※印の下り	▲七の縛込み妙
第三十一局	自九四…至九六	第四十二局	自一一一…至一二二
▲十二の跳込み肝要	▲九の跳ね、大敗の基	▲黒二三	と外方發展

第四十三局	自一一三…至一一四	第五十五局	自一三〇…至一三一
▲黒のり印の戦略		▲屢々七四の好機を逸す	
第四十四局	自一一四…至一一六	第五十六局	自一三一…至一三二
▲黒には潜龍	▲四二、四四は趙括式	▲四二、四四の手柄	▲却争の大激變
▲六十臨機の手段を要す	▲十一の打込み無謀	第五十七局	自一三三…至一三五
第四十五局	自一一七…至一一八	▲九の眩惑手段	▲四三の計略
△×印劫争の手段	▲左右兩劫	第五十八局	自一三五…至一三六
第四十六局	自一一八…至一一九	▲七の立枯策	▲四四の掛粘面白し
▲四二長蛇を逸す	▲黒十の手柄	第五十九局	自一三七…至一三八
第四十七局	自一一九…至一二〇	▲※印の打込は急所	
▲九二は金鵝勳章		第六十局	自一三八…至一三九
第四十八局	自一二一…至一二二	▲四二は紛擾の基	▲黒四五の激烈なる却争
▲四八、五十の犬死	▲黒二八大事を誤る	第六十一局	自一三九…至一四〇
第四十九局	自一二二…至一二三	▲黒二六の手筋	▲フラ／＼石の處置方
▲四二味消しの悪手	▲黒二四の機會	第六十二局	自一四一…至一四二
第五十局	自一二三…至一二四	▲六八戰機を逸す	▲黒二目を吝みて敗勢を兆す
▲白軍の大敗		第六十三局	自一四二…至一四三
▲黒い臨機の策	▲四六の腰折れ	▲黒十九追風に帆の趣向	▲黒十五と内外振替なり
▲白九の凱旋	▲黒九の好機を逸す	第六十四局	自一四三…至一四四
第五十二局	自一二六…至一二七	▲黒いの大場を失す	▲白勝を讓る
▲黒ルの急處を逸す	▲四五腹頂け妙ならず	第六十五局	自一四五…至一四六
第五十三局	自一二七…至一二八	▲黒軍空く長蛇を逸す	▲黒と印の兩睨み
▲黒×印の攻勢	▲七四隠忍、六十の殺到	第六十六局	自一四六…至一四七
第五十四局	自一二九…至一三〇	▲黒八以下の溝渠	▲黒八九以下の功名
▲十六、十八の機轉	▲三六は趙括式		

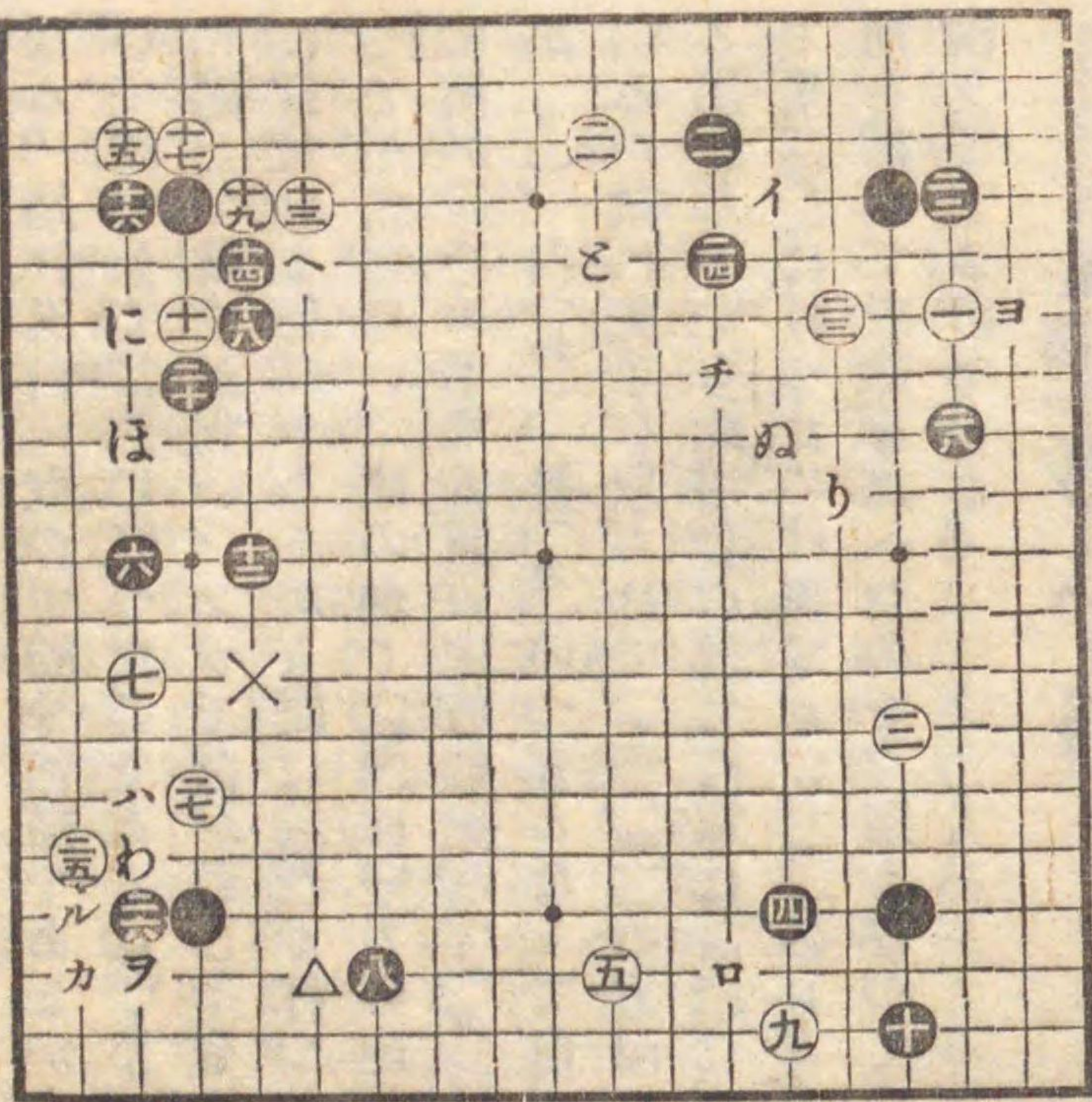
- 第六十七局……………自一四七…至一五〇
- ▲黒※印の攻めを逸す ▲白十五は鬼面
- 第六十八局……………自一五〇…至一五一
- ▲七八の返り討ち ▲恐るべき白は、にの陰謀
- 第六十九局……………白一五一…至一五二
- ▲五六と手抜の氣轉
- 第七十局……………自一五三…至一五四
- ▲黒三十以下敵地に壁 ▲黒四二、四四の蛇足
- 第七十一局……………白一五四…至一五五
- ▲黒二十は一手の損 ▲四七は過慾

布石置碁必勝法上卷

六段 雁金準一 著

●第一局

▲黒白の手段 本譜の如く白が(二)とかうつた時は黒が普通である。夫れから白が(三)と二間高にかうつた時は黒は(四)と一間締りに應ずるのが常用の手段である。或は(ロ)に締る手もあるが、それは左下隅方面に白のある場合で、行手に敵が居なければ譜の如く高く締るのが通形である。黒(八)は所謂目下の大場で、此場合唯一の要處であるから黒が此地點を占領したの



其時を得た者である。白(七)は黒が(三)に締るのを妨げた譯で、其時黒は(十二)に締る手段もあり又(ハ)に詰めて居ても悪いことはない。假に黒(十二)に締るとせんか白は無論(△)

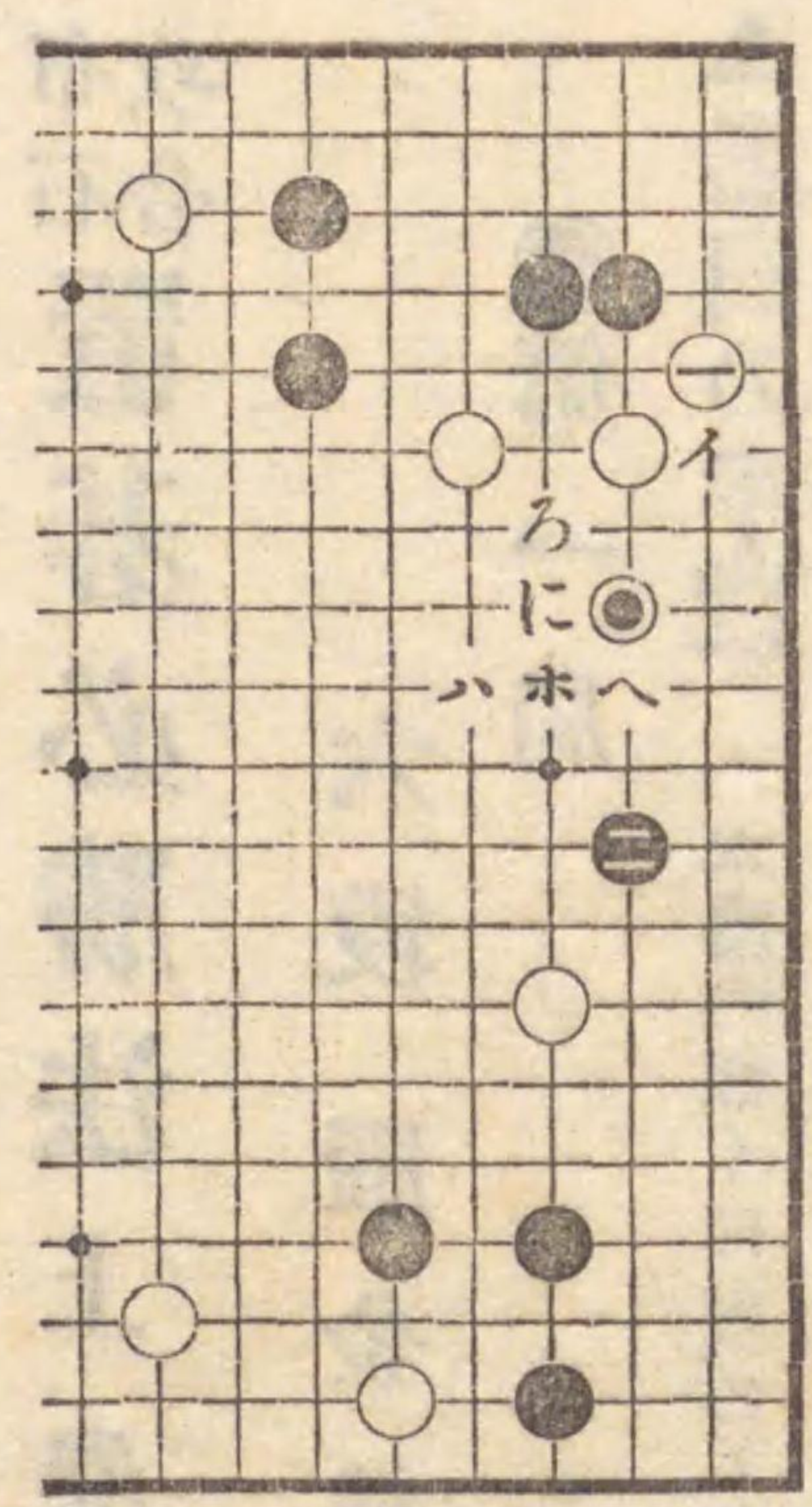
印に詰め掛るべく又黒(ハ)に詰めんか、白(×)印に飛び黒亦(十三)へ飛ぶこともあるべく、或は白(×)印に飛ばずして左上隅の置石と(六)との間に割打ちをして(七)の一子を軽く棄て、打つ趣向もあるが此處では先づ黒が(六)と締つた手段を示すのである。以上三通りの手段中、孰れを用ひても悪いといふことはない。白(七)は根據を作る爲めに打つた手で、黒(七)は先づ斯様に受けて置く方が無難である。俱に普通の手で別に説明する程の事もない。

▲黒(十六)のおさへ 白(十二)は(ハ)へかゝる事もあり、又(ハ)に挟む手段もあるが、是れは趣向によつて高くかゝつたのである。黒(十三)は左上隅丈けに就て言へば(十三)に締るのが普通であるけれども、左すれば白から(十三)杯へ冠ぶせられて紛争を生ずるから、それを嫌つて譜の如く黒(十三)へ飛んだので、此の方が白に對する響きが強い譯である。併し黒(十三)へ飛ぶ手で(十三)に締つたからといふて敢て悪いといふことはない。黒(十四)から(十五)までは普通の應手で、其中で注意すべきは黒(十六)の手である。之れを(十七)の方に約へると白(十六)黒(八)となる外はあるまい。トなつた所で前の方に黒地が出来たといふ譯でもなし、且つ(六)(十三)の二子が未定の形になつて了ふから譜の如く(十三)までの運びを爲す方が紛れ少くして宜いのである。扱又白(三)より黒(四)までは普通の形であるが其中白(三)は自己の繩張を擴げると同時に右上隅の黒を攻むる意味を含んで居る手である。

▲黒(二六)と(二八)の急所 白(五)は考慮を要する所で、此場合白は(十三)と(三)の間を荒されぬやう先づ(七)に飛び、黒亦(チ)に飛んだ所で白(リ)或は(ぬ)に用心したいのであるが、左うすると黒から先手で(ハ)に挾撃される事に

なる。是れ又白に取つて随分苦痛であるから前面は暫く棄置いて譜の如く(三五)に打つたのである。然るときは黒は單に(三六)に應じて置くが宜い。ソコで白が若し手を抜けば黒から(ハ)に打たれる恐れがあるから既に(三五)と打つた以上は手を抜くことが出来ない。譜の如く(三七)に守るのが普通である。然るに黒が(三六)の手で普通の定石に泥みて(ル)に約へると白(三六)黒(ヲ)、白(ハ)、黒(カ)のつぎとなりて白の形を備へしむるのみか敵に先手を取られて(十三)(三二)の方面に先鞭を著けらるる事になるから此場合に於ては單に(三六)に打つが宜い。尋いで黒(三八)に打つたのは要するに(ヨ)の互りを含みつゝ敵の急所を衝いて攻撃を加へたので、斯うなつては此邊の白模様は消えて了ふ譯である。

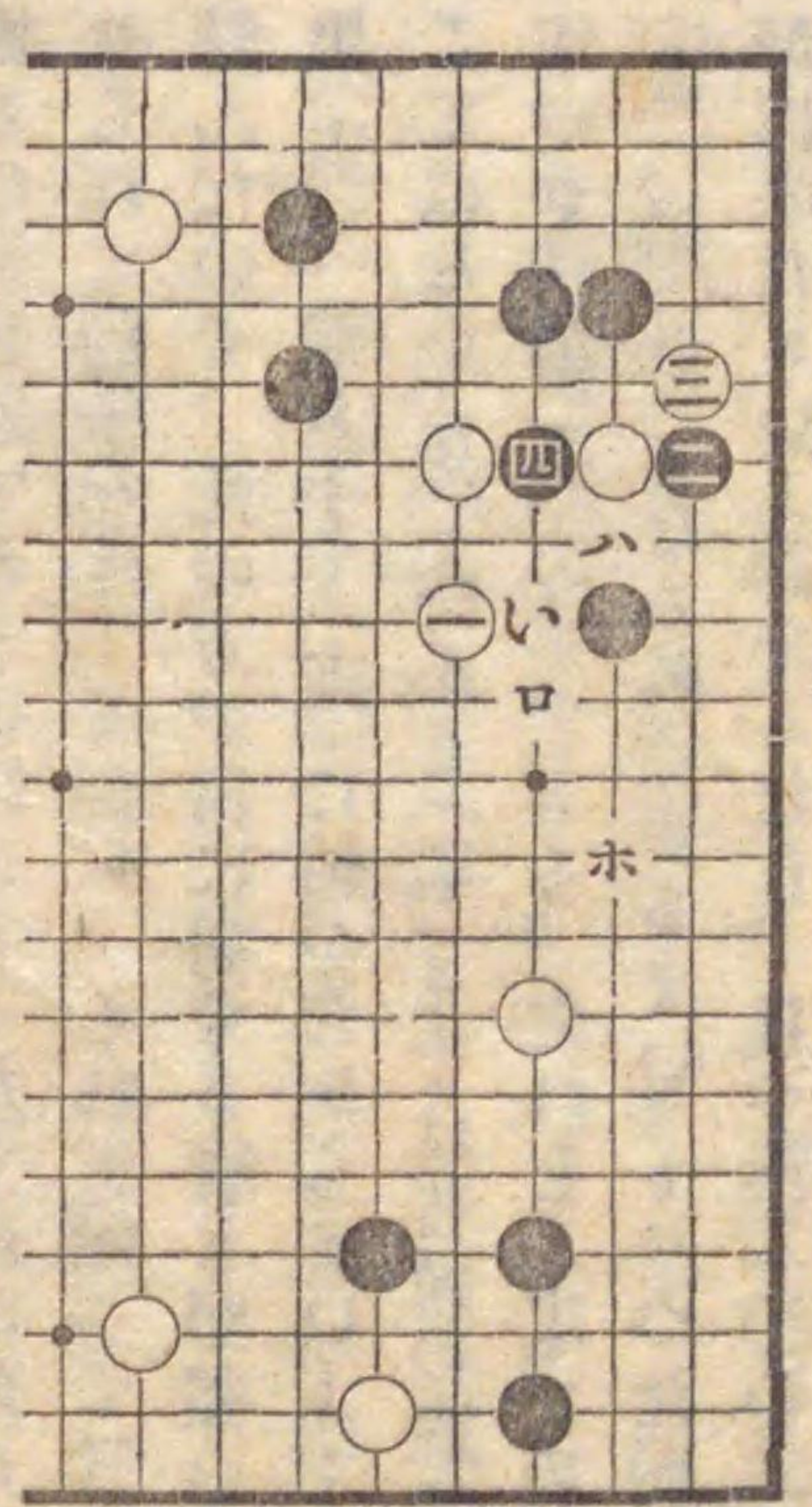
▲局第一圖



▲黑白攻守の勢を轉ず 白(二)は(イ)の互りを禦ぐ爲めに打つたので、左すれば黒は譜の如く單に(三)へ展開するが宜い。多少隅を荒らさるゝ懸念はあるが、斯うなつては黑白攻守の勢を轉じて却て白が攻められて居る形で、得、失を償ふて餘りあるのである。▲白(二)の變化 又白(二)にこすま(ろ)にこすみて互を止めれば黒は輕(ハ)は斜走するが宜い。ソコで白が(二)に出で黒(ホ)に押へ

白(ハ)に切る手段に出でなば黒は無論一子を棄てて打つ心得が肝要である。尙ほ變化があるが餘り混雜するから次圖に就て説明する。

▲局第二圖

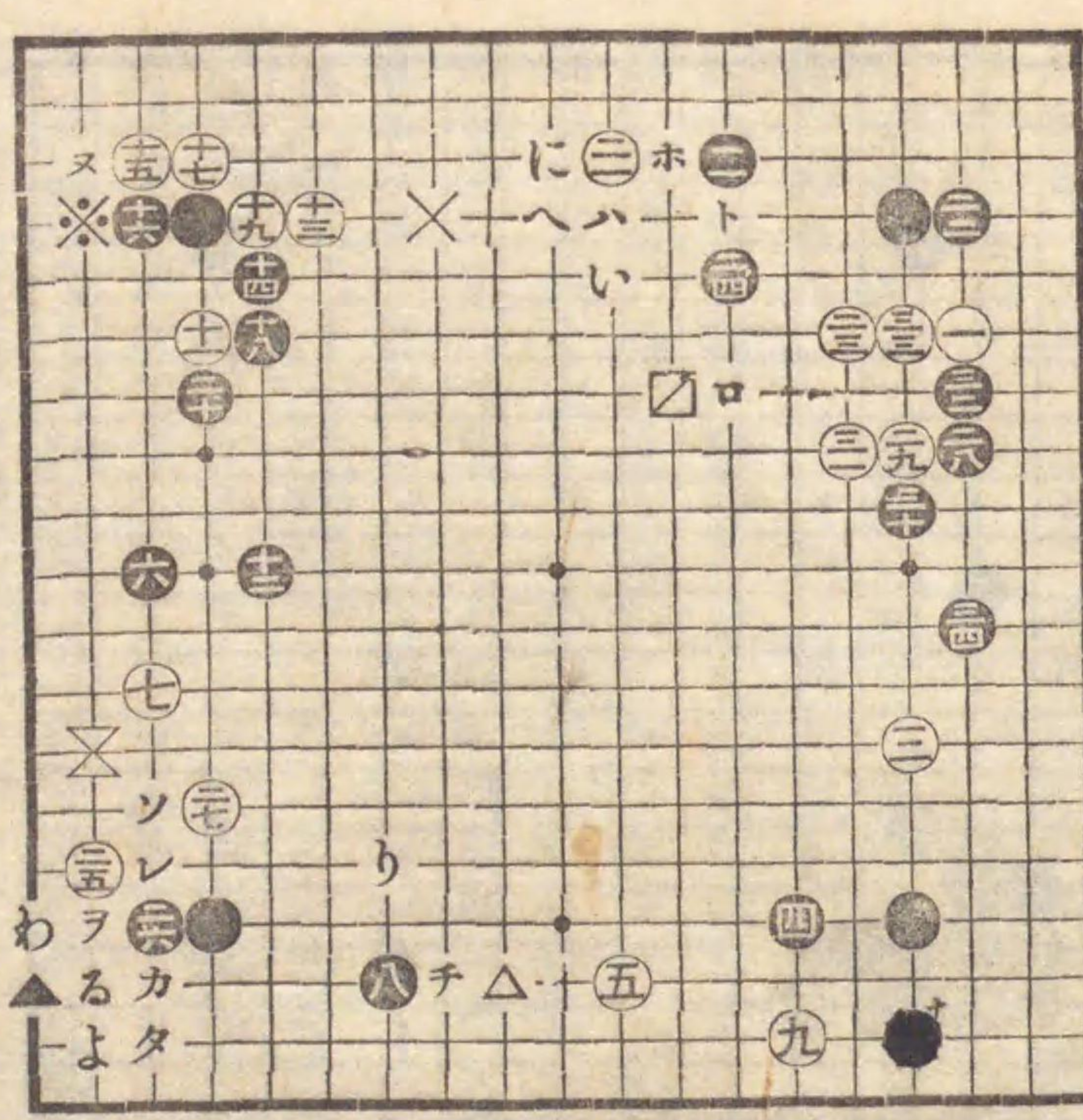


▲黒(四)の挟み肝要 本圖は前圖白(二)の變化で是れ又一手段である。就中肝要なるは黒が單に(四)へ挟む手である(詳細は草薙の巻に在り) ▲白(二)の變化 白(二)或は(イ)につけることもあらんか。若し然らば黒(ロ)にはね、

▲局第三圖

▲白の作戦如何 扱て黑白の陣形既に成りたる本局面に於て白は如何に進退すべきかといふに、白先づ(イ)に飛び、黒亦(ロ)へ飛びたる其機會に乗じて、挾撃を被りつゝある(二三)以下の石を逃げ出す趣向に出づるも亦一策である。併し白は(イ)の手で先づ(四)の處へ斜走に遁げ越し黒が(イ)に飛ぶか或は(ハ)につけて中原への出路を求むる其機みに(三二)の一子を北げながら領域を固むる趣向もある試に黒(ハ)につけるとせんか ソコで白が單に(二)へ引けば黒(ホ)に突

第三圖



當り、白(ハ)に曲り、黒(イ)のびとなる。斯うなると白地も確實になる代りに黒の形も亦好くなる。或は白(二)へ引く手で(ハ)にはねなば黒(イ)、白(ホ)、黒(ト)となる、斯くしては前の形よりは幾分か黒

▲白△の詰め肝要

さうなつた所で今度は白は(三)の一子の收まりを著けねばならぬ形勢である。左もなくば(二)ら先づ此(三)の一子を先手でキマリをつけて、さうして△印へ詰めるのが一番大きい手である。黒から△印へ詰められる事になる、黒地が固まる許りではない、(五)の二子を攻められる結果を生ずるから△印の詰めは是非とも白が先手で打ちたいのである。今假りに白が△印に打たりとしてソコで黒は先手を取らんと欲せば(チ)に突當るべく、又他に好い處もなく後手になつても宜いと思は(リ)に飛んで居ても宜い。夫れ

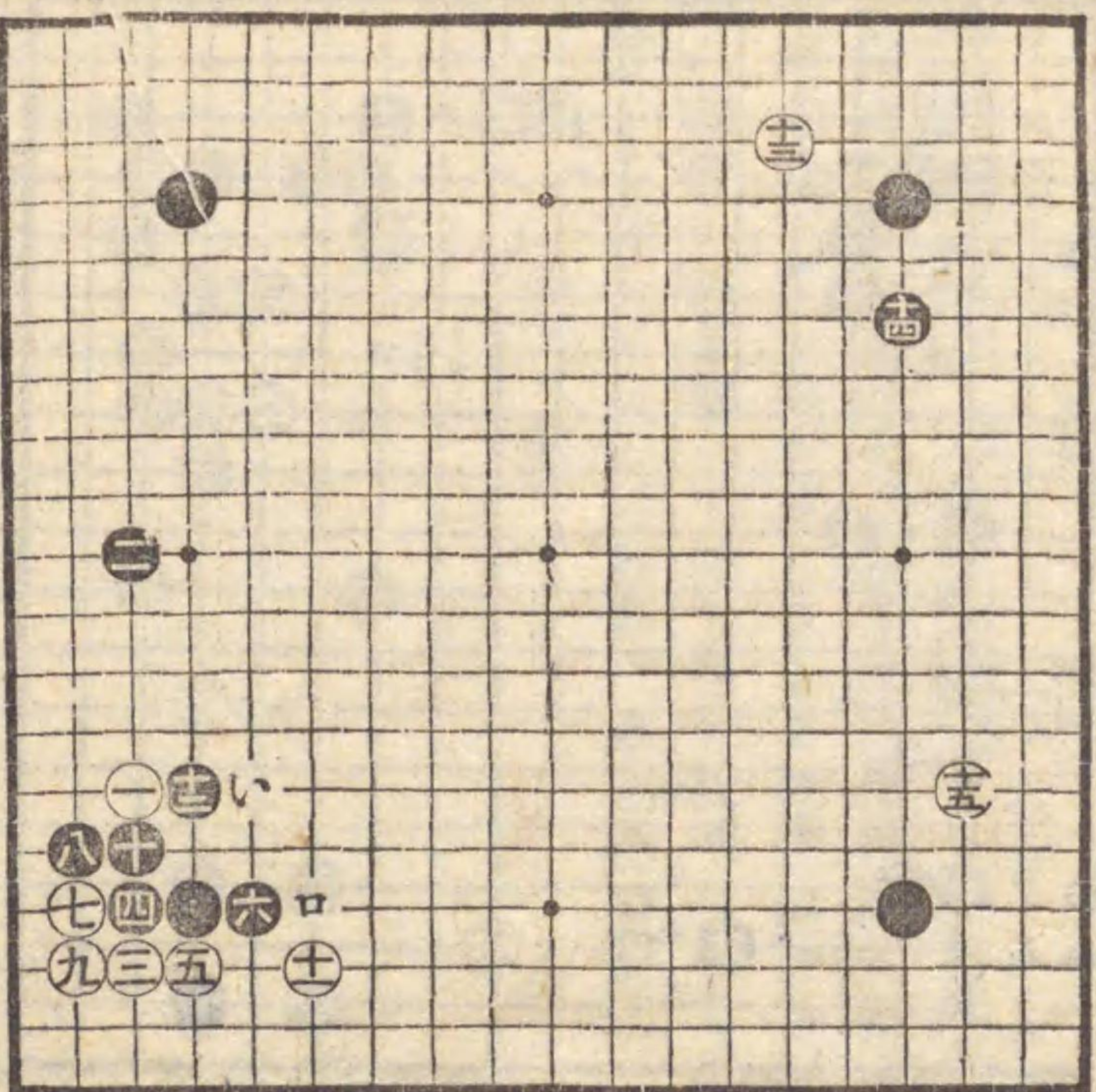
から茲に注意を要するは△印のはねである。これはいろいろ味のある處だから白は此はねつぎを見合はせて居るのであるが併し黒が(ヌ)にはねつぐとすれば後手になる。だから斯ういふ處は白からはねつがれるものと目算して居なければならぬ。

▲黑白の大勢

情ら大勢を案するに前面の方は黒(ハ)白(ハ)、黒(イ)、白(ホ)、黒(ト)、となつた所で黒から△印へ打込まれる傷が残つて居るから是れは全然白地といふ譯にはいれない。其他には何處にも纏つた地がある譯でないから黒の方優勢なることは固より言ふを須たのである。否な白の棋勢は甚だ薄弱であるから思ふやうに地杯を貪つて打つことの出来ぬ形勢に在りと云つて宜い。尙ほ一つ注意をして置く必要があると云ふのは左下隅である。此處は所謂据明であるから(ル)に飛んで來られはせぬか杯と心配する向きもあらうけれども、それは少しも恐るゝに足らない。黒(ヲ)、白(ハ)、黒(カ)の約へとなると白の上の方の三子の間にいろいろな傷が出来る。毛を吹いて疵を求めぬやうなものであるから上手は決してコンナ手を打ちはせぬ。若し白が打つとすれば單に(ヲ)にのび込む位のものであるが、黒(ル)に約へ、白(ト)につけ、黒(カ)につぎ、白△印に互れば黒(タ)に約へて十分である。左すれば黒は後に普通ならば(ソ)につけ越すべき筋であるが、此場合は愚筋ではあるが單に(レ)に突出すが宜い。ソコで白(ソ)に押へと黒△印に置く筋が出来るから白は容易に(ヲ)にのび込むことも出来ず時機を見るの必要がある。夫故に黒は据明だからと云ふて少しも心配するに及ばぬ。此局面に於ては最早や他に説明を要する程の處もないから第二局に移る。

●第二局第一圖

▲黑白の振替り 黒(三)は遠く敵を攻めながら左上隅方面に模様を作らうといふ趣向で、目下の大場を挾撃かたかた占領したのである。其時白に於ては搦手即ち(十)の方面から攻める手段はいろいろあるけれども譜の如く(十三)に打込んで振替るのも亦常用の手段である。併し白(三)の手にて(イ)杯に飛びて黒(ロ)に締る運びとなつては白の方が甚だ割合ひが悪いといふことは記憶して置くが宜い。黒は白の趣向に乗るやうではあるが此場合は致方がない。尤も目下に黒(三)と打たぬ時ならば或は(五)におさへ、白をして(四)に聯絡せしめて打つ手段がないでもないが、既に(三)と挾撃の態度に出でた以上は



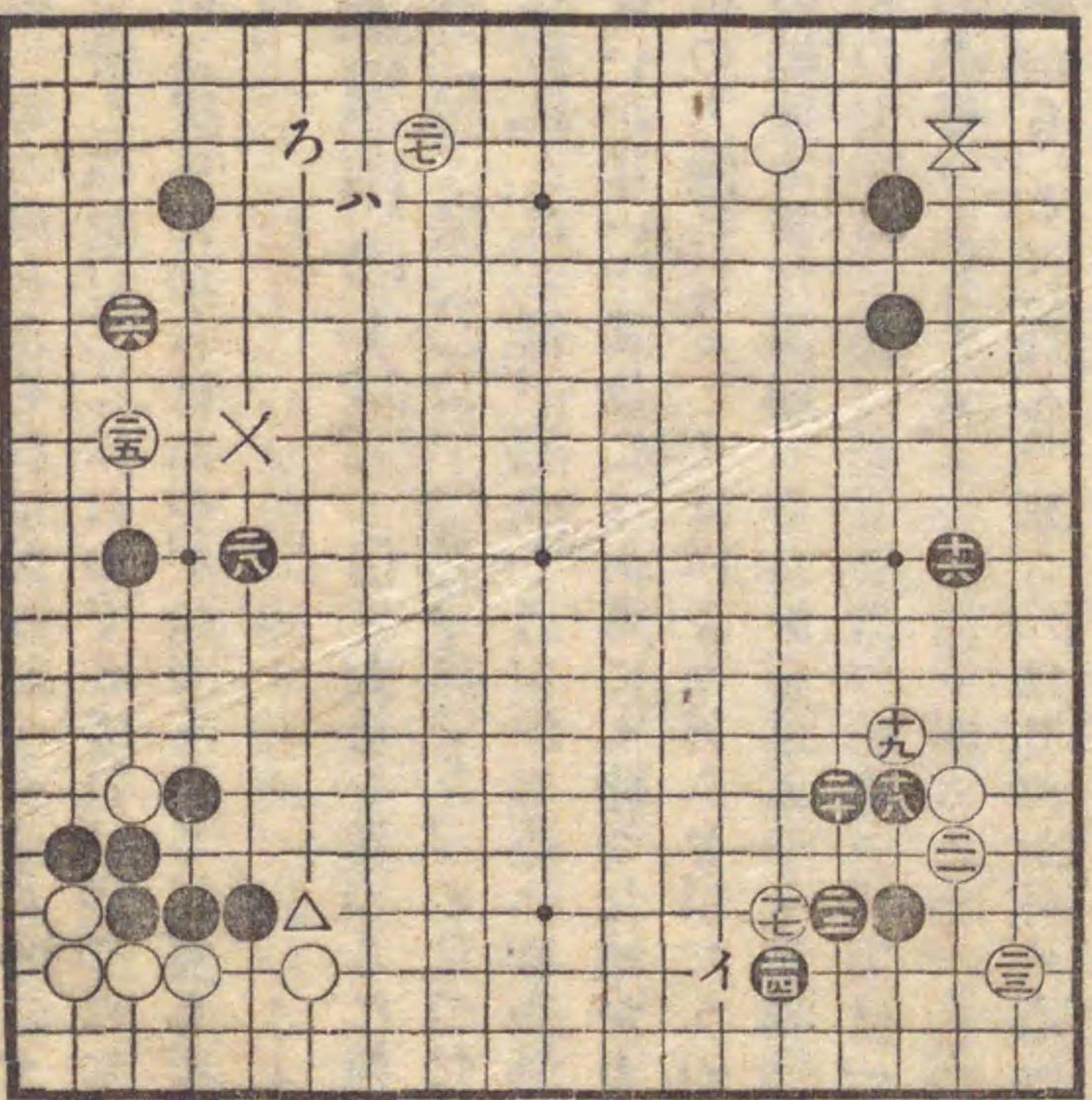
第二局(第一圖)

譜の如く(四)に遮断して振替る方が得策である。白(十二)までは常用の手で黑白共に斯くなくてはならぬ。そこで黒が(三)と打ちたるは最も堅實なる手である。若し之を棄置くと白は(イ)に飛んで来る。さ

うなると結局紛雜を生ずるから譜の如く收まりをつけて置くが宜い。

▲第二局第二圖

▲黒(一六)の手段 黒(一六)の手で(イ)杯に打つ者あるは往々見受ける所であるが此場合は宜しくない。なぜかといふに左下隅に於ける白の構へは低く(二)と飛であるのに、それを同位に締るのは位が低くなるからである。同じ締る位なら一間高に(二七)の處へ打つ方がマダ優つて居る。それよりも譜の如く(一六)と目下の大場を占領して遠く敵を攻めながら右上隅の繩張を擴げる方が餘程宜いのである。此に於て白が轉じて(二七)にかより黒(二四)までの應手は常用の手段で委しい



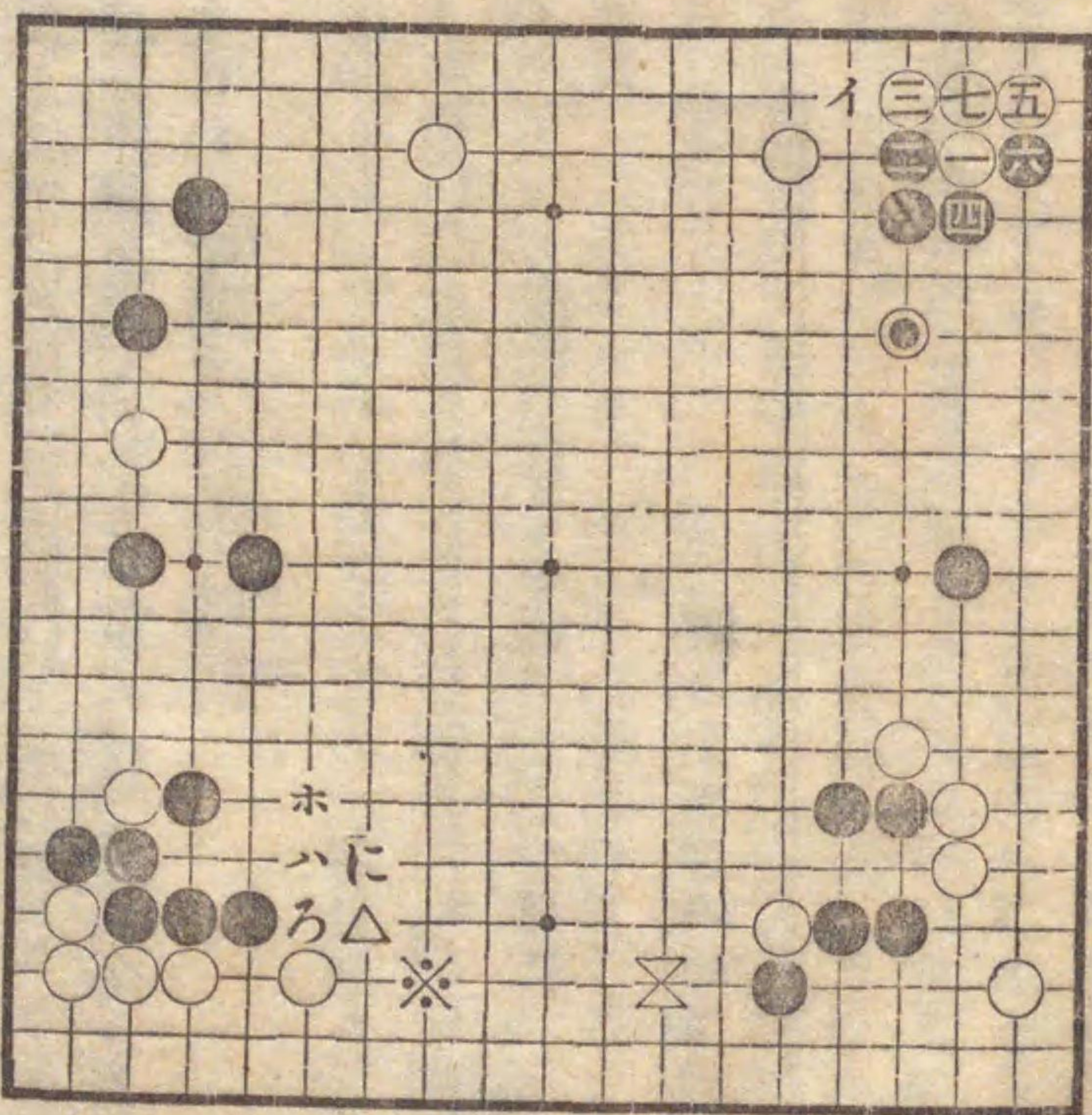
第二局(第二圖)

事は草雜の卷に説明してある。白(三五)は所謂割打ちで黒(二六)に挾撃するの亦普通である。窮鼠却て猫を噛む 扱て白が(二七)と當らず障らず遠く陣取つたのは大いに理由がある。(ろ)へ迫るのは

(二三)の味方と餘り離れ過ぎると同時に敵城に接近し過ぎる嫌がある。加之ならず(三五)の味方が搦手に孤立して居るから搦み打に遇ふ虞れがある。ソコで白は一方に於ては(三五)の味方に勢援を興ふる意味に於て、又一方に於ては(二三)の權衡を保つ爲めに(二)と打つた譯である。黒(三)は確な手である。(三五)の白は敵の動靜を見て進退を決しやうといふ棋家の所謂軽い石で、急に之を擒にしようとする窮鼠却て猫を噛むで味方の不利を醸すやうの事がないとは謂はれぬから斯ういふ敵は急に迫らず徐々に自分の地を固めながら攻むるが宜い。是迄の處では黒の局勢は申分のない形である。

▲白の打場如何 扱て黑白兩軍の陣形既に整ふ。此場合白の打場はドウかといふと先づ(イ)印に飛出すか、(ロ)印に打込むか或は(ハ)印へおすかの三策であらう。假に白が(イ)印へ飛び出したとすれば黒(ろ)に守るは誠に穩當であるけれども或は(ハ)の肩に打つて双方へ利かせるも亦一策である。次に白(イ)印に飛出さずして(ロ)印に打込まば如何。混雜を避くる爲め第三圖に於て説明する。

▲第二局第三圖



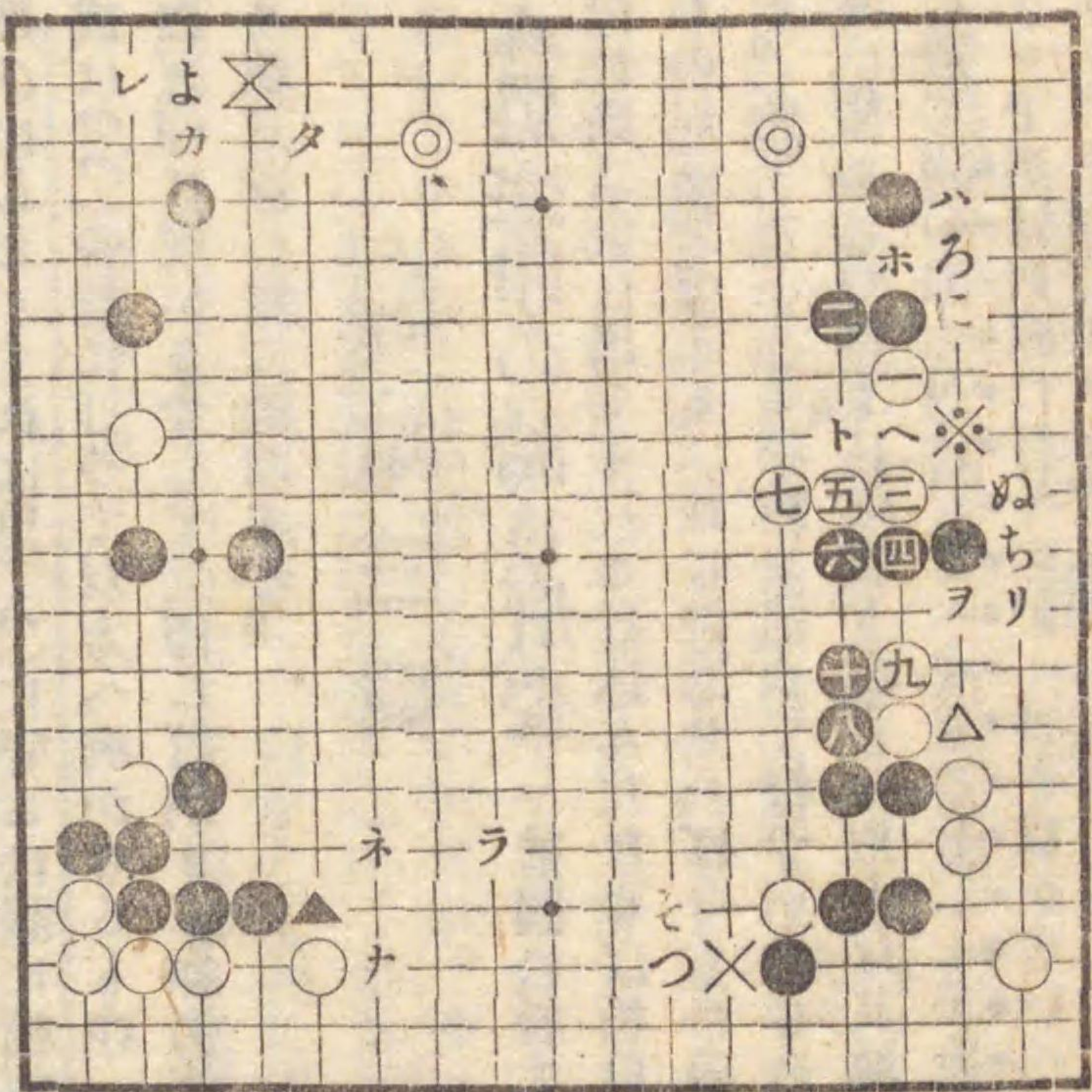
第三圖

(二)に打込まずして第三策即ち(ろ)におすにせば黒(ハ)にはぬ、白亦(ハ)へはね、黒(ホ)にのびて自己の形を厚くする一方に(イ)印の切味を狙つて打つが宜い。其時假に白が(ロ)印へ詰めたとしても黒から(ハ)印へ一本切りを入れられると上の黒の勢が強くなる反對に白地が薄くなつて了ふから白は容易に(イ)印へ開くことが出来るのである。尙ほ注意すべきことがある。

▲第二局第四圖

▲黒(イ)の詰め肝要 前圖に於て警告したる如く白が第二策に出で(二)と打込んだならば黑白共に譜の如くなるのが通形である。茲に注意せねばならぬのは黒(ロ)の手である。此手で(イ)に聯絡を絶つて打つ場合もあるが(ロ)印に一間高に締り且つ目下に繩張りをした以上は其地を擁護する方針に於て譜の如く(イ)におさへて先手を取る手段が肝要である。ソコで黒は何處に打つのが一番急務かといへば(イ)印の詰めである。若し白が(イ)印の急處に詰めらるゝのを嫌つて譜の如く

▲白(一)のつけ妙ならず 前々來説明せし如く白が三策中の其一を擇まずして萬(二)につけることもあらんか。黒はジツト(三)にのびるが宜い。抑も此(三)ののびは管に自己を守ると同時に外部の發展を期する許りでなく(イ)印を見て白(一)の間に打込まうといふ意味を含んで居る手であることを記憶して置くが宜い。それは暫く措いて白(一)へつけた結果は譜の如く黒に聯絡されて陣形が益々厚壯になる許りで



あるから餘り良い手では無い。尙又白(二)の手で此際強て△印へ打込む事もあらば黒は無論(三)にすむが宜い。白(ろ)、黒(ハ)、白(に)、黒(ホ)、白(へ)、黒(ト)となつたとき白(ち)につねばなるま

(レ)におさへるし又白が(レ)に出れば黒(タ)に飛んで十分である。さうなると上の白一子は益々深間に陥るから黒の方が宜い譯である▲参考。白或は×印へはねることもあらん。又(そ)に一問飛ぶこともあらん。其應手は草薙の巻に委しく説明してあるから此處には省略する。尙ほ一つ参考までに述べ置くのは▲印は前述の通り白に取つては肝要の處であるけれども併し白或は▲印におさすして單に(つ)に詰めたらばドウかといふ右下隅の黒軍は極めて堅實の姿であるから容易に攻められ氣遣ひはない。だから是れは手を抜いて黒(ネ)に斜走するが宜い。これは自分の地を厚くすると同時に敵地を薄くする最良の手である。尙ほ白が棄置けば黒は(ナ)につけて約へ附けて了ふ手がある。左りとて白が(ナ)に並ぶのは位も低く地も薄く且つ後手である。併し白が若し(ナ)に並んだらばモウ黒は其儘棄置いて他に轉じても宜いのであるが尙ほ一層敵を低くしやうと思へば(ラ)に飛ぶも亦一手段たるを失はぬのである。

白浪の打ちや返すさまつ程に

濱のまさごのかすぞ積れる

い。黒(リ)におさへ、白(ぬ)に引き黒(ヲ)のつぎとなると右下隅の白が手薄くなる。△印を切られる傷も残れば或は上の模様により黒は上から取掛けに行くやうな事にならぬとも限らぬ。斯くの如く右下隅の味方に波及する影響が厳しくなるからこの場合心得ある者は※印杯へ容易に打込みはせぬから斯様な處は少しも案するに及ばぬ。

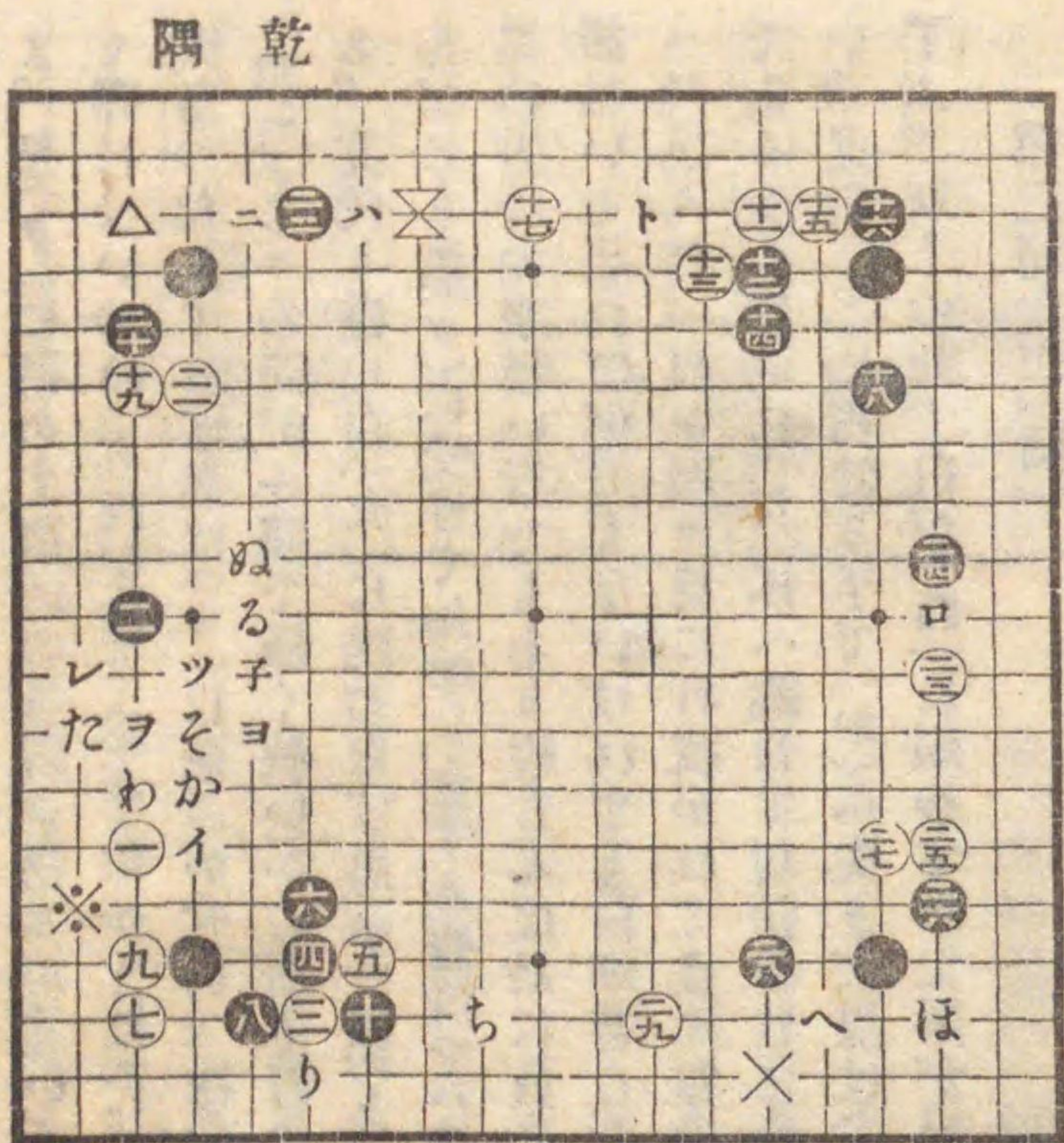
▲黒(カ)の並び善し 扱又白△印へはねることもあらん。若し然らば黒は單に(カ)に並んで居るが宜い。(よ)杯におさへると白から(カ)へはね込まれて白の形が備はると自然、上の一子の引出しが利くやうになるから是れは容易に打たぬ方が宜い。又白が一路進んで(よ)に侵し來つても黒はやはり(カ)に突當つて居るが宜い。ソコで白が△印へ引けば

第三圖中の活策九

第三局(第一圖)

▲黑白擲手じらべ 白(三)は所謂兩懸りで、黒(四)は既に草薙の巻に於て詳説した通り譜の如く打つのが定石である。然るにアベコベに(イ)の方につける者あるは往々見受ける處であるが、星下に黒の控えある場合に(イ)につけると自然星下の一子の立場が悪くなるなら譜の如く黒(四)につけることを忘れてはならぬ。白(七)は振變りの手段で黒(二)の切りとなるのが通

第三局(第一圖)



形である。黒(ハ)は(ロ)に打つても亦一策である。黒(三)の手で(ハ)に締る者あるは往々見受ける所であるが甚だ宜しくない。と云ふのは星下に白(七)の控えある場合に普通

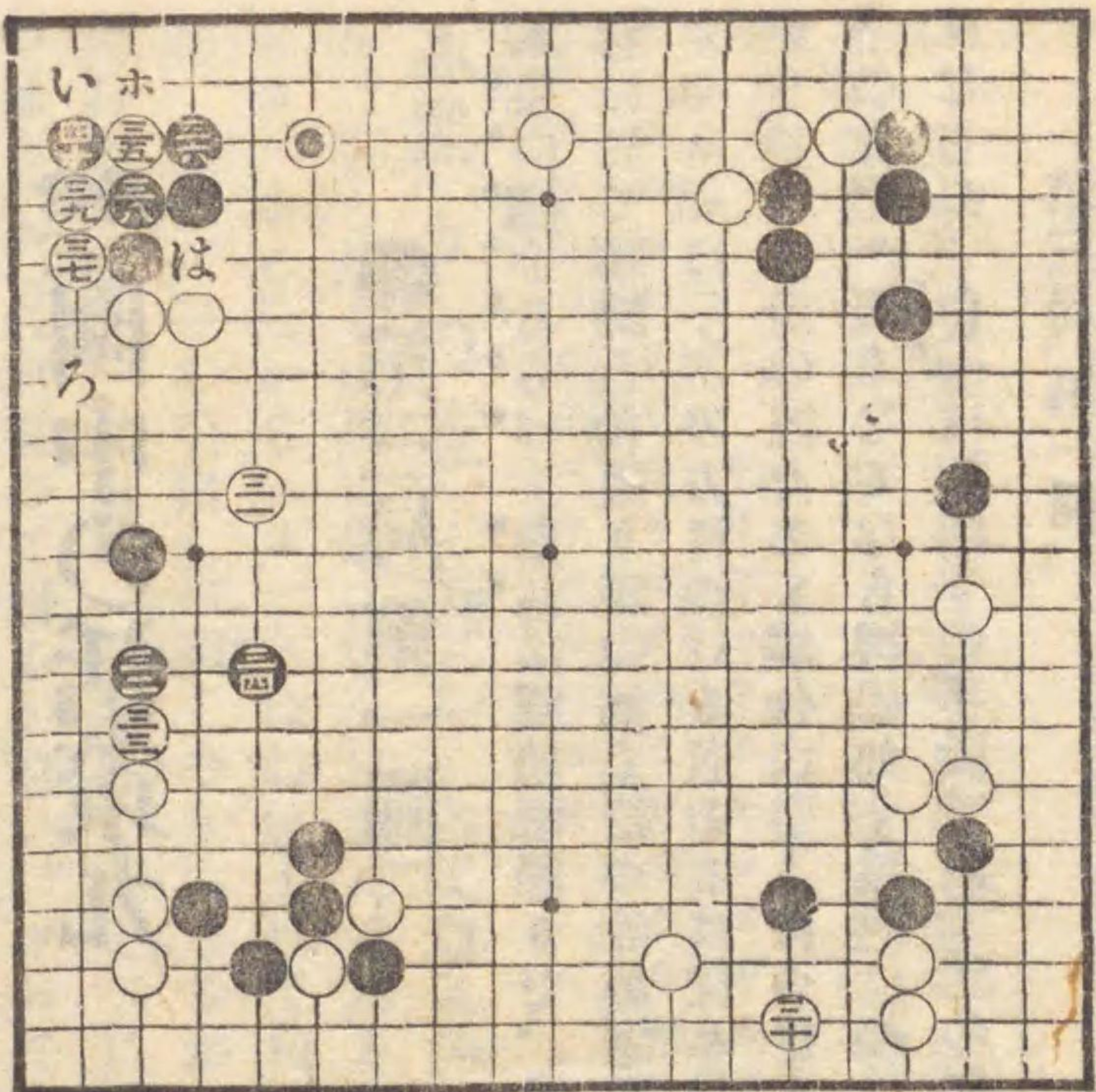
の如く黒(ハ)に締ると直ちに三々即ち△印へ打込まれて生きられ了ふ。さうなると黒は内外に敵を受けて競られる結果を生ずるから譜の如く(二)へ尖みつけ次いで(三)に締るが通形であるが或は(三)の手で(三)へ尖んで居ることもある。茲に注意を要するは黒(三)は星下に(三)の備えがあるから斯くの如く尖みつけたのであるけれども黒(三)の備えなき場合には手を抜くこともある。白(三)は所謂割打ちで、此場合黒が前後孰れから詰めても二間に展開しやうと云ふ趣向で斯く打つからは黒(三)へ詰め尋いで白の開きが二間で間合が狭いから譜の如く(三)へ尖みつけて(二)へ一間に飛ぶが宜いのである。

●黒の打場如何

▲×印と△印が唯一の好處 此場合黒の打場如何と云ふに×印へ固めるも一策であるが或は△印に詰めて居るのも唯一の好處である。抑も×印の守りは(1)×印の迂り込(2)ほの打込み(3)への覗き此三ツを防ぎ且つ白の便りとする根拠を奪つて徐々に(三)の白を攻めやうと云ふ戰略を意味して居るのである。又△印の詰めは(三)即ち△印の打込を附ぐ一方に(ト)の打込を狙つて居る手でもあり自ら(二)△印の白に幾分か響きを及ぼして居るのである。假に黒×印に固めたりとすれば白は何處へ打つが宜いかと云ふに(ち)に打つても亦一策である。それは自分を守りながら(三)の白を(り)へ延びて左右孰れかへ亘らうと云ふのであるが併し四子の置碁に對しては多少ぬるい氣味がある。此場合先づ乾隅に着手すべきである、けれども直ちに△印へ打込むと(二)△印の味方に累を及ぼすから順序として(ぬ)又は(る)に脅かして敵の動靜を窺ひ然る後に△印へ打込むべきである。ソコで白が(ぬ)に打ちたりとせ

第三局(第二圖)

よ。黒(ヲ)に詰めて※印の急所を狙ふが宜い。白は無論捨置く譯にはいかぬ。それを凌ぐ爲めに(カ)に尖むか、假に(ワ)に突當つたすれば黒は(ヨ)に飛ぶが宜い。扱此(ヨ)の飛びは(黒三と)ヲの間が一間で極く狭いから斯く打つが宜いのである。其代り後に白(た)に跳ねば黒(レ)に約え、白(そ)に跳込んだとき黒(ツ)に受けて却争ひをする覺悟でなければならぬ。黒の方は元來軽い石でもあり縦しんば劫に負けた所が(る)に掛粘いで居れば何でもないけれども白が若し劫に負けて(そ)へ跳込んだ一目を四ツ目に打抜かれては非常の打撃を被る譯であるから迂濶に(た)杯へ跳ねて却仕掛けに行けるものでない。又白(わ)に衝當る手で(か)へ尖まば黒は(子)に飛出して丁ふ。斯くの如く白が(ぬ)に煽つて來た所が(三)の黒は容易に捌きが着くから其儘捨て置いて敵の仕掛を待つて進退を決するが宜い。更に圖を更へて説明する。



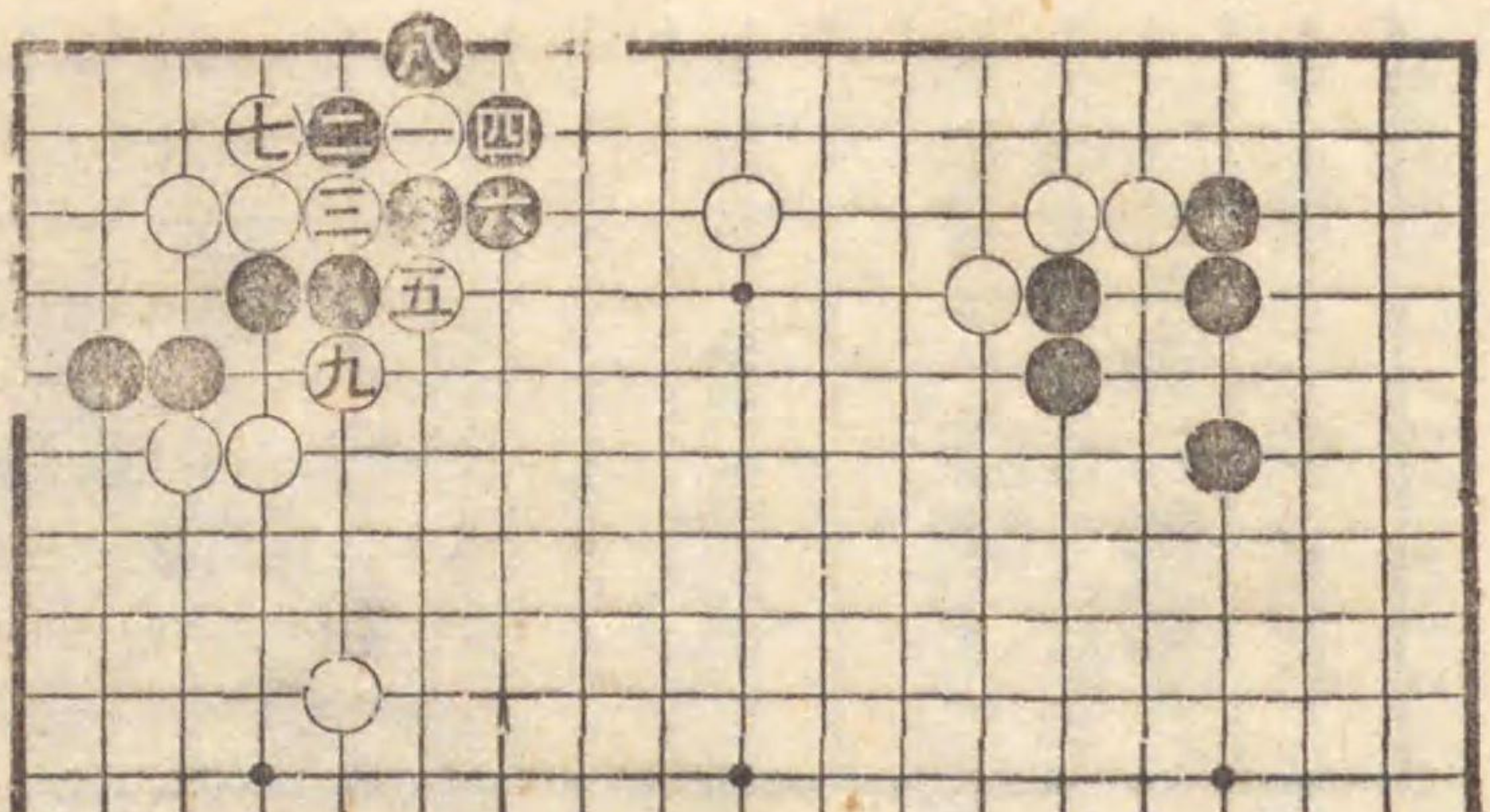
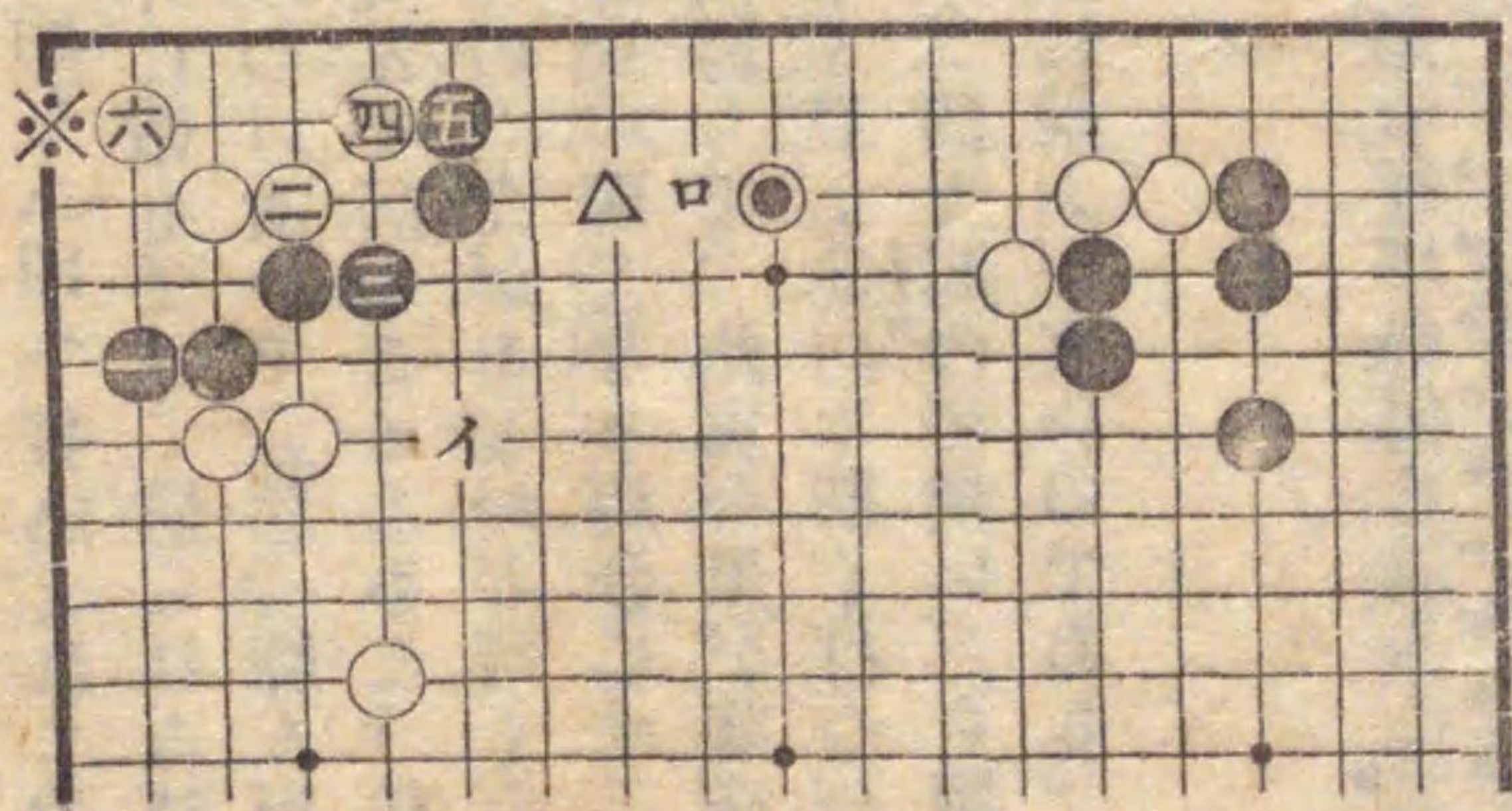
第三局(第二圖)

ら其儘捨て置いて敵の仕掛を待つて進退を決するが宜い。更に圖を更へて説明する。

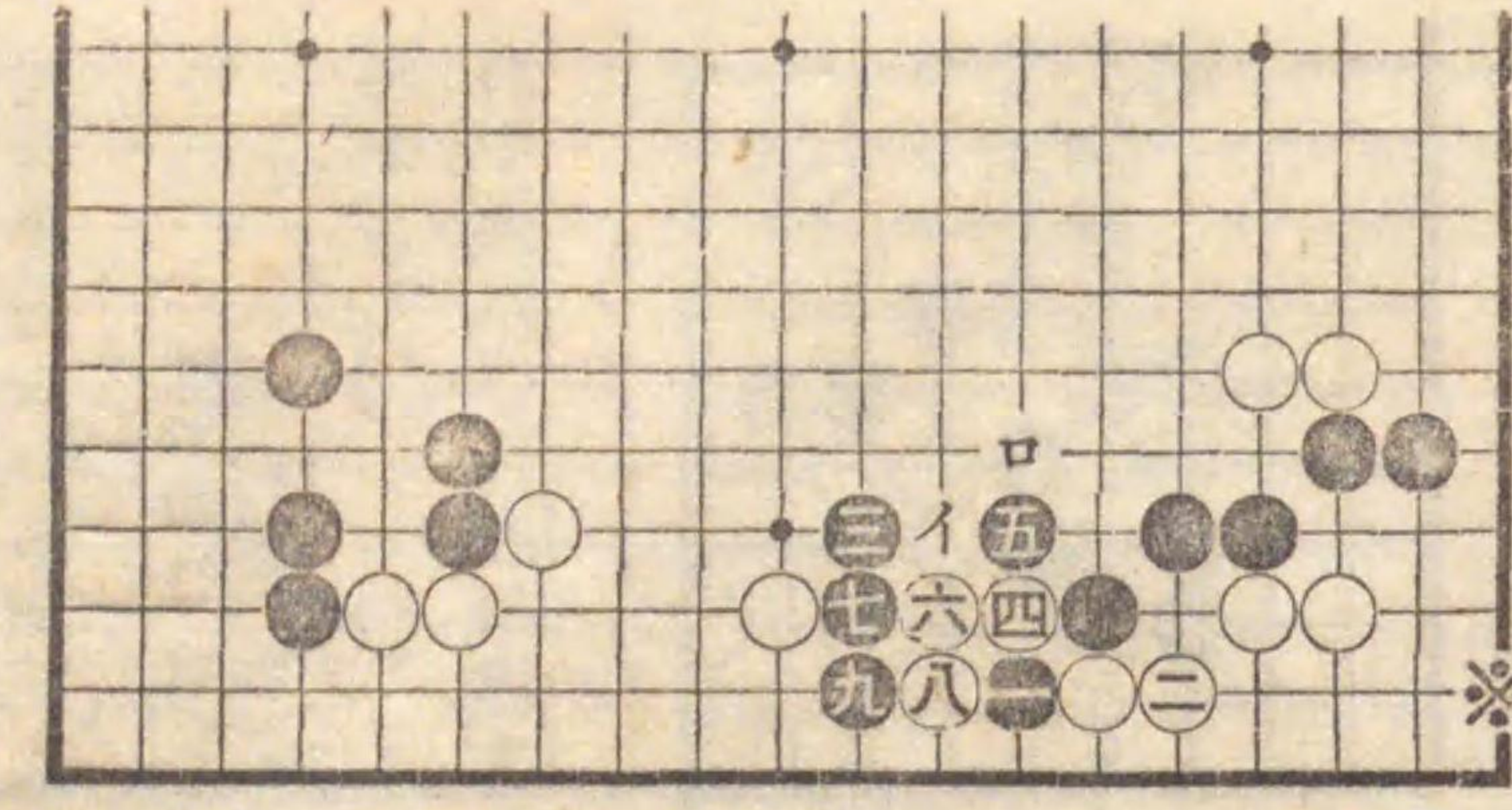
▲白(三六)の延びに就て 白(三五)の打込に對する黒の應手に二策ある。其一は少し損をしても隅を守る方が得策である。考へたらば譜の如く打つべきである。斯うなると(三六)と(三三)の間が餘りに狭く且つ後に(一)に打て互れ、手が残るから大分損である。(三五)の約え、篤と考慮を要する。茲に注意すべきは白(三五)の延びである。是れは外部の關係に由つて(ろ)に掛粘ぎの趣向をしたいと思ふ時は暫く(三六)の延びを見合せて扱て(ろ)に掛粘ぎの利いた時に白(四〇)へ延びて互る手を見越して居ることもある。▲黒(三八)の變化 其二は黒(三八)へぐすむ手で(三五)へ跳ね出す手段もある。左すれば白(三六)、黒(四〇)、白(は)に取り黒(ホ)の互となる。斯うなれば黒の收まりは宜いが白も相應に堅くなつて居る。要するに黒が(三六)に讓歩した丈け地が減つた譯である。尙ほ他に策がある。それは(三五)の白を隅に活かして打つ趣向である。是れには種々の變化があるから圖に就て能く覺えて置くが宜い。

▲其一は譜の如く活かして打つのである。白(四)は三策中の其一を示したものであるが黒が(五)に約へる手で先づ(イ)杯に打つて白の應手を試みた後に△印へ一問飛ぶか或は殊更に(ロ)に肉薄して暗に互りを防ぐ手段を施す

(一) 其



其二

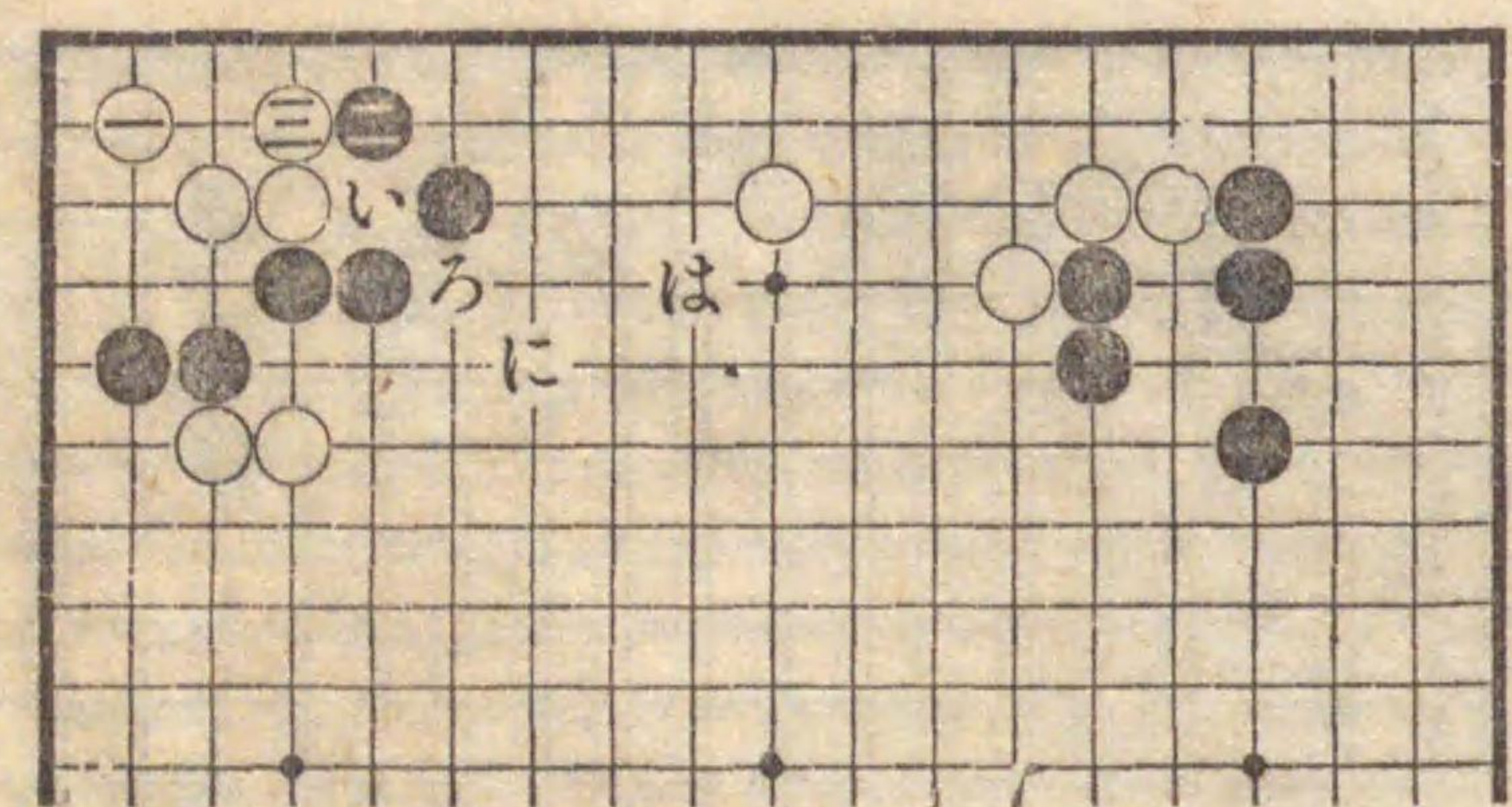


其三

が宜い。其手段に携はつて居れば最早や互りは止まつて了ふから黒は一轉して※印のトマメを刺す。折角打込んで殺されては堪らぬとあつて隅の方を生きて居れば◎印の方が急になると云ふ恐れがある。さう云ふ策略のある處だから白が(四)へ尖んだからとて直ちに黒(五)に約えて活かして了ふのは所謂無策である。暫く(五)の約えを保留して何氣なしに◎印方面へ懸かるのが即ち權謀で敵を苦むる所以である。

▲其二 白(一)につけるのである。其時黒(三)へ跳ね出す手は萬々ないのであるけれども初心者の參考までに示すのである。譜の如くなるに假令隅の白は取れたにしても到底紛雜を免かれなから置基としては決して打つべき手でない。夫れよりはモツト良い手段がある。次圖の如く打つに如くはない。

▲其三 は前圖黒(二)の變化で黒(三)は即ち好い手筋で暗に(四)の切りを凌いで居るのである。既に(三)と打たれた以上は白(四)と切る

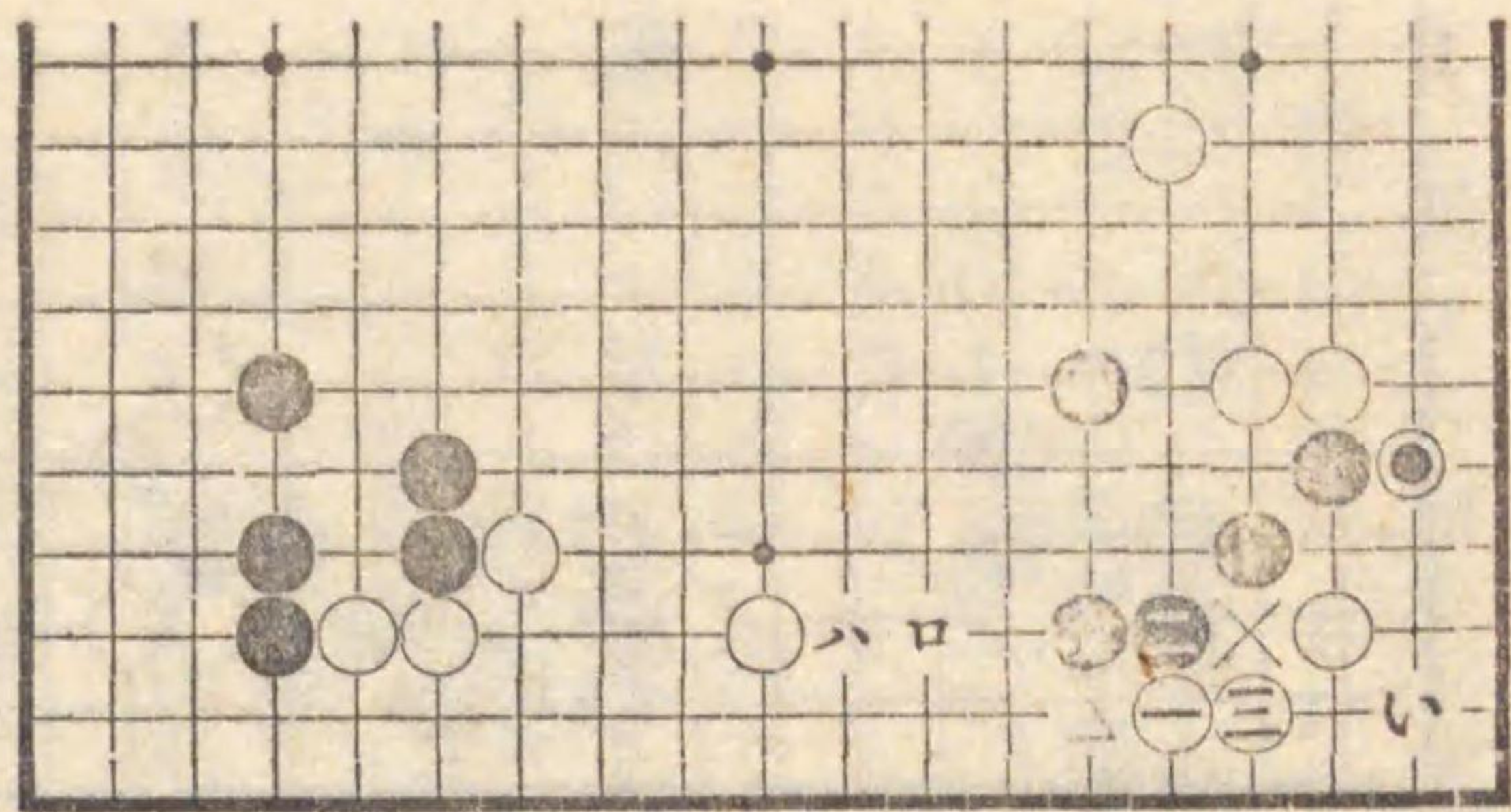


其四

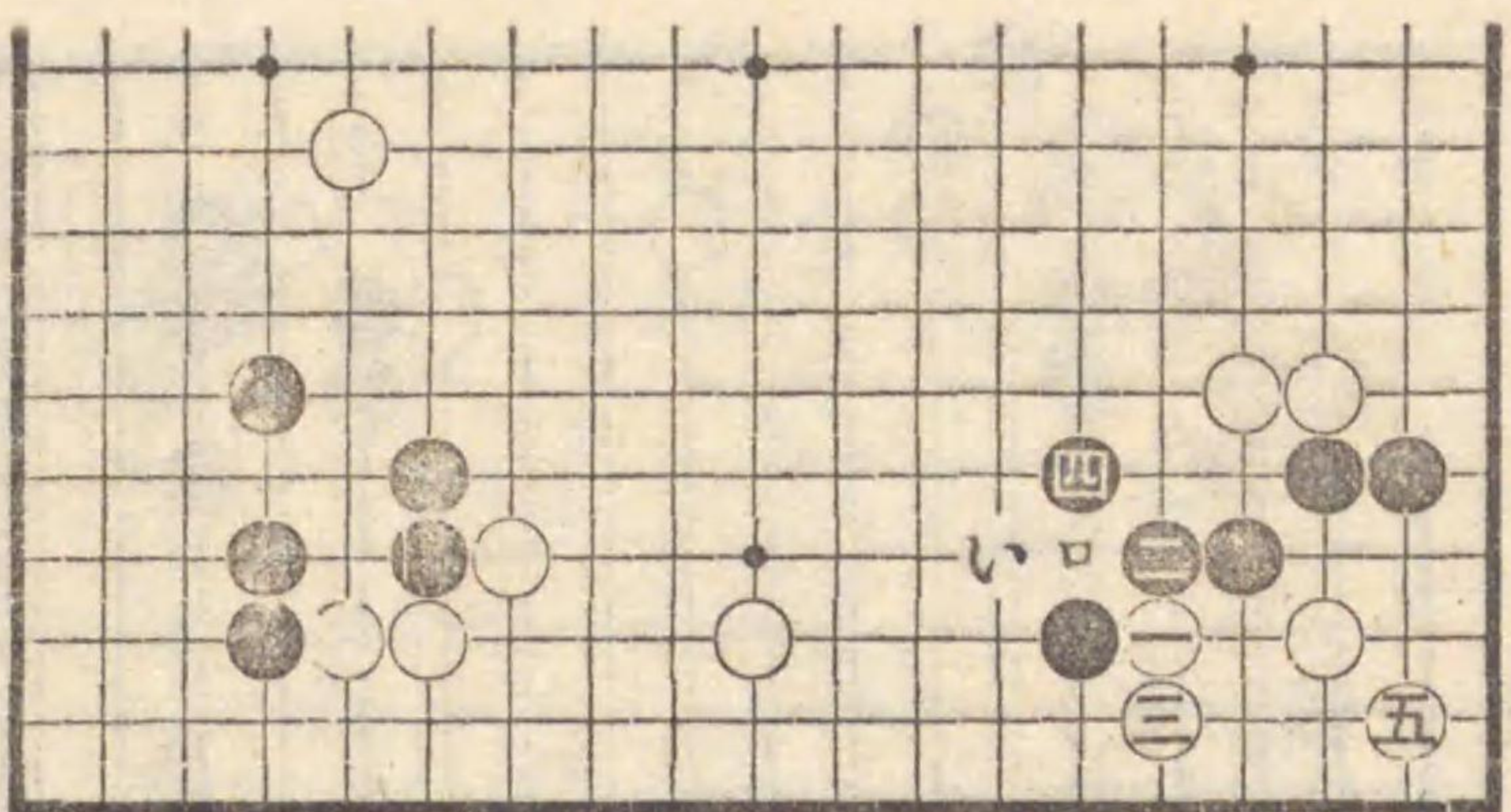
杯は上手の荷めにも爲さざる所であるが試に白(四)に切を試るとせば譜の如く(二)の一子を棄て厳しく塗付けられた上に左側の出來るものが傷められる結果を生ずる。容易に(四)を切ることと打つたとき敵の挑みに應じて挨拶をして居る何時の間にか(四)の切りを失ふと時分は善しと倏ち※印の急所を衝かれて隅の白が參つて了ふ。斯かる好手筋(黒三)あるに拘らず黒が(一)の手で(イ)或は(ロ)に打つならばマダしも(四)に粘いだり或は(三)杯に掛粘ぐは以ての外無能の閑手である。何故かと云ふに左すれば白は無論隅へ手を掛けて安心して了ふは必定であるからである。尙ほ變化がある。次の圖に就て見るが宜い。

▲其四 は其一白(四)の變化で是れ又一手段である。斯うなれば取らうと思へば隅の白の眼を缺くことが出來るけれども併し白に於ては(一)に刺込み(ろ)を切ると云ふ手段があるから容易に取掛けに行くことは出來ない。夫故に黒の戰略としては暫く隅の取掛けを保留して先づ(は)か(一)へ打つて暗に(ろ)の切を凌ぎがてらに外部の敵を攻めると云ふ態度に出ると白は内外多事になつて中々凌ぎ切れるものでない。

▲其五 右の如き結果となつてドゥ打つても白の不利に歸着する最大原因は其初めに於て黒が◎に下つたとき白が×印へ押し



其 五

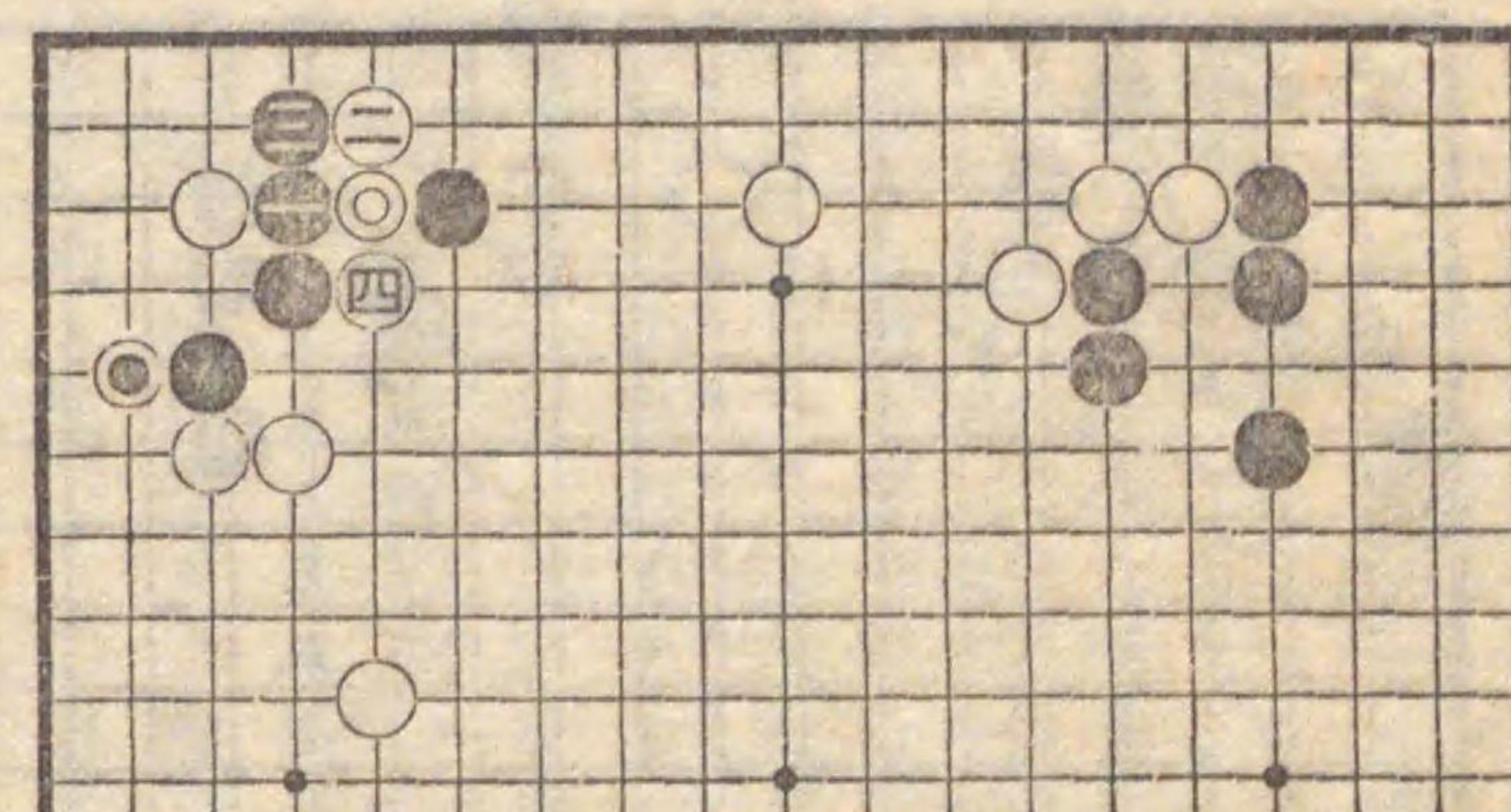


其 六

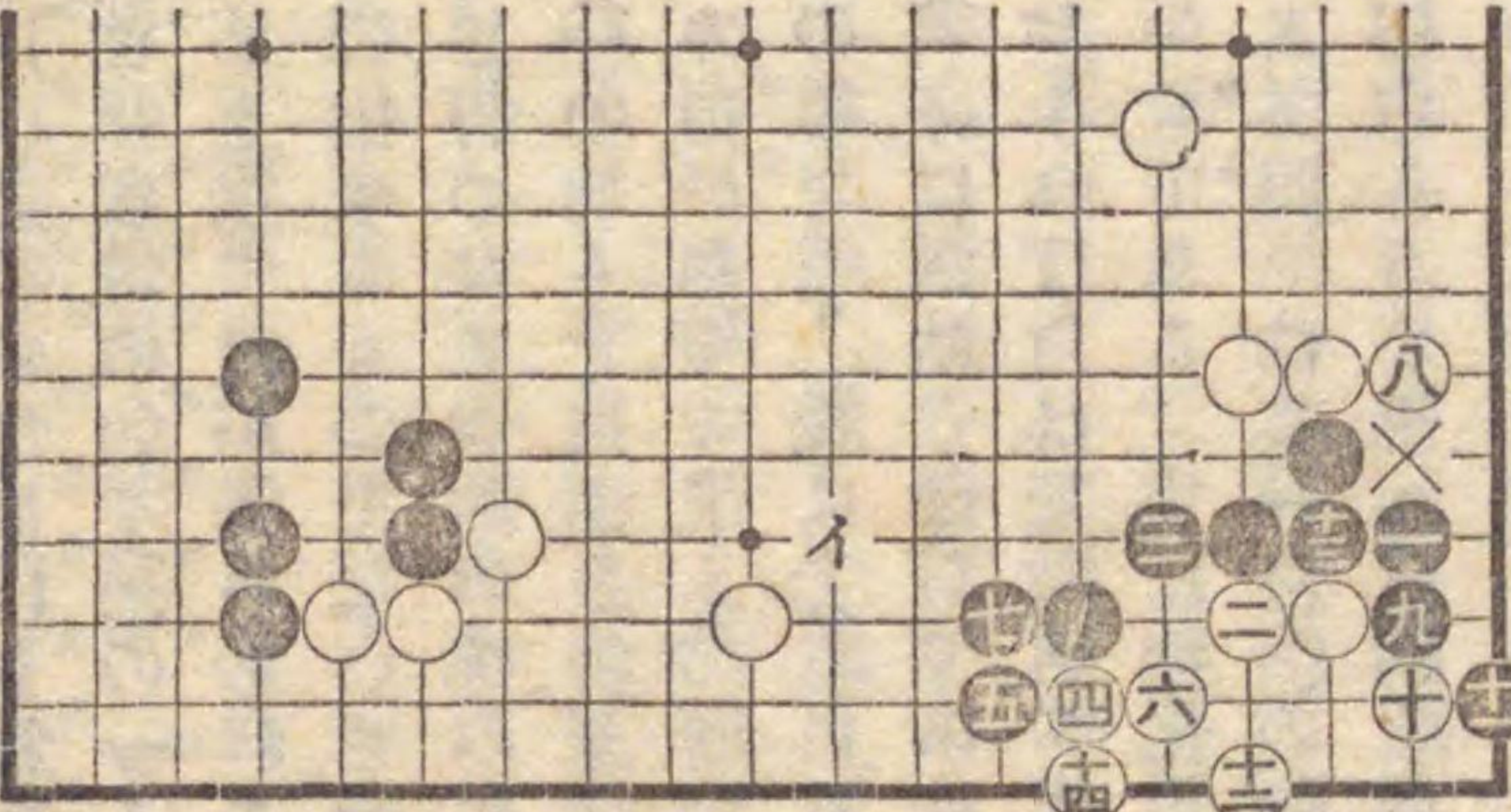
だから、是は甚だ面白くない。然らば譜の如く白(二)に斜走せば如何。黒(四)は先づボウシに打つ位のものであらう。茲に注意すべきは黒(四)へボウシに打つ手にて△印に約へるのは面白くない。何故かと云ふに左すれば白は(一)に置いて直ぐに生きて了ふ。夫れよりは隅の白を半活きにして置いて先づ外部の敵を攻めて後に機を謀つて(ロ)へ一間飛ぶとか或は(ハ)に突撃するかして白が△印へ押して互る手を止むることが出来れば今度は黒(一)のトヤマを刺す手段があるではないか。さう云ふイキサツがあるから△印の約えは容易に打つべきでない。

▲其六 本圖の如く打つ手もある。白(五)は先づ(一)に覗き(ロ)に粘がして後に白(五)に活きることもある。

▲其七 本圖は前圖黒(三)の變化で(二)へ突出して振變つたのであるが此振變りは黒の方が面白くない。と云つて黒(三)の手で(四)に押へれば白は(五)に互つて了ふ。



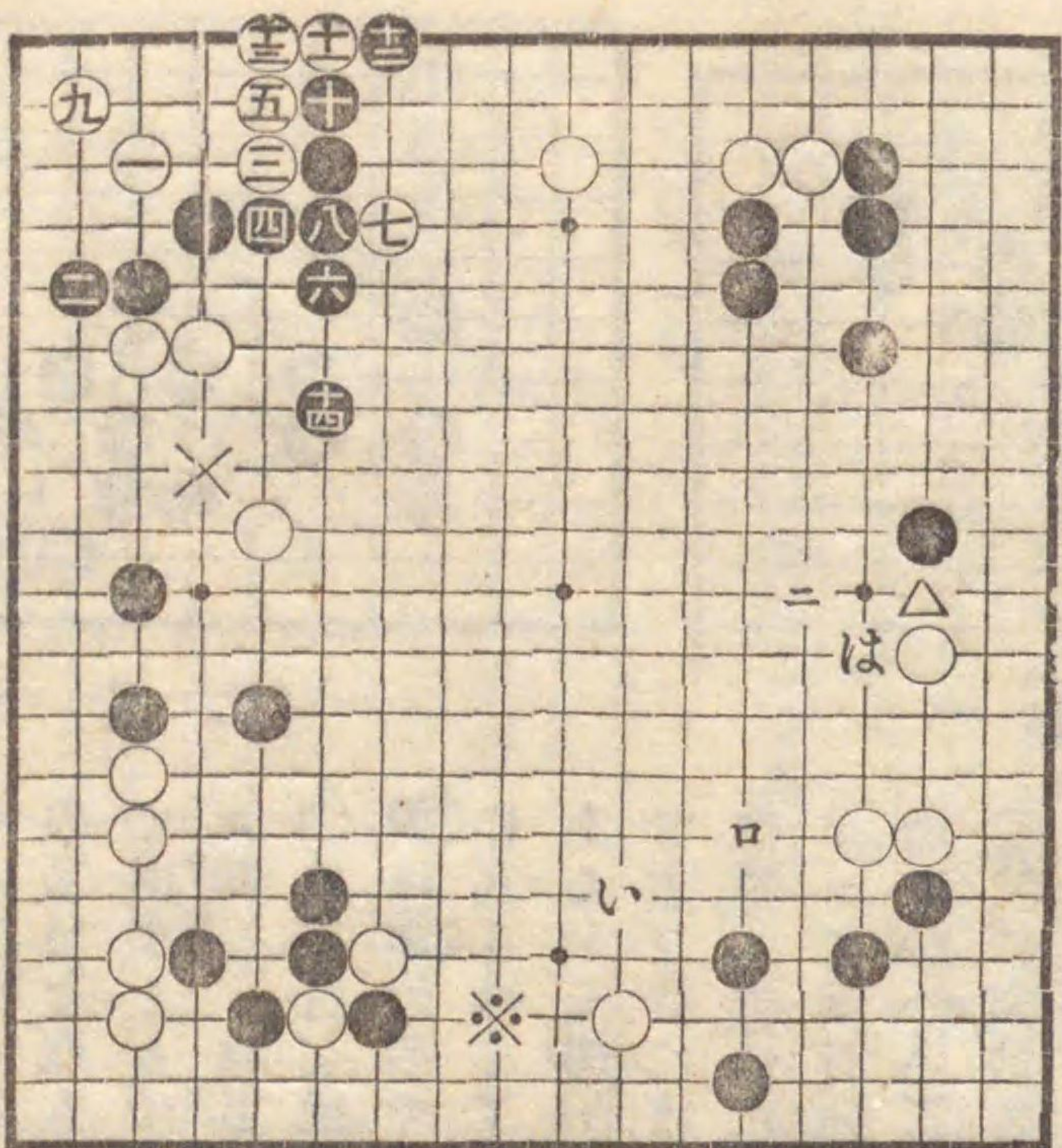
其 七



其 八

さうなると其六圖よりは却て悪くなる。之を要するに(一)につけられた以上は黒(二)杯へ衝出さず其六圖の如く單に(四)に壓へて打つ外はない。詳言すれば黒が最初(一)印に下る時に上來述べ來つた凡ての變化及び其影響の及ぶ所を仔細に考慮して打たねばならぬ。白亦た然り(三)の打込みは餘程時機を斟酌しなければならぬ。尙ほ初めに溯つて注意を要する事がある。

▲其八 初めに戻り黒(×)印へ下る手で譜の如く(二)へ尖むも亦一策である。併し大體の場合(×)印へ下つて居る方が宜いのであるが参考の爲めに其成行を示すのである。扱て此手順中黒(七)前には(一)に打つが宜いと云つたが本圖の如く黒(二)に尖んである時でも矢張キツチリ粘ぐ手で(一)に打つて居る方が宜い。其時白(三)の手で(五)に約えて居れば無論活きはあるけれども手順として白(三)に下つたのは大變得の手である。要するに本圖の如くなつては黒の方が割合が悪い。



其 九

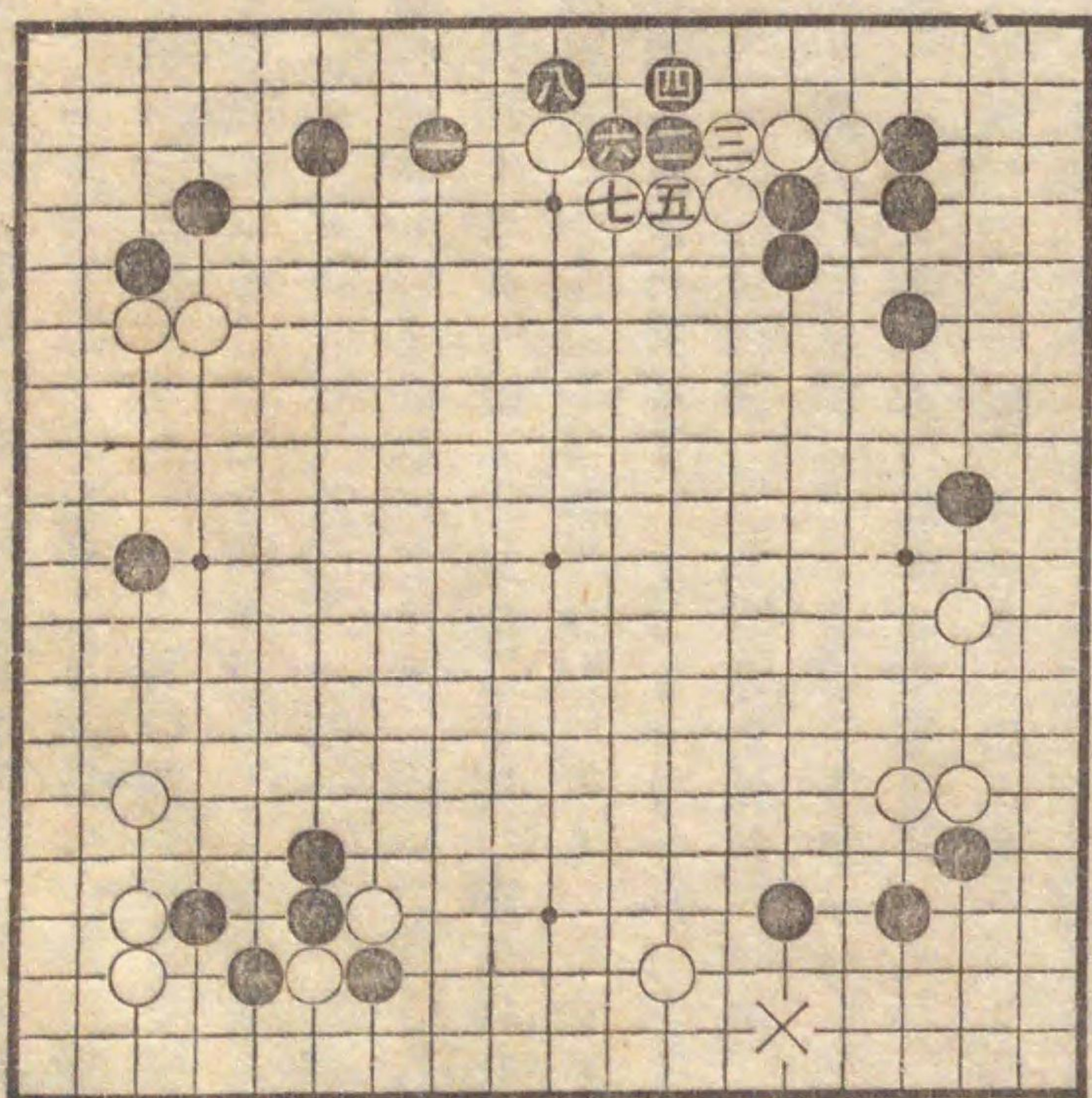
ら既に(二)へ尖んだからは白が(四)へつけた時(五)杯に押えずして寧ろ黒(六)へ跳ね捲つて變化を試るも亦一策であるが圖の如くなつて白から此(六)の下りを利かせられるのは随分辛い譯であるから前に言つた通り大人しく(×)印へ下つて居るのが一番無事である。更に百尺竿頭一步を進めて尙ほ説明を要する事がある。

▲其九 黒(四)の手で(三)の掛粘ぎをしたりキツチリ粘いだりするのは事甚だ小なり、譜の如く(四)へ煽るか或は此手で(×)印へ攻め込んで追立てるか、其一を擇むべきである。斯くの如く外部の白が艱まざるゝのは必竟隅へ這入つた巢りと覺悟せねばならぬ。是

● 黑白の大勢

れで此隅の打込に對する黒の應手變化は概略説き盡したりと信ずる。

如何と云ふに本譜其九の如く黒(四)に對し白は何とか應手を



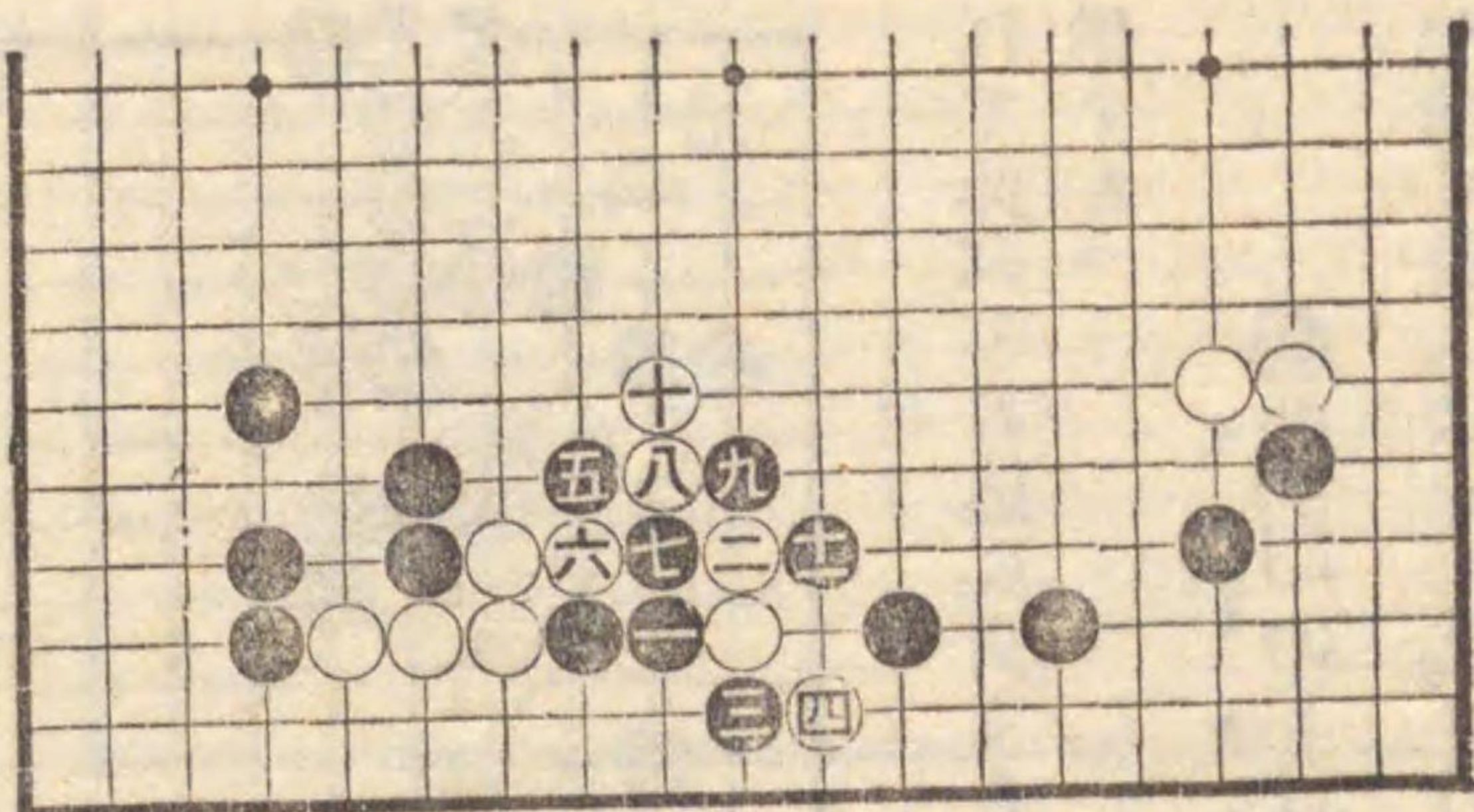
参考(其 一)

せんければならぬとすれば次に黒は何れに打つべきか。×印が此場合に於ける一番の大場である。白は(一)に飛ぶ位のものなるべく黒(ロ)に飛び出さば如何。白は何とか此二目の捌きを付けなければならぬ。ソコで黒(△)印へ突當り白(ハ)に延びたとき黒(三)へ飛んで自己の地を固めながら白を攻めるが宜い。サア斯うなつては白は何處も彼處も追立てられる形勢になつて居るから中々黒地を潰ぶしに行く所の騒ではない。自分の方が忙しくて始末に困ると云ふ中に碁はお仕舞になつて了ふ。黒の優勢なることは固より言ふを俟たぬのである。

▲ 参考

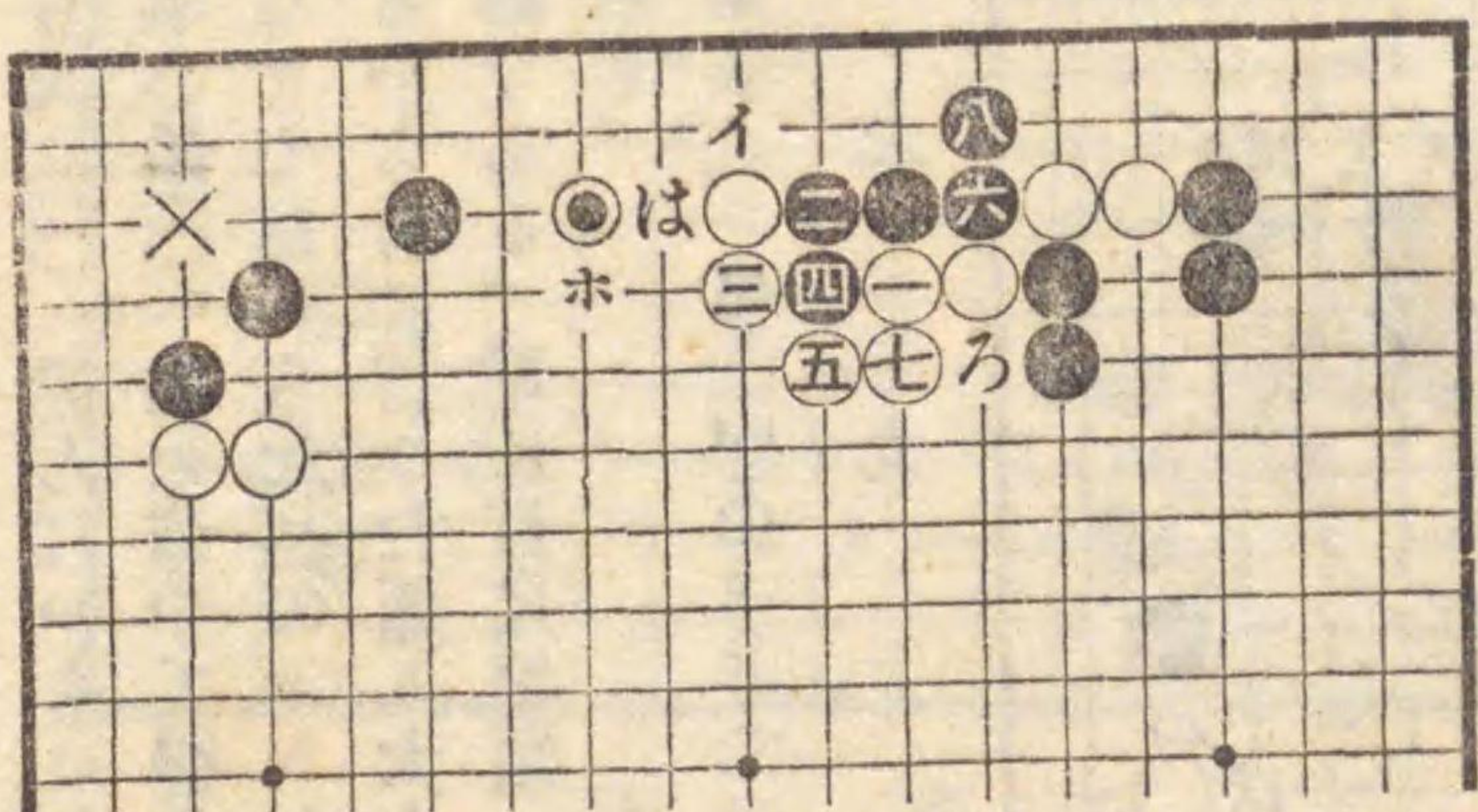
の爲めに前に溯つて注意して置くことがある。参考圖に就て了解するが宜い。最初に説明した通り此場合に於ける大場は(×)印と(二)の處であるが前の如く黒(×)印に圍はず

して譜の如くに詰めたりと假定せよ。而して白若し手を抜けば(三)へ打込む手段がある云ふた。其結果はドウなるか、圖の如く成ることもある。斯うなると詰り黒は白の根據地を奪つて自分の地を擴



(二 其) 考 参

めた譯であるから其利益は少からぬのである。尙ほ變化がある。▲其二 は前圖黒(二)の變化である。時に白が(三)杯へ延びて取らうとする譜の如く打たれて反對に二目を擒にされて了ふ。中の二目を取る杯云ふことは決して出来るものでない。



(三 其) 考 参

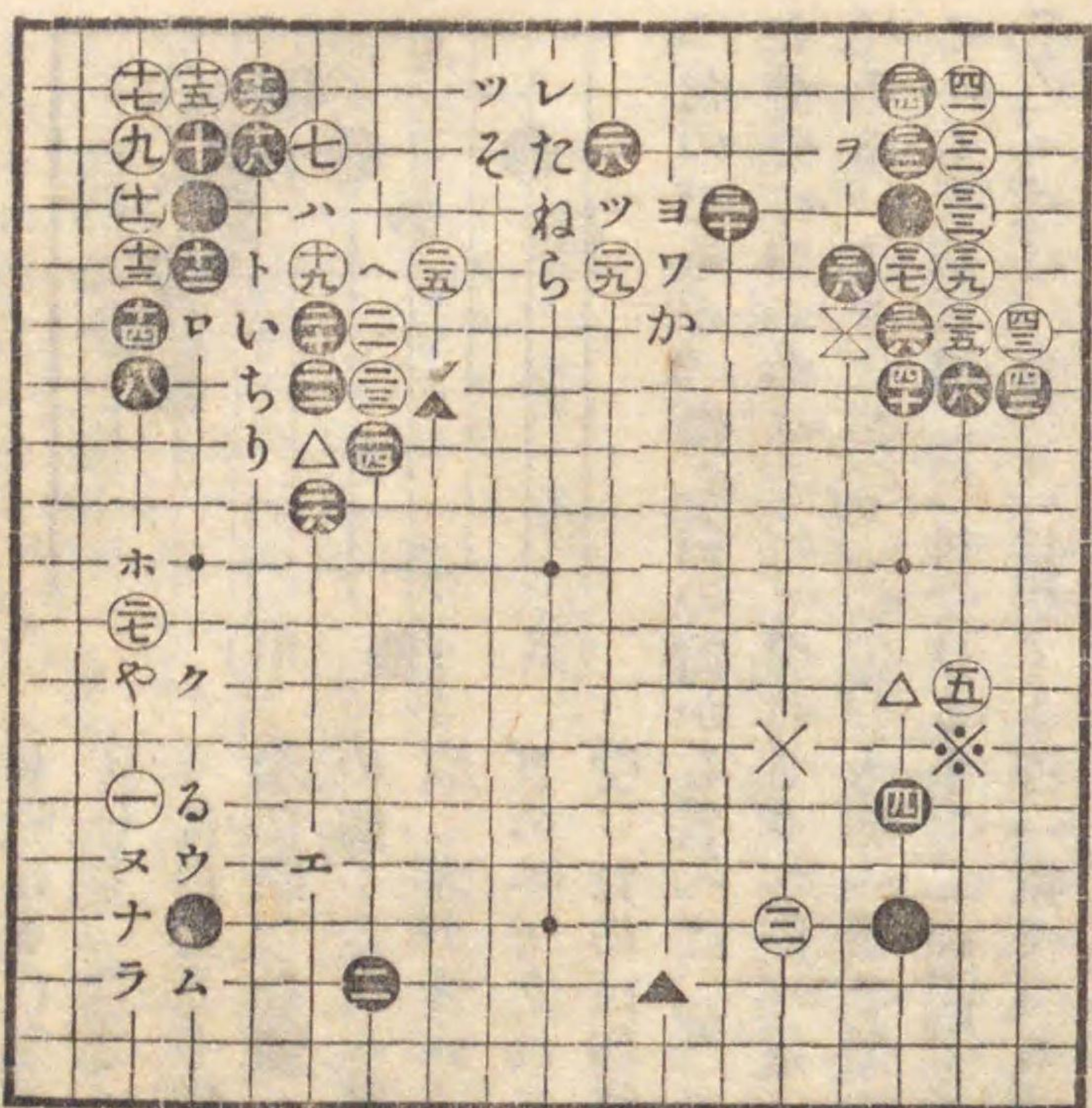
▲其三 は其一白(二)の變化で右側の二目を擒にされて了ふ。白或は(三)の手で(四)に押へると(イ)に亘られて了ふ。斯う云ふ手があるから黒が(五)印へ一間に詰めて来た時には打込みのあることは豫て覺悟しなければならぬ。ソコで其打込を防ぐには(ろ)に沿ふか(は)に突當るか。假に(は)に突當るとすれば黒は(ホ)へ延びる。左すれば一時打込を凌いで先手になつたとは云ふものゝ黒(ホ)の延びあるからは益々×印の打込を失ふのみならず左上邊の白ニ子の被る影響も輕からぬのである。是れで本局の説明は略々盡したりと信ずる。更に局面を新にして説明すべし

第四局 白(五)△ニ子逃掛の駄賃

●第四局

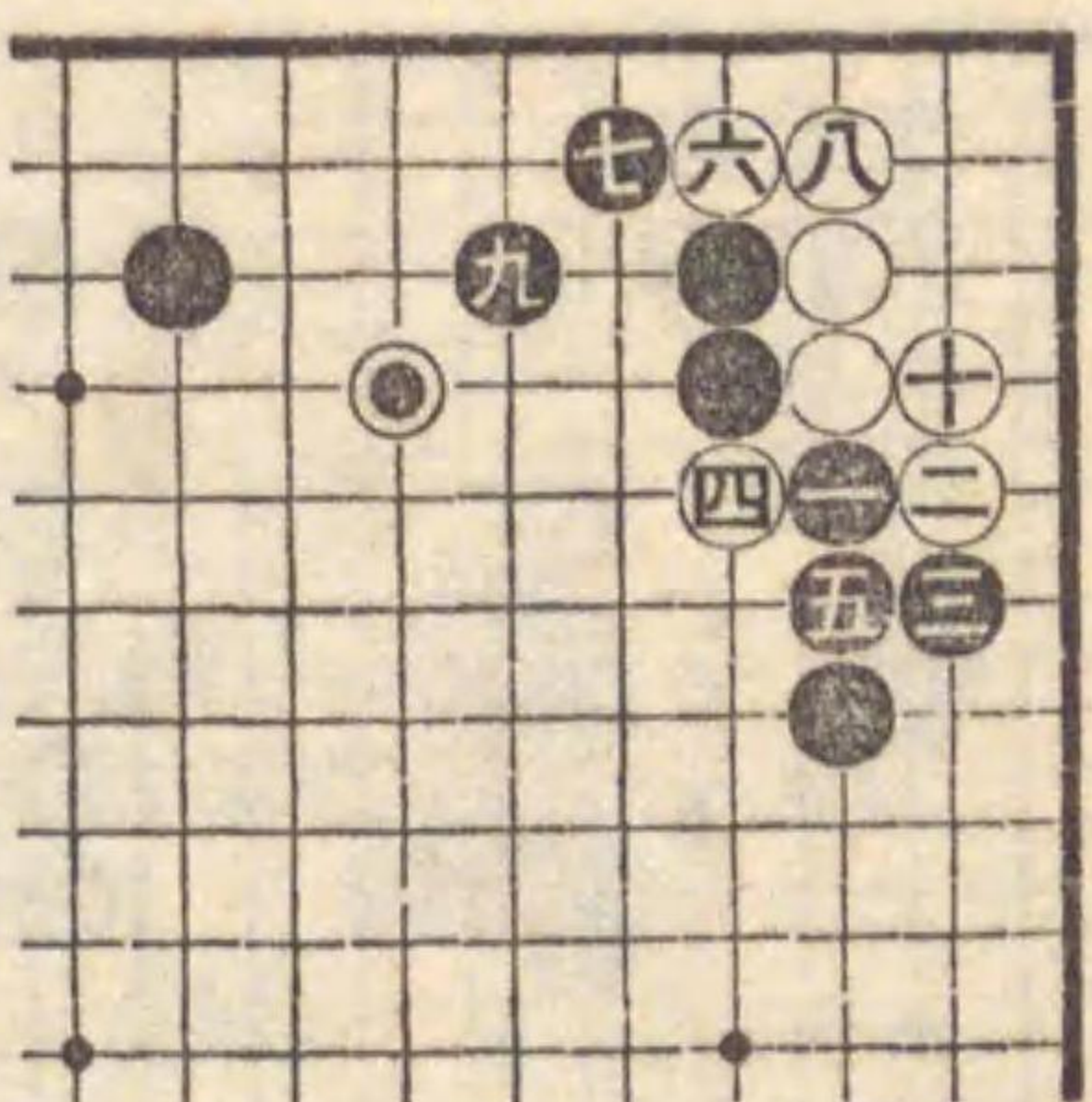
▲黒白の小手しらべ 圖中白(五)と打込みたるは即ち内外振變りの手段に出でたので黒(ハ)までは黒白共に通形である。ソコで白が(ニ)へ飛んだのは黒の勢力範圍を掻消さうと云ふ趣向に外ならぬ。若し此手で直ちに(イ)に覗いたならば黒は(ロ)杯に粘がすして(ハ)へはねるが宜い。白(ロ)を切らば黒(ホ)に開け。前後の黒は聯絡こそ絶たれたれ。其陣容整へるに反

第四局(第一圖)



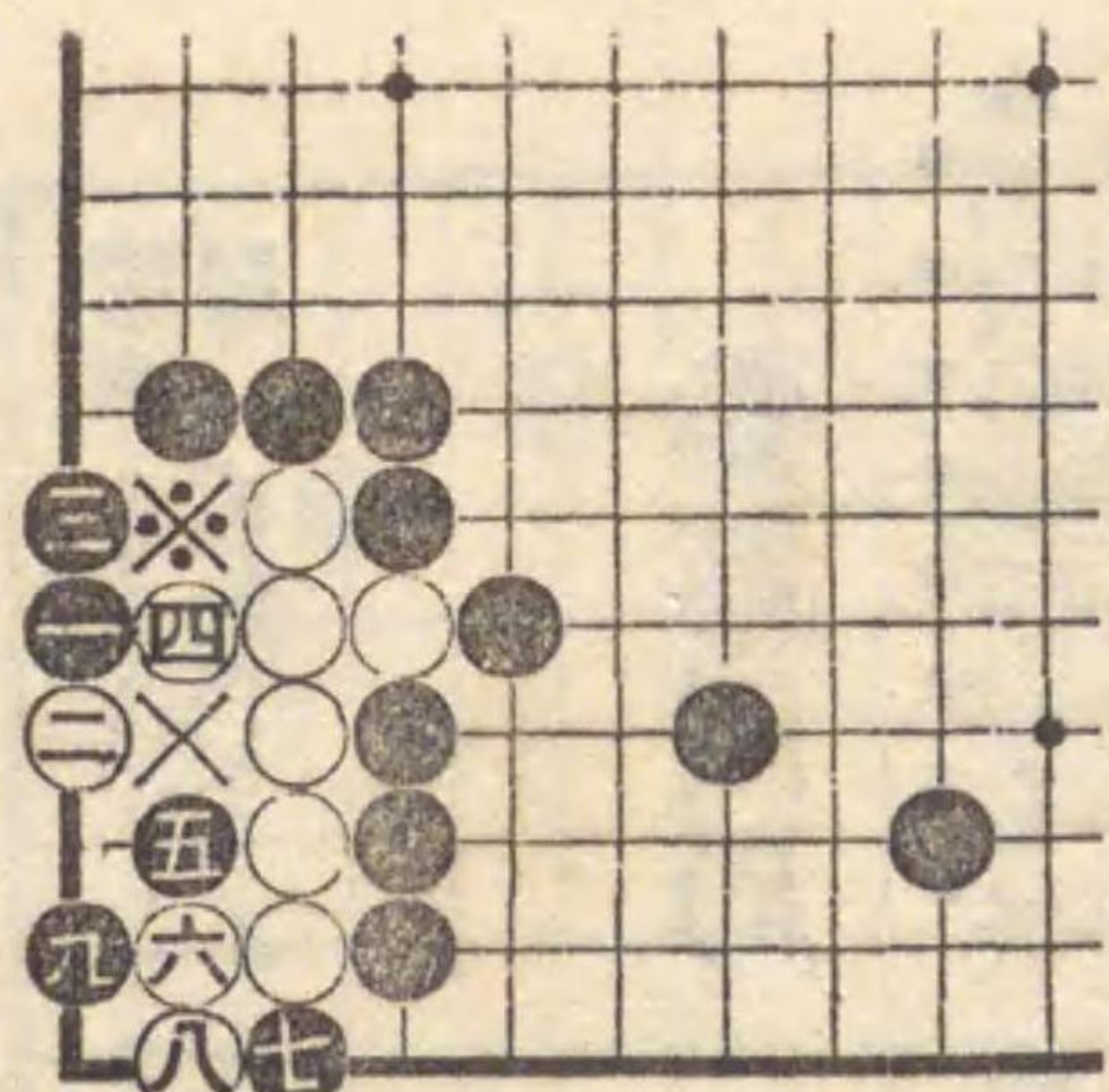
し白は只切斷したと云ふ丈けで何の得る所もない。然るに黒(ハ)へはねる手段を知らずして切られては大變だ杯と慌て(ロ)に粘ぐは是れぞ敵の術中に陥るものにて、左すれば白は(ニ)に備ふべく、斯

うなッては折角鐵壁を築いた黒の繩張は殆ど消された譯で、割合の悪いことは固より言ふ迄もない。黒(三)へつけたとき白(三)へ跳ねずして(ハ)へ引かば黒も亦(イ)に辛抱せねばならぬ。併し譜の如く白が(三)にはねたからは(三)へ延びる手で(イ)に引くのは損である。或は(三)へつける手で單に(イ)に尖んで居るも亦一策であるが、譜の如く(三)へつけて(三)までの運をしたのは早く自分の備へを整へん趣向に外ならぬ。或は又白が(三)へはねる手で無謀にも(イ)へ跳ね出したら黒は無論(ト)を切るべく、白(ち)へ延びなば黒(ハ)へ割出で、何處までも押し出すが宜い。而して白が(ロ)を切る手順になつた所が、ドウも三角に曲つて駄目づまりに切る杯は以ての外悪手で、黒は(ホ)へ二間に開くユトリがあるから少しも恐るゝ所はない。白(三)の押しは常形を示す爲に斯く打つたのであるが、場合に依つては白(三)と跳ね放して、三子を軽くして置いて打つ趣向もある。併し譜の如く打つのが通形である。コ、に初心者の爲めに注意を加へんに、白(三)へ掛粘ぐ手で或は△印を切ることもありとせんか。黒(リ)へ跳ね、白(三)へ延びた時黒(ハ)を切らば如何。白は(ハ)と(四)の急所急所を切られた姿で、上と下とを一時に凌ぐことは六ヶしい結局(七)の二子を棄てねばなるまい。ソコで白(三)に掛粘いだ譯である。白(三)は少しも黒に響かぬけれども此場合自衛の爲め止むを得ぬのである。然るに若し之を棄置かんか、黒(ヌ)へ尖みつけ、白(ル)へ延び、黒(三七)の詰めとなり、上下の地固めをしながら攻めらるゝことになる。黒(六)は此場合唯一の大場である。少し緩い嫌ひはあるが(三六)の手で或は(ラ)に尖んで居ても悪いことはない。縦じや白が(三六)の處へ打つて来た所が一方は所謂楯明で地にはならぬ。唯黒の閉き



(圖 甲)

を妨げるに過ぎぬから黒(ラ)に尖むも一策ではあるが、夫れよりは白(三)一隊は其形甚だ重く未だ眼形を備へて居らぬから譜の如く(三六)へ詰めて遠く攻勢を取。方が宜い。白(三九)は即ち凌ぎの手で之れに對し黒が(三〇)と受けたのは聯絡を保ちながら圍



(圖 乙)

つたのである。併し白の側から言へば(三五)と「ボウシ」に冠した真意は譜の如く(三〇)と受けさせて隔へ這入らうと趣向なんである。先きに黒(ラ)に尖むも亦一策と云たのは此意味があるから或は黒(三〇)に引くも亦一策である。黒(三四)の下りは(か)へ跳は、黒(ヨ)に引くも亦一策である。黒(三四)の下りは此場合甚だ良手である。然るに普通の定石に拘泥して甲圖のやうに打つと(四)に一本切りを入れられた上に此(四)が遊んで仕舞ふ結果を生ずるから第一圖の如く黒(三四)へ下るが宜いのである。第一圖中の白(三三)は究めて必要の手である。若し此手を抜けば即ち乙圖の如くなつて殺されて仕舞ふ。又白(六)へ曲る手で(五)へ置けば黒(六)、白(七)、黒(八)の粘ぎとなつて矢張り死となる。夫れから又(四)の手で(五)へ置けば黒(六)、白(七)、黒(八)印のはね込となつて何れにしても寂滅して仕舞ふから白は(四)印の押えを等閑にする譯にはゆかぬ。竿頭一步を進めて白(四三)の押えとなり黒白攻守の勢ひ略々成れる此局面に於て

▲黑白の打場如何

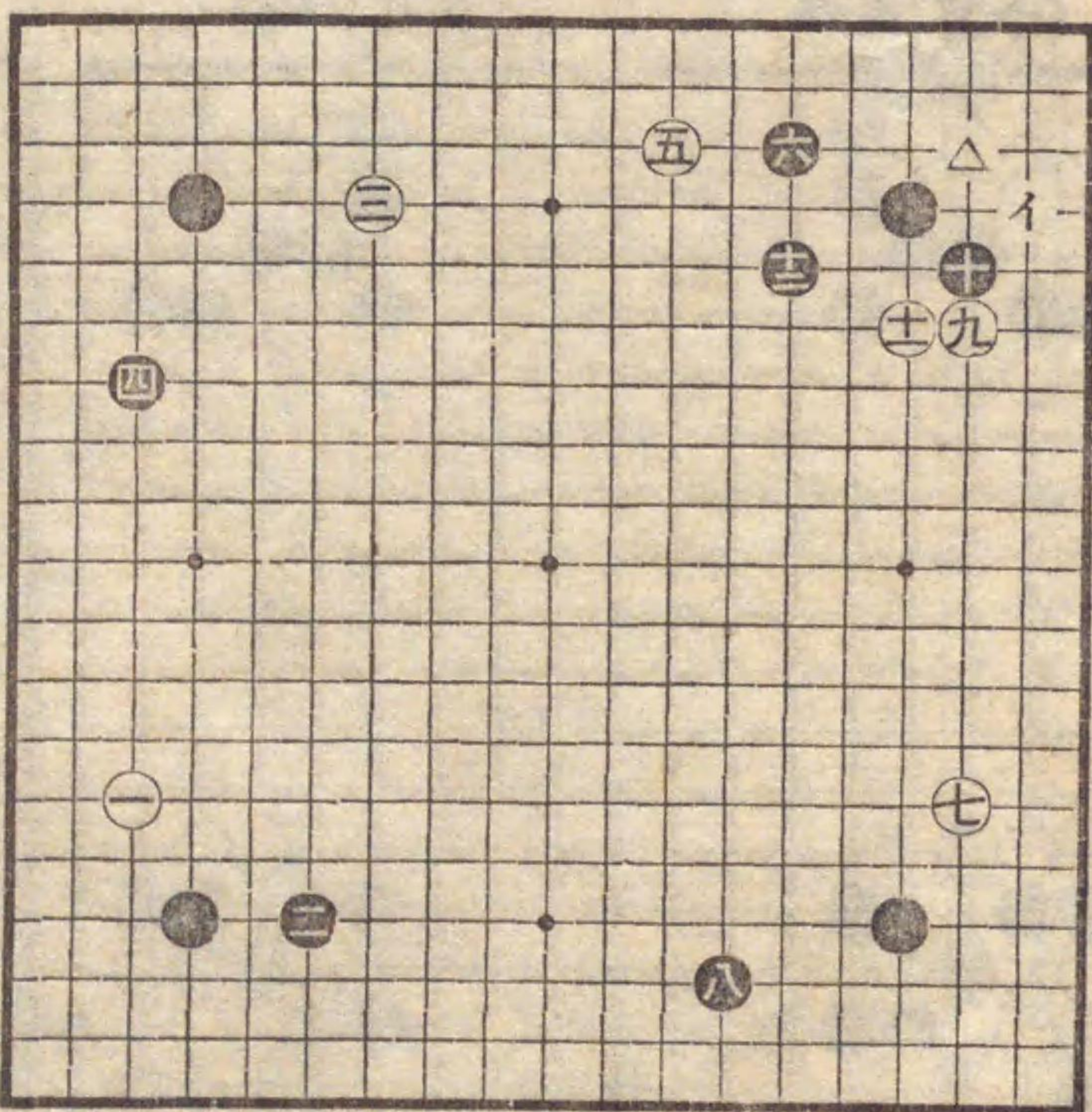
と考慮せよ。此場合黒は(四)印へはねる手段、最も厳しくして可なり。此一隊の白は眼形未だ備はらず、尙且つ(三五)と(三九)の聯絡密ならずして断絶せらるゝ恐れがある。扱て白は(四)印のはねに對し如何に應戦すべきか。(三五)と(三九)の間を棒つぎに聯絡するも働がなないし、左りとしてアチラへつけたりコチラへつけたりすれば敵の備へ、固めて仕舞ふし、實に應手に窮せざるを得ぬ。何とも仕方がない。先づ(た)にでもつける位のものだらう。左すれば黒(レ)へはね、白(そ)に延びれば黒(ツ)へ突當つて先手を取るし、又白(そ)へ延びる手で(ね)に引けば黒は(ツ)へ延び出す。左すれば白はモウ一手何とてか應手をせんければならぬからドウしても先手は黒に取られる。假に(コ、は白(た)、黒(レ)、白(そ)、黒(ツ)、白(ら)となるものとして黒は(ド)へ先鞭を振ふべきか。通常(四)印へ尖みつけるのは宜しくないけれども此戦局に於ては彼方には(四三)(六)(四)等、黒軍の鐵柵ありて來たらば彈き飛ばさん見幕を示しつゝある形勢なるが故に、成べく敵を我堅壁の方へ壓し付ける戰略を應用して先づ(四)印へ尖み付け白(四)に延びたるとき(四)印へ煽る杯は臨機の處理だらう。(コ、に注意を要するは敵は(金)△印の二目を北げながら(四)印の切りを狙ふに違ひない。(四)印を切られると紛雜を生ずるから攻立てるのは宜いが北げかけの駄賃を取れないやうに心せんければならぬ。依つて(金)△印の二目を攻めることは程々にして今度は方面を變へて(四)印へ進撃したのである。斯くて(三)の白一騎を追立て、上下の敵を搦み撃つ態度に出づれば自ら自分の地は固まつて來る。

▲黒の深謀遠慮 扱てコ、で疑の起るのはナゼ(ナ)の締りをせぬかと云ふ一事である。凡そ一手一手の打石は自己の固めを爲すと同時に敵に響く手を選まんければならぬ。然るに白(二)は既に(三七)の開きがあつて其形が整つて居る。縦じや黒が(ナ)に締つた所で只自分の固めをしようと云ふ丈けで一向敵に響がない。夫故に白が若し(ラ)に這入つたらば黒(ム)に押え、白(ナ)、黒(ウ)、白(ヌ)の粘ぎとなる位のものだらう。如何にも白の位低く先手は黒に歸するから決して割合は悪くない。棄置く所以は即ちコ、に在る。若し黒が(ナ)に締るべき機會を得たならば單に(ナ)に締らずして厳しく(ヌ)へ尖みつけ白(ル)へ延た時黒(エ)に締りがてら煽るが宜い。但し白(三)一騎を追立てた上の模様依り白(二七)の一隊を上から塗付けて遠く白(三)の一隊を包圍の裡に陥れて攻める必要あらば先づ黒(ク)に脅かし白(ヤ)に聯絡したる時黒(ル)につけて打つと云ふ非常手段もある(斯う云ふ種々の戰略があるから黒に於ては(ナ)の締りや(ヌ)の尖みつけを見合はせて先づ(四)印へ進撃して白(三)の動靜如何によつて(二)の白に對する作戰計畫を定むるが順序であると云ふ所以である。黒の優勢なることは固より論を俟たぬ。

●第五局

▲黒白小手しらべ 黒(二〇)は(イ)に締つても悪い事はないが、譜の如く(二〇)へ尖みつける方が劇しくて宜い。黒(二三)は(二〇)と關聯した手で、△印の打込を防ぐ一方に外部へ發展しやうと云ふ手段である。假に白(二三)の手で無謀にも△印へ打込だらば黒は如何に應手すべきか。参考の爲め圖解すれば左の如き種々の變化がある。第一(其一)の如くならば如何。一見黒

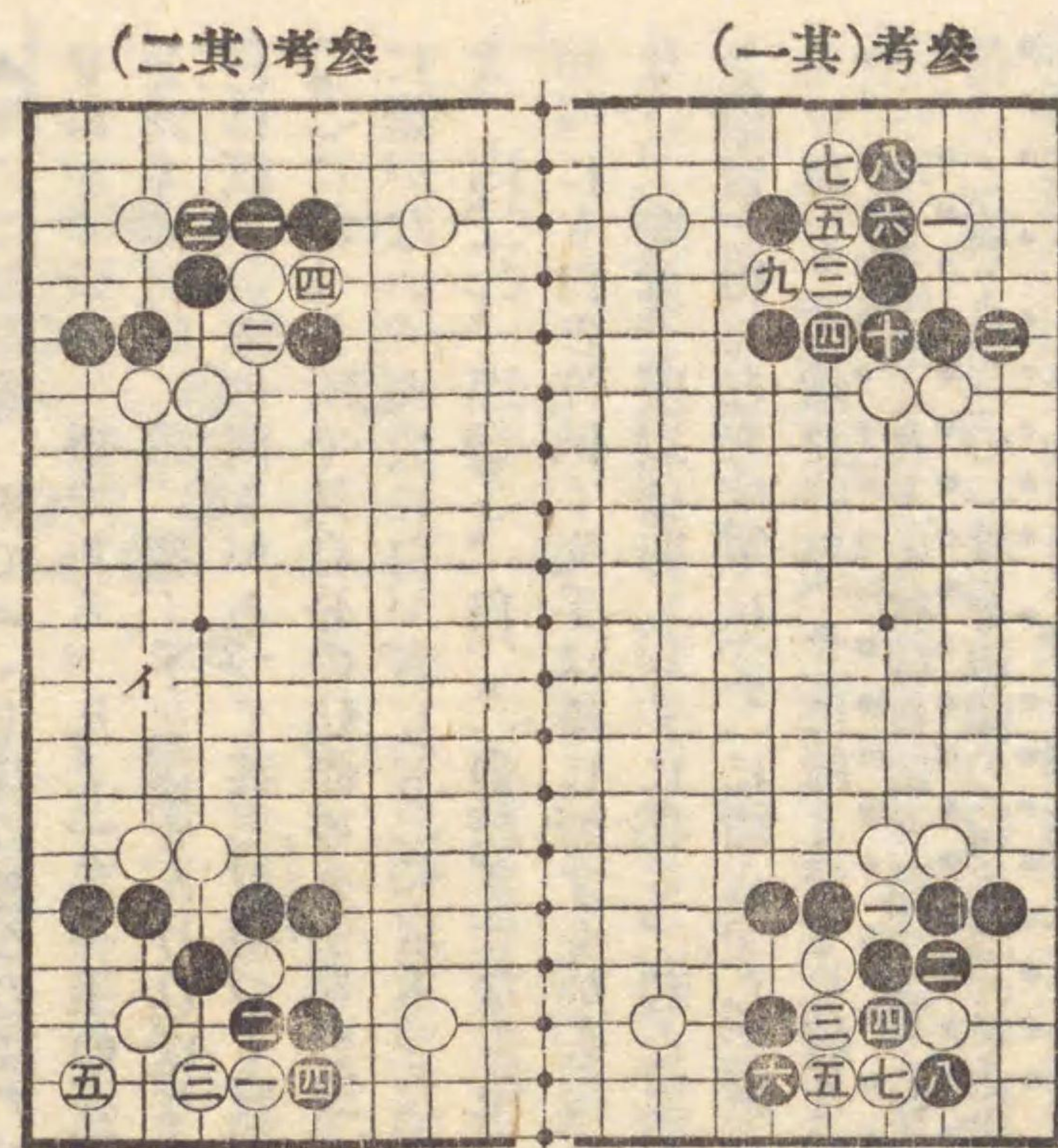
第五局(第一圖)



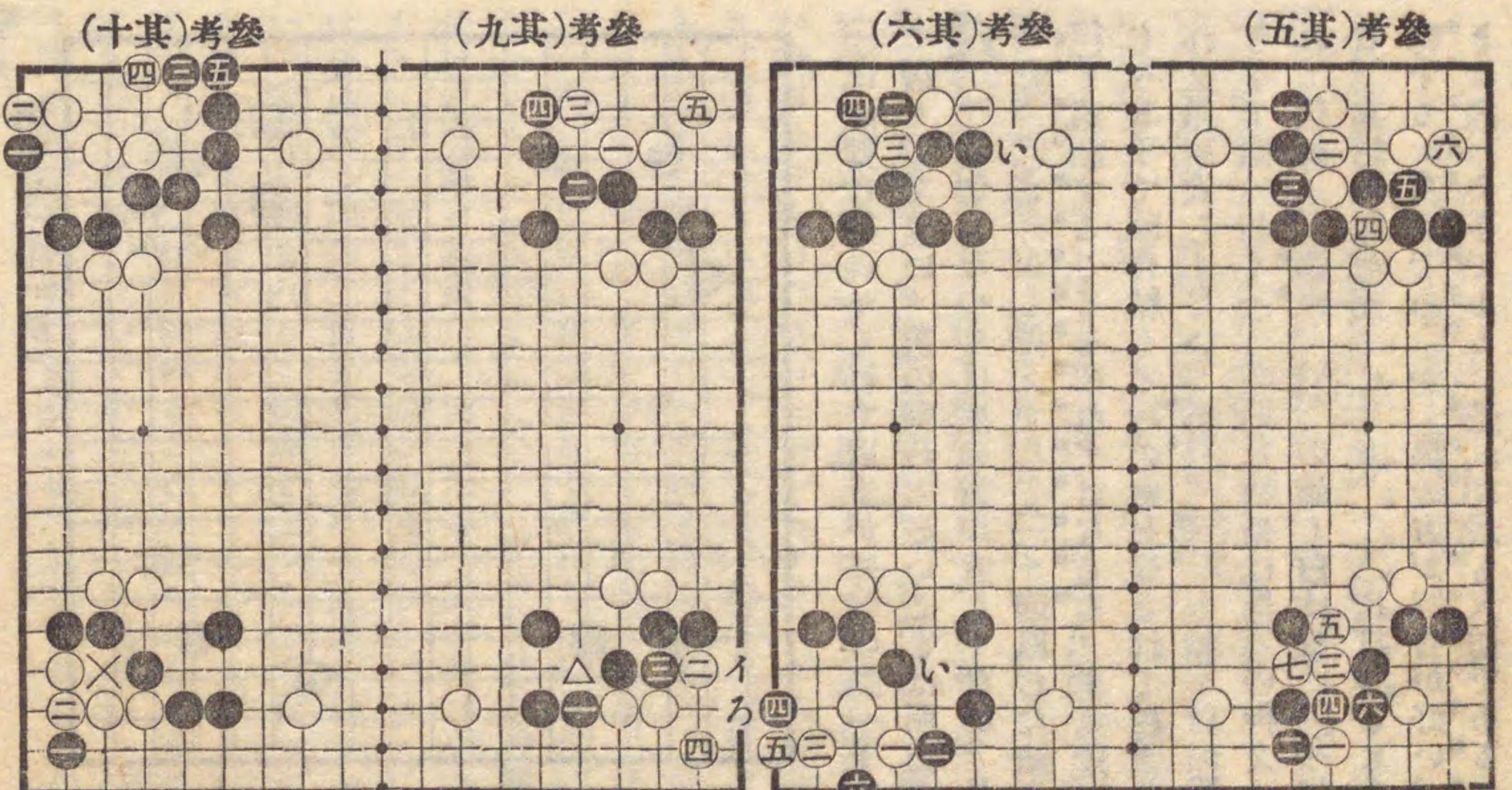
地は多少減らされたやうの姿であるが併し黒の壘壁は嚴密となりて其地域が確定せるのみか、外部に於ける白二騎は敵の鐵壁へ釘付けとなつて殆ど戰士たるの効用を半ば失つて居るではないか。且つ白

(二)は確實に擒にせられて居るが外部の黒一子は全く取切られて居る譯でない。黒の割合の好いことは明白である。第二、(其二)の如くなつては黒の方が宜しくない。是れは黒が前圖の如く(三)と外から押えずして(二)と遠慮した結果である。必ず(三)と遮断することを忘れてはならぬ。尙ほ此圖中黒が(三)に粘ぐべき手で(四)に粘くと(三)の處を切られて紛雜を生ずるから是れ又黒が宜しくない。第三、(其三)の如く白が單に(三)へ下るべき手で圖の如く(二)へ突込む結果は黒(三)の押えとなつて擒にされて仕舞ふ。第四、(其四)の如く白は單に(二)へ斜走する手もある。其結果黒が先手となり、(イ)に打つこともあれば又他に轉ずるも自由であるか。黒の方が割合が好い。圖中注意すべきは黒(三)の手である。是れは最も大切であるから決して忽に

してはならぬ。第五扱て此(三)の手で黒(四)に押へる結果はドウなるか。請ふ参考(其五)を見よ。譜の如く白に(三)へ下られては黒の方が悪い。以て黒(二)の押への不可なる所以を了解すべきである。第六扱は参考(其四)の手順中白(三)の變化を示せば参考(其六)の如くなる。白(三)の突込みは無理である。斯うなつては白が取られて仕舞ふ。白(三)へ突込む手で(一)に突當れば黒は無論(三)へ粘がねばならぬ。尙ほ前へ戻つて説明すべき事がある。第七、(其七)は即ち(三)のつげを後にして先づ(二)へ斜走したのである。然る上は黒(三)と押へ次いで(四)に遮断せねばならぬ。参考(其四)と場合を異にすることを注意すべきである。斯くの如くなれば黒は外部との聯絡を絶たれて一子を擒にせられたと云ふ條、黒(三)へ下つて更に(二)の一子を擒にして居るから矢張黒の方が割合が好いのである。然るに黒(四)に



(一其)考參
 押へる手で、參考(其二)と場合の異なるに心付かずして(五)に押へると白(四)に粘ぐ結果は參考(其五)の如くなつて黒の方が悪い



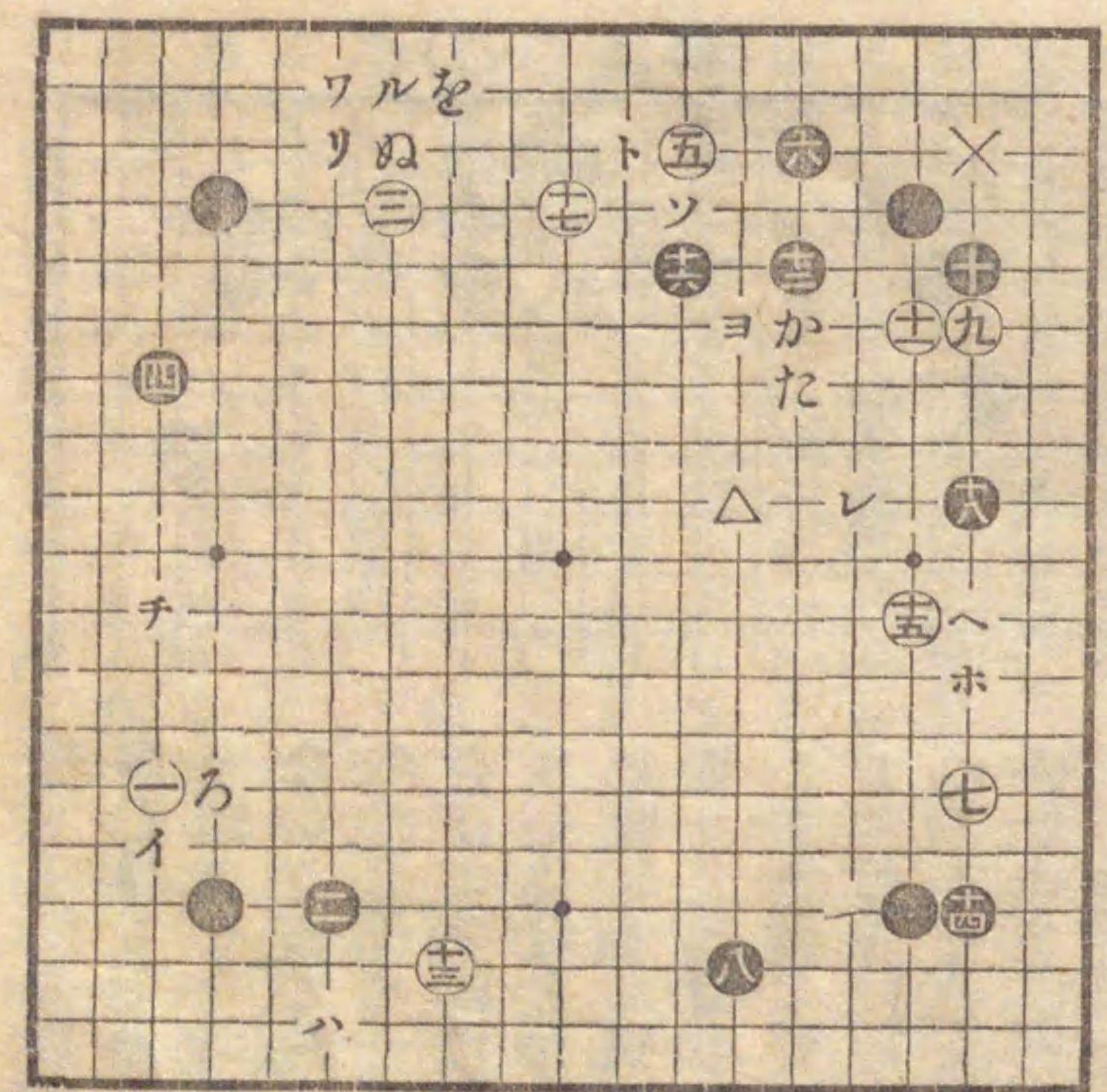
(五其)考參
 と云ふことにならぬ。第八、前々來説明せし通り白(一)にもつげず、(三)にも斜走せず、單に(二)へ尖む結果は參考(其八)の如く樂往生と觀念すべきである。第九、參考(其九)の如く白(二)に押したる時は黒(三)に引くは肝要の手である。斯くてはすつ

かり隅地を荒らされて黒は損をしたやうであるけれども堅壁一點の瑕なく、大手、搦手にすくめる弱敵を、自由に蹴散らし得べき姿勢に在るを以て得失を償ふて餘りあるのである。更に之を詳解せんか。第十、結局參考(其十)の如くなるべく、白は尙ほ一手を隅に費やして生きざるを得ぬ。黒(五)の下りを利用して右側の白を攻むる手段あるに非ずや。第十一、(其十一)の如く黒は穩便に△印へ引かずして嚴しく(二)に突當る手段なきに非ず。斯くて黒(一)にはねれば白は(ろ)に劫を争はん決心である。黒が此劫に負けては少からぬ損害を被る譯であるから容易に切仕掛けに行くことは出来ぬ。ソコで第十二、(其十二)の如く黒×印へあてずして(二)に置いたからとて白(三)と互りを止めるを以て外部との關係上容易に白を擒にすることが出来るものでない。夫故に參考(其十一)の如く黒(二)杯に突當らずして穩に△印へ引いて居る方が却て後の爲めと了解すべきである。

之を要するに本圖に戻り説明せんに黒(三)の飛びあるにも係らず(二々)即ち×印へ打込むと前來説明せし通り何れにしても白の不利に歸するから此場合×印の打込みは決して上手の爲さざる手と心得、外部の形勢切迫せざる限りは安心して奮闘するが宜い。

△兩楯あきは棄て置け、便覽の爲め更に第五局(第一圖)を再掲して説明する。白(三)は單に掛りと云ふに過ぎない。之れに對し黒は既に(三)と高く締りある以上は、大手、搦手共に敵の掛りは低く、兩方共に楯明で一方を防げば一方から滅されること云ふ譯で、折角受けても一手の働きを爲さぬ處であるから寧ろ手を抜くに如くはない。勿論手数も愈々進んで此隅を固める外に好き場所もないと云ふ機會に觸れたならば黒(一)に

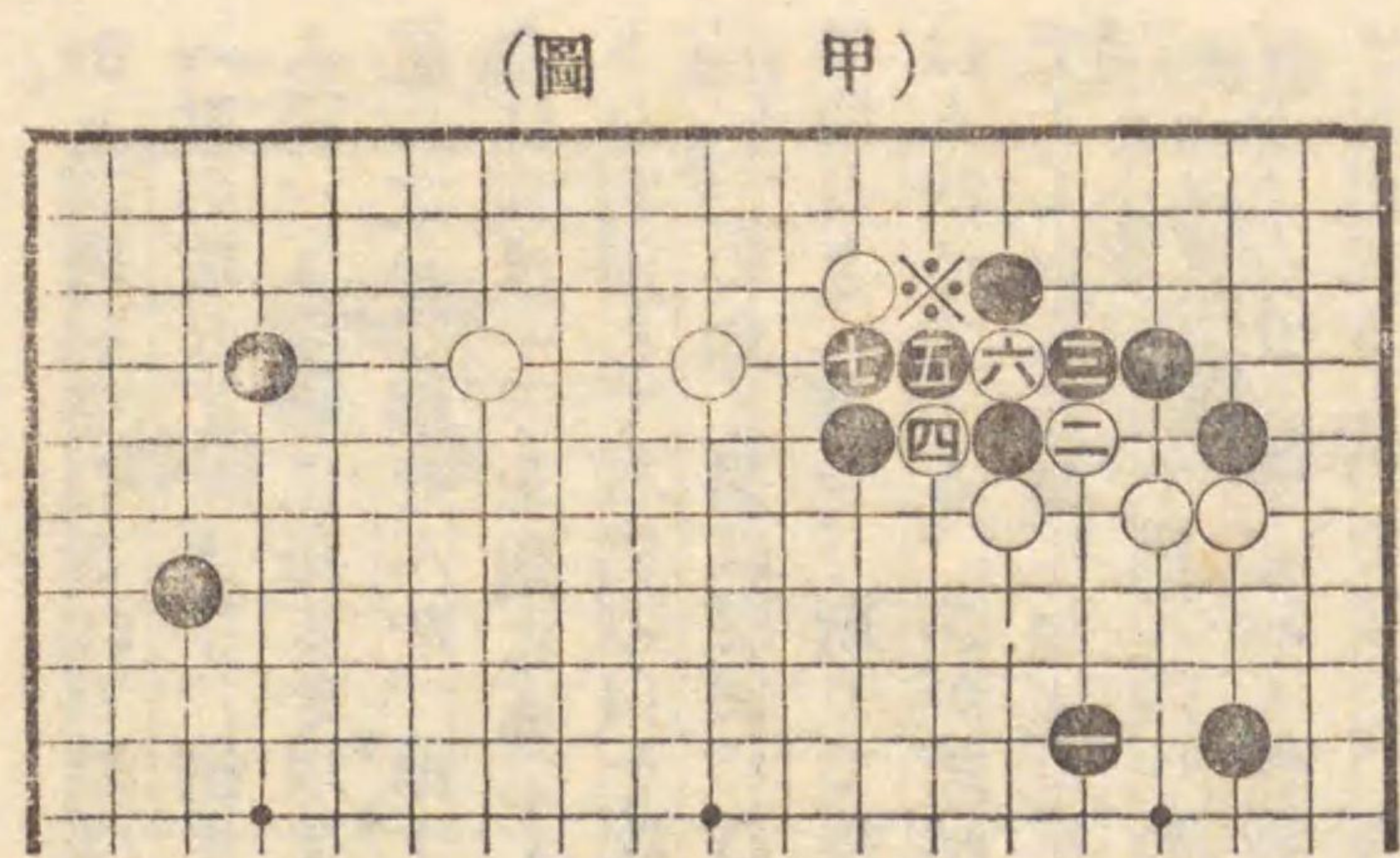
尖みつけ、白(ろ)に延び、黒(ハ)に守る位のものならん。斯くせば双方の楯明を一時に防ぎ得る譯である。但し是は尙ほ早急と謂はざるを得ぬ。此に於てか黒(四)と締りて(ホ)の挾撃を狙つたのである。左れば白は其挾撃を凌ぎ旁(五)と模様を形造るは餘儀なき應手である。白(五)は通常(ハ)に二間開きすべき所であるが、一方には(五)の二子あり、且四子も置かしてあるから、斯くの如く變化を試みて模様を張つたのである。▲黒(六)の戰略、ソコで黒が(二)へ飛んだのは良い手で、是れには二様の意味が含まれて居る。其一は白が若し手を抜けば上の模様によつては單に(二七)へ攻込むこともあり、或は劇しく(ト)へつて打つ手段もある。其又一方に於ては(二八)の打込を狙つて居るのである。左ればとて白は双方を一時に凌ぐことは出来ぬから先づ(二七)と應じて(三)の兵備を整へたのである。此に於て黒は豫定の通り(二八)へ打込だので、コ、は敵の急所であるが、其他の大場如何と云へば其(一)は黒(一)に尖みつけ、白(ろ)



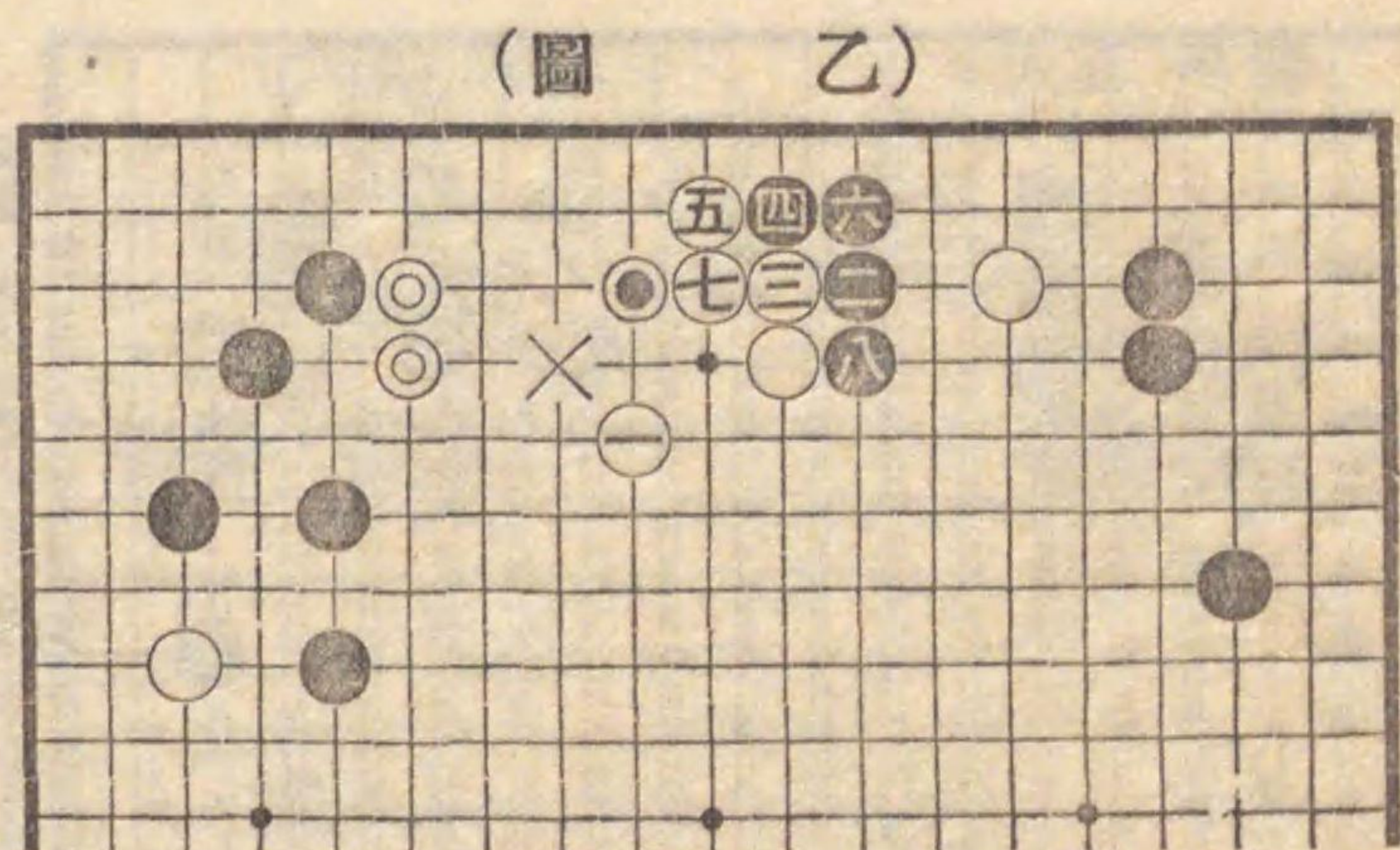
尖みつけ、白(ろ)に延び、黒(ハ)に守る位のものならん。斯くせば双方の楯明を一時に防ぎ得る譯である。但し是は尙ほ早急と謂はざるを得ぬ。此に於てか黒(四)と締りて(ホ)の挾撃を狙つたのである。左れば白は其挾撃を凌ぎ旁(五)と模様を形造るは餘儀なき應手である。白(五)は通常(ハ)に二間開きすべき所であるが、一方には(五)の二子あり、且四子も置かしてあるから、斯くの如く變化を試みて模様を張つたのである。▲黒(六)の戰略、ソコで黒が(二)へ飛んだのは良い手で、是れには二様の意味が含まれて居る。其一は白が若し手を抜けば上の模様によつては單に(二七)へ攻込むこともあり、或は劇しく(ト)へつて打つ手段もある。其又一方に於ては(二八)の打込を狙つて居るのである。左ればとて白は双方を一時に凌ぐことは出来ぬから先づ(二七)と應じて(三)の兵備を整へたのである。此に於て黒は豫定の通り(二八)へ打込だので、コ、は敵の急所であるが、其他の大場如何と云へば其(一)は黒(一)に尖みつけ、白(ろ)

へ延びた時、黒(チ)に打つ手段もある。其二は黒(リ)、白(ぬ)、黒(ル)、白(ぞ)、黒(ワ)に粘るも亦一策であるが、併し前に説明した通り、黒は(二六)へ飛んだ意思をついで譜の如く(二八)へ打込 のが順道である。事コ、に至つては(五)、(二)の白は事太だ急なり、何とか應手せざるを得ない。假に白(か)につけ黒(ヨ)に跳ねたりせよ、白は(た)へ延びる位のものなるべく、黒(レ)に飛ばざり如何、黒白共に北げ(一)となつて白の模様は消されて仕舞ふではないか。或は又黒(ヨ)に孕れる手で單に(レ)に飛んで居ても宜い。其時白は甲圖の如く打つこともあらう。斯くて白が※印を切つて劫仕掛に來たらば黒はドコでも捨てドシ(一)切を打抜いて仕舞ふが宜い。

▲黒(三)の振變り手段 更に第一圖に戻つて説明せんに白(か)へつけずして(レ)に冠し來るとせんか。黒の應手々段は種々あるが、一番わかり易いのは乙圖の如く黒は(三)と轉じて振變るに如くはない。斯くては多少白地が出来た姿であるが、併し白(七)の一子は敵地へ置去りになつて黒の勢力範圍も相應に出來て居る。彼此相殺すると白地は殆どゼロになつて仕舞ふ。此に於て白若し(七)の一子を北げ出せば黒(六)の一隊も亦中原へ飛出すから結局白は苦まざるを得ぬ。其中に方々へ障りが出來て損をしつゝ北げねばならぬやうな事になる。コ、に於てか黒(三)の振



あるが、一番わかり易いのは乙圖の如く黒は(三)と轉じて振變るに如くはない。斯くては多少白地が出来た姿であるが、併し白(七)の一子は敵地へ置去りになつて黒の勢力範圍も相應に出來て居る。彼此相殺すると白地は殆どゼロになつて仕舞ふ。此に於て白若し(七)の一子を北げ出せば黒(六)の一隊も亦中原へ飛出すから結局白は苦まざるを得ぬ。其中に方々へ障りが出來て損をしつゝ北げねばならぬやうな事になる。コ、に於てか黒(三)の振



りて白(一)の「ボウシ」若くは×印の手段いづれも妙ならず、自ら固むると同時に敵をも極らしむる不利あるを以て成べく漠然と敵を迷はす手段に出で、最初第一圖に就て説明せし通り先づ(か)へつけ、黒(レ)に飛び、白(ヨ)に延びたりと假定せよ。蓋し黒は(ソ)へ突當るであらう。此場合白(ト)杯に引いて居ては碁がおくられて仕舞ふ。ソコで白△印に打つは餘り調子の好い手ではないが、假に斯く打つたとせよ。此結果は如何になるべきか。

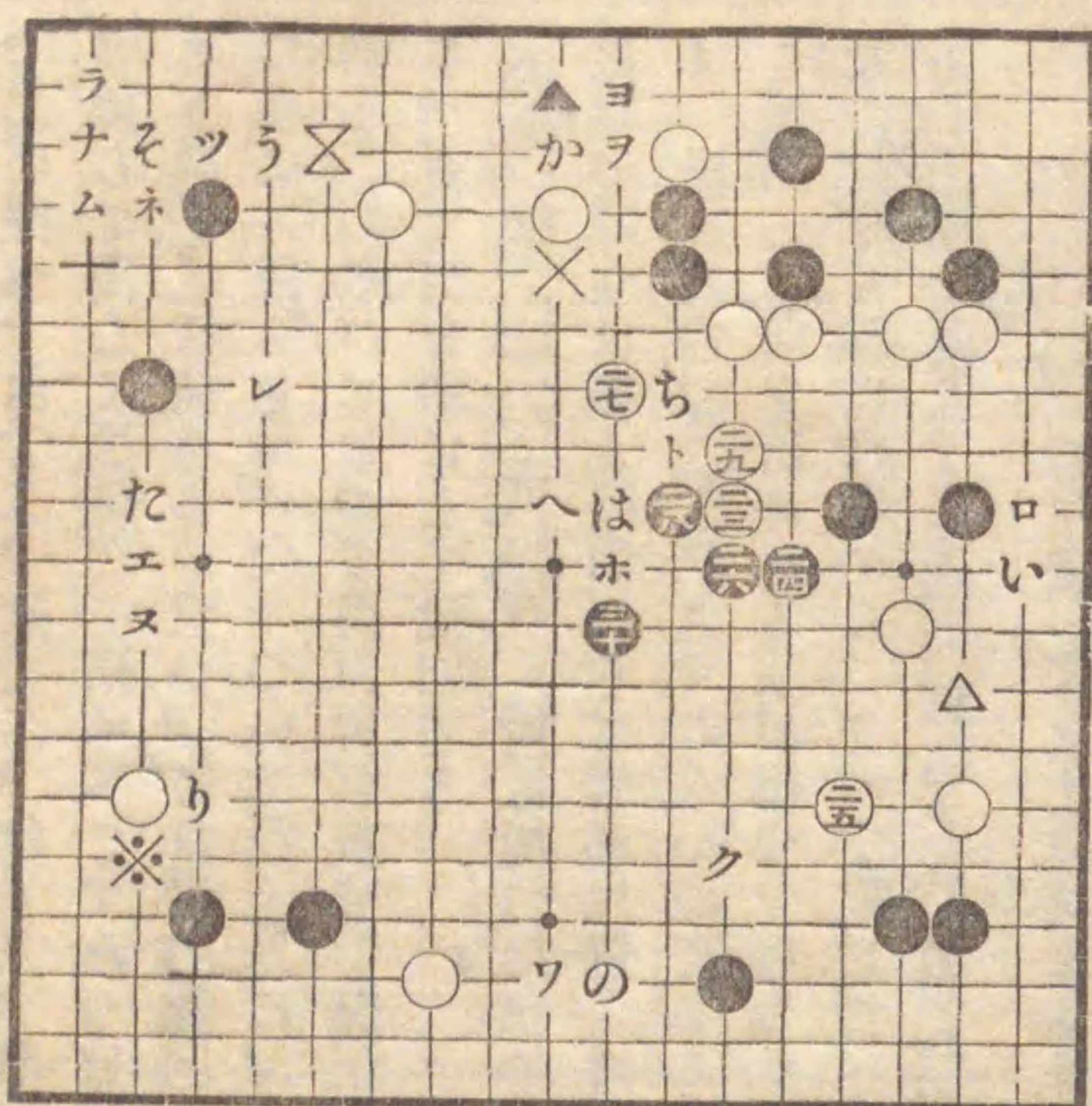
變り手段の益々妙なる所以を了解し得るであらう。然るに白(二)と冠せし時黒(一)子を圍地に生かさんと焦り出したり或は白(三)子と(二)の聯絡を絶つて攻合ひの手段に出づるは餘程先きを見越した上でなければ甚だ危険なりと戒めざるを得ない。吳々も乙圖の如く黒(三)と振變ることを忘る可からずである。扱て又白(二)に冠せずして×印へ打つこともあらんか、斯くて黒はやはり(三)と振變つて仕舞ふが宜いのである。以上の説明によ

第五局 ▲印裾明と左上隅の戦略

第五局(第二圖)

▲第三回 黑白兩軍の繩張り 前段に於て説明せし如く白(三)に冠したる時黒(四)、白(五)、黒(六)、白(七)、黒(八)、白(九)、黒(十)に斜走したりと假定せよ、白は前後事、甚だ急にして頓と應手に苦まざるを得ぬ形勢である。何れが最も急であるかと云へば黒から×印につけられて聯絡を断た

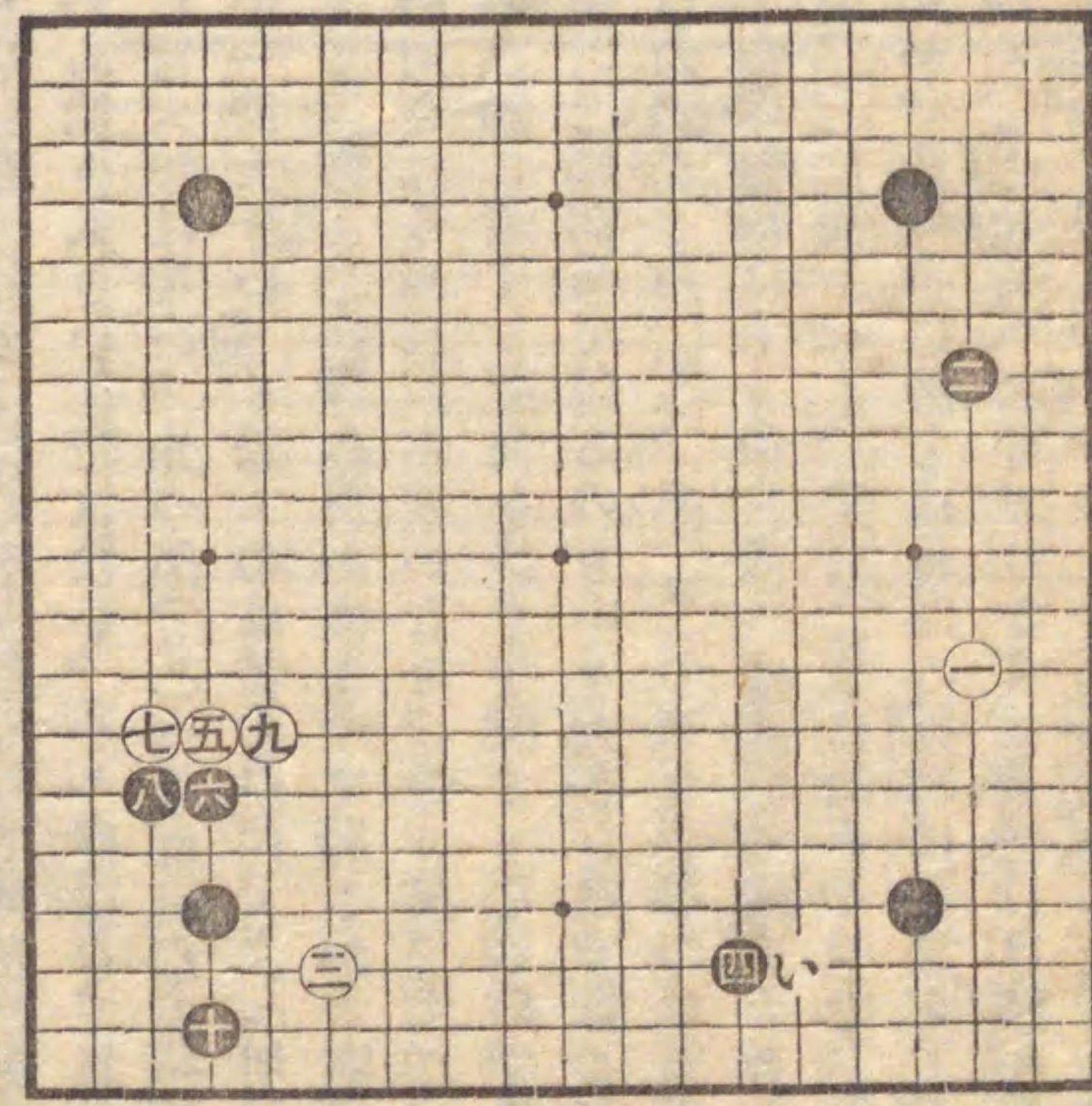
るゝのが一番怖いのである。或は又右側中間の三子も前後に隊伍整然たる強敵を控えて居るから△印の打込ありて中々凌ぎ切れぬ苦境に居るのである。何とも打ちやうに困る。先づ(い)に打つて聯絡を圖る手段に出る外はあるまい。黒は無論(ロ)に押へねばなら



居るから△印の打込ありて中々凌ぎ切れぬ苦境に居るのである。何とも打ちやうに困る。先づ(い)に打つて聯絡を圖る手段に出る外はあるまい。黒は無論(ロ)に押へねばなら

ぬ。ソコで白は(は)にでも挟んで黒を威しながら自分の備へを整へる趣向をする位のものである。左れば黒(ホ)、白(ヘ)、黒(ト)、白(チ)となるべき形である。扱てさうなつた所で黒の打場はドコかと思渡すに×印の斜走か將た※印のこすみつけか、否な然らず、既に白(ヘ)の突岬あるからに黒※印へこすみつけ白(リ)の延びとなる姿を視よ。敵は彼此相呼應してイザ戦ひと云ふ時には遙に便りとならん心強き姿に在れば縦し黒(ヌ)に挾撃すればとて痛切に敵に刺戟を與ざるのみかは、自らの陣立とて何時敵の襲來を受くるやも測り難き危険な事と云ふを得ず。加之ならず左下隅の黒の陣立も亦好い形とは云はれぬ。夫れから又×印のけいも既に一方に(ヲ)へはね出して白一子を取込む手があるからはコ、は敵の地でもない處へ掠めに行くやうなもので只自分を固めるに過ぎぬから餘り大きい手ではない。かう穿鑿して見るとモウ外に大した大場はない。先づ黒(ヲ)へはね出して一目を擒にするのが一番大きい。と云ふのは若し白に(ヲ)へ引かれることになると(三)(三九)一隊の白が固まつて居るから隅に向つて何とか趣向される恐れがあるからで、旁々黒(ヲ)に一子を擒にするのは隅に對する趣向を凌ぐ手段ともなるのである。左なくば黒(ヲ)に詰めて居るの中々大きい處であるが先づ黒(ヲ)にはね出し、白(か)、黒(ヨ)の下りとなつたとせよ。コ、に於て白の打場はドコかと云へば(た)の詰めであらう。左すれば黒(レ)に飛ぶべく、又白(た)に詰める手で(そ)に打込むとせんか。此場合に於ては▲印の裾明に注意せよ。黒若し普通の如く(ツ)に押へて中で生かすと右邊には堅固なる白の二聯隊が蔓つて居るから、つまり黒は碁場に土手を築いたやうになつて何の得る處もない。困つて黒は▲印の裾明を利用して黒

第六局(第一圖)



左側中腹の白(四)の二子は浮石になつて居るから何とか此始末をせねばならぬ。夫故左側中腹の黒はよじや右下隅の味方と聯絡を断たれた所が左側中腹の味方か、左なくば左下隅の我軍と聯絡を保つは容易の事で、黒軍の勝利歴然、白に勝算なしと断定して宜い。

第六局

▲第一 黒白の小手しらべ 黒(三)と打つも亦一策である。と云ふのは白(二)の掛りが遠くして右下隅に對する響きが薄いから手を抜いても差支ない。白(三)に對しては黒は通常(尖)の方面に應ずるのが普通であるけれども遠く右下隅に掛つた白(二)に對して一旦手を抜いて其反對の側なる右上隅の締りをした。然るに白(三)の掛りに對して普通の如く黒(六)或は七と左下隅の守備をする白(八)に掛られて右下隅の城主が兩掛りに攻めらるゝのみならず、白(三)と(七)の繩張り之餘

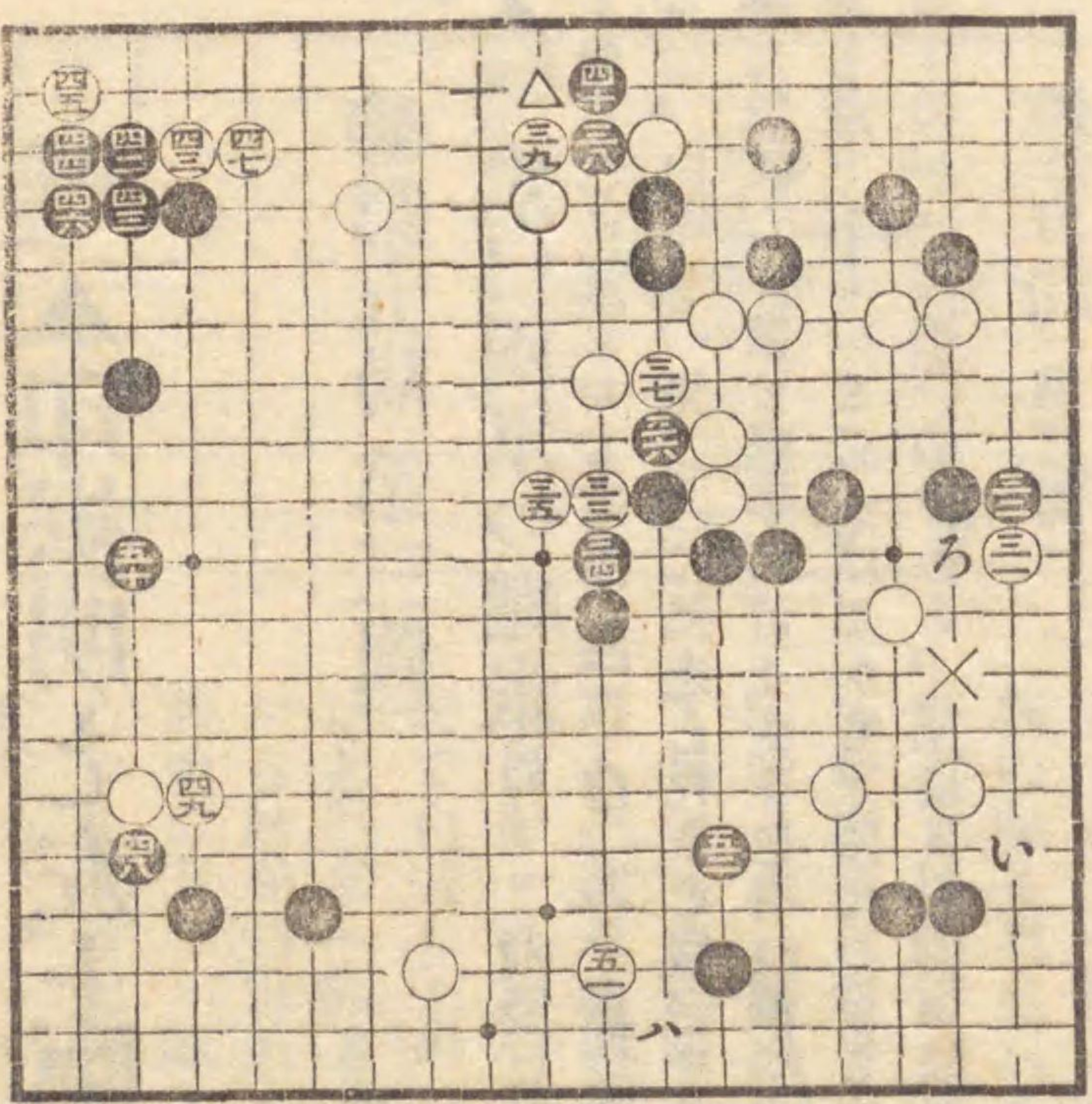
つは容易の事で、黒軍の勝利歴然、白に勝算なしと断定して宜い。

(ネ)に押へ、白(ツ)、黒(ナ)、白(ラ)、黒(ム)、白(ウ)と相交換して而して黒轉じて※印へこすみつけ、白(リ)に延びたとき黒(エ)に詰めるが宜い。これで右上隅及左上隅方面の地争ひは一段落を告げた。ついで白(の)に詰める外なかるべく黒(ク)の飛びとなつて黒白兩軍攻守の繩張り定まるのである。更に圖を新にして説明する。

第四圖 黒白の大勢

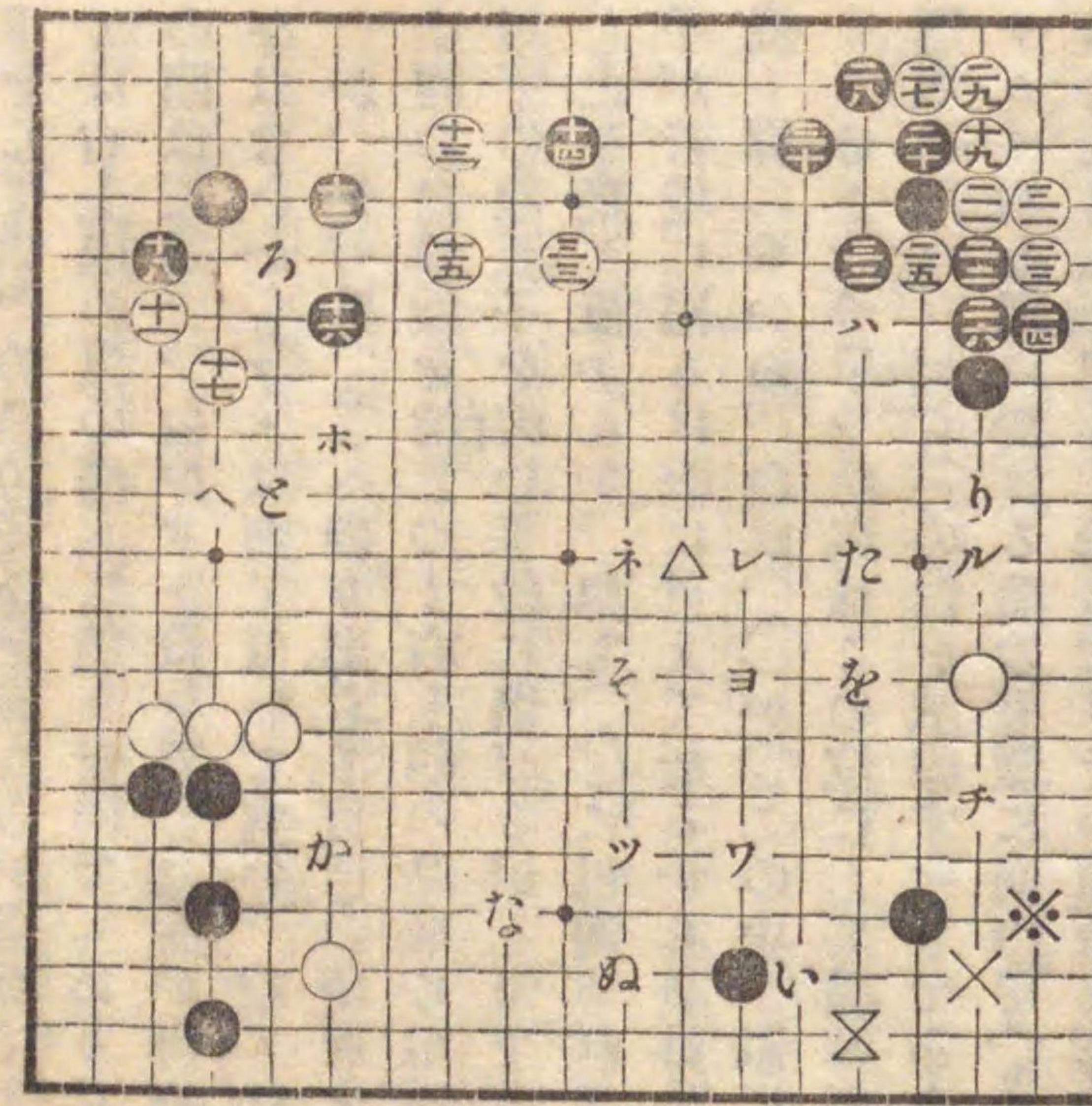
▲第四圖 黒白の大勢 借ら黒白兩軍の大勢を案するに、黒軍の陣立は頗る堅固にして容易に侵す可らざる武者振である。此場合白は(い)にこすみたい處であるが、左すれば黒から×印の筋を衝かれる筋が残つて居るから中々(い)杯に突んで儲ける譯にはゆかぬ。先づ(ろ)に押へて居るのが本手である。扱てさうなると隅へ打込まれる恐れがあるから黒は(ハ)に突んで隅を固めねばならぬ。茲に於て全局の形勢を見るに左上邊の白地は△印の裾が明いて居るから未だ確定領域とは云はれない。其他には右側中腹に僅少の地あるのみで土臺比較ならぬのみならぬ。

第五局(第四圖) 黒白攻守の繩張り定まる



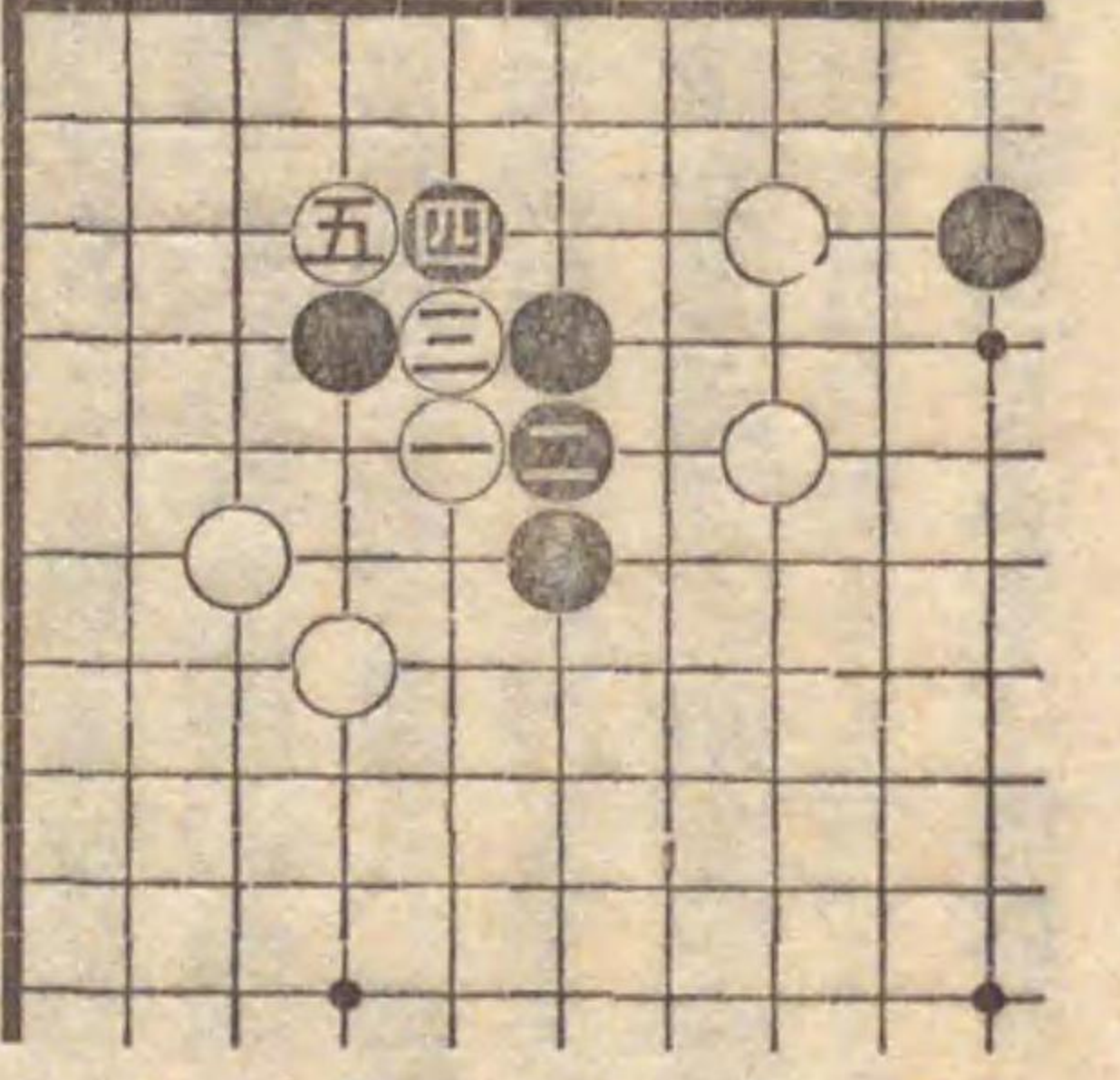
り廣くなつて打ちにくくなるから譜の如く黒(四)と締つたのである。黒(六)のつけは既に説明した通りで、白(七)と緩めて下るからは黒も亦圖の如く(八)に押へ、ついで(十)と固めて仕舞ふが宜い。黒(十三)は左側中腹の白模様を厚いから機を見て其勢力圈内に侵略を試みやうと云ふ手段で斯くの如く高く締つたのである。夫れから又白(十五)に對し黒が(十四)に挾撃したのは白を(十五)に飛ばして己れも亦一步先きに(十六)へ飛出して徐々に白の模様を消さうと云ふ趣向である。サアさうなつては白(十七)の一子を棄置し譯にゆかぬから(十七)に突んで身固めをしながら暗に(ろ)の覗きを狙つたのである。黒白の暗闘虚々實々、寸分の隙もない處に言ふに言はれぬ妙味があるので(ろ)に覗かれると茲に小せり合ひが始まつて負傷せぬとは限らぬ。依つて黒(十八)へ突みつけて白(ろ)の覗きを豫防したのである。然るに黒(十九)の突みつけを等閑にして假に白(ろ)に覗きたりとせよ、其結果は如何成行か、請ふ甲圖に就て見よ。白(五)の切りとなる結

第六局(第二圖)

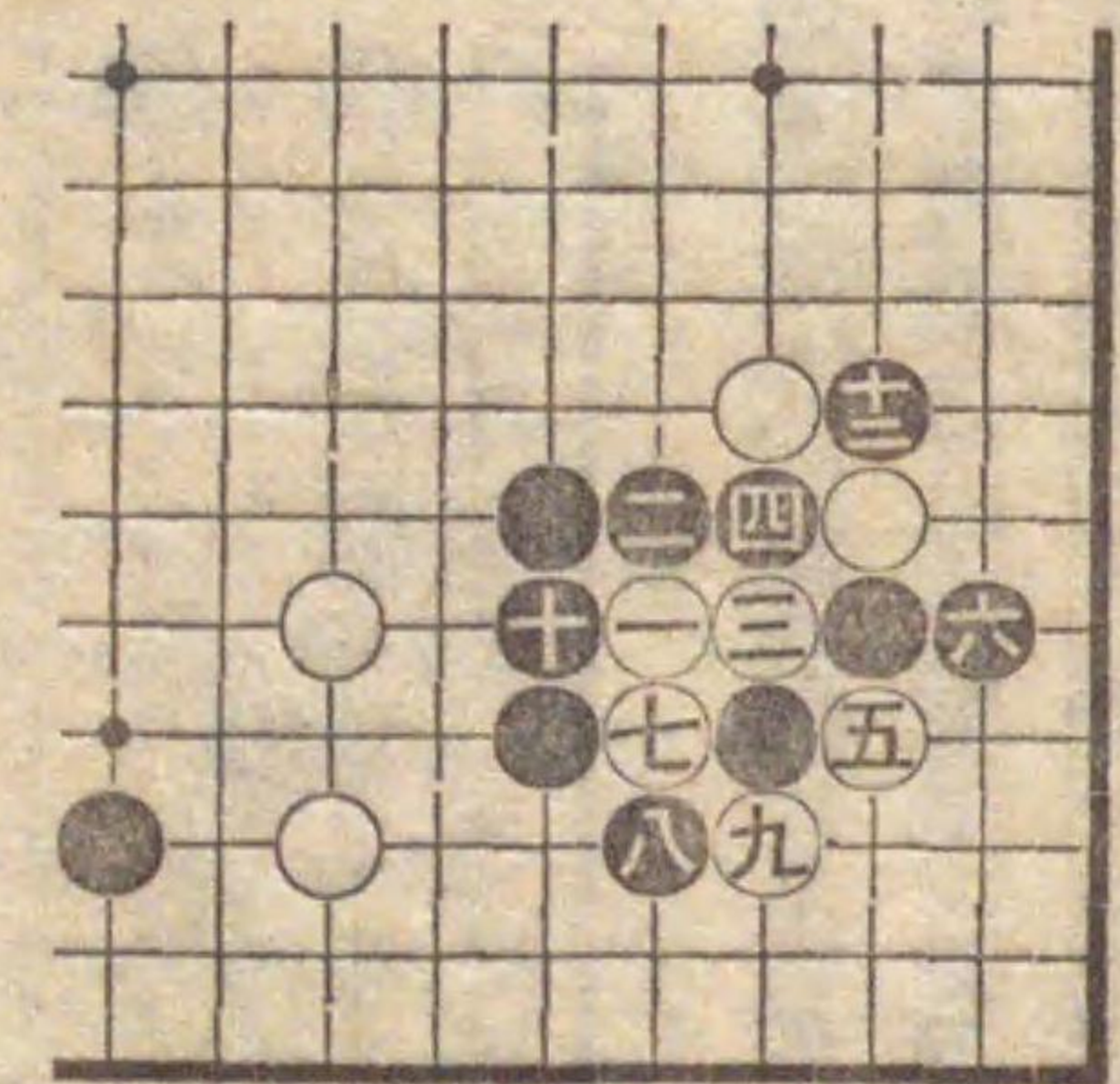


りとなる結

圖甲



果、黒(四)か、置石か何れかを取られる。黒は先づ置石の方を棄てなければならぬ。其損害は中々輕からぬのである。然るに黒(十五)の突みつけあるにも拘らず白強ひて(二)にのぞくとせんか。其結果乙圖の如くなつては外部の二子は支離滅裂、折角の



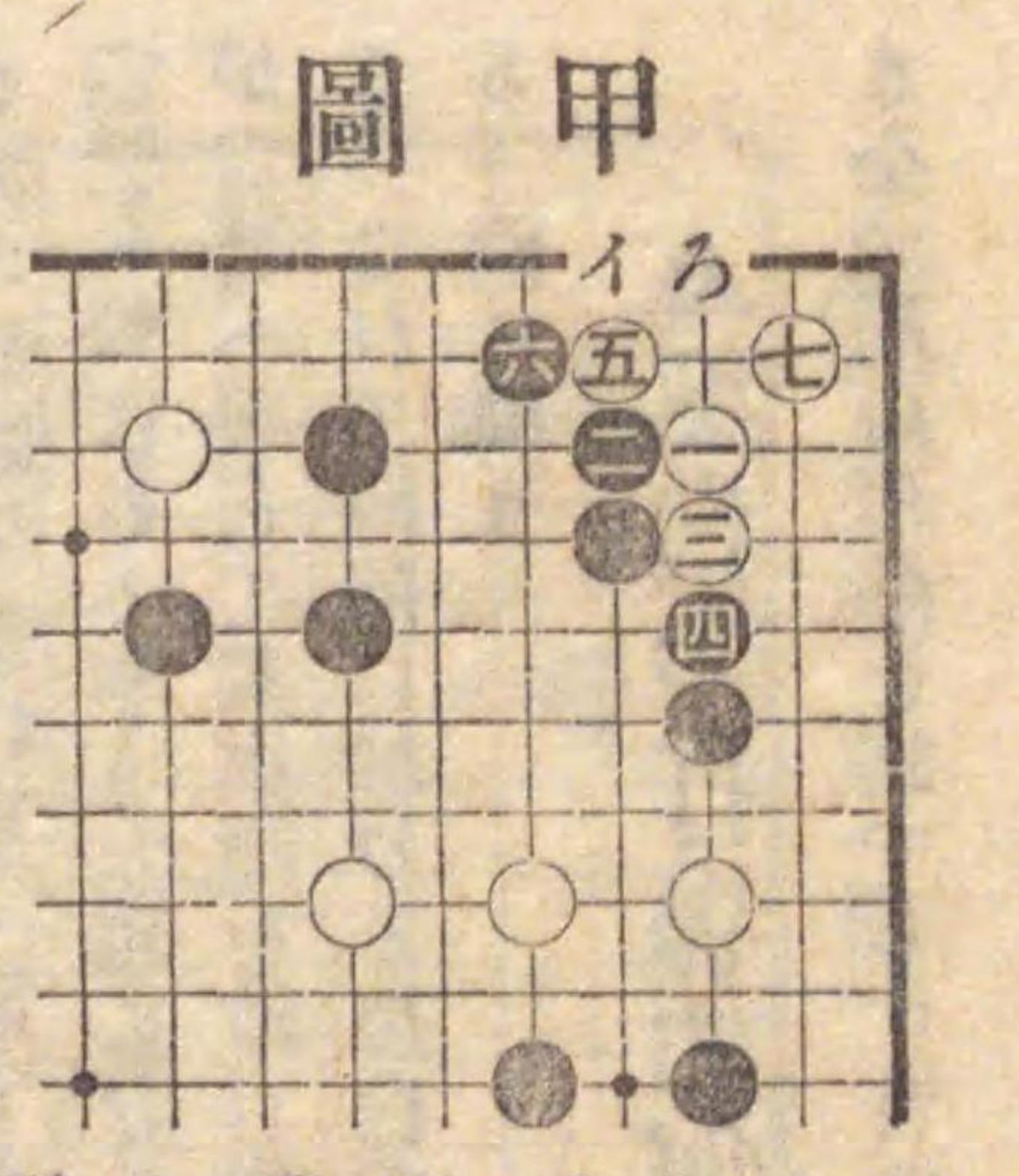
圖乙 白(七)の切り

勢力範圍はメチャ／＼となり、内側の白も亦絞られて花六形に愚集した杯は餘り見榮えのせぬ圖で白の不利や無論である。と云ふのは黒(十八)の突みつけあるに拘らず白が無理に(二)に覗いた累りである。次に白(十五)の打込に對し黒(三)までの受け答へをするのは通形である。但し黒(三)に押へる手で單に(三七)へ下る手段がある。ソコで白が(三)へ延びれば黒(ハ)に斜走し白(五)に押へた時黒(三)に飛んで大模様を造りつゝ攻めやうと云ふ戰略で是れ又一策である。本圖に戻り若し此上黒に(三)へ飛ばれるやうな事になると黒地が益々厚くなるから白が(三)へ冠して其模様を消し旁々自己の發展を圖つたのである。これで四隅に於ける黒白の争ひは一段落を告げたのである。例に依り

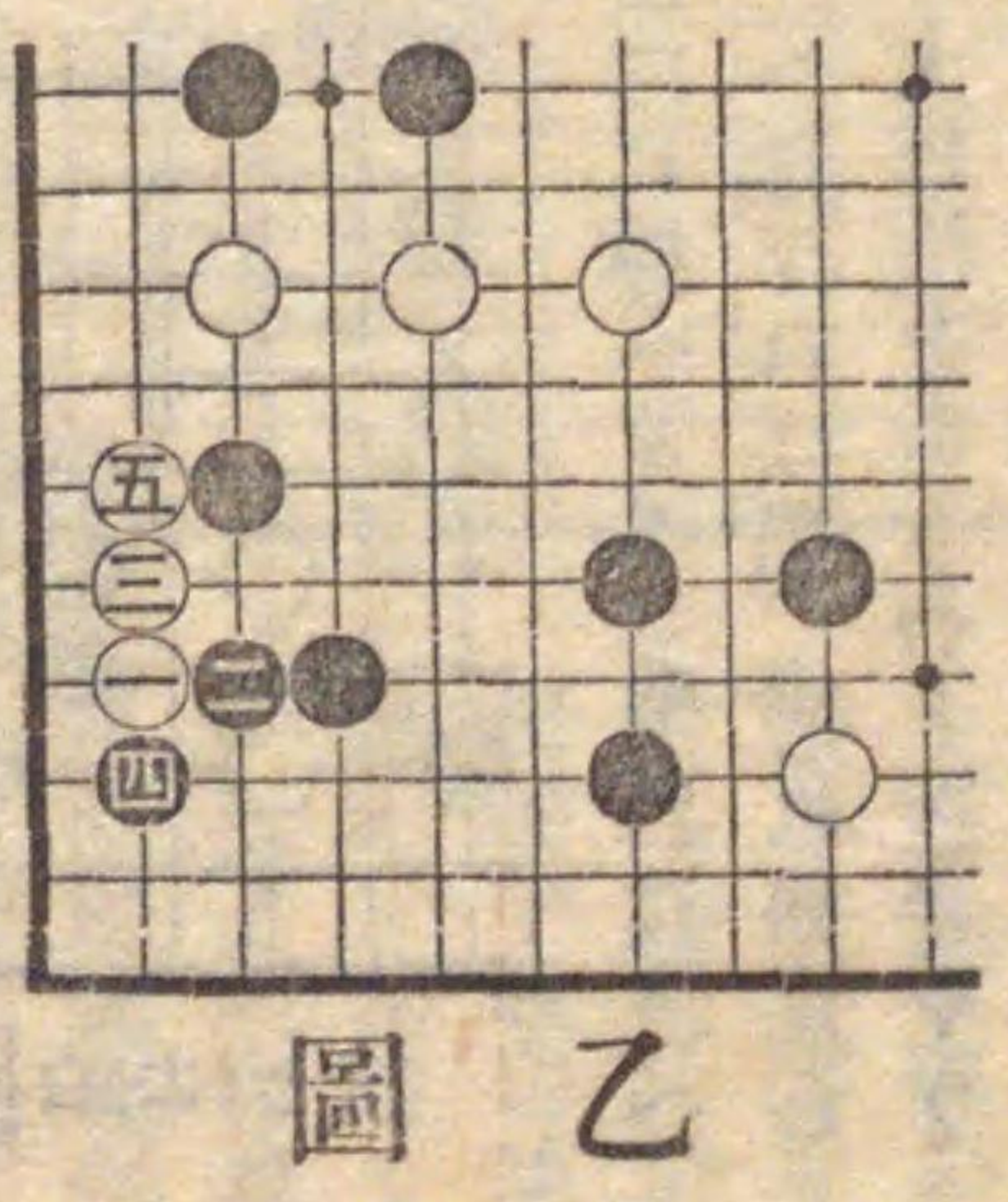
黒白の打場如何

と全戦局の形勢を案するに普通白(三)の冠子に對し何とか應

手をして(十四)の黒の安全を謀るのが當然であるが此場合に於ては右上隅の黒の備へは頗る堅固でもあり且つ黒(三)と(十四)の間は三間で、白がドウ策を弄した所が聯絡を断たれる氣遣ひはないからコ、は棄て置いて宜い。左すればドコが一番好いか、先づ黒(ホ)へ繰り出して自己の發展を謀る一方に左側中腹の白模様を消しつゝ右上隅の黒軍と相呼應して暗に(十三)以下の敵三子を睨む手段に出づるが上策である。然るに白若し之を棄て置かんか。忽ち(八)に包圍されて(十二)(十三)の白二子が苦境に陥るは眼に見えて居るから是れはドウウしても棄て置く譯にゆかぬ。白は(八)か(九)の中、假に(九)に應手したりとせよ。最早や此處はこの位にして黒轉じて(チ)に打つて隅地を固めながら(二)の白を威嚇すべきである。其場合白はマサカに右上隅に於ける黒の堅壁に向つて(リ)へ二間開きする杯は只己れを守ると云ふ丈けで一向敵に響かぬ手であるからソナナ價値の少ない着手に屈托して居ると忽ち負けて仕舞ふ。故に此處は白としては手を抜く外はあるまい。更に黒の動作如何に由つて(二)一子の進退を決するとして白(ぬ)に詰めるが一番の大場である。左すれば黒は(ル)に挾撃するであらう。其時白(を)に飛出し黒又た(ワ)に遮断の計に出で(ぬ)の白を威嚇する一方に(二)の敵に對抗する隅地の防備を爲すが宜い。サアさうなかと今度こそ(二)(ぬ)の間に打込まれる恐れがあるから是非とも白は(か)に備へざるを得ぬのである。扱て黒の作戦如何。此場合黒(ヨ)に「ボウシ」に冠し白(た)に北げた時黒(レ)に追うて我堅陣の方へ壓迫するは誠に痛快の手段であるけれども黒として好んで戦ひを挑むは穩當の策に非ず。先づ(た)に飛んで白(ヨ)に迫立て其はづみに(ツ)に壓迫を加ふるは棋家の常に好き手順とする所である。ドウ



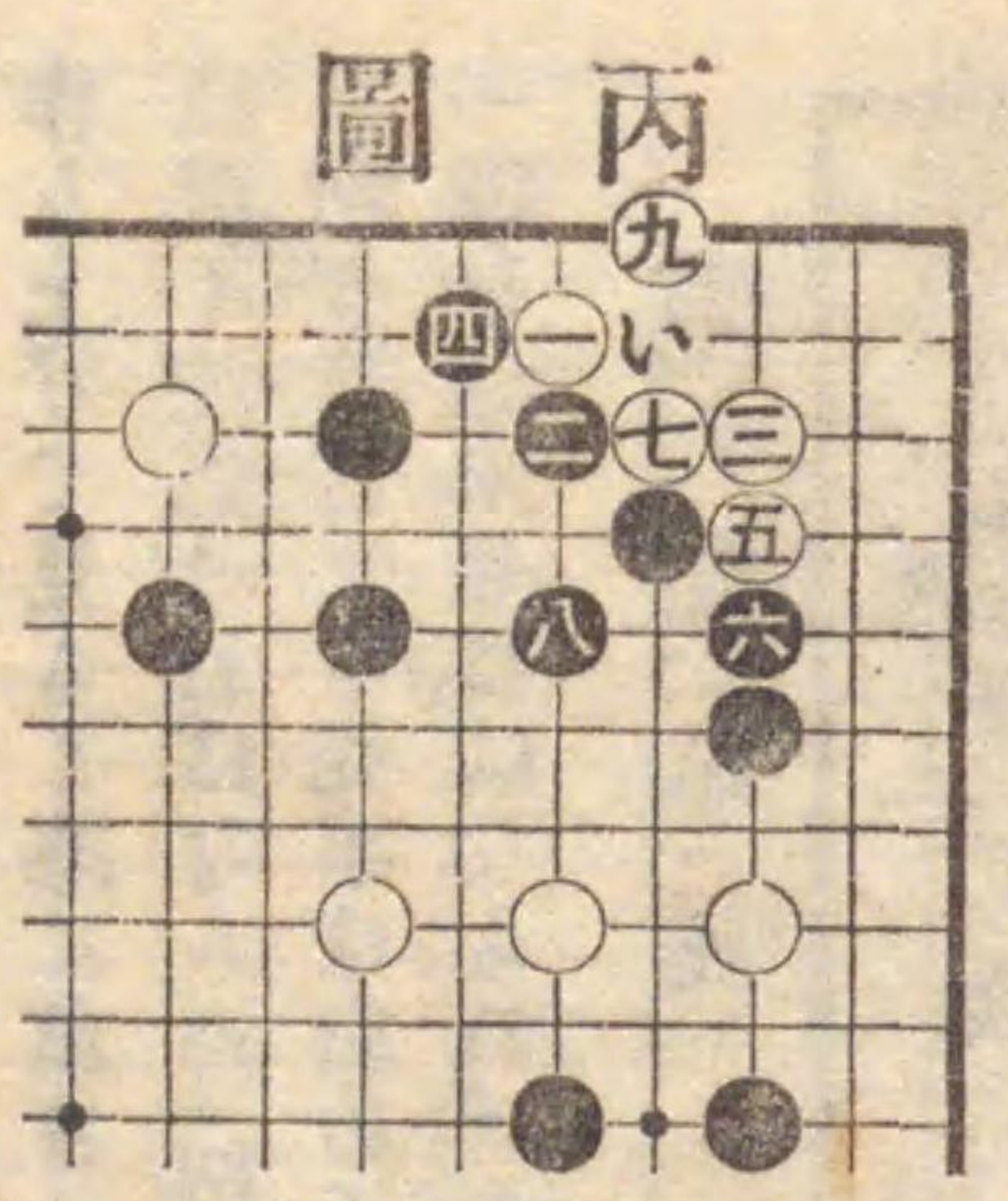
も斯う云ふ風に着々勝利を占めながら彼を伐ち之れを攻め立てられては白は殆ど打ち様に窮せざるを得ぬのである。若し此上手扱して黒から(レ)に飛ばれ白(そ)の時黒に又々(ネ)にでも打たれやうものなら益々黒地の模様が擴大するに反し白は水草枯



渴せる原野を徒らに北げ延びる。云ふ丈けで更に獲る所がない。因つて白は此場合△印に斜走して黒の模様を消しながら遙に(三)一隊の味方と聯絡を通じて無事を謀るは極めて穩當の手段であるけれどもソナナ手ぬるい事をして居ては逆も勝算はない。去りて一々敵の作戦計畫通り(な)杯に服従して居ては尙更ら敗北疑ひなしである、左れば此處は敵の勝手に放任して扱てドコに攻撃の鋒を向くべきか。此局面に於ては三様の戦略がある。第一は△印、第二は※印、第三は×印の打込である。是れより順次其成行如何を詳説する。

▲白三策濫用の祟 扱て白×印に打込みたる結果如何は甲圖に就て見よ。即ち圖の如く白(七)に掛粘ぎ黒(イ)にはねた時白(ろ)に却を争ふ外に手段はないのである。其割合はドウかと云ふと白の方が悪い。ナゼかと云ふによし白が却仕掛けに打たれたと云つて黒は(イ)にはねて却を争ふや否やは黒の自由である。夫故に心靜に全局の形勢を見定めて此切

を打抜いて仕舞へば則ち其が勝ちであると認むれば黒は(イ)にはねて却を争ふし、又黒(イ)にはねて直に却を争ふを不利と見れば、儘棄て置て他に轉じ機を見て(イ)にはねて却を争ふと云ふ選擇權を持たれて居る丈け白の不利たるは明白である。然らば、圖の如く白(二)に打込み(五)に亘つた結果はドウかと云ふと多少黒地を荒らしたやうではあるが、併し上手の嫌ふじかも二筋をはつて聯絡を保つたと云ふ丈けで先手を敵に譲つたのは是又白の不利益に非ずして何ぞや。斯く解説し來れば白は三策中×若くは※の打込を避けて△印に打つのが一番面白からう。其結果は丙圖の如くなる。白(七)は實は(い)に引きたいのであるが、それでは完全の活きと云ふ譯にゆかぬから止むを得ず(七)へ突當つたので、斯うなれば活きはあが、其代り黒の備への堅實になつた其反比例に中間の白三子が薄弱になることを覺悟せねばならぬ。尙ほ變化がある。それは白(い)に斜走せずして丁圖の如くに引く結果は譜の如く黒に(六)に



から止むを得ず(七)へ突當つたので、斯うなれば活きはあが、其代り黒の備への堅實になつた其反比例に中間の白三子が薄弱になることを覺悟せねばならぬ。尙ほ變化がある。それは白(い)に斜走せずして丁圖の如くに引く結果は譜の如く黒に(六)に

縊られる味がある。と云つて締殺されはせぬけれども崖邊を匂つて生きる杯は餘り白の手柄でもあるまい。斯くの如く外部に於ける白の陣形未だ收まらざるに黒を紛らさう杯いふ好手段を弄して隅地侵害の三策濫用の結果、何れも白の不利に歸する次

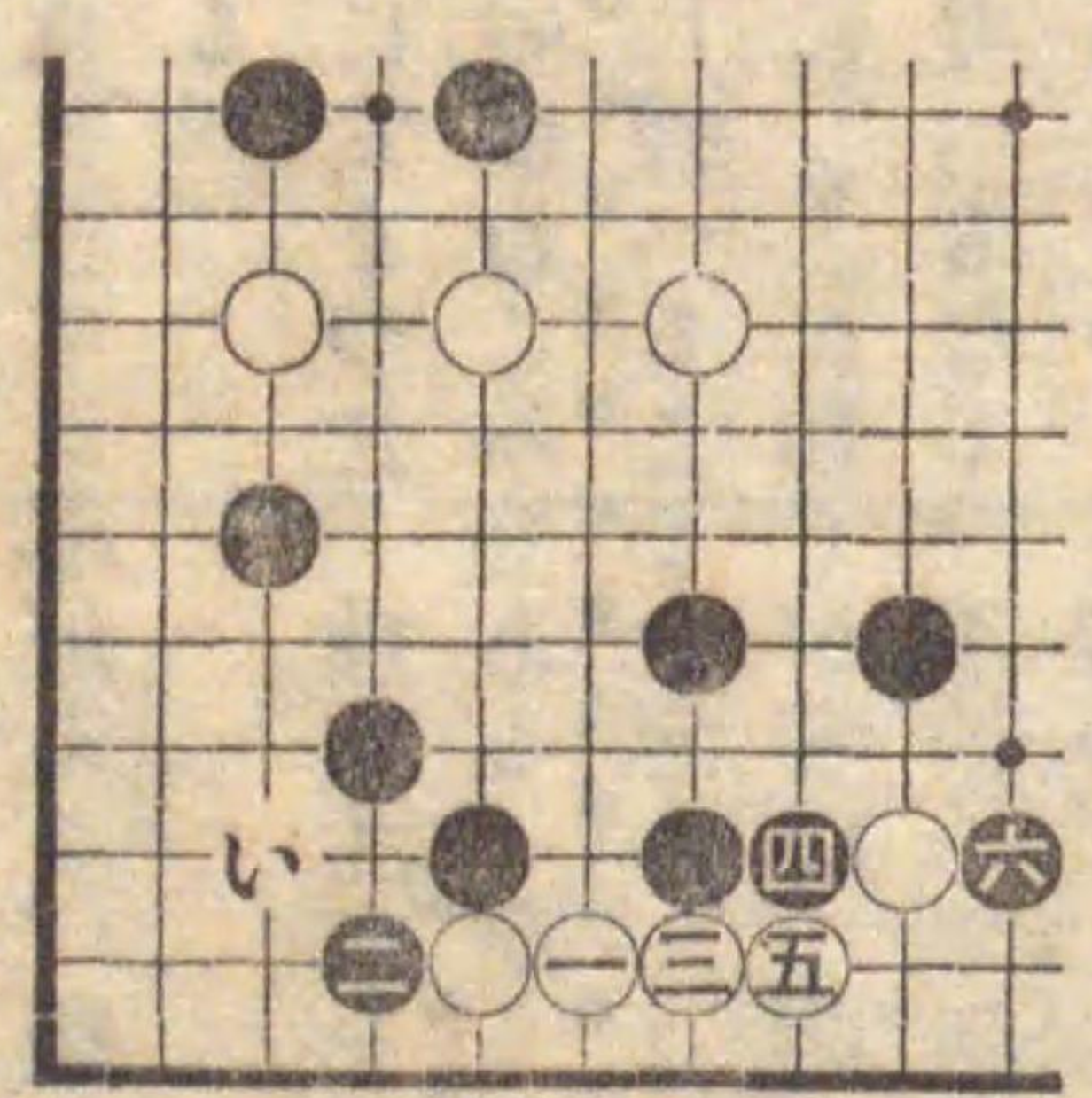


圖 丁

第は詳に了解されたであらう。便宜の爲め更に圖を改めて説明する。

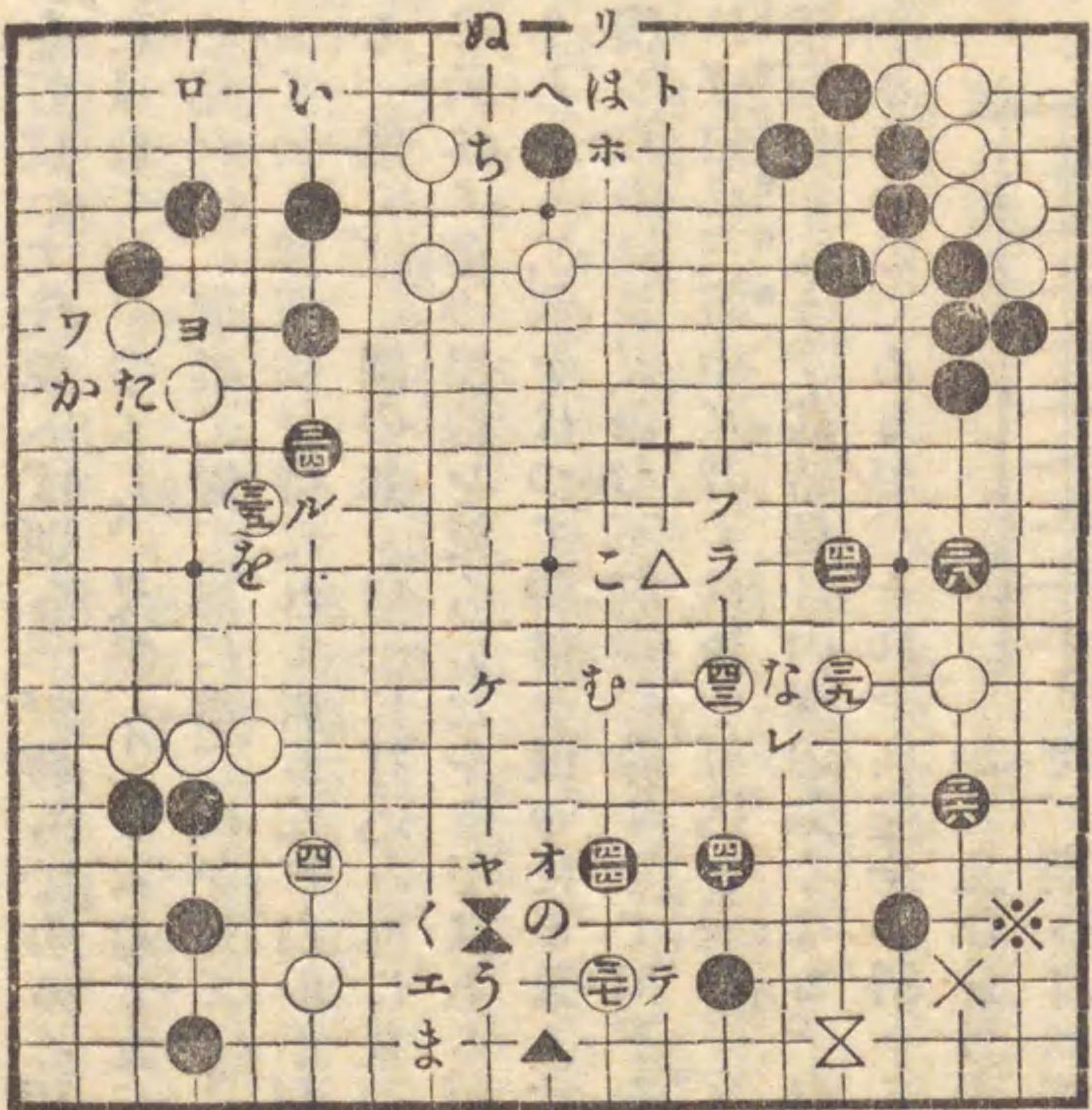
▲第三 黒白の敵本戦畧 前段既に説明せし如く白△印に斜走するも面白からず將た△印に圍ふは尙更ら妙ならず。左ればとて×若くは※或は×印に打込むも覆ばじき効果を得る能はず。いつそ其儘棄置いて(い)に迂り込むも亦一手段である。左すれば黒(ロ)に應ずべく、コ、に於て白は敢然馬首を廻らして敵は本能寺に在りと(は)の裾に殺到すべきである。其結果は黒(ホ)、白(ハ)、黒(ト)、白(チ)、黒(リ)、白(ぬ)の掛粘ぎとなり幾分黒地を掠めて自ら收めた形であるが其代り後手となつた。既に上邊中腹の白が其形を整へたかに押し、白(を)にのびたる時黒轉じて(ワ)にはね、白(か)に押へ黒(ヨ)にあて、紛れを生せぬやう自己の陣形を結束して仕舞ふが宜い。白は無論(た)に粘がねばならぬ。先手は尙ほ黒の手中に在り、依つて黒(レ)にのぞき白(な)につき黒(ラ)に追ひ白(む)に北げた時、黒に於ては白(は)の敵本主義に倣ひ

▲印の裾を襲ふて亘る手段があるけれども何もソナナ窮屈なことをするに及ばぬ。徐ろに△印へ攻め込むが宜い。白(う)につける外なかるべく、黒(エ)に押へ(注意黒(エ)の押えは何時でも棄石と心得べし)白(の)に膨れ、黒(オ)に押へ、白(く)を切り黒(ヤ)につき、白(ま)にはねて黒の棄石を擒にした時黒(ケ)にあほらばドウか、白は△印へつける位のものであらう。左すれば黒は黙つて(フ)に延びるが宜い。白は(こ)に並ぶ外なかるべく、此に於て黒の最も大切なる領地は右下隅であるから(テ)に突當つて白の打込を防ぐが宜い。それでも白から※印に置かれる位の筋は残つて居るが若し然らば乙圖の如く

撃退すべきである。尙ほ聊か注意を要する事がある。煩雜を避くる爲め圖を新にして解説する。

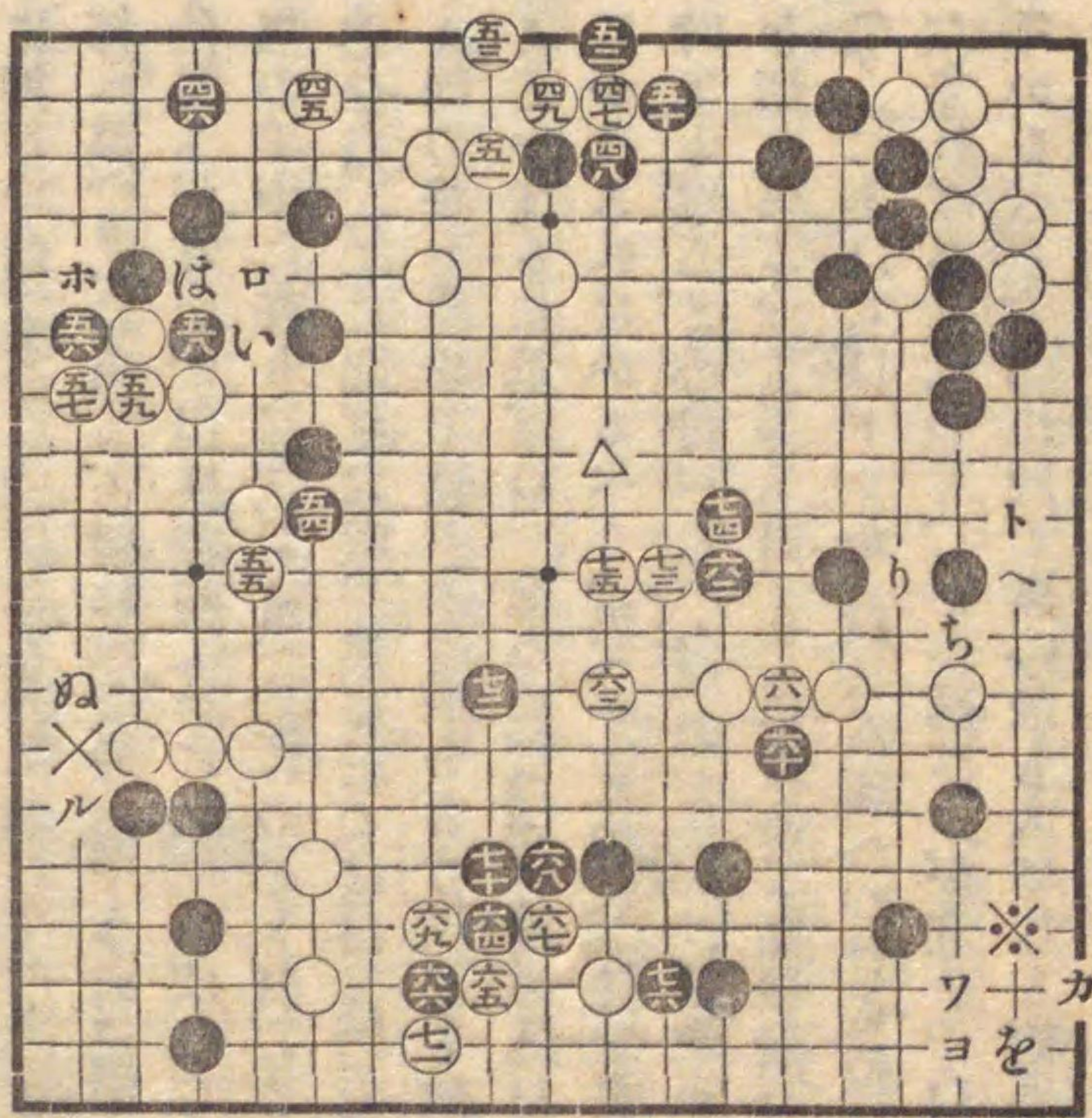
▲第四圖 黑白の大勢 は既に定まつた。茲に注意を要するところがあると云ふのは白(い)のはねこみである。斯う云ふ所は白の手段に逆ふて必ず(ロ)に押へることを忘れてはならぬ。白(は)に却を取らば黒は徐に(ホ)に粘ぐが宜い。然るに白が(い)に跳込んだとき前後の考へもなく、手拍子で無造作に(は)に回むやうな事が度重なること、いくら勝つて居る碁でも作り上げて見ると終に負けと云ふことになるから斯う云ふ處は深く注意せねばならぬ。扱て白(い)はねこみの結果は黒(ホ)の粘ぎと假定し先手は白の手にある。此場合白は(七三)(七五)の一隊を始末せねばならぬ。左なくば黒から△印に煽られる恐れがあるから

第六局(第三圖)



白(へ)につけ、黒(ト)に押へ、白(ち)に突當り、黒(り)の粘ぎとなつた時白は※印へ打込む位のものであらう。其結果は乙圖の如くなるものととして先手は黒の手に歸するから黒は轉じて×印へ

第六局(第四圖)



はね、白(ぬ)に押へ、黒(ル)の粘ぎとなるのである。ソコで白が若し(を)へつけたら黒は只(ワ)に粘ぐべく、白(か)に、互に押へるや否やは自由である。黑白の大勢はドウかと云ふと黒には四ヶ處に確實なる地あるに反し白には地らしいのは左側中腹に一ヶ所ある許り、それも二十目以内で外には區々の寸地あるに過ぎぬから白の負け。黒の勝たることは論を俟たぬのである。

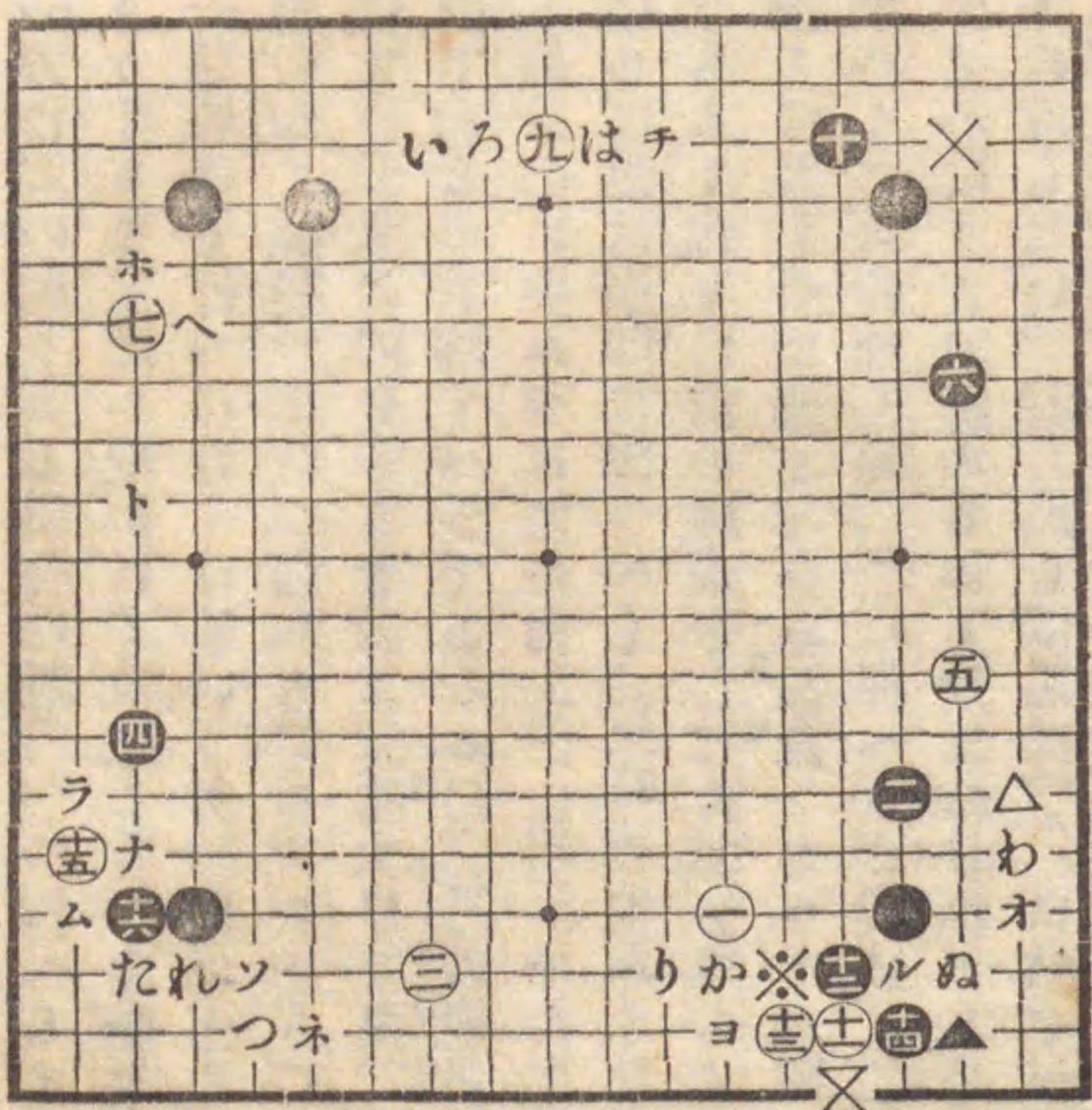


第七局「チ」の蜻蛉形は楔子抜け

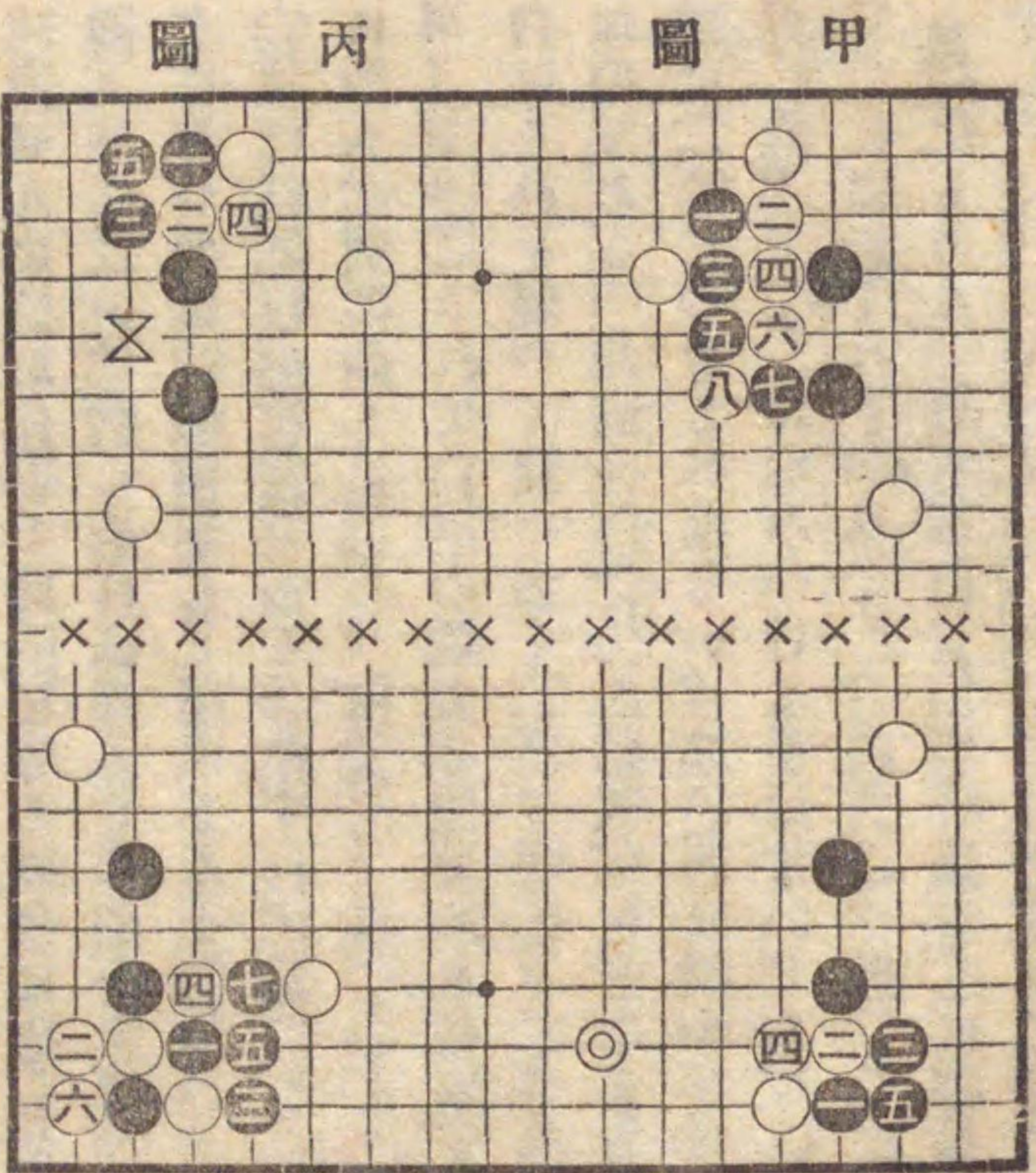
第七局

▲黑白小手しらべ 黒穴迄は再々説明してあるから既に讀者諸君は能く了解せられて居るであらう。白(五)は所謂ハンマの打方で是れ亦置碁に對する一の趣向である。此場合(い)若くは(ろ)に打つは普通の手段で、是れは左上隅に對する懸りであるが、或は(は)に割打を試みる手段もある。扱て白(九)に對して、黒がジツと(二〇)と尖んだのは誠に穩かで宜い。或は(二〇)の手で、先づ黒(ホ)に尖みつけ、白(へ)の時黒(ト)に挾撃するも

第七局(第一圖)



亦た一策であるが、夫れよりは圖の如く(二〇)と尖む方が穩當である。然るに黒(二〇)の手で(ち)杯に詰める者あるは實戰に於て往々見受けられる所であるが、是れは所謂蜻蛉形で肝腎の(二〇)の處



に楔子が一本抜け居るから、折角繩張の効力がなくなつて了ふ。と云ふのは三々即ち×印へ打込まれて折角繩張を

した其過半を敵に占領されて了ふからである。白(十)は何か策略でもあるかの如く見えもするが別に大した趣向がある譯ではない。只置碁に對して敵の應手を試めすに過ぎぬのである。左れば黒は圖の如く(二三)へ尖みつけ、白(二三)に引いた時黒(二四)に押へるが本手である。然るに黒(二三)に尖みつける手段を知らずして、隙があるからとて※印の挾間杯にもぐり込むは敵の術中に陥るものである。其結果は甲圖の如くなつて二つに割かれて了ふ。イザ白兵戦となると兎角混雜して紛れ易うなるから置碁としては好ましくない。併し黒(二三)第一圖の手で單に(二四)に押へる場合もある。それは白(二)が低く(り)にある時のことで、而して乙圖の如くなると、白(二)一子が稍セマイ形になつて了ふ。殊に第一圖の如く白三の一子ある時は宜しからず夫れは左方へ更に三間に開いたと云ふ重複の形になるからである。けれども第一圖の如く白(二)と高く陣取れる

一方に(五)の懸りある場合に黒(二)に押へると丙圖の如くなる
さうすると△印へ覗かれて攻立てられる結果を生ずるから第
一圖の如く打つに若くはない。勿論白(三)とはね込だとき丁
圖の如く振變つて打つ趣向もある。かやうに趣向で打つなら
ば宜いが單に隅を守ると云ふ意味で黒(二)と押へるのは
損であると了解すべきである。▲白(三)の變化 扱又本圖に戻
り黒(三)に尖みつけた時白(三)に引かずして(四)へ逆に延び
込めば黒は※印に出づべく、白(四)の尖みとなりて隅地を占領
せらるゝ代りに白の繩張をした外部を荒らす結果になるから
決して其割合が悪くない▲注意 ソコで本圖に戻りて注意を
加へんに譜の如く黒(二)に押へると或は(四)に覗かれはせぬ
かと心配する者があるかも知れぬけれども是れは少しも恐る
ゝに足らない。若し然らば黒は(ル)に粘ぐが宜い。ソコで白
△印に迂り込まば黒(オ)に應ずべく、又白外側から△印に迂
り込まずして(わ)に斜走せば則
ち戊圖の如く打つべく白が一手
の不足となつて、擒にされて了
ふ。併し圖中黒(二)の時白△
印に互らば黒(五)に斷ち切りて可
なり。又白本圖△印にも迂り込
ます或は戊圖の如く打たずして
單に△印に互らうとすれば癸圖
の如くなるべく、本圖中注意す
べきは白(五)にキツチリ粘かずし
て(七)を切れば結局戊圖の如く
なつて取られて了ふから此場合
は是非共圖の如く(五)と粘がざる

を得ない。其時黒は(二)と掛粘がすしてキツチリ(三)に粘ぐ
手もある。扱て癸圖の如くなる白に活きられて了ふから黒
は損をしたやうであるけれども實は然らず元來此隅は黒が眼
二つで活きさへすれば宜い處で、固より地になるべき處でな
いから白に活きられたからとて左程腹の立つ處でもない。斯
くの如く塗りつけて外部に勢力を張つた上に先手で白を攻め
ると云ふ利を占むるに至つては寧ろ黒の方が優勢である。茲
に注意して置きたいのは癸圖の如く白(二)に沿うて互らうとす
る時黒(三)に下らずして先づ(イ)印に突出し白(ろ)に押へた時
黒(ハ)へはねて打つ趣向もあるが、是れは場合に依つて打つ
べき手段たることを忘れてはならぬ。但し白(本圖)に覗く
手で直ちに▲印についたら夫れこそ黒は先づ※印へ突出し
白(カ)に押へたる時黒△印へはねて而して(ヨ)の切りと(ぬ)
の押へてを見合ひに打つべきである。尚ほ序でに本圖に就て
注意せんに黒が先手で此隅を守る機會に達したならば△印に
圍ふ外はない。併し是れは外部との釣合で打つべき手で今直
ぐに打つのは時機尙早しと謂はざるを得ない。扱て白(二)は
(た)に打込むが通常である。左すれば黒(二)に押へて白(れ)
に沿へば例の如く黒(ソ)、白(ツ)、黒(ネ)と二段はね(此手段
屢々説明せり)されて白(三)の効力を殺がれる結果を生ずるから、
白はそれを嫌つて圖の如く(五)と變化をして黒の應手を試み
たのである。此場合白(た)に打込むを非なりとすれば(二)か
或は(二)につける外はない。黒(二)は穩かな良い手である。
或は此手で(ナ)に尖みつける手がないでもない。左すれば白
(た)に斜走すべく、黒(ラ)、白(ツ)、黒(ム)に一子を擒にす
る變化もある。然るに白(た)の時黒(ラ)に押へる手段を知ら
ずして(れ)に押へんか、白(二)に突當りて活となるべく、其

圖 戊

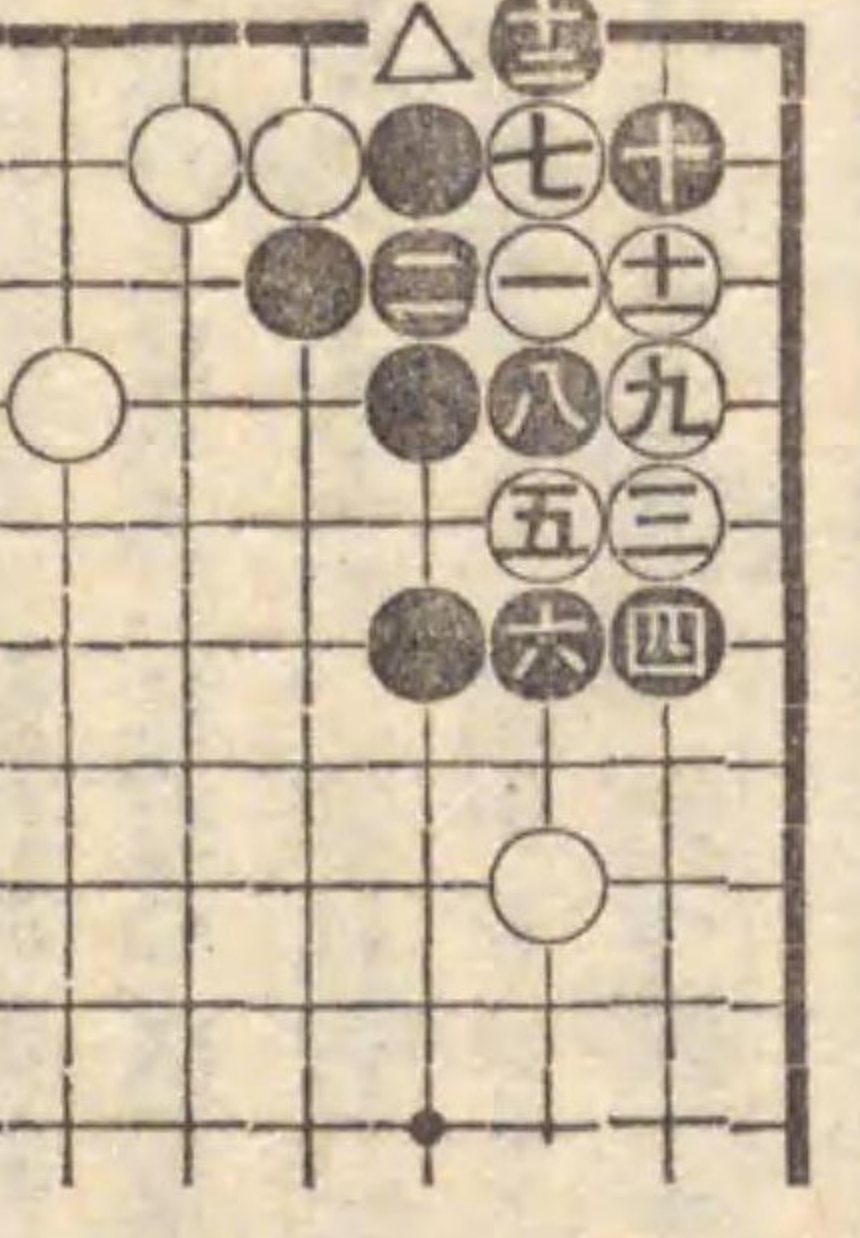


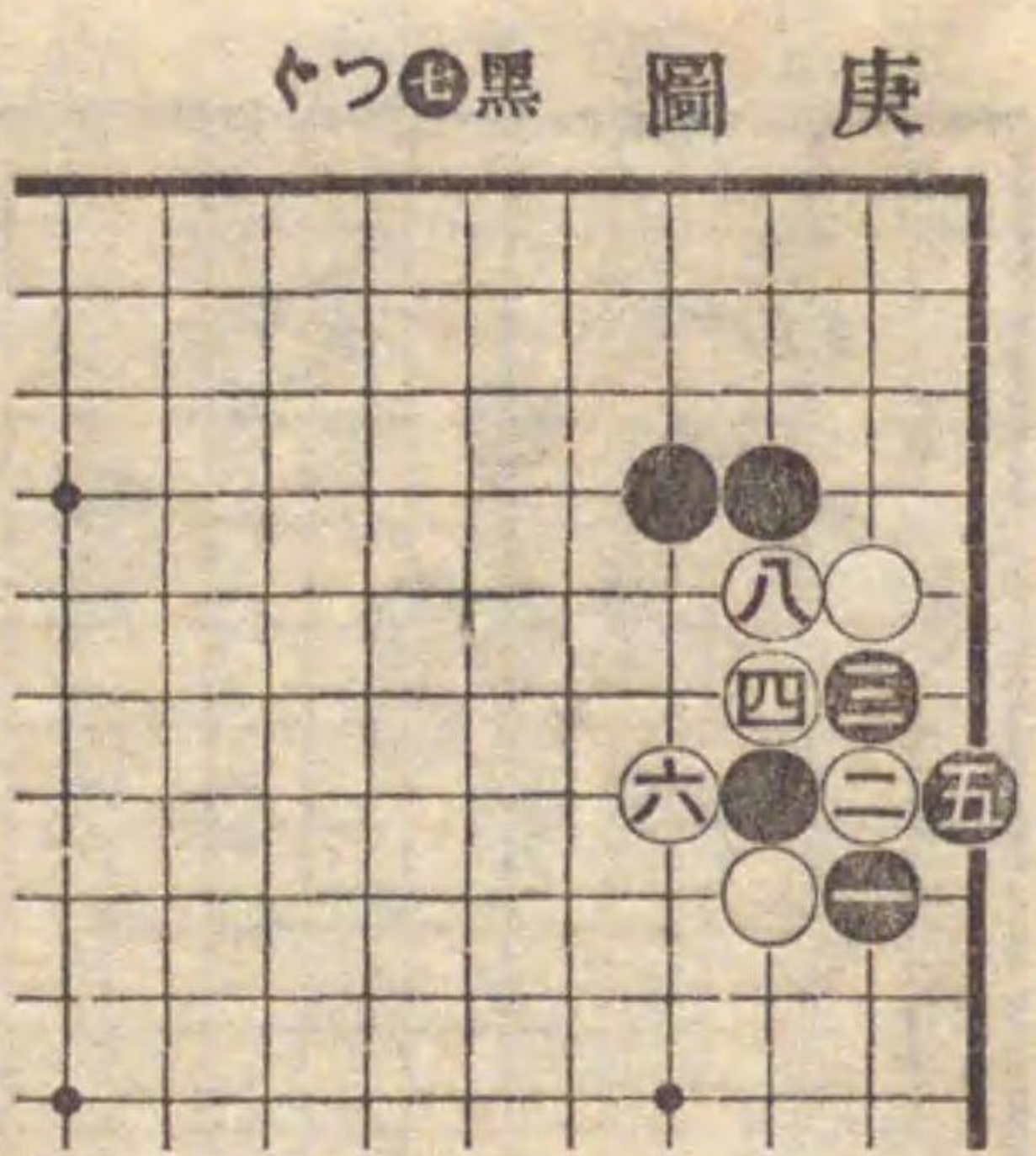
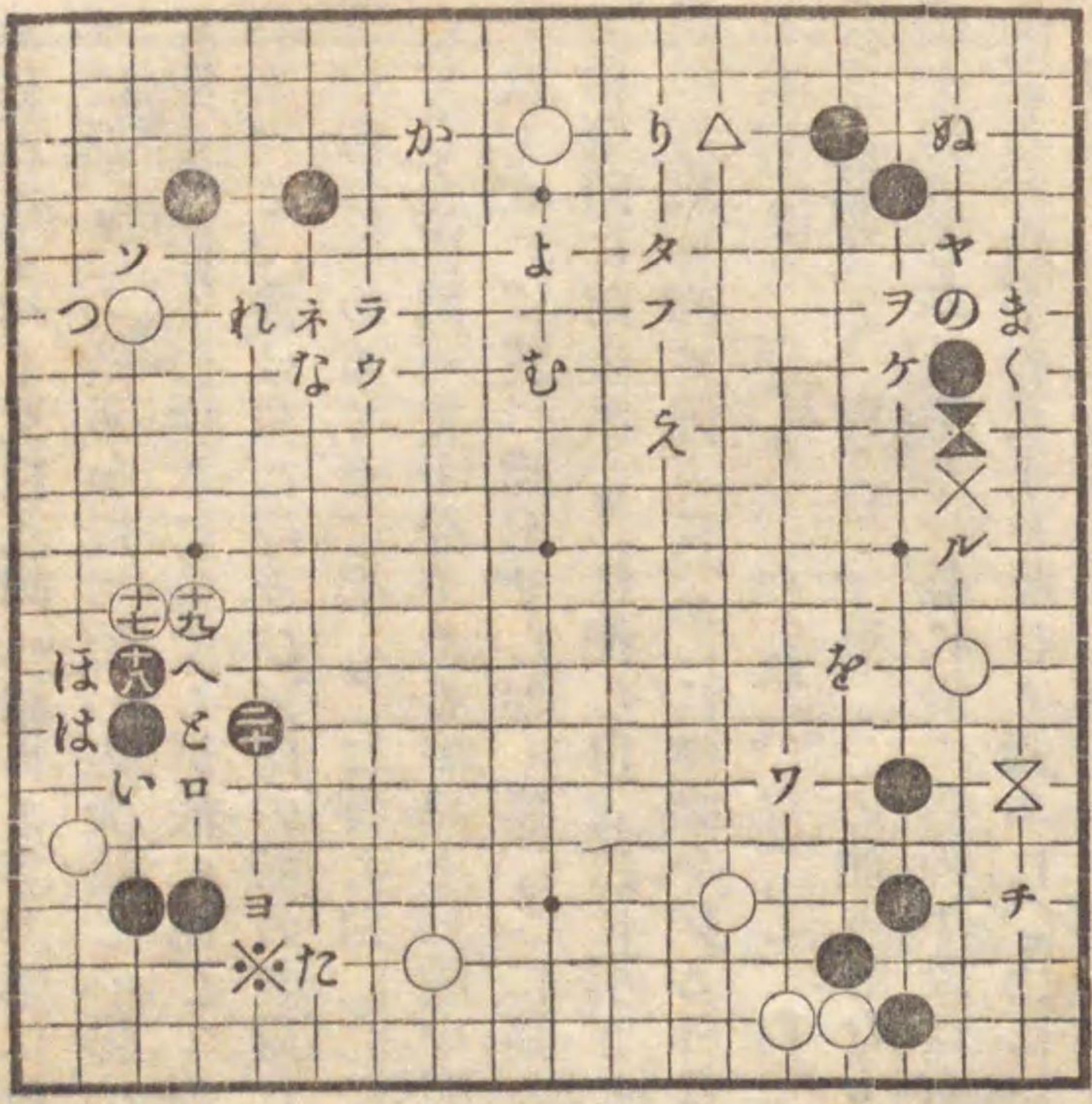
圖 癸



手解きを示せば則ち白が單に三々即ち(た)に打込みたるとき
前に説明したる如く黒(二)に押へて而して(ソ)と二段は
ねの良手段を應用することを忘れて黒(れ)、白(六)、黒(ナ)、
白(五)のはねとなつた形と同様になつて白の趣向に符まる結
果を生ずる。故に黒(ナ)に尖みつけた以上は白(た)の時(ラ)
に押へ次いで(ム)に一子を擒にして敵の趣向を挫くに如かず
である。夫れよりは譜の如く黒(二)に並んで打つのが一番確
實であると了解するが宜い。

第七局(第二圖)

▲第二圖 黒(ほ)は紛雜の基ぬ
は(二)の一子を利用して斯く詰めたのである。黒若し之を棄
て置けば白(い)、黒(ロ)、白(は)となつて互られて了ふから
黒は之を棄て置く譯には行かない。因つて黒(ハ)、白(カ)、
黒(三)と確實
に打つのが普
通である。扱
て本へ戻り白
(二)に詰める
手で強ひて
(い)杯に尖み
つけて活きや
うとするのは
甚だ宜しくな
い。左すれば
黒(ロ)、白(は)、
黒(ハ)、白(は)、
黒(セ)となる
べく、斯くの

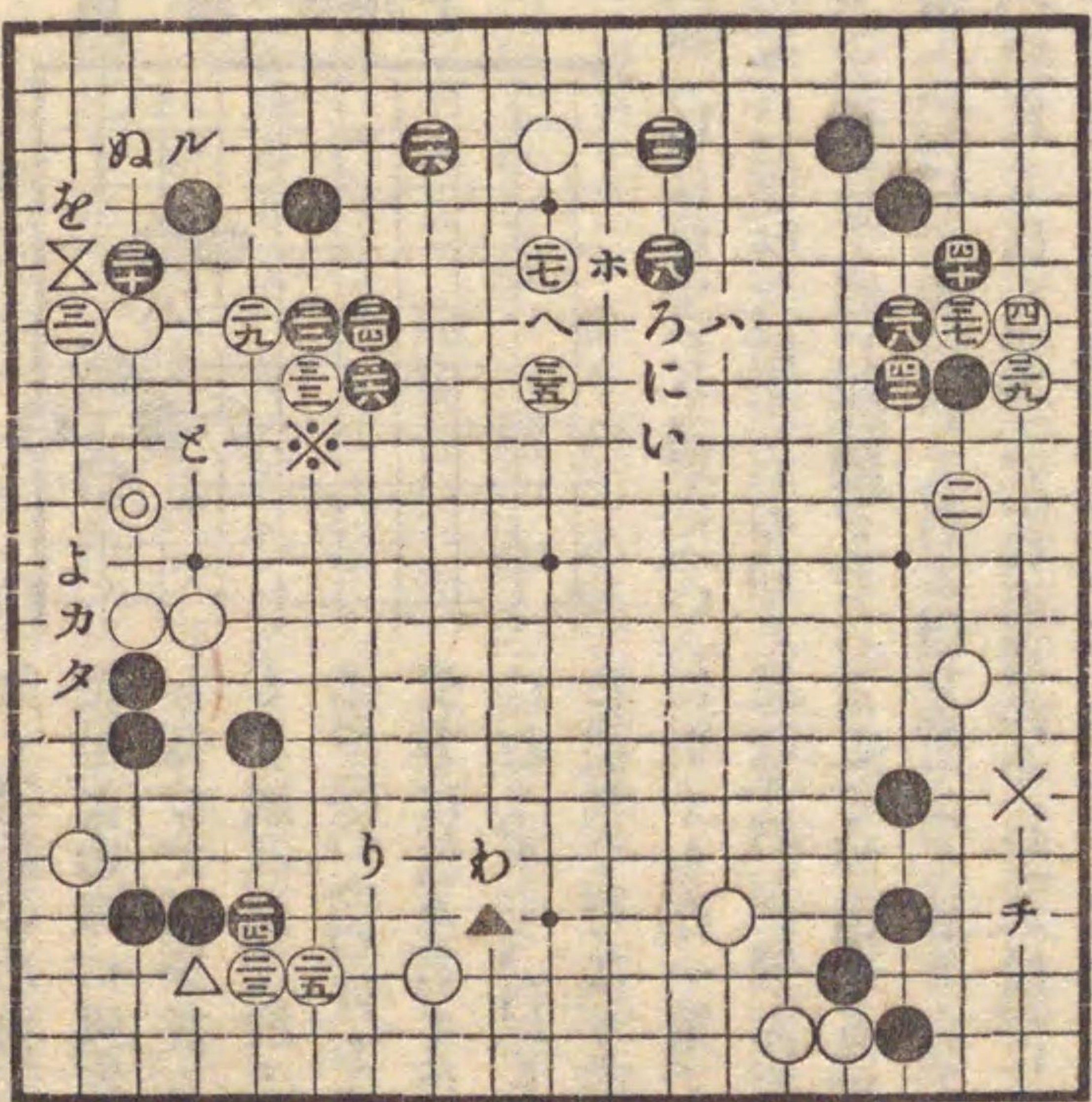


如く戦局の形勢未だ定まらざる開
戦早々の際に棋家の最も嫌ふ二筋
を匂つて活を貪るは最も不利であ
る。或は白に於ては(七)へ詰める
手で(ハ)へつける手段もある。黒の
受方は色々あるが其一は黒(ヘ)に
はねる手で、白(ト)を切らば黒(イ)
に引きて可なり或は白(ハ)の時黒
(ヘ)にはねずして單に(い)に引くも亦一策である。其時白が
(一)に延びた所が前の如く黒は(三)に飛んで隅の防ぎをする
必要もなく他に先鞭を着けることが出来るから本圖に比し黒
が(い)に一步退いて居る損を償ふて居るのである。扱て又黒
(ヘ)にもはねず、(い)にも引かずして(ほ)にはねるとせんか、
其結果は庚圖の如くなるべく、斯うなつたからとて強ち黒が
悪いとのみは謂はれぬが併し斯くの如く兩斷されて崖際に密
集するのは所謂凝形で面白くない。兎に角黒が(二)と内側へは
ねる手段は紛れを生ずる基であるから前の如く單に(い)に引
くのが簡單明瞭で一番無事であると心得べきである。是れで
四隅に於ける黒白の應接は一ト通り片付いた。是れより

▲黒白の打場如何

▲白の二策 と云ふに第一△印、第二×印、或は白先
づ×印に迂り込み黒(チ)に受けたるとき白×印に詰めるか第
三※印に侵掠するかの二策あるのである。假に白△印に
詰めたりとせんか、是れは畢竟黒(り)の詰めを防ぐ一方に幾分
か(ぬ)へ打込む機會を狙つて居るのである。左すれば黒(ル)
に詰めるが最も穩當の手段で、白(を)に飛び、黒亦(ワ)に飛

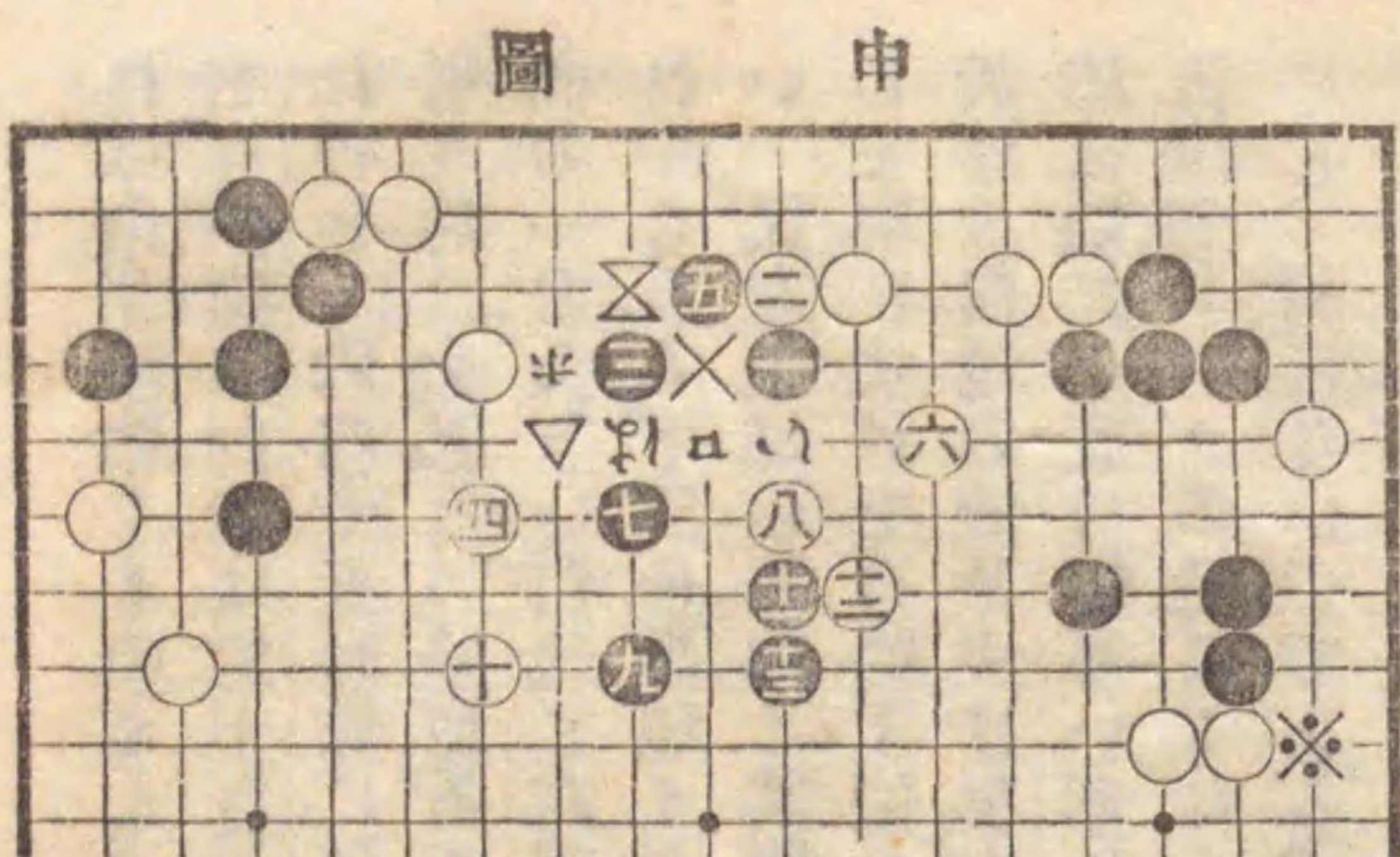
ぶを可とすべく又白△印へ詰める手で第二策×印に詰めるとせば黒(リ)の詰めを以て随一の大場と心得べく、此時白(か)に開くは餘りに狭きに失するが故に轉じて※印へ詰める外なかるべく、或は白△印及び×印の詰めを見合はせて第三策即ち※印に詰めるとせば黒(ヨ)に押し白(た)に引いた時黒、轉じて(リ)に詰めて十分であるが以上三策中實 白が×印に詰めたりとせば前に説明せし如く黒(リ)に詰めたりとせよ、ソコで白※印に詰め黒(ヨ)に押し白(た)に引きたりとせよ。次に黒の打場如何と云ふに(か)に挾撃を試る外なかるべく、左すれば白(よ)、黒(タ)、白(れ)、黒(ソ)、白(つ)、黒(ネ)、白(な)、黒(ラ)、白(む)、黒(ウ)の曲りとなりて此方面は一段落を告げるのである。是に於て白の手段は右上隅に着手するか或は元以下の三子を収むる爲めに(え)に斜走するか、其一を擇ぶとして(え)杯に自己の安全を謀つて居ると直ちに右上隅を固められて了ふから此場合元以下の三子を顧るの違あらず、右上隅に侵掠を試る外なすとすれば先づ(の)につける位のものであらう。左すれば黒(ヲ)、白(く)、黒(ヤ)、白(ま)、黒(ケ)の粘ぎとなるべく、或は黒に於ては白(の)の時強硬に(く)へ下る手もあり又×印へ突當る手段もあるけれども是れは中々力量を要する手で動もすれば失敗を招く恐れがあるから寧ろ(ヲ)にはねて前の如く穩かに收まつて無事に勝つ手段に出づるが宜い。ソコで白の手番となつた、今度はドウしても(元)以下の三子を始末せんければならぬ。▲第三圖扱て此場合白は(い)に斜走するのが本手であるが併し既に右上隅は堅固にして此上術の施しようのない處であるから寧ろ白(ろ)につける方面白かるべく、黒(ハ)、白(に)、黒(ホ)、白(へ)の粘ぎとなるを普通とする、コ、に於て黒は如何に打つきか、盤



第七局(第三圖)

中見渡すところ黒※印にはねるを最上策とすべく、而して白(と)に受けたりとせよ、右下隅×印の入り込みは最初から白の權利に屬するものと覺悟して居らねばならぬ所であるとするれば扱て何れが最も肝心の場所であるかと云ふに黒△印に押へるか、但しは×印に押へて隅地を固めながら白を攻めるは最も着實の手段とする所である。假に黒△印に押へたりとせん、左すれば白は無論×印の權域に侵掠し來るべく黒は豫定の如く(チ)に守らねばならぬ。ソコで白の打場如何と云ふに(り)邊に打つて中側の地域を擴張するか或は左上隅(ぬ)に打込むかの二策である。假に(り)に飛ぶとせば黒は無論×印に押へるは必定である。斯くては勝敗が忽ち確定して了ふ。因て白(り)に發展せずして(ぬ)に打込みたりとせよ、黒(ル)、白(を)の尖みとなる外なかるべくコ、に於て先手は黒の手に歸せん。徐に畏つて黒白兩軍の形勢を熱視せよ。黒地は四隅ともに頗る堅實にして左ながら巍々なる山嶽の國境に聳ゆるが如く何れか中原に向

つて發展し血路を開かざるは非らず。強ひて危険を冒すの必要はない、徐に(り)に斜走せよ、此場合白はマサカに顧みて他を言ふ態度にも出で難かるべく即ち白(わ)に應ずる外なすとすれば黒轉じて(カ)にはね、白(よ)、黒(タ)の粘ぎとならんには勝算歴々毫も疑を容れぬのであるが、或は黒(り)に斜走する手にて▲印の肩を衝く手段がないでもない。これは聊か單騎突貫の趣きなきに非ざれども顧みれば左右の黒軍は難攻不落の堅陣にして毫も後顧の患あらざるのみか遙に左上隅方面を望見すれば即ち我軍は敵城門外※印の要處に壓迫を加へ、イザ危急と云ふ場合に於ては如何やうにも援兵をくり出し得べき形勢に在りと知るべく唯だ逃げさへすれば▲印突貫の役目が濟むのであるから此の肩を衝くも亦一策である。左すれば申圖の如くなる。此中で黒は普通(に)飛ぶべき所であるが圖



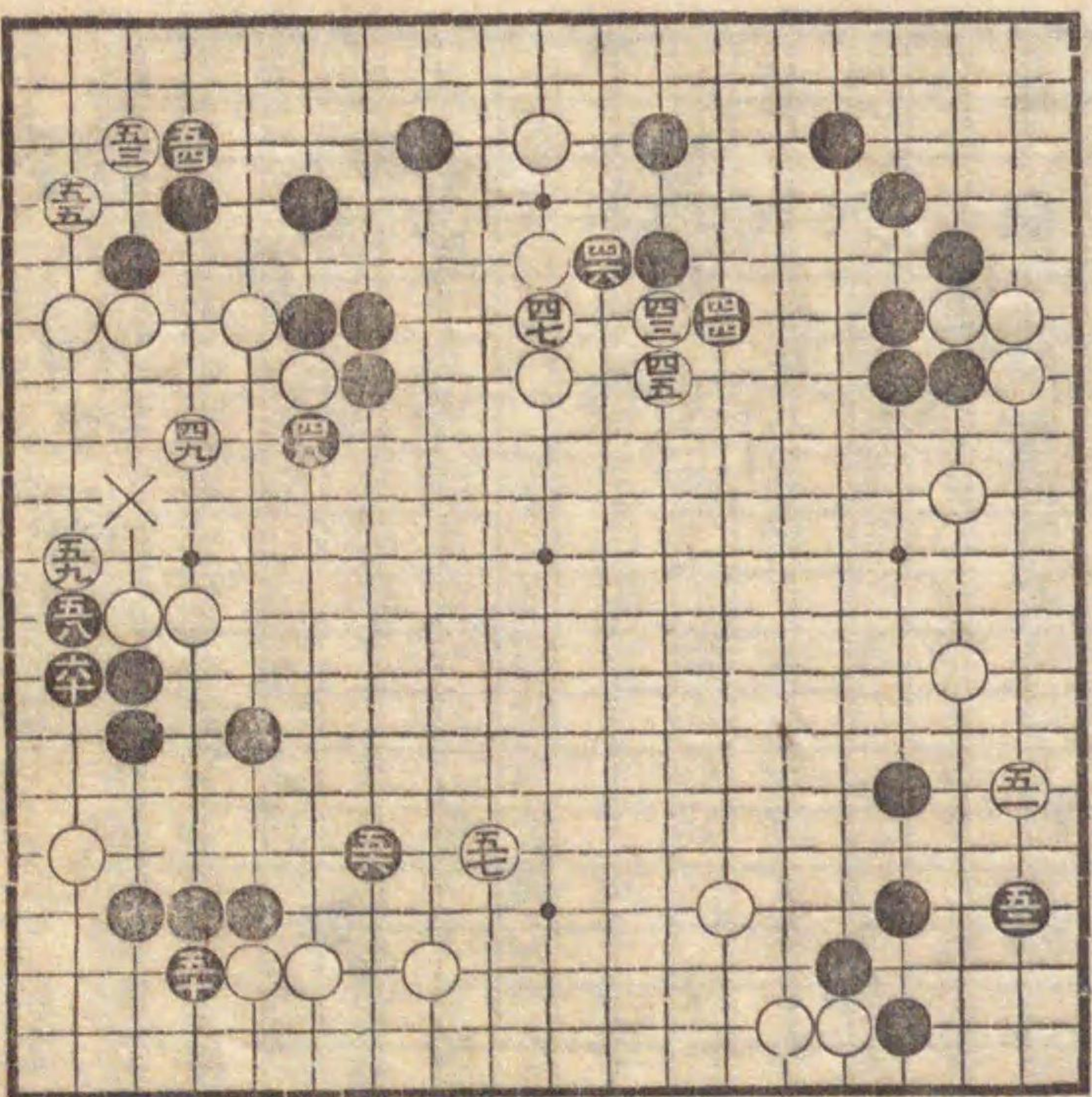
申 圖

の如く黒(に)飛びて斯く眼形を持ちながら尋常に逃げて行く中にはドコへか聯絡して了ふから決して捕虜となる氣遣ひはない。但し(三)に飛びたる時白(四)に飛ばずして(い)に挾むこともあらんか、黒は知らぬ爲して(七)に飛べ、又白(い)に挾む手で×印へはね込めば黒(ロ)に押へ、白(五)に粘ぎたる時黒は其儘軽く打棄て置きて他に轉ずるも好し、又劇しく×印に押へ付ける手段もある。其時白(は)を切らば黒△印にはね、白(七)に延び、黒(ホ)の粘ぎとなるべく、斯うなると白

の上下の石が弱いから白がそれを凌ぐに従つて黒も亦北げて了ふ結果となる。夫故に黒から×印に押へ付けられたからと云つて白は(は)を切る手段はないので、此場合(四)に飛ぶ外なかるべく、黒又(七)の掛粘ぎとならば如何。中々凛々しい武者振ではないか。斯く解説し來れば此場合黒は×印に押へ付ける手段は危いやうであるけれども少しも恐るゝ所はないのである。以上は即ち黒(二)と肩を衝く手段を示したのであるが、敢て戦を挑むに及ばず、前に言ひし如く穩健に(六)へ斜走し白(い)に應じたる時黒※印へはねつぐ手段が最も確實で、必勝疑ひないのである。因つて其通り打ちたりと假定して扱て

第七局(第四圖)

第七局(第四圖)



合せて約二十目で、左下隅の黒地は二十目以上、すべてを合して約七十目餘と目算すべきである。然るに白地如何と云ふに左上隅から側邊へ掛けての白地は×印掛粘ぎ如何に因つて大分相違はあるが是

これは白が掛粘ぐものとしても約十五目に過ぎない。夫れから右側中間の白地は約十目で下邊中間の白地は二十目餘、彼此合せて約四十五目餘に過ぎぬと云ふことは明白である、差引き約二十五目の差がある。更に之を比較的と言へば下邊中間の一番大きい白地と左下隅の黒地と略々匹敵して居る。夫れから又右下隅の黒地と右側中間の白地では白の方が少し多い。又左上邊の黒地と其隣りの白地とは×印の掛粘ぎを別として現在丈けでは略々似たやうな姿である。故に右側中間に於ける白地の餘分丈けを右上隅の黒地から差引いても尙ほ黒地は約二十五目位多い形勢である。其他中原のさら地は所謂秣場でドナラの地にもならぬ處であるから黒の

中押勝

●第八局

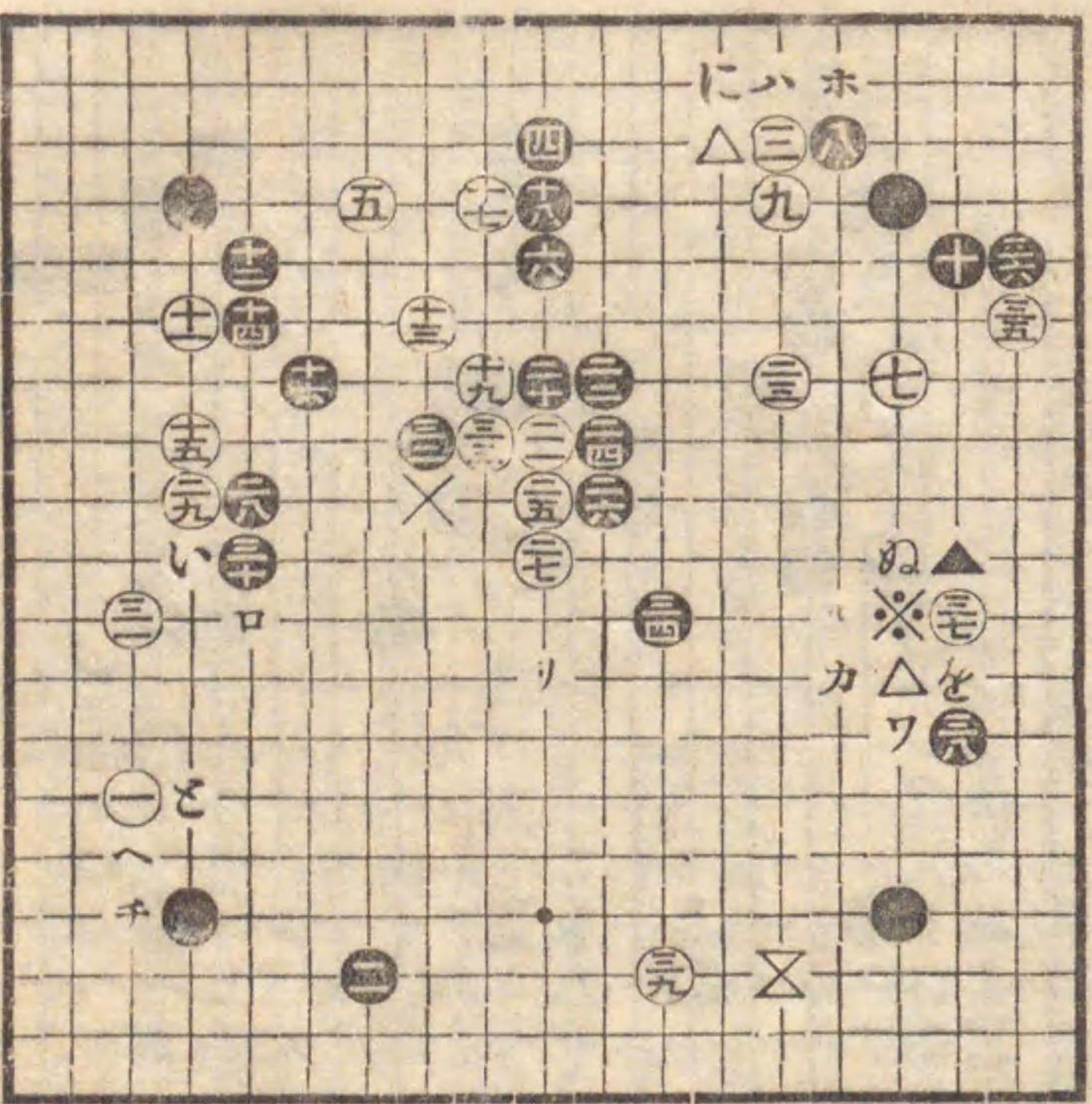
▲第一 黑白の小手しらべ 黒四までは既に説明してある。白五は所謂割打で、其真意は黒四を攻むる味を含んで成べく此方面に紛雜を惹起さうと云ふ戰略である。然るに黒に於て普通の定石に泥みて(十)杯に飛ぶと忽ち(六)に威嚇されてアツと度膽を抜かれんよりは譜の如く黒(七)と飛んで敵の計略を挫く方が安全である。白七は敵がドウ云ふ動作をするか。其應手を試るに過ぎない。此場合黒(八)と尖みつけ白(九)の時、黒(一〇)と當らず障らず俗に所謂三羽鴉の陣を構へて隅を擁護する手段に出たのは面白い手段で是れ又白の目算ガラリと外づれた譯である。勿論黒(一)に尖みつける手で普通の如く(一)につけたからと云ふて、敢て悪いと云ふことはないけれども白が(七)と打つた趣意は即ち(七)か或は(一)につけさせようとする趣向であるから黒が圖の如く白の手段を挫いたのは臨機

第八局 黒の三策

●第八局(承前)

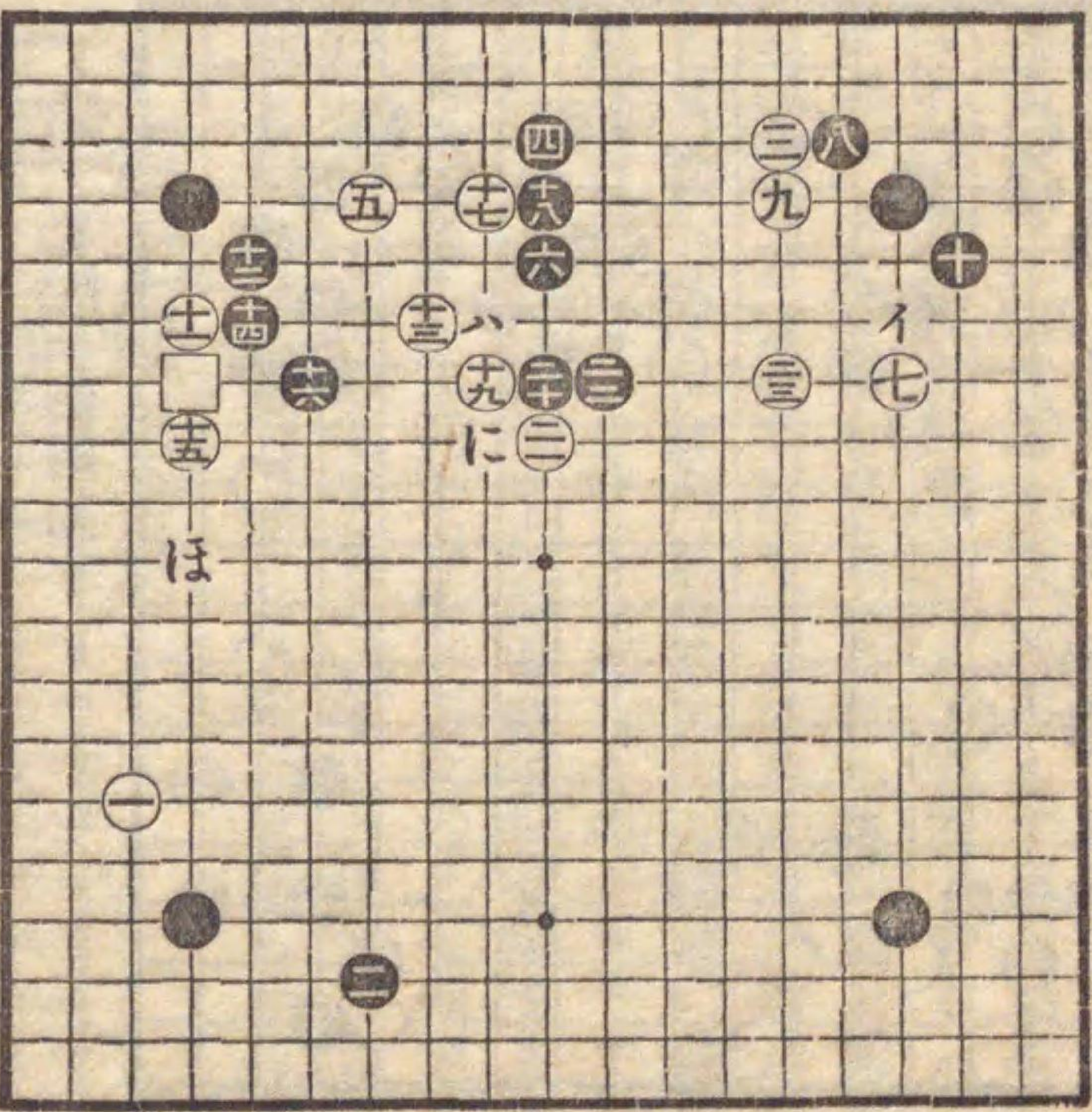
▲黑白小手しらべ 本局は前圖の續きである。此の場合黒(三)はドウ打つが宜いかと云ふに(三)の處杯を切るは宜しくない。ナゼかと云ふに、左すれば白は(三)に跳ねて(三)の一子を軽く捨て、壘を築き以て(十六)一隊の黒を封鎖する手段を運らす。さう云ふ關係があるから黒は單に(三)に曲るが宜い。白(五)、黒(六)、白(七)之れは普通の手段で別に説明を要する程の事はない。次に黒(八)は左右の白を別けて中央

第八局(第二圖)



に出づると同時に敵の模様を消しつゝ其の位を低く仕様とする手段に外ならぬ。然るに白(三)の手にて(一)に押すと黒は無論(ロ)に延びる。其の結果黒の外壁を益々厚くする許りであるから斯う云ふ

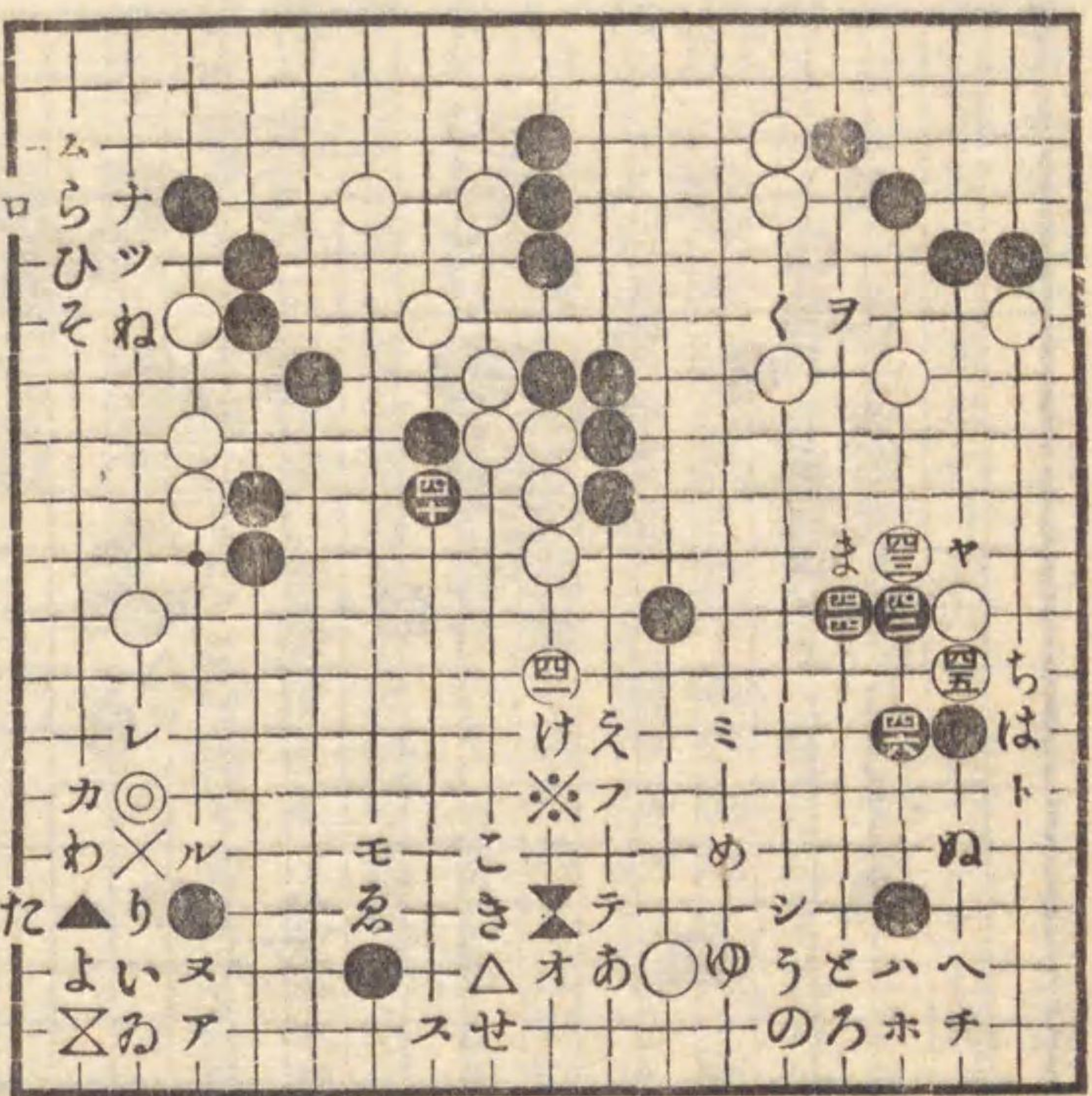
第八局(第一圖)



るに(ロ)杯に延びるは極めて重い手で上手の打たぬ手と知るべきである。黒(六)、コ、には色々の手段があるが圖の如く尖んだのは即ち白(五)と(三)との間の切れ目を覗ふ趣向で白をして(モ)に覗かして黒(一)と粘り段々中間の棒石を堅くし然る後に(三)の肩へ掛けやうと云ふ意味を含んで居るのである。左れば白は止むことを得ず(一七)と覗いて切味を凌ぎ而して(二九)と尖んだのは尋常の手段で此場合(三〇)へけいまい冠する杯は甚だ宜しくない。ナゼかと云ふに(一)へ尖みつけらるゝ味が残るからである。次いで黒(三〇)、白(三一)、黒(三二)は順當で、サア斯うなると(三三)の白一隊は段々深間に落ち込むから白は圖の如く(三三)と打つて聯絡を保たざるを得ない。

處は圖の如く軽く(三三)と外づすに若くはないのである。ソコで黒(三三)と覗いたのは先づ自分の補ひをして而して後(三三)と煽つて行かうと云ふ手段である。扱て白が(三五)と打つた時黒が(三六)と受けたのは四子の置碁としては悪いことではないけれども、普通は緩い嫌ひがある。此の場合黒(三三)の手で(ハ)に跳ね白(一)に押へ黒(ホ)に粘ぐ方が宜いのである。左すれば△印の切りが残る。其時白が其の切を防げば黒は手を抜いて(三七)の大場を占めるのである。然し圖の如く黒(三五)、白(三七)、黒(三六)、白(三九)となつたからと云ふて黒の方が悪いと云ふ事はない。之れで一ト通り黑白の配石は済んだ。是れより

▲黑白の打場如何 と云ふに其一黒×印の延び其二×印の詰め、其三×印の頂けである。又左下隅を打とすれば(ハ)に尖みつけるのが一番宜いのであるが、さうすると白は(と)へ延びる。此の延びは遙に眞中の白と相呼應する姿を成して自ら中の白が強くなるから此の場合に於ては(ハ)の尖みつけは遣りたくないものである。尙ほ茲に注意を要するは黒(ハ)へ尖み着ける手で單に(チ)に締まるなどは所謂趙括の兵法である。夫れは何う云ふ譯かと云ふに、上の白は二間備へて極く堅いから少しも響きはない。只自分の固めをするに云ふに過ぎぬから此の場合ソナ緩い手を打つ可きでない。扱て以上の三策中黒は何れを擇ぶべきかと云ふに、一寸考へると黒(リ)に煽りたい様な所であるが左すれば白は×印に跳ね直ぐに眼形を備へて了ふ。白を苦める譯にも行かず、左りとして下邊には既に白(三三)と打つてあるから(リ)に煽つて見た所が自分の模様を造る助けにもならぬ所であるから此の場合黒×印に延びて白の目を奪ひ攻勢を取りつゝ外部へ追出す方が面白からう。白は勢ひ(リ)に飛ばねばならぬ。ソコ



(圖三第) 局八第

で黒△印につけて白の模様を挟めながら遠く上下の連絡を保つ手段に出づべく其時白(ぬ)に跳ねば黒(ル)に延び白(を)に突當り黒(フ)の立となれば則ち

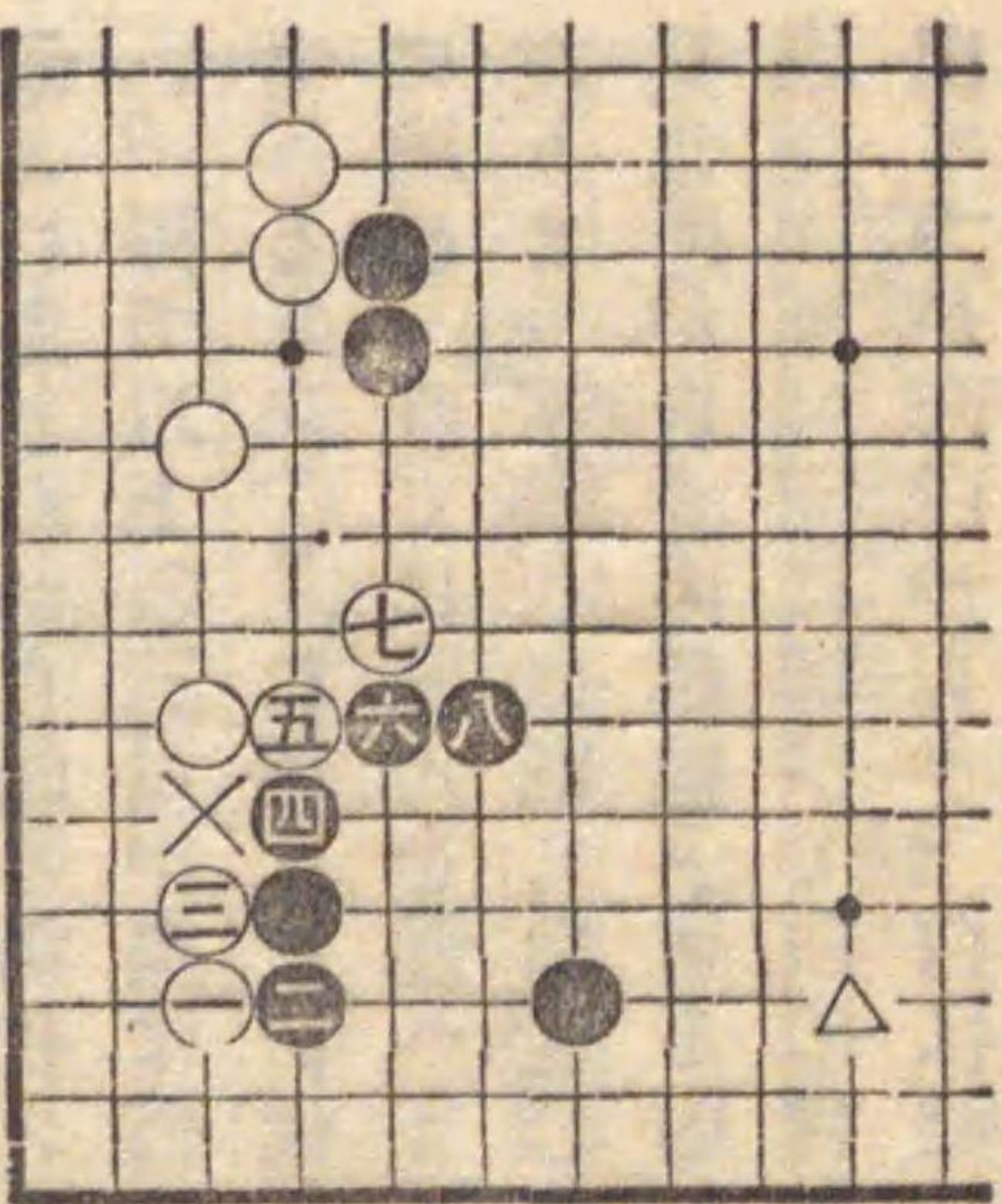


圖 乙

込むか此二ツである。先づ(ろ)に迂り込むのが時機を得たものであらう。左すれば黒は毎々述べた通り單に(ハ)に下る手と(ホ)につける手と二様の受手ある事は豫て了解せられて居るであらう。茲

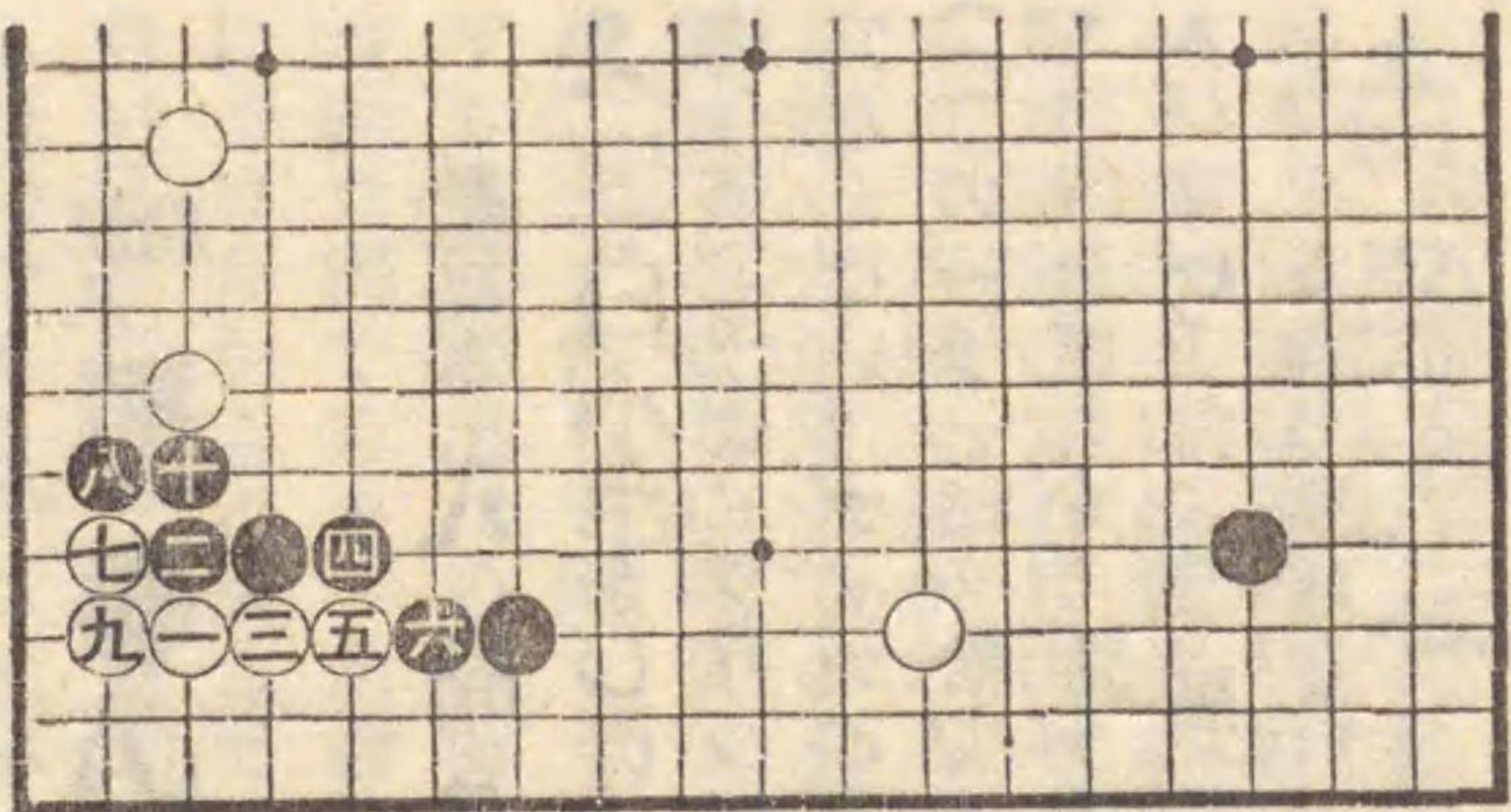


圖 甲

黒は豫定通り連絡を保つてが出来る。さうすると初心者は或は△印へ突出して切られればせぬかと心配するかも知れぬけれども夫れは少も怖るゝに足らぬ。と云ふのは白△印に突出し黒(カ)の押へとなると白の方は駄目詰りとなり従つて△印を切られる缺陷が出来るから此の出切りは容易にやれない。安心して可なりである。是に於て白(三七)の打場如何と云へば第三左下隅の(三三)即ち(い)に打込むか或は(ろ)に迂り

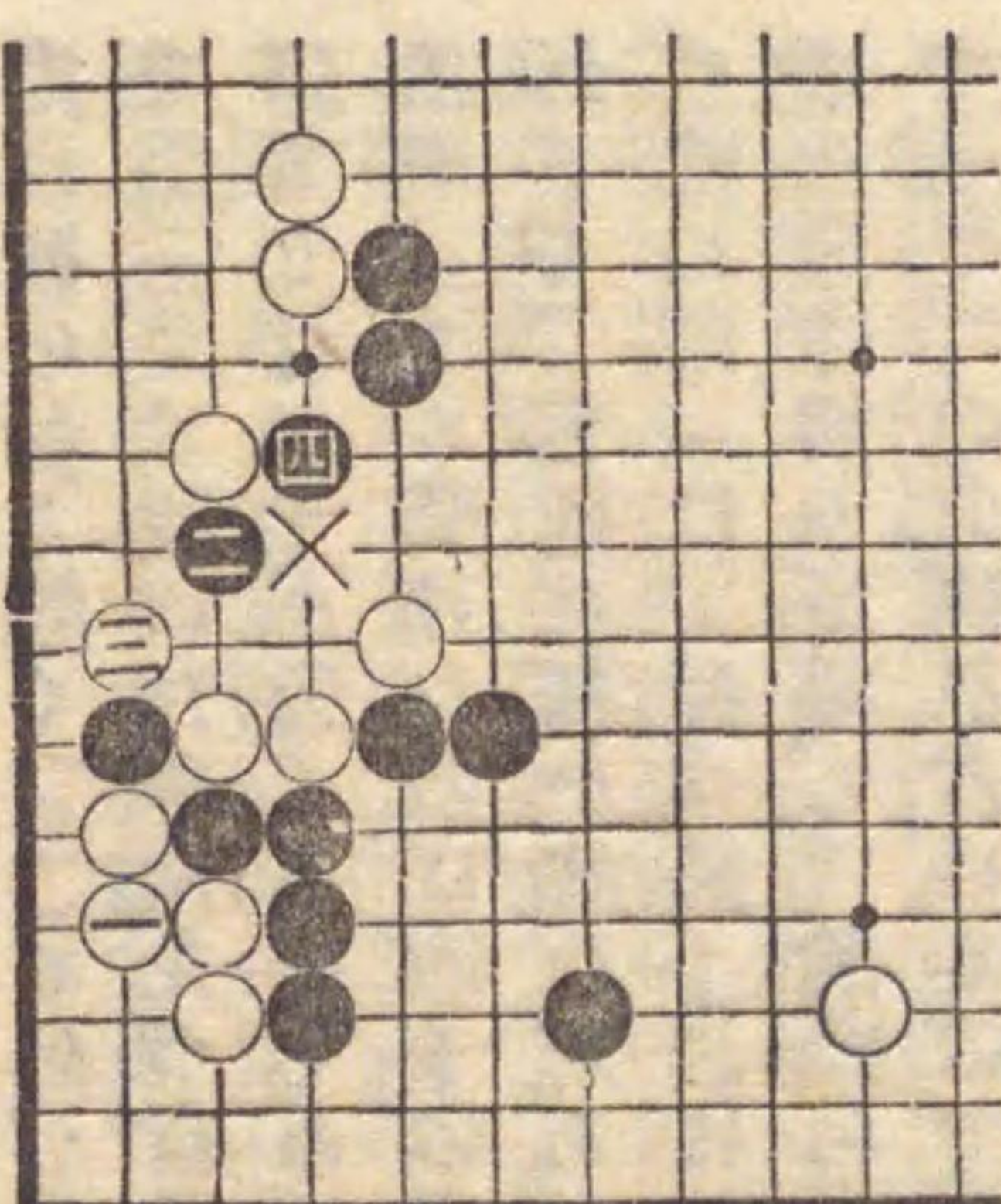


圖 丙

肝要である。ソコで黒が(ル)に延びたにも拘はらず白が其儘棄て置くことせぬか。×印の出切りが残るから白は是非とも×印に粘りて居なければならぬ。其の時黒は(オ)へ二間に開いて居るが宜い。

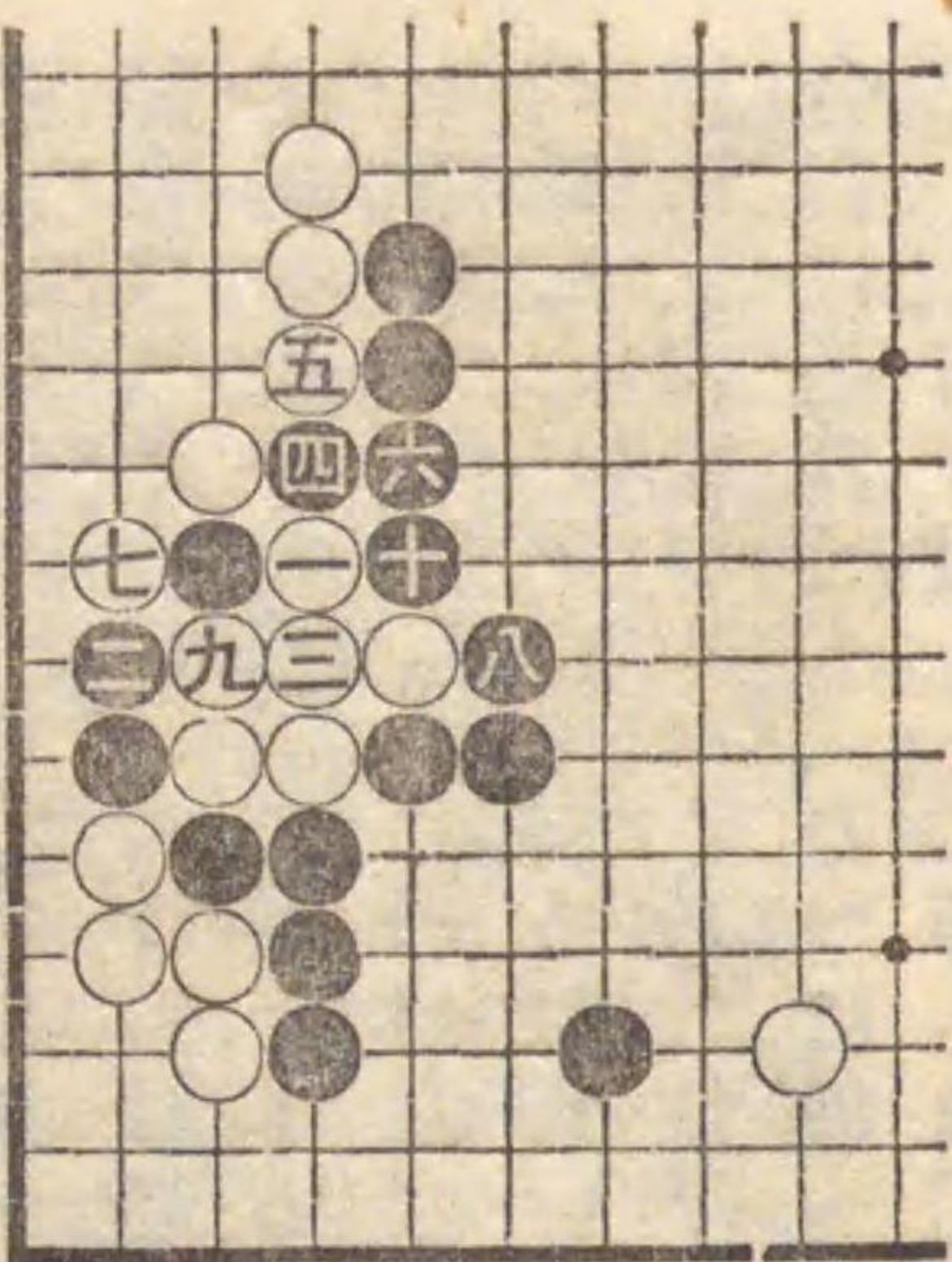


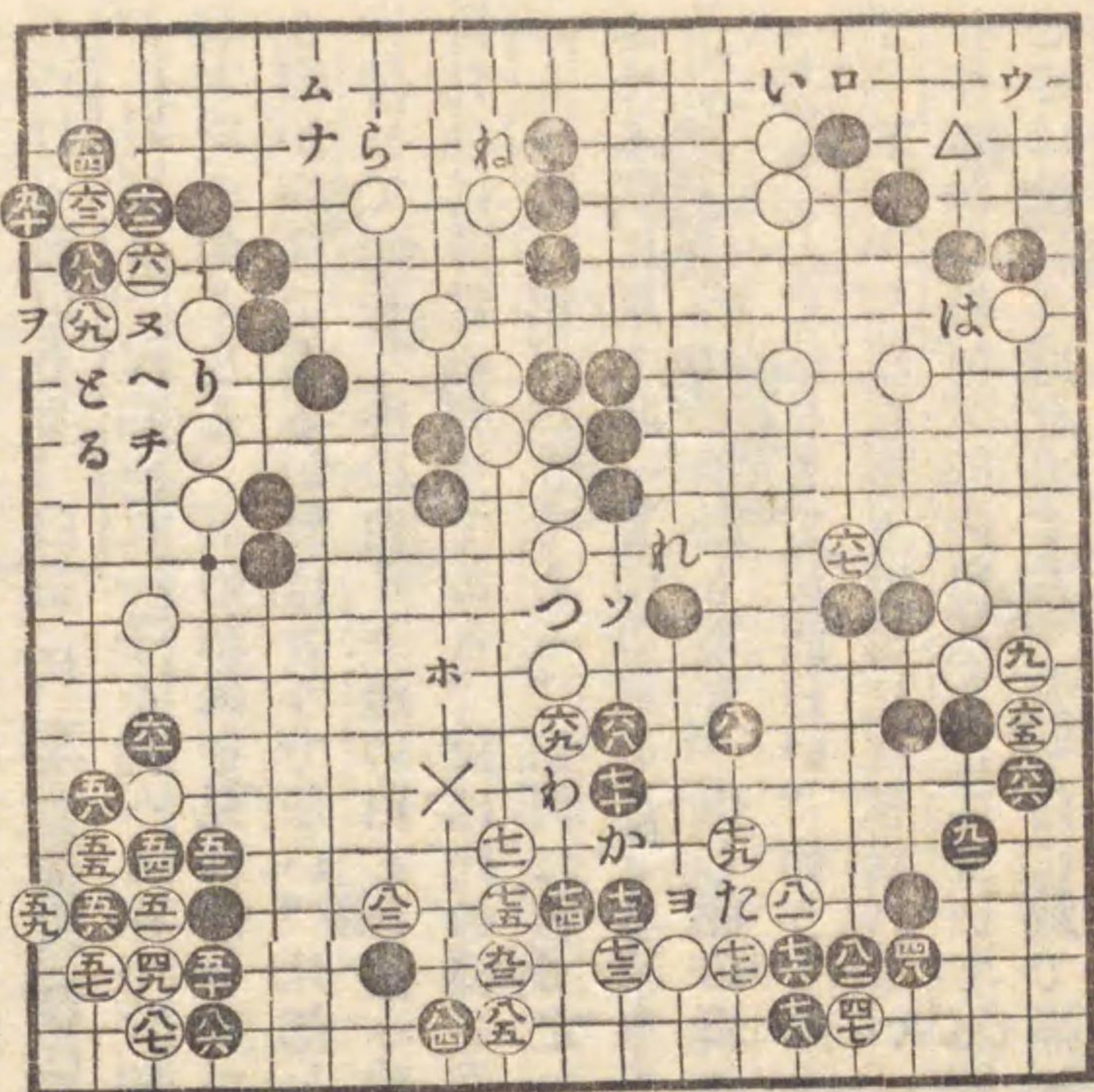
圖 丁

サアさうなると中の白と右側の白との聯絡を絶たれて搦み攻に遇ふ様な結果を生ずる。左ればと云ふて白が乙圖の如く打つとも矢張り×印の出切りと△印の二間開きとが残る譯である。逆も双方を

一時に凌ぐ手段はない。コ、で白は×印に粘りて居たいのは山々であるが、背に腹は換へられず本圖△印に詰るとせんか、然らば黒は×印に出で白(わ)に押へた時黒(カ)を切つて敵の挨拶を聞く。其の時白が丙圖の如く(二)と粘れば黒に於ては(三)とつげ筋がある、白(三)に一子を抱へれば黒は(四)に押へつて仕舞ふ。又白(三)に一子を抱へる手で×印に跳ねんか、結局丁圖の如くなる。其の結果を見ればコ、では出切りはあまり働かぬ様であるが實はさうでない。外部を先手でビシ／＼論付けて而して中の白と下邊の白とを搦み攻めにする機會を得たのは非常の利益である、黒は此の機を逸せず中の白を攻める手段に出づべきである。如何にして之れを攻めるかと云ふに本圖に戻り其一×印の肩を衝く手もあり或は又×印へ「ボウシ」に掛ける手段もある。但し此の場合に於ては黒×印へ「ボウシ」に掛ける方が面白い。何うも斯うなつては白は上下搦攻めの窘境に陥り容易に凌ぎ切れぬ。さう云ふ結果を生ずるから白が×印の出切を捨て置いて△印に詰めると云ふことは餘程考慮を要する。尤も白に於て黒×印に出で白(わ)に約へ黒(カ)を切つた時其の切石と隅の二目を交換する覺悟なれば夫れは△印へ二間に詰めて居ても差支ない。夫れなれ

ば前に乙圖の如く白(三)に押し尋いで(七)に跳ねるに及ばぬではないかと斯う云ふ疑問が生ずるのである。依つて本局に於ては黒(ル)に延びた時、白は單に△印へ二間に開いたと假定する。左すれば既に詳説した如く黒は無論、白が餘儀なく棄て置く缺陷即ち×印へ突出すのが一番宜いのである。白(わ)に押へた時今度黒は丙圖の如く上を切らずして下の方即ち△印を切るも亦一策である。其結果白(よ)、黒(カ)、白(た)、黒(レ)となつて白(一)子「う」に擒にするととなり、随つて左側中腹の白四子の備へが薄弱になつて来るから白は是非とも之れを收めて置かねばならぬ。扱て如何に之を收むるかと云ふに(を)に一間飛ぶは洵に堅固でもあり、且つ後に隅で得する手が残るから一寸面白い様であるけれども、左すれば黒は(ツ)に覗く、白(ね)に粘りた時手を抜いて他に先鞭を看ければ(ナ)に押し白(ラ)に跳ね黒(ム)に押し白(ツ)に尖み(ハ)に跳ね黒(ト)に押し白(エ)に尖んで中央の一大隊を收むる手段が肝要であらう。ナゼかと云ふに若し黒(カ)と(エ)の邊に掛けられると中央の一大隊は未だ完全に活形を備へて居らぬから敵の爲に攻められつゝ儲られる虞れがある。故に斯う云ふ所はソツト辛抱して(を)に尖んで居るが宜いのであるが若し然らば今度黒は白の打たんと待構へつゝある(う)の肩を衝き白(の)に引いた時黒轉じて(ヲ)に覗き、白(く)に押し白(ヤ)に切る筋がある。夫故に實は白は前に(エ)に尖む手で一先づ(ま)に押し外はあるまい。左すれば黒は(エ)に掛け、白(け)に押し、黒(フ)に延び、白(こ)に飛んだと假定し、

第八局(第四圖)



ソコへ黒(テ)の肩を衝き白(ア)に押へ、黒(キ)に延び白(キ)に粘いだ時黒は(オ)の出切れを含んで又(ウ)の肩を衝くと云ふ面白い手段がある。其の時白はまさか一子を惜んで(ノ)に引く譯には行くま

い。(ウ)に衝當るほかなかるべく、黒(ノ)に下りて白の一子を擒にし白(メ)に飛び黒(ミ)に守り白(シ)に膨れ黒(ト)の粘ぎとなる。茲に於て白其一(ス)につけるか其二左上隅(ヒ)に粘ぐかで他に宜い所もない。假りに白(ヒ)に粘ぐとすれば黒(ス)に尖み、白(セ)に押へた時黒(モ)に飛んで我が陣營を結束するが宜い。左すれば敵の一大縦隊は未だ完全に收まつて居らぬから自然に得をすることが出来る。扱てまた白(ヒ)に粘ぐ手にて(ス)につけなば黒(ス)に尖み、白(セ)に押へた時黒(ア)に下つて居るが宜い。然るに白が其の儘棄て置けば黒は(ウ)印につくべく乃ち左下隅の白は劫となるを以て此の場合白は是非とも(ル)に押へて居なければならぬ。ソコで黒(ヒ)に切り白(ロ)に押へ黒(ロ)に一子を取る手順となる。斯

うなると左側中腹の白は甚だ手薄になるけれども然し外部へ逃げ出す道もあるからまさか取られる氣遣ひはない。依つて此處は手抜きとして白は右側中腹に轉じて(チ)に粘ぐの一番大きい處である。サアさうなると黒の方も何だか氣味が悪く(ウ)に懸粘りで居すばなるまい。餘り混雜するから圖を新にして説明する。白は右上隅に轉じて(イ)に下り黒(ロ)に押へた時白(ハ)に押へて連絡を全ふする外あるまい。今度は黒の手番であるから先づ中原の(ホ)に一着を下すが宜い。或は黒(ホ)に打つ手で此の場合左側中腹(ヘ)に置くは如何と云ふものあらんか、左すれば白は(ト)に押す、黒(チ)に出れば白は(リ)に粘ぐ、黒(ヌ)に差し込めば白は(ル)に這つて黒を絞つて了ふ手段がある。此の場合黒(ヘ)に置くなどは一向つまらない。又黒(ヘ)に置く手にて(ト)につければ何うか、白(ヘ)に押へ黒(ヲ)に渡つた時白(ル)に押へて凌ぐ手がある。だからコンナ所はマア見合して前にも云ふた通り(ホ)に一着を下して置く方が宜い。左すれば白は是非とも(ワ)に粘いで居なければならぬ。さうなると(カ)に跳ね込みの工合があるから黒(ヨ)に覗け、白(タ)に粘ぐべく黒又(レ)の附越を凌ぎ旁々(ソ)に覗き白(ツ)に粘いだ時黒(ウ)印に飛んで敵の動靜を窺ふが宜い。ソコで白前面に轉じて(ネ)に押へなば黒(チ)に斜走すべく白(ヲ)に押ふれば黒(ム)に下れ、白は如何にして活くるか。其の活き方を見るが宜い。併し黒としては無論此の白は生きあるものと認むべきである。扱て(コ)に聊か注意を要するは此の場合に於て白が若しも右上隅(ウ)印に打込むやうな事があれば黒は如何に挨拶すべきかと云ふ(ウ)に打つが宜い。左すれば(ウ)に渡る手があるから斯う云ふ所は少しも心配するに及ばない。其儘にして置いて

差支ない。例により

▲黑白兩軍の大勢如何と云ふに右下隅から中原へ掛け其黒は約廿五目位と目算すべく、夫れから又左上隅と

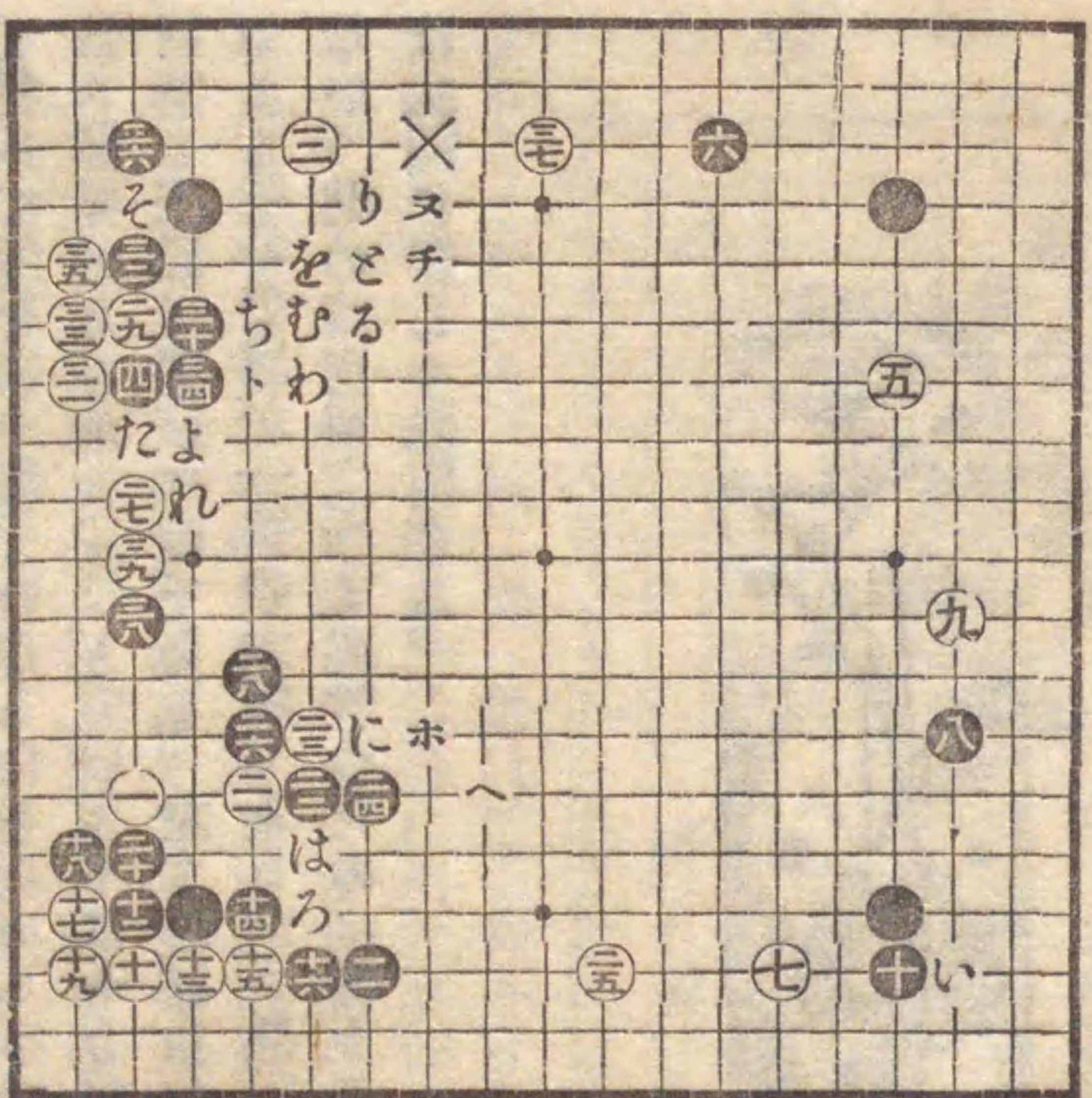
左下隅との黒地を合して約卅目、右上隅の黒地は十目合計約六拾五目餘りある。事に依ると七十目になるかも知れぬ。之れに反し右側中腹から前面に亘る白地は約二十目で左下隅の白地は約七目、真中の一大縦隊は僅に目が出ると云ふに過ぎない。而して左側中腹の白地は精一ぱい出来た所が十目を越えない。巧に寄せて見た所で四十目位の地しか出来なから差引約三十目は違つて居る姿である。しかのみならず中原に一大動脈を引いて居る所の大部隊は此のまゝ手を抜いて置く譯には往かん。動けば動く程益々敵地を殖やす結果を生ずるから何うしても三十目以上中押の勝利たることは疑ひない形勢である。

●實戰應用第九局

▲第一 黑白兩軍の小手しらべ 黒(ハ)までは普通の

應手で別に説明する程の事は無い。白(ハ)は多少の意味がある。夫れは白(五)の補ひを爲す一方に、右下隅に於ける黒の勢力範圍(二三)即ち(イ)の打込みを狙つたのであるソコで黒が(キ)と締つた譯である。若し黒が(キ)の締りを抜いて(イ)に打込まれ而して左下隅の如く活きられて了ふと白(ハ)の詰めあるだけに、事が急になつて来るから置碁としては好ましくない。依つて圖の如く(キ)と締つて置くが宜いのである。然る時は白は(十二)の手で(二五)の處へ二間に開いて居るのが普通であるが、さうすると黒は又(十三)と左下隅の締りをして仕舞ふ。左右兩隅ともに締られては碁が極まつて仕舞つて面白味がなくなるから

第九局(第一圖)



白は常套に泥ますして直ちに左下隅の根據地(十二)と侵入したのである。黒(十三)以下(三四)までは常用の形であるが茲に聊か注意を要するは黒(二三)の頂けである。右側の方を見ると(二五)の所は白が開かう

として居る所であるから黒が(二三)へつける手で(二五)の所へ詰めるのは大變宜い手であるやうに思はれぬでもないけれどもさうすると白は「シテウ」の當りを利用して直ちに(ろ)と切る。何うも(ろ)と切つて前後聯絡を絶たれては紛れ易くなるから面白くない。よしや白に「シテウ」の當りなく直ちに(ろ)を切る手は無いにしても(ハ)に覗かれると黒の位が低くなつて了ふ。だから大抵の場合は圖の如く(二三)と頂けて打つ方が宜いと心得て置くが宜い。今度黒に(二五)と詰めて來られては堪らぬから實は黒が(三四)に延びた時白は(二)に押し、黒(ホ)に跳ね、白(三八)に掛粘ぎ、黒また(ヘ)に掛け粘りで居るのが常形であるけれども何分にも(二五)の所が急場であるから白は(二)(三)の方は軽く捨て置いて先づ圖の如く(三五)と開いたの

である。ソコで黒は敵の虚に乘じ(三六)と切つたので此の場合白は(三六)の黒を相手に戦ふのは不利であるから暫らく捨て置いて先づ(三七)と打つて黒の動靜を窺つたのである。サアさうなると白は又ドンナ趣向をして来るか知れぬから(三八)と延び紛れないやう手堅く用心したのである。ソコで白が(三九)と頂けたのは(三七)と打つ時から豫定の手段である。然るに白が若も(三九)の手で(四二)に飛び出すと黒もまた(ト)に飛んで而して白を追ひながら機を見て左上隅を締められる様な事になつては面白くない。白は夫れを嫌つて圖の如く(三九)とつけたので、黒(三九)以下(三六)までは四子の置碁としては普通の受け方である。然し多少緩い氣味があるかも知れぬ。或は黒(三九)と押へる手で(三九)以下つて敵を兩断して戦ふ手段がないでもない。左すれば白は普通(三九)に延ぶべく黒(四〇)白(四一)黒(ト)白(ヒ)となつた時黒(四二)と打つ手段もある。斯うなると左上隅の一子は死地に陥つたやうな姿であるけれども、コ、には種々の味が残つて居るからよければ白が(三九)に押へ切つた位では中々取り切つたと云ふ譯には行かない。夫れ故にさう云ふ風に打つたからと云つて黒の割合が悪いと云ふことはな、或は黒が剛情に(三九)と下つた時白(三九)に延びる手で(四二)へ跳ねんか、左すれば黒は(三九)と切つて戦ふべきである。之れは何う變化しても黒の方が悪い事はない。茲に注意して置きたいのは白が(三九)と跳ねた時黒(三九)と切る手段を知らずして(ト)などへ跳ね出すと白は無論(ト)と切つて仕舞ふ其の時黒(三九)と切つたのではモウ間に合はない。それは何れに變化しても黒の方が悪い。故に斯う云ふ處は毎々云ふ通り單に(三九)と切るが宜いのである。以上説明した通り黒(三九)と下つて打つ手段はあるが然し四子の置碁としては前の如く(三九)と跳ねて打つ方が紛れもなし又

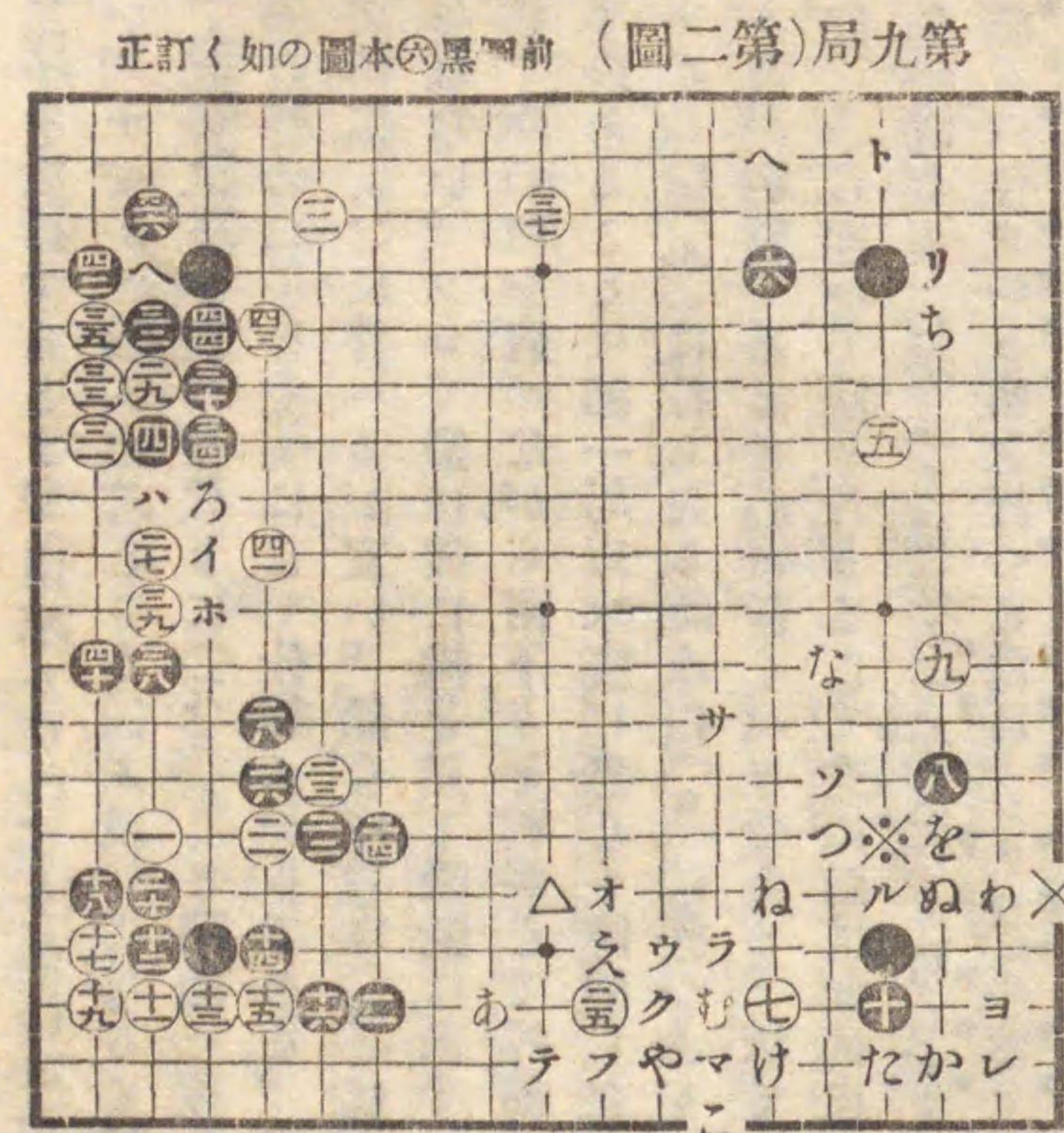
悪い事もないのであるから本局に於ては黒(三六)までの運びをなしたりと假定し尙茲に一寸注意して置きたいのは白が(三五)へ延びた時黒(三六)と控へる手である。此手で直ぐに(四二)と押へると(三六)に覗かれる筋が残るから宜しくない。圖の如く(三六)と控へねばならぬ。白(三七)は(三六)の所へ一間に開いて居るのも中々大きい手であるが、さうすると黒(ト)印へ挾撃するは必定である。而て白を攻めないから右側方面に於ける勢力範圍を擴張する手段に出づるは眼に見えて居る。即ち白(ト)に斜走すれば黒(チ)に頂くべく又白(ト)に斜走せずして(リ)に尖めば黒(ヌ)に押し白(ル)に一間飛びたる時黒は(チ)に延びる。又白(ト)にも斜走せず(リ)にも尖ますして(セ)に一間飛びば黒も亦(チ)に飛びソコで又白が(ワ)に飛べば則ち黒は(四二)と押へて隅を固めて夫れから白を攻める手段を講ずる。さう云ふ關係があるから(三九)も宜い手ではあるが先づ圖の如く白(三七)と三間に開いたのである。左すれば白の占領せんとしつづある(三六)の處が一番の大場であるから黒(三六)と詰める外はない。其の時白が(三九)と突當つたのは何う云ふ譯か其の理由は次圖に詳しく説明する。



第九局 乙圖黒●、○の兩下り

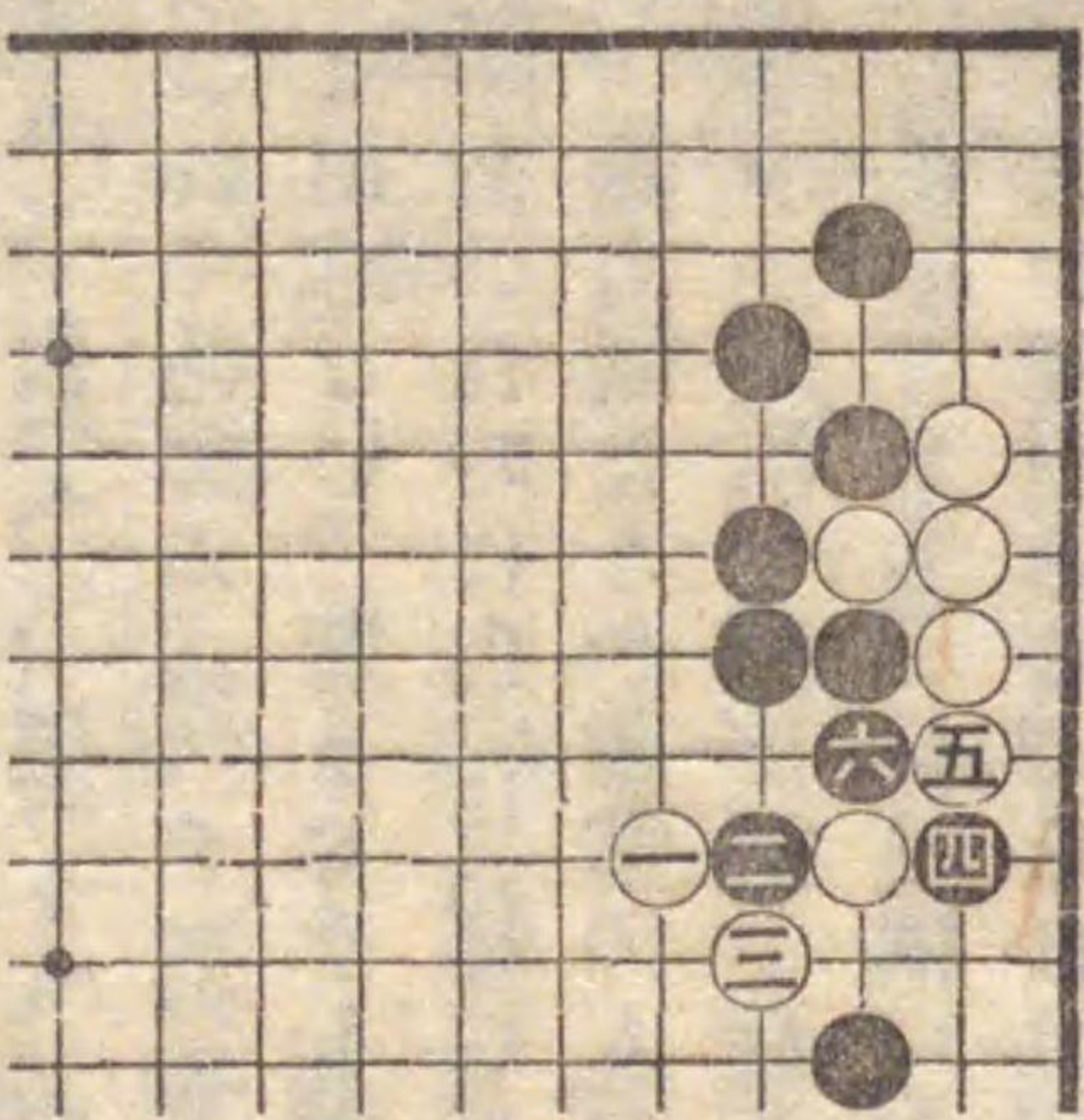
第九局 (承前)

▲黑白小手しらべ 黒(三六)までは前圖に於て説明した、白は何故に(三九)と突當つたであらうか。若し白(三九)の手で單に(四二)へ飛べば黒から(イ)に割込まれる恐がある。其の時白(ル)へはね込めば黒(ハ)にあてるし又白(ル)にはね込まずして(三九)へ突當れば黒(ホ)に押へて断ち切つて仕舞ふ。左ればとて白(ル)にもはね出さず(三九)にも突當らず(ホ)に押へれば則ち甲圖の如く、圖中白(五)の手で(セ)に突當れば黒も亦



た(五)に突當る。ドチラにしても兩断されて仕舞ふから圖の如く白(三九)と突當る外ないのである。黒(四〇)白(四一)は説明を要するまでもなく當然の成行である

甲圖

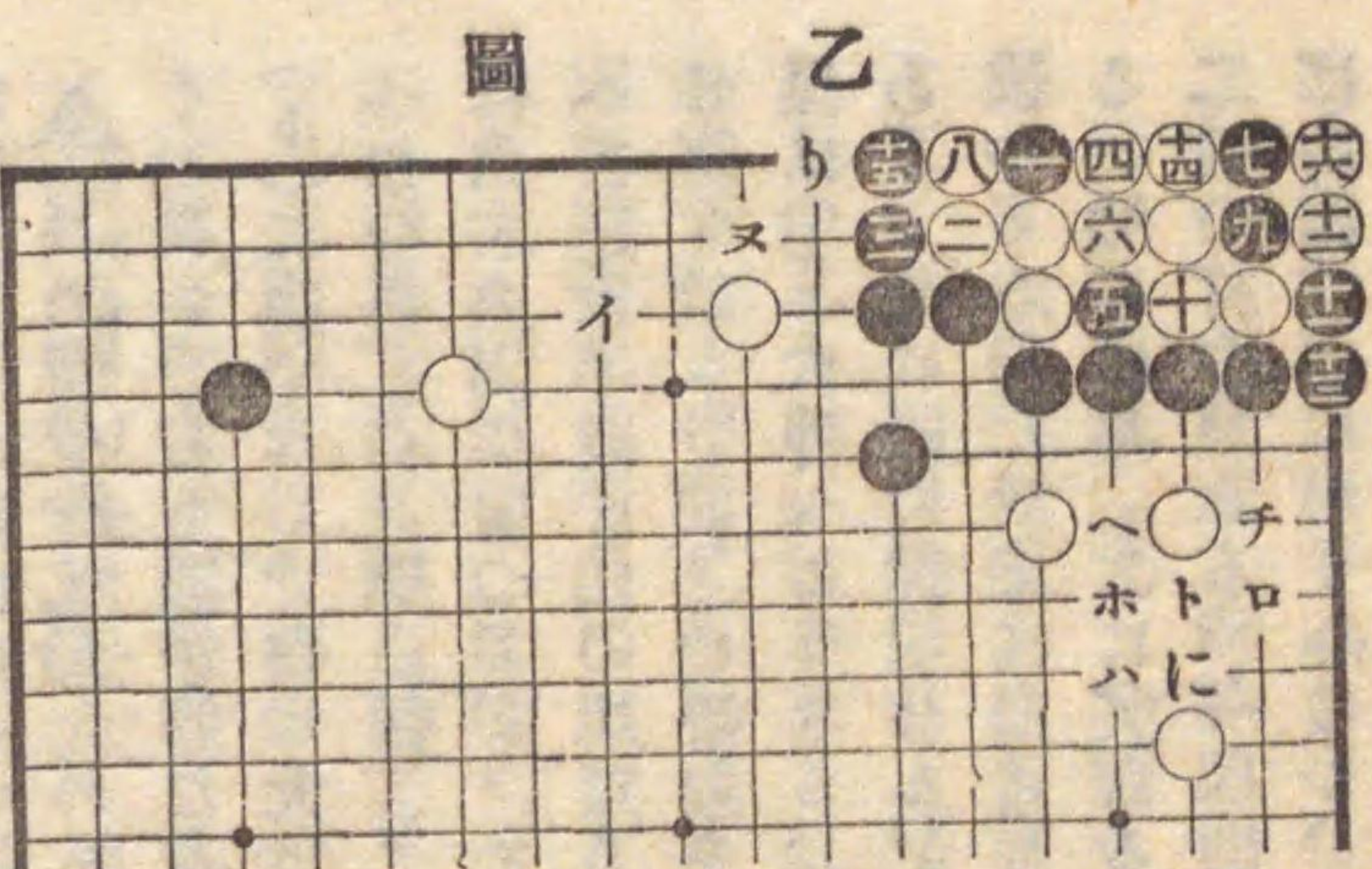


が、既に白(三)と(四)と前後に迫つて居るからは黒(四三)と押へて自ら守るは即(三七)以下の一隊は未だ十分に眼形を備へて居らぬから之を攻むる意味にも當るのである。ソコで白(四三)と覗いたのは時機を得た手で之れには少しく説明を要することがある。試に思へ黒(四三)の押へなき時に假に白(四三)と覗きたりとせよ。後に白(四三)に出た場合に(ヘ)に突込む隙がなくつて仕舞ふではないか。併し黒が既に(四三)と押へた以上は最早や隅に何等の味もなき此の機會を利用して白(四三)と覗くは則ち打得をする所以であると知るべきである。是れで黑白双方の配置は一ト通り済んだのである。

▲黑白の打場

是れより白は如何なる方面に戈を向くべきか。右上隅が將た右下隅か。先づ白(ヘ)に侵入せば黒(ト)に應ずべく、白、大手に轉じて(チ)に脅かし黒(リ)に押へた時白又右下隅に轉じて(ぬ)に打込むも一策なるべく、或は白右上隅に向つて(ち)と打つて極めて仕舞はずに單に(ぬ)へ打込む手段と此の二策ある。本局に於ては第二策即ち白(ヘ)と打ち放しで(ち)と掛らずして單に(ぬ)に打込みたりとせよ。黒は(ル)に押へる外なく、其の時白(セ)に突當つて活きる手段あることは既に説明せるを以て了解せられて居るであらう。依つて本局に於ては白(セ)に突當らずして(わ)に下つたどす。然らば黒(セ)に突當るべく、白(か)に置きたる時黒には二様の打方がある。一は則ち(ヨ)に遮断する手段で、左すれば白は(た)に引く外なく、黒(レ)の押へとなつて(ぬ)(わ)の

二子を擒にすることが出来るけれども是れは甚だ面白くない。ナゼかと云ふに若しさう云ふ成行になると詰り黒は(ぬ)(わ)の二子を取つた代りに(た)(か)と隅地を掠められた上に(七)(五)の二子を丈夫にして仕舞ふからである。依つて白(か)の時黒(た)に押へるが宜い。然らば白は(ヨ)に尖んで活きる外はない。ソコで黒は後に機を見て後圖に示す如く×印へつけて隅の白を窘めながら兩下りを利かして外部の敵を攻むる手段あることは第一局以來既に悉く説明したこともある要するに白(か)に打ちたる時は白(ヨ)に打つよりは(た)に押へる方が利益であると思得置くべきである。扱て黒(た)に押へ白(ヨ)に尖みて活きたりとして次に黒は如何に打つべきか、此の場合(ソ)に備ふるは決して忽(ゆるがせ)に可らざる要處である。然るに浮ツかり他を打つと白は「シテウ」の當りを利用して直に×印を切るかも知れぬ。よしや「シテウ」の當りが無いにしても白から(ツ)に覗かれると黒の石立が形崩れとなると云ふことを始終念頭に置くやうになれば餘程強みが増すのである。サアさうなると前後の白の影が薄くなつて氣味が悪い。白(ね)に飛ぶか但しは(な)に備ふるか、此の兩様の手段中(な)に備へたと假定せよ。然らば敵が手が廻らぬ爲め止むを得ず棄て置く(ラ)の肩を衝き、白(む)に押しした時黒(ウ)に延びて敵の隙を伐つ機會を逸してはならぬ。コ、に於て白若し(え)に押さんか、黒(オ)にはねて打つも可なり、或は又黒直ちに(ク)に突出し白(や)、黒(マ)、白(け)、黒(フ)、白(こ)、黒(テ)の引きとなりて忽ち兩斷されて仕舞ふ。其の都合の悪いことは一見明白である。因つて白は(え)に押す手にて(テ)に尖む位のものであらう。左すれば黒は△印に斜走すべく、白は最早や外へ出る途はない。左りとて其の儘棄て置くことを隅と



せられて纔に眼二ツで隅に封じられて仕舞ふ。ソコで乙圖に就て言へば黒は(十三)(十五)の兩下りを利用して互りの意味を含みて一方に於ては(イ)に打込む手段もあり又一方に於ては(ロ)に打つ手と(ハ)の肩を衝く手筋がある。以上三策中黒(ハ)の肩を衝きたりとせん、其の時白若し心なしに(に)へ互れば則ち黒(ホ)、白(ヘ)、黒(ト)、白(ロ)、黒(チ)の切りとなつて兩斷されて仕舞ふ。黒(チ)の切石は(十三)の下りがあるから取ることは出来ない。斯うドウも兩斷されては堪らぬから黒(ハ)の肩を衝いた時に白(に)杯に互らすして(ロ)に尖む外はあまい。其の損たるや非常のものである。是れ即ち黒(十三)(十五)の兩下りの効能で白が隅で活きても得、失を償はぬと云ふのは即ち此處である。尙ほ隅の白の攻め工合に就て一寸注意して置きたい事がある。それは丙圖に就て説明する。黒が(二)と

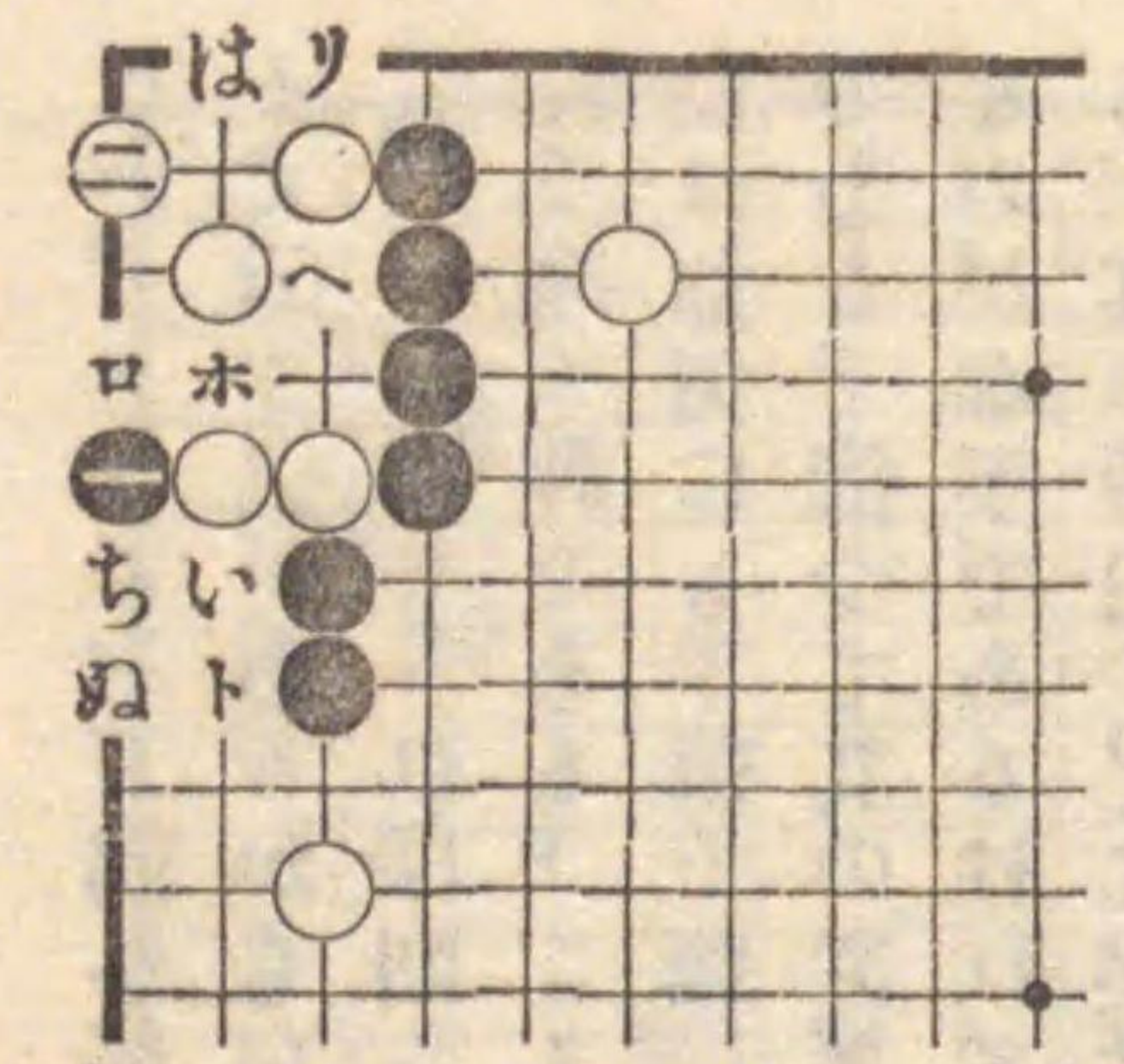


圖 丙

つけた時白は甲圖の如くなるのを嫌つて(三)と外づすことがあつた。若し然らば黒は其の儘棄て置くが宜い。要するに黒(二)のつけは白(い)に曲るか丙圖の如く(二)と外づすかを試めす手段に外ならぬ。而して後に機を見て黒(ロ)へ延び込む手段がある。其の時白(は)に眼を持たずして(へ)にグズまんには黒(は)に置きて死となるべく、或は白(は)にも活きず(へ)にもグズますして(い)に曲らば黒(ト)に押へ白(ち)に下つた時黒(へ)に當てる筋がある。白は(ホ)に粘ぐ外なく、ソコで黒(り)にはねて劫争となりては白の方が宜しくない。故に黒に(ロ)へ延び込まれた以上は白は二目を棄て(は)に活くる外はない。斯くの如く二目を取られて其の形を整へらるゝ不利あるを以て甲圖の如く(十三)(十五)と兩下りを利かせられるのは辛いけれども止むことを得ず甲圖のやうに打たねばならぬのである。茲に甲圖に就て尙ほ一つ注意して置きたいことがある。それは白(ハ)の手にて(十五)へはねなば黒(り)に押へ白(ハ)に粘りがてら一子を取つた時黒(ヌ)に掛粘ぐべく、白はモウ一手を隅に費して活さねばならぬ。さうなつては外部の白は非常な傷みを受ける譯で(十三)(十五)の兩下りを利かせられるよりは却て損害であるから白(十五)のはね粘ぎは避けねばならぬ、丙圖に就ても同様で黒が(ロ)に延び込みたる時白(ホ)に押へんか、黒(は)、白(い)、黒(ト)、白(ぬ)へはねれば(二)(ロ)の二目を取込んで活きるけれども外部に於ける損害は非常のものであるからは

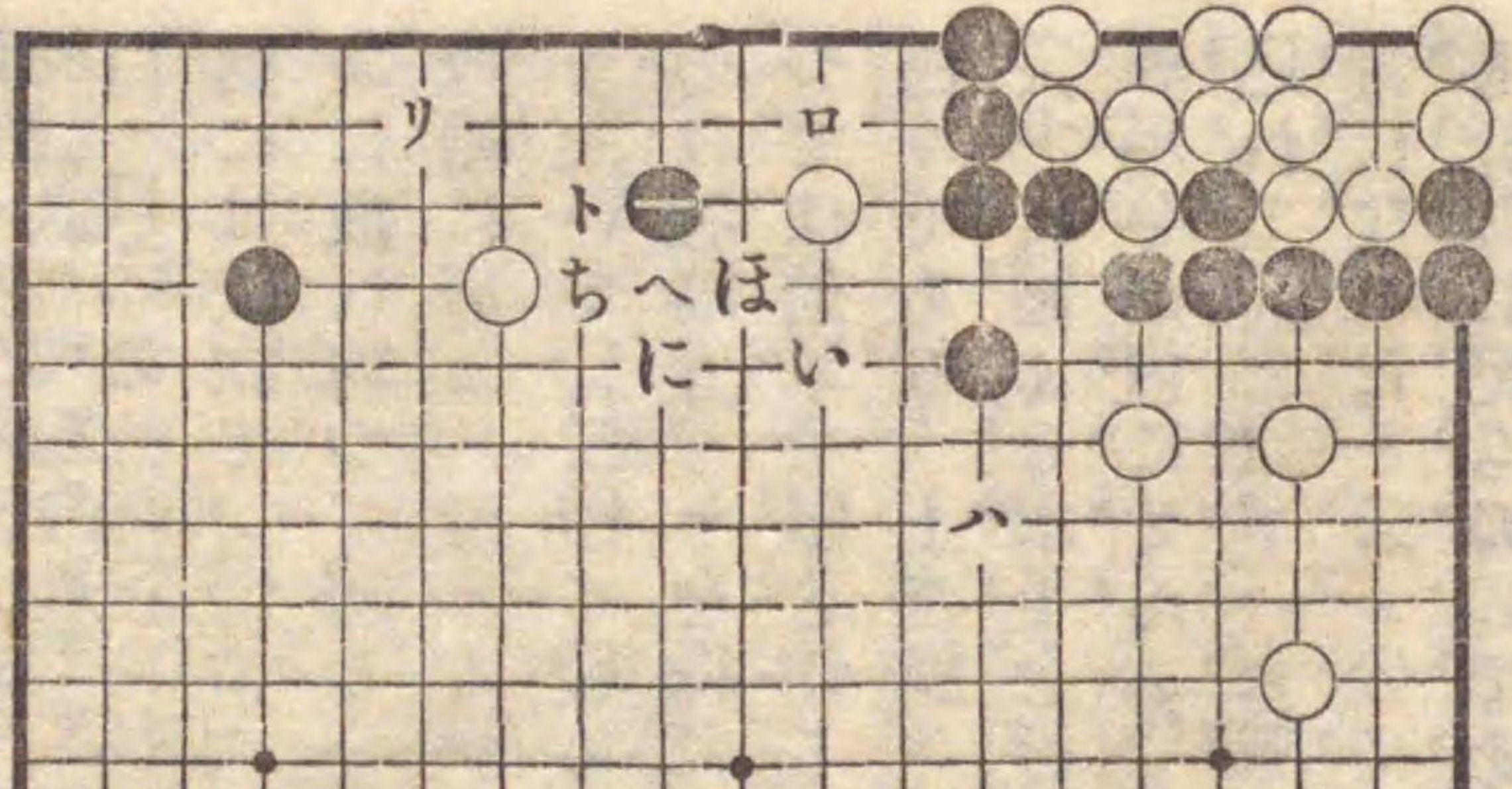
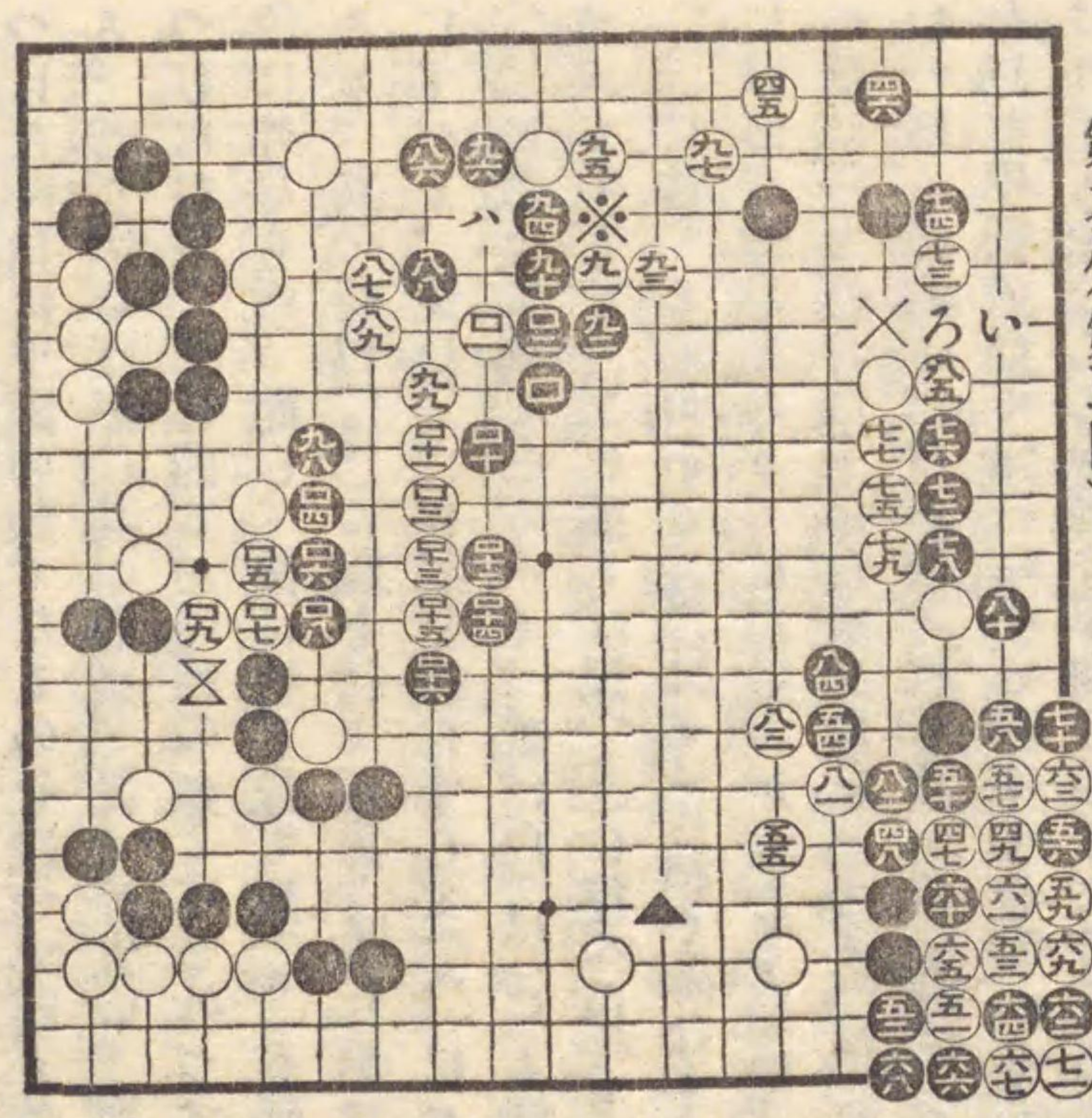


圖 丁

又上手の打つべき手段に非ずと心得べきである。扱て右下隅は甲圖の如くなつたとして黒(ハ)の肩を衝く手段は既に述べた。更に丁圖の如く(二)と打込む手段を説明する。何分にも黒が下り切つて居るので白は實に應手に窮する。假に白(い)に一間飛ぶとせんか。黒は直ちに(ロ)に互る手もあり或は一ツ(ハ)に飛び白(に)へ冠ぶせた拍子に(ロ)に互つても善し、又白(に)へ冠ぶせる手で(ロ)に互りを止めれば黒は(に)へ飛出して仕舞ふ。何とも始末に困る。更に初めに戻り黒(二)と打込んだ時白(い)に飛ばすして(は)に尖めば黒は一應(へ)に押し白(に)に押へた時黒(ロ)に互るべく、又白(は)へ尖む手にて(へ)につければ黒は逆(ト)へ延び白(ち)に押へた時一方に(ロ)の互りを含みつゞ(リ)に斜走すると云ふ面白い趣向がある。斯くては白地は丸つきり潰れて却て黒の方に地が出る。ドウも兩下りの祟りは實に恐ろしい。此の手順を心得て居るものに向つて迂ツかり隅へ打込まうものなら忽ち兩下りを利かされてヒドイ目に遇ふ。これで黒兩下りの効能は大概了解し得たであらう。扱第三圖の如く黒(七)の下りを利用して(七)と打込みたりとして白は如何にさばくべきか。前述の如く(七)の一子に右上隅へ聯絡されては堪らぬ。因つて白先づ(七)に斜走して黒(い)の互りを妨ぐる結果は圖の如く黒(七)の互りとなる外は

ない。ソコで右下隅外部の白には棄置けば、△の肩を衝かれ
ると云ふ疵があるから白(八二)へ尖みつげ黒(八三)、白(八三)、黒
(八四)の延びとれば則ち黒が▲印の肩を衝く手段は幾分か緩
んで来る譯である。こゝに於て全局の形勢を見るに左上邊の
白は如何にも手薄で圖の如く(八六)に打込まれると随分面側
である。依つて其の凌ぎ旁々白(八五)の手で(八七)に備へて居
るのが本手であるけれども、さうすると黒から(八五)に押され
る。其の時白(ろ)に突當ると×印の切りが残る。黒は其の切
りを質に取つて先づ白(四五)と左ト邊の白との聯絡を絶つ工夫
をするであらう。それを凌がんと欲すれば×印を切らるゝ恐
れあり。×印の切りを防がんと欲すれば(四七)の一子を擒に
せらるゝと云ふ所謂からみ攻めに引ッ懸かるから詰り(四七)

第九局(第三圖)



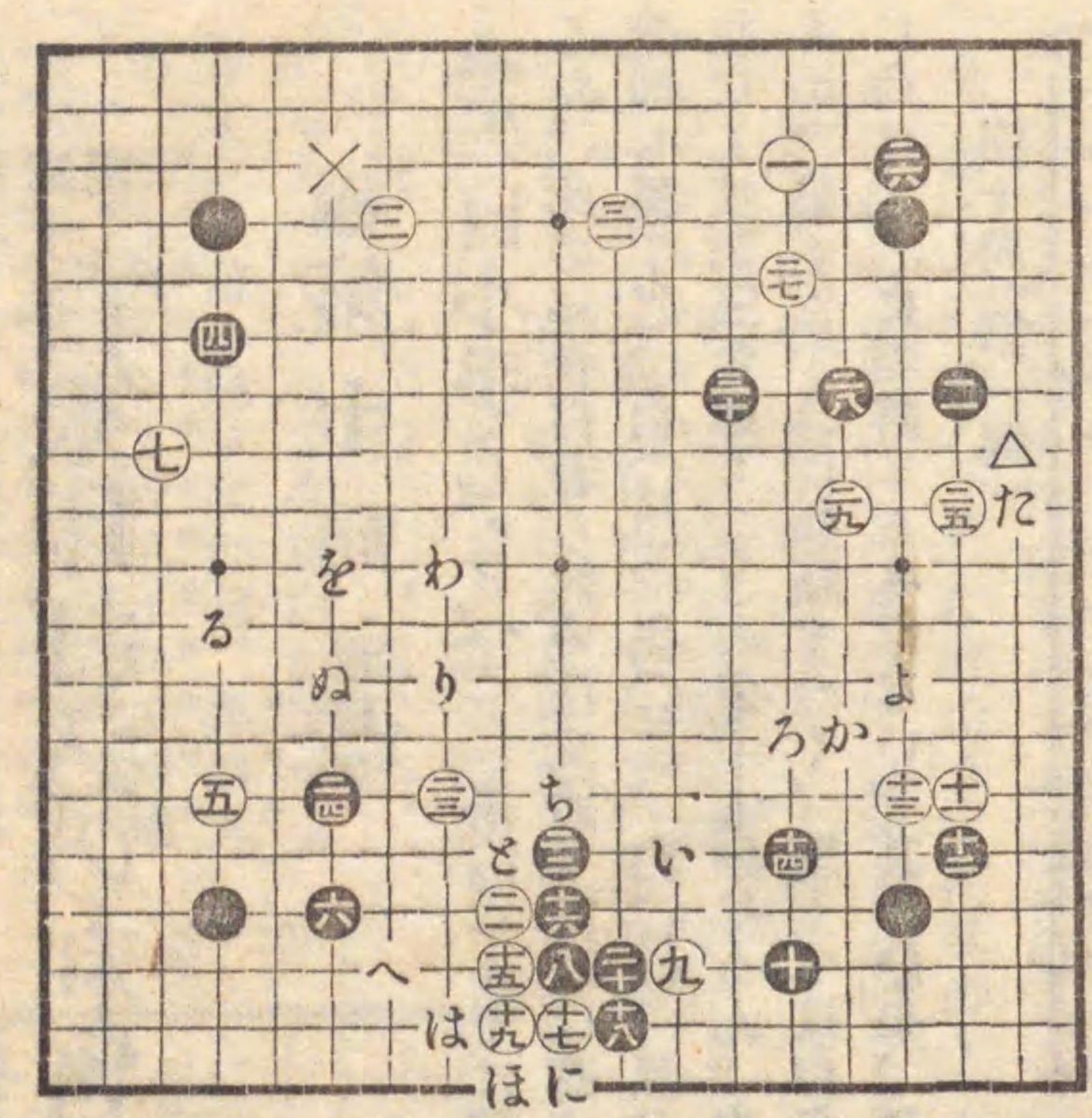
の一子を見殺
しにするやう
な結果を生ず
る。夫故に本
手だからと云
ふて(八七)坏に
備へて居ると
益々碁がおく
れて仕舞ふか
ら止むことを
得ず(八五)に曲
つた時黒(八六)
に打込む結果
はドウなる
か。白は矢張

り(八七)に打つ外はあるまい。其の時黒は(ハ)に尖んでも宜
いのであるが圖の如く(八八)につけても宜い。白(八九)、黒(九〇)
の飛びとなるべく、ソコで白(九七)に備いて居るのが本手であ
るけれども左すれば(九三)に封鎖されて愈々碁勢が極つて仕舞
ふ。依つて此處では白(九二)につけて戦ふ外はない。其の結果
圖の如く白(九五)の引きとなつた時に黒は直ちに(九六)への遮断
手段に出ても一向差支へないのであるが、頗る優勢であるか
ら堅く打つに若かずとして黒は(九六)と突當りて×印の出切り
を狙つたのである。出切りをやられては堪らぬから白(九七)に
備へたので其の時黒(九八)と左右兩斷の一着を下したの時は時機
を得たもので白は奈何とも致方なく(九七)と尖んだのである。
此の時黒に於ては(四四)に押へ付けて仕舞ふ手段があるけれ
ども他を攻むるよりは先づ手堅く己れを守るに若かず(四)と
掛粘いで充分である。黒(四六)までの手順中注意を要するは
白(四九)の時黒×印坏に押ふるは大事の前の小事である。前
面には攻立て、追立て、打立てられて、眼を作るの暇あらず、奔
命に疲れ切つて居る一大隊が殆ど運命を我が手に委ねて居る
境遇に居るのであるから黒が×印の押へを棄て(四十)と視
き次いで(四四)と緩めて而して(四六)に包圍の實を全うした
のは戦略宜しきを得たものである。斯くの如く重圍の中に陥
つては最早や眼を作るの餘地がない。白の大敗北たるや明々
白々である。上來説き去り説き來りし如く白(八五)の手にて、
(八七)に備ふる本手を打たんか(八五)に押されて×印を切らるゝ
缺陷を如何にせん。左りとて(八五)に押へんか圖の如く(八六)と打
込れて(八七)以下一大隊の破滅を來たすと云ふ如き果敢なき運
命になつたと云ふのは必竟四目を置かせたる結果であつて毫
も怪むに足らぬのである。

第十局

▲第一 黒白の小手しらべ 白(十二)の掛りまでは説
明を要する程のことはない。黒が(十二)と尖みつけたのは即
ち白を(十三)に延ばしてこの形を重くし而して黒(十四)と飛んで
隅を守りながら丸の白を孤立の地位に陥らしめぬ戰略で此の
場合至極良い手段である。白は(一)に飛ぶが普通であるけれ
ども左すれば黒も亦(ろ)に飛び出さば如何。(十二)(十三)の二子
を何とか始末せねばなるまい。其の時黒は(三)に飛んで白を
追立つる一方に地を固めて仕舞ふ。それでは黒の注文通りに
なる譯であるから其の趣向の裏を搔いて白(十五)と變化を試み
たのである。黒(十六)の手で(十七)へ下る手段もある。デ白(十六)

第十局(第一圖)



に跳ねれば黒
は(三)に切つ
て戦ふべく、
又白(十六)に跳
ねずして(三)
へ延びれば黒
も亦た(十六)に
沿うて行くと
云ふ強硬の手
段もあるけれ
ど四子も置い
ては成べく戦
ひを避けて圖
の如く單に
(十六)に延びる

方が穩當である。白(九)の手で若しも(ハ)に掛粘いだらば黒
は直ちに(九)へはねるが宜い。兎角初心者は(ハ)坏へ劫に受
けられるのを嫌うて凹んで仕舞ふのは往々見受ける所である
けれども此の場合劫は少しも恐るゝに足らず、何處でも棄て
てドシ／＼打抜いて仕舞ふが宜い。白(三)以下(三)までは既
に幾度か説明してあるからコ、には略する。是れで兩軍の配
置は一通り片が付いた。是れより

白兵戦

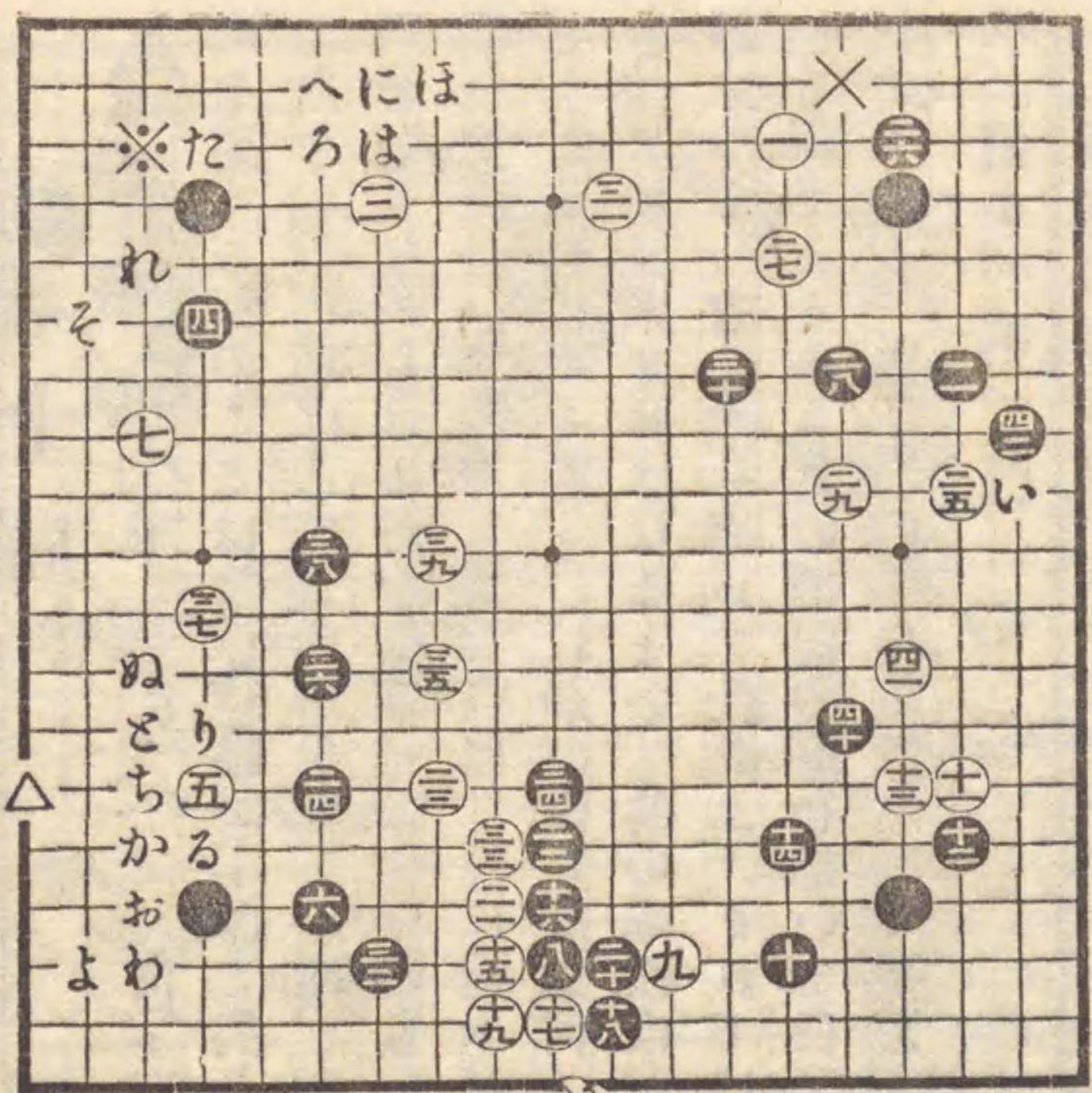
に移るのであるが黒は如何に打つべきやと
云ふと黒(ハ)に尖むが一番の急務である。是は自分を固め乍
ら(ロ)の出切を狙つたのである。然る上は白は勢ひ(ロ)に添
はざるを得ざるべく、其の機みに黒(ち)に出で白(り)に飛び
黒亦(ぬ)に飛びて右を撃ち左を脅かす手段に出づべきであ
る。左すれば白は(る)にでも備ふる外あるまい。黒はモウ一
つ(を)に飛べば則ち白も亦(わ)に飛んで用心せずばなるま
い。コ、に於て黒には三通りの打方がある。其一は△印に尖
む手段、其二は×印に打つて左上隅を固める趣向、其三は左
邊中側の白を攻むる戰略である。以上三策中何れが急務なり
やと云へば△印に尖むに若かずである。其の手順として黒先
づ(か)に脅かし白(よ)に防ぎたる機に乗じて△印に尖めば一
層働く譯である。と云ふのは白が既に(よ)に圍つた以上は△
印の尖みに對して(た)に押へぬでは白(よ)の圍ひを全うする
ことが出來ぬ。左りとて敵の意の儘に屈從して居ては碁がお
くれて仕舞ふから白は其の儘棄て置いて他に打つであらう。
白は如何に機略を弄するかは次號に於て説明する。

第十局 白※印打込の利害

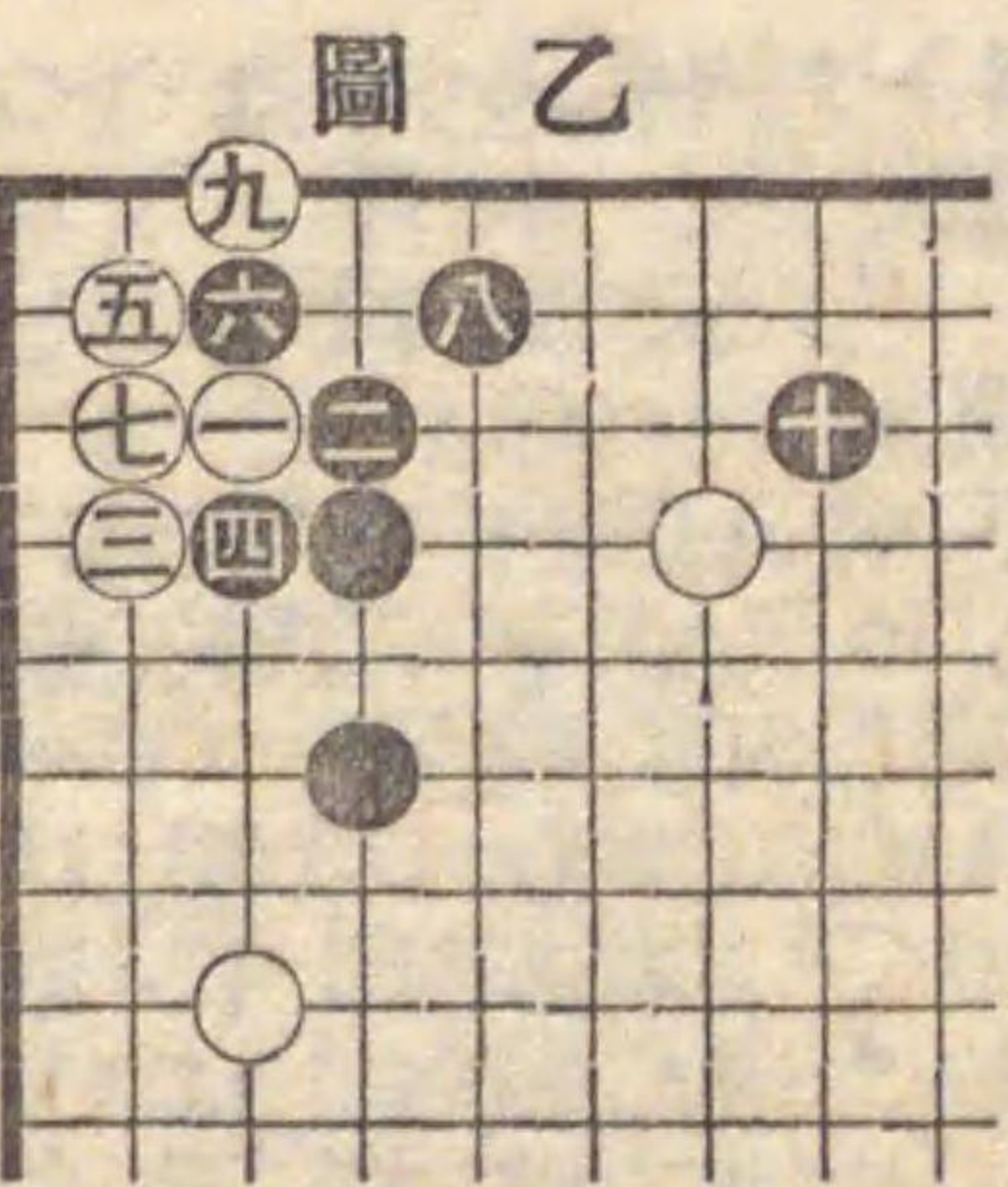
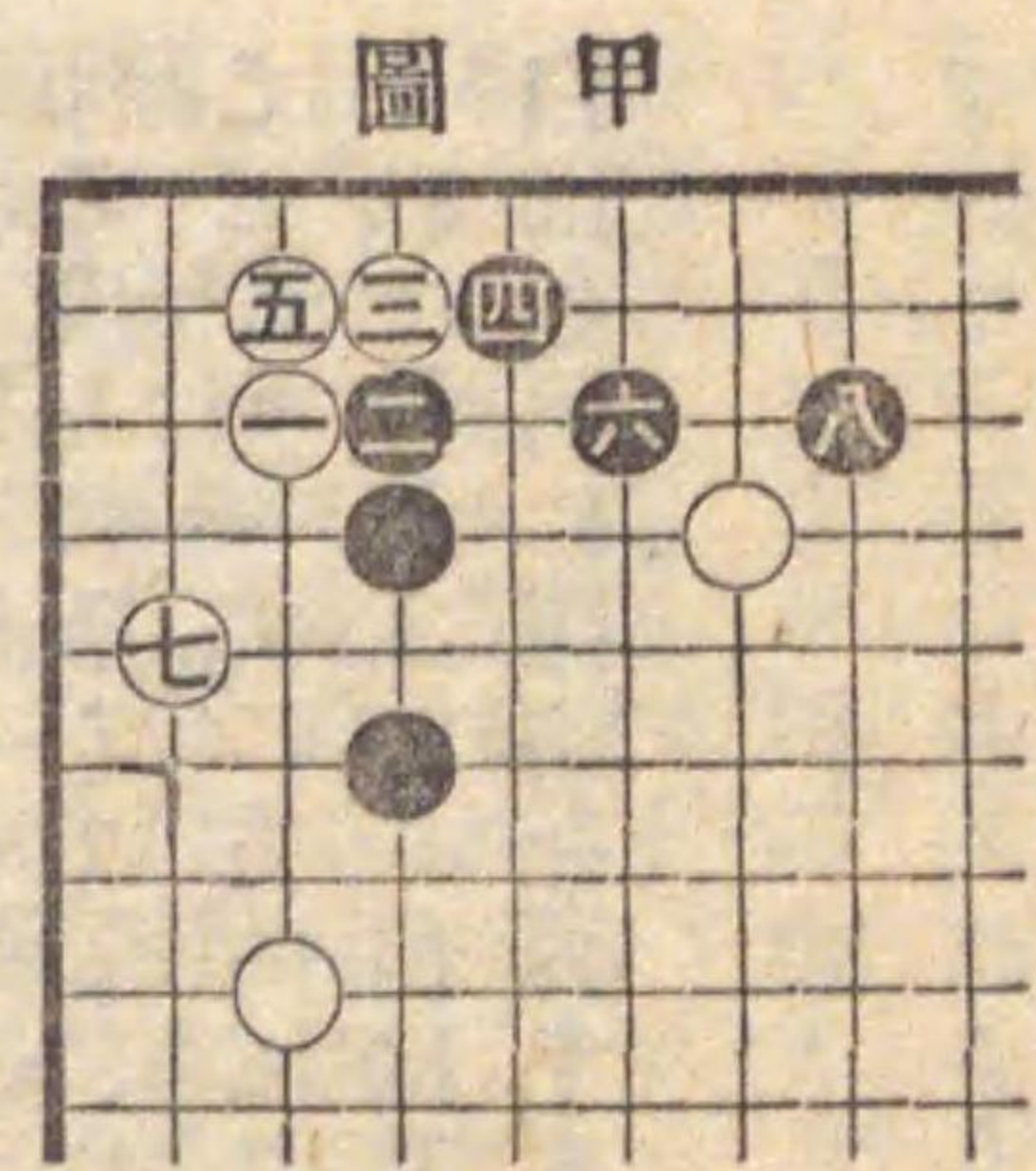
第十局 (承前)

▲黑白小手しらべ 黒(四)までは前圖に於て説明した。此の場合白若し黒の注文通り(い)に應ずれば黒は第二策即ち黒(ろ)、白(は)、黒(に)、白(ほ)、黒(へ)に粘るか、左なくば第三策即ち(と)に置くも妙ならん。白(ち)に遮断せんか、黒また(り)に遮断すべく、斯くては白の不利なるが故に白は(り)に聯絡する外はない。其の結果、黒(ち)、白(ぬ)、黒(る)となる

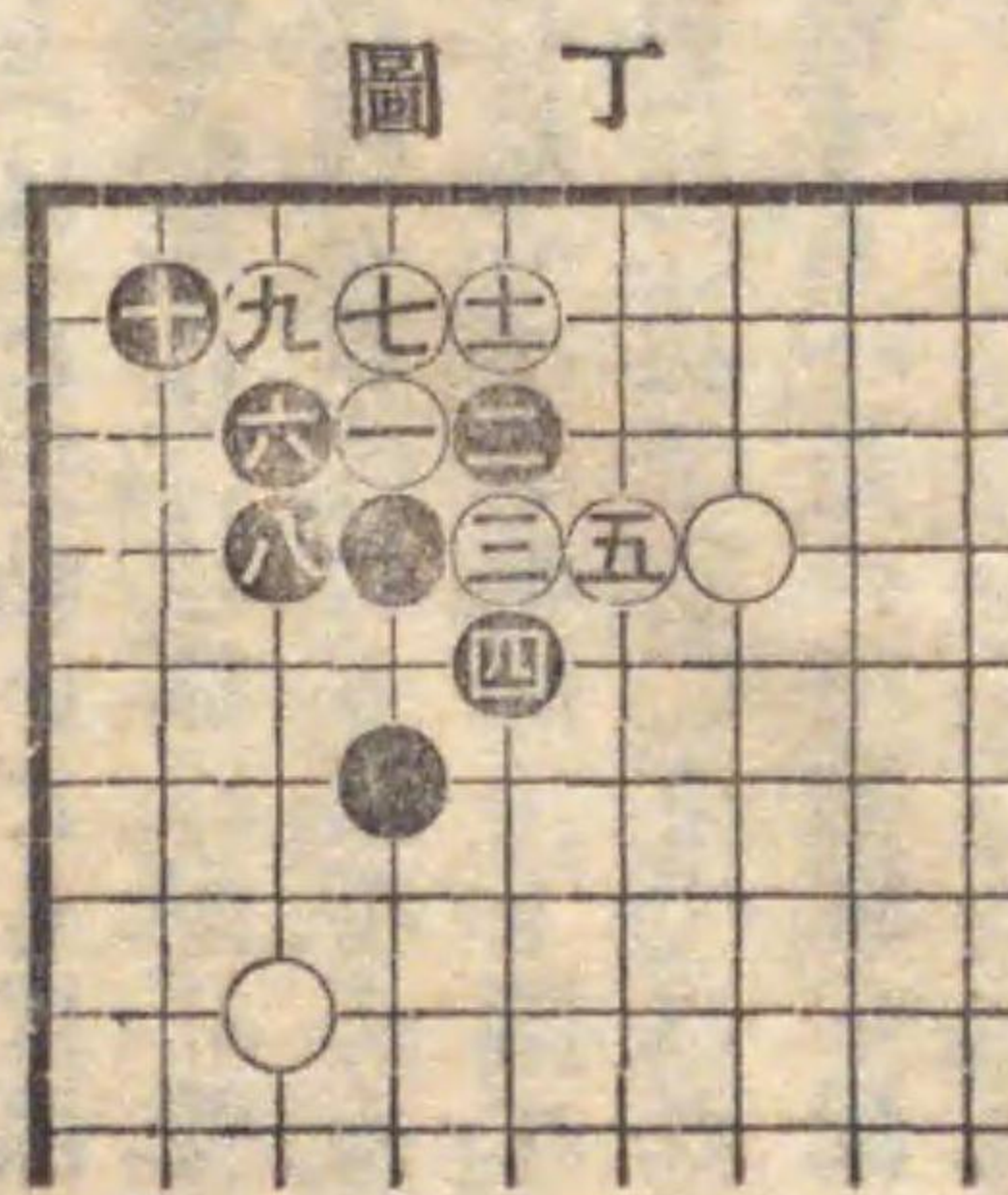
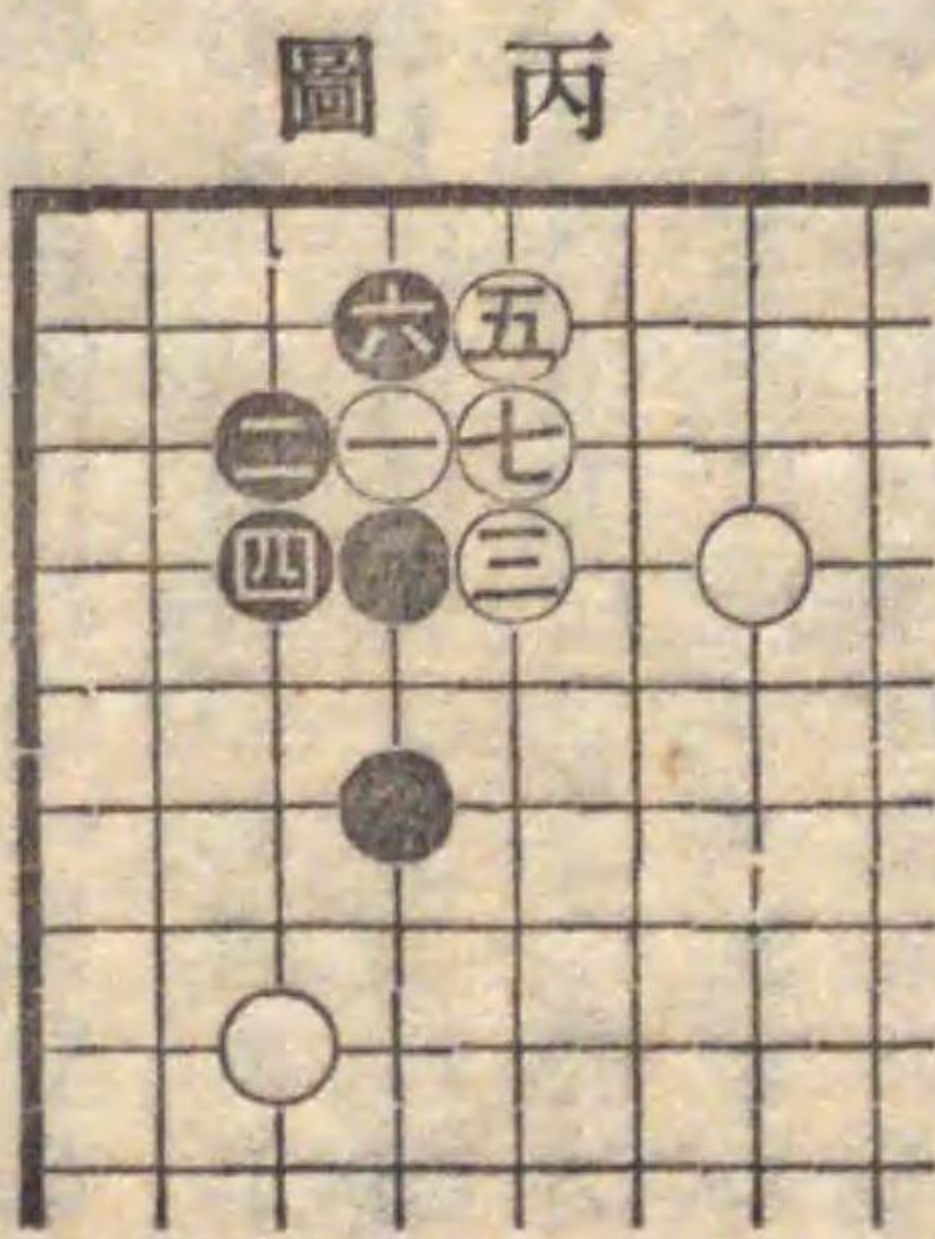
第十局(第一圖)



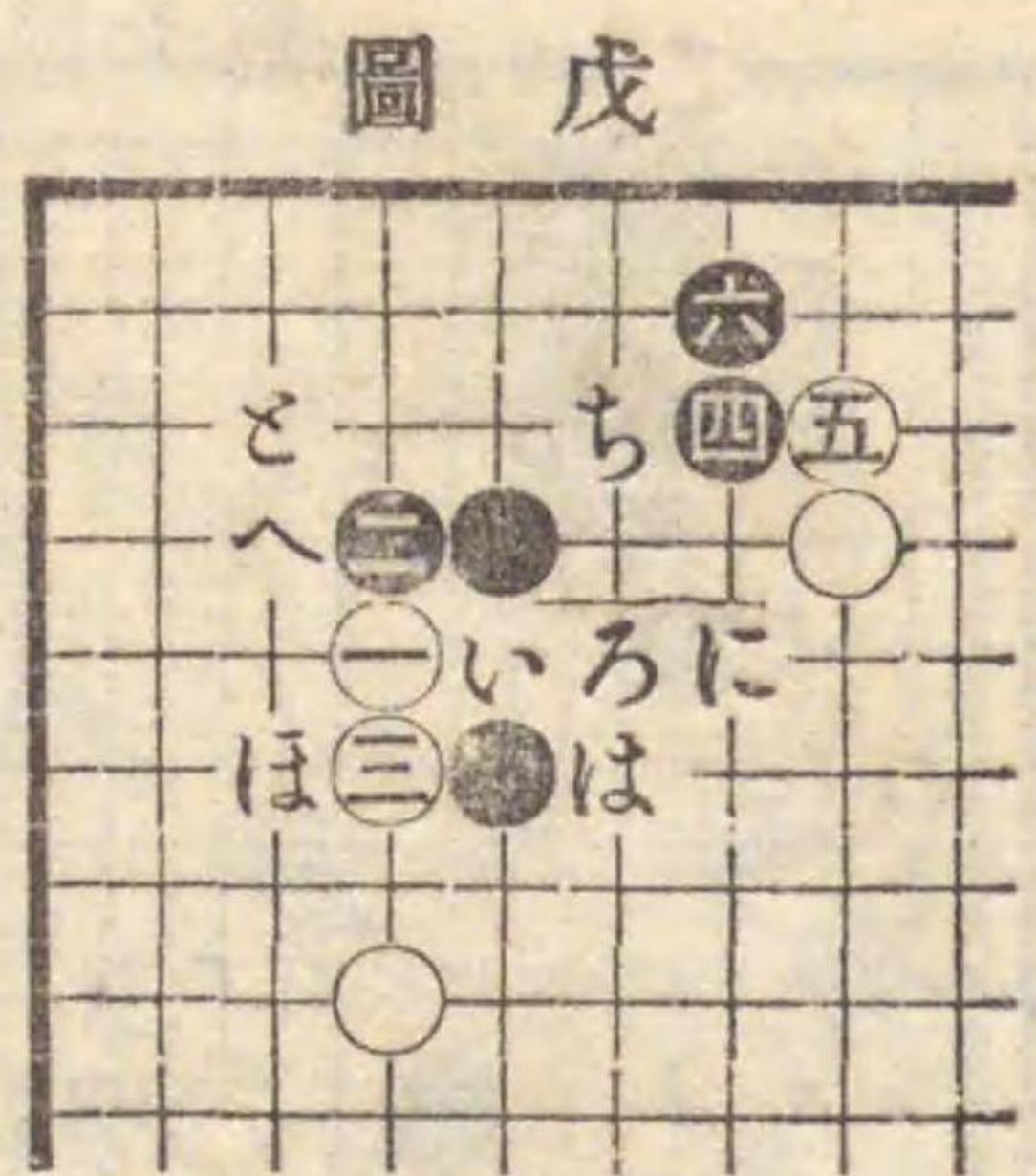
べく白地は變じて黒地となりて忽ち碁勢が定まつて仕舞ふ。故に白は一々黒の計畫通りに(い)杯に服従して居る譯に行かぬ。因つて白(と)の侵略を凌ぎかた(お)に一撃を加へたりとせ



して置きたいのは此の場合三々即ち※印に打込むのは宜しくない。ナゼかと云ふに白(七)の掛りある以上は此の隅は左程黒の地にならぬ處である。然るに敵の地にならぬ※印へ打込みて隅地を食る其の影響忽ち白(三)の勢力範囲に波及して却て白の損失を來たすやうな事がある。試に之を圖解せんか甲圖の如くなりて隅を掠めた其の代りに黒に(六)と侵入されて折角の勢力範圍を荒らされて仕舞ふではないか、是れでは逆も收支相償はぬ。



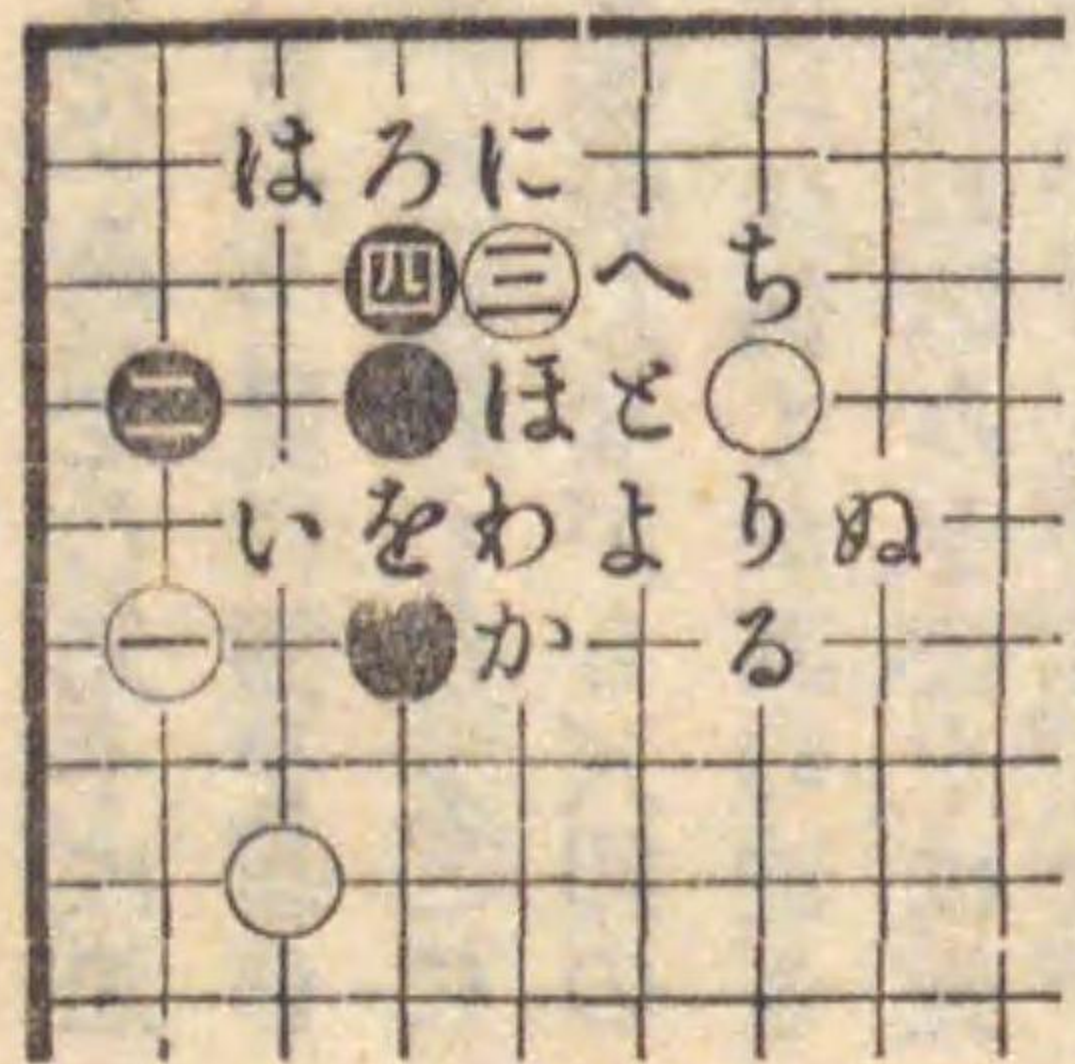
(四二)



尙其の變化を示せば則ち乙圖の如く、矢張り敵地を荒らした祟り、自分の地も亦メチャクになる、其の不利たるや知るべきである。因つて第一策即ち(た)につける結果は丙圖の如くなるのが普通である。或は丁圖の如き定跡もあるが、

白(七)の掛りある場合に斯くの如く打つのは黒の不利である。丙圖とても敢て黒の利と云ふ譯ではないが、既に四子も置いてあり、全體の形勢が優れて居るから白(七)の掛りある上は丙圖の如く穩に受けて自己の備へを確實にするに如くはないのである。更に白第二策に出で(れ)に覗けば黒は戊圖の如く打つを可とすべく、即ち安全に隅地を占領し得るのみならず(六)の下りある爲めに機を見て敵地を荒らす得も残る譯である。斯くて白若し(い)に突出さば黒は必す(ろ)に押へよ、白(は)を切らば黒(に)へ延びて何時でも一子を棄てる覺悟をして居るが宜い。其の割合は決して悪くないのである。茲に聊か注意して置きたいのは戊圖の如く白(二)と覗いた時黒が上の一子を棄てる趣向に出でずして(い)に粘ぐは白の術中に陥るのである。左すれば白は單に(三)に引くこともあるべく、或は(ほ)に尖むこともある。其の時黒(三)に押へんか、白(へ)、黒(と)となるべくソコで今度白が搦手より(ち)に攻め込まば如何、黒は大手を、搦手兩門より攻込まれて隅地を切縮めらる其の反對に前後に白地を擴張される結果を來たすでは

圖 癸



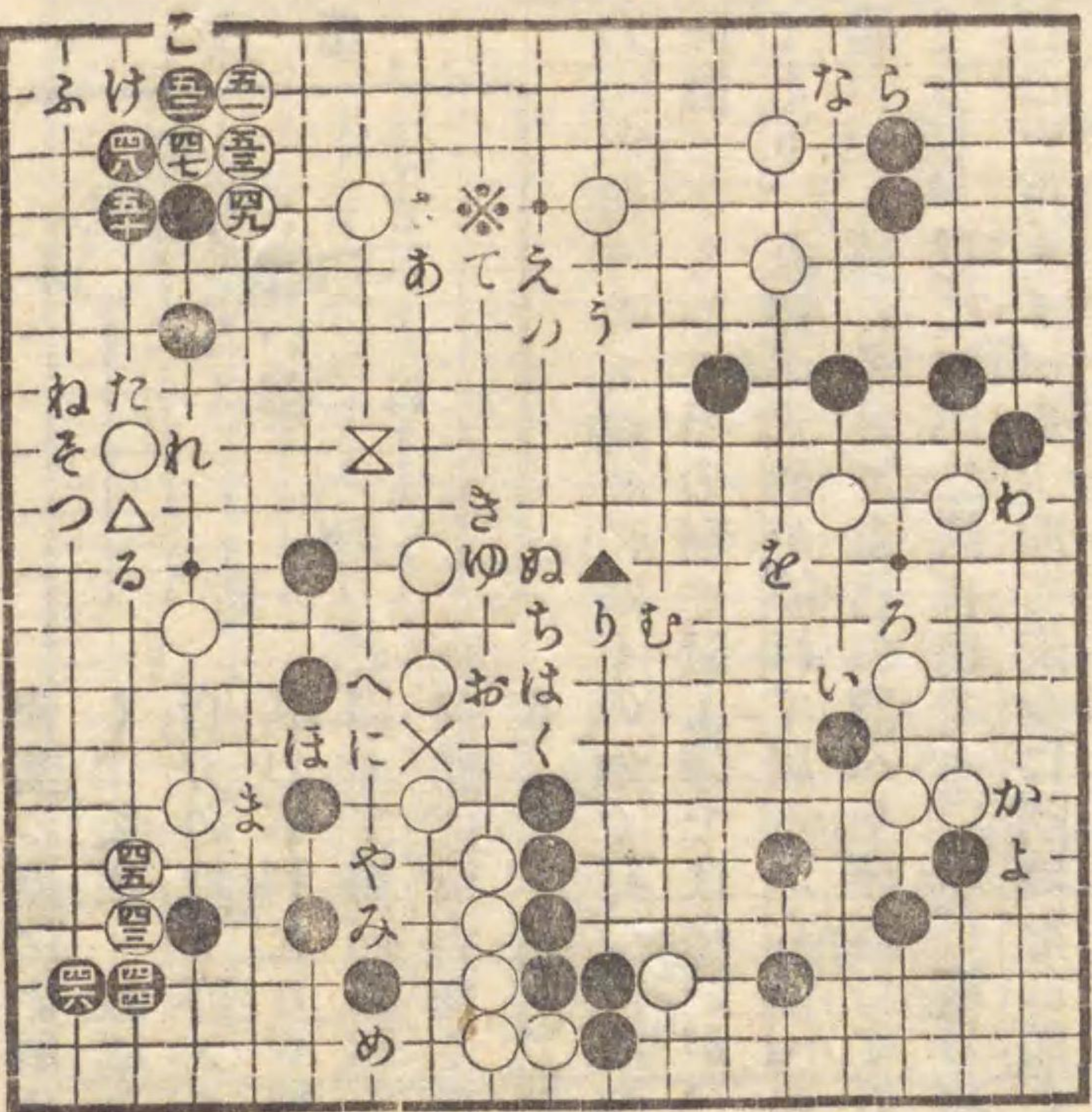
ないか。又白(は)に尖ますして單に(三)へ引きた。時黒(三)に押へても白は矢張り(ち)に攻込むのである。何れにしても非常に黒の不利たるを免かれぬから戊圖の如く一子を棄てる趣向に出づることを忘れぬやう注意して欲しいのである。次は第三策で、本圖に戻り白(た)にもつけず(れ)にも覗かずして(と)に迂り込まば黒は癸圖の如く打つ外はない。一見前後兩方から攻込まれた形ではあるが、戊圖の如く白(い)に覗いて居る譯でなく、一路緩んで居るから縦じや兩攻に遇ふても是れは止むを得ぬのである。此の場合白は此の儘手を抜くこともあり、一ト先づ(ろ)にはね、黒(は)に押へた時手を抜くこともあり、又(に)に粘ぐこともある。が黒(は)の受方にも亦變化がある。と云ふのは黒が(は)に押へた所が何程の地が出来た譯でもないから隅は明け放しにして(ほ)に曲る手段がある、其の時白(へ)に延びれば黒(は)に押ふべく即ち(は)の打得をした譯である。因つて白は黒の趣向に逆うて白(へ)に延びずして(に)に粘ぐとせんか、黒(と)に突當り白(ち)に下り、黒(り)、白(ぬ)、黒(る)と斯う打つ手段もあるが是れは後手である。なほ癸圖に就て注意して置きたいのは白(三)に攻込む前に(い)に覗くこともあらう、左すれば黒は戊圖の如く上の一子を棄てる覺悟で(三)に尖むことを忘れてはならぬ。白(を)に突出し黒(わ)に押へ、白(か)を切り、黒(よ)の延びとなつては白の方が割合ひが悪い。然るに白(い)の時黒(三)に尖む手段を知らずして(を)に粘ぐは是れ又白の術中に陥るもので、白より(三)に打たれて兩攻に遇うては黒の方が宜しくない。吳々も注意すべき事にこそ。

▲第二虚々實々の競合ひ 白の三策に對する應手手段は以上の説明に依て了解せられたであらう。因つて本圖

(四三)

に戻り白(た)につけ黒丙圖の如く應手したと假定し先手は黒の手にある。扱て黒は如何に白を攻むべきか、更に圖を新にして説明する。此の局面に於ては黒先づ(い)に押し白(ろ)に延びたる時黒(は)に飛びて自己の領域を擴張しながら×印の跳ね込みを狙ふを上策とすべく、左れば白は何とか其の凌ぎをせねばならぬ。ソコで白(に)に覗きて跳ね込みを凌ぐは先手のやうであるが左すれば黒(は)に粘りは必ず其の響きが忽ち左邊の白に波及するから是れは白の忍ぶ能はざる所で此の場合白(へ)に突當る外なしとすれば黒は(に)に膨れる、白×印の粘りとなりて先手は矢張り黒の手に在るから尙×印に煽て白を攻めつゝ遙に※印の打込を狙ふべきである。ドウも憚う云ふ風に理攻めに打立てられては堪らない、白(は)もつけ黒(り)、

第十局(第二圖)



白(ぬ)に延びて、眼形を造らざるままい。餘り窮寇を追ふは名將の爲さざる所中原の白は其の位に棄て置いて戈を轉じて※印に打込んで戰ふ手段もあり、又左邊の(る)或は△印に侵掠を

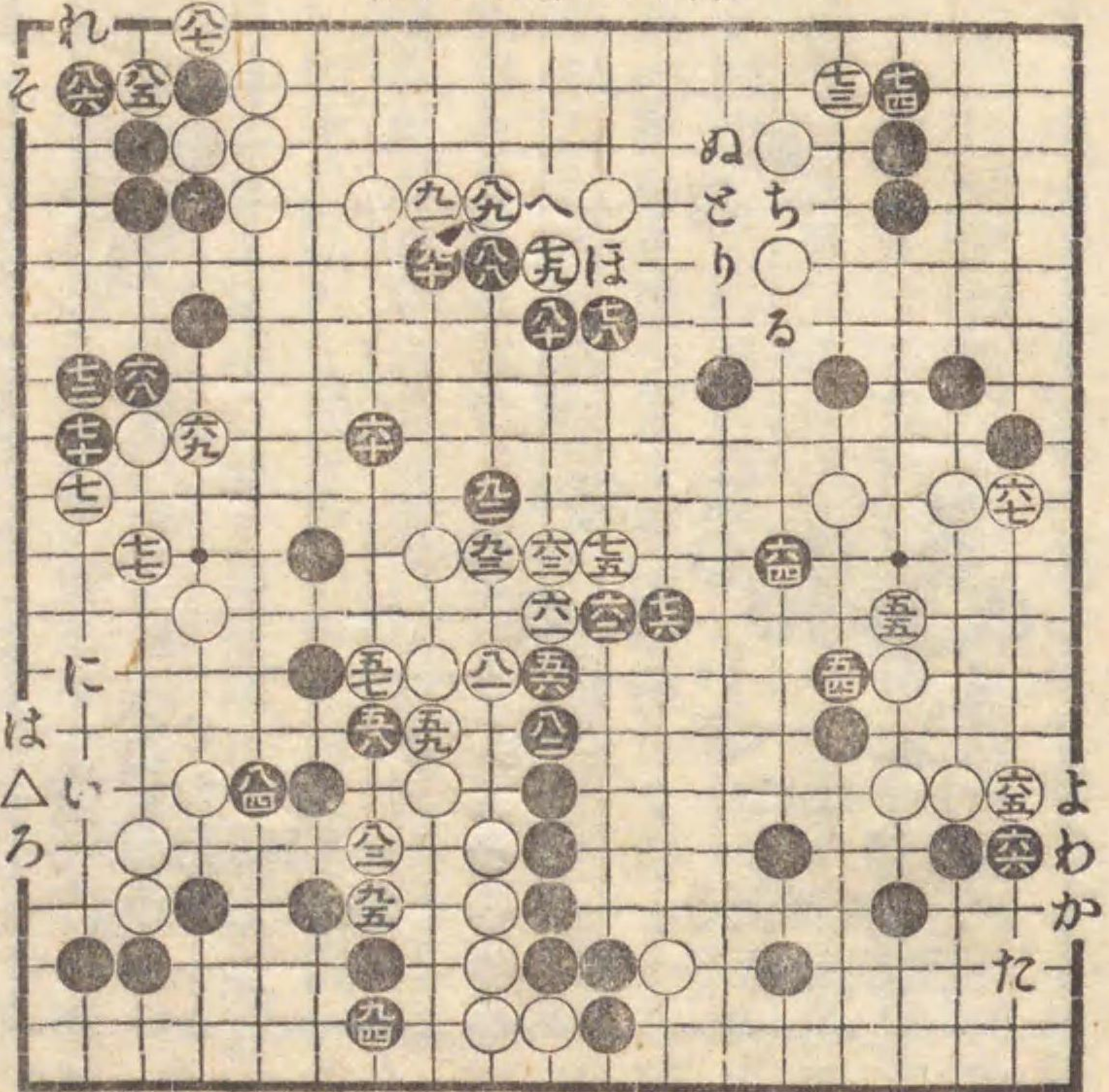
試みる手段もあるけれども、黒軍の形勢は頗る優勢であるから敢て危険を犯して敵地へ切込みて惡戰苦闘するにも及ばぬ。穩かに(を)に斜走して自己の地域を固めながら右邊の白を脅かす位の事で十分である。左れば白は(わ)に押へるが本手であるけれどもソコで手緩い事をして居て黒から(か)に跳ね粘られては迎も堪らない。因つて白(か)に下り黒(よ)に押へた時白(わ)に押へたとせよ。ソコで黒(た)に尖みつけ、白(れ)黒(そ)白(つ)黒(ね)の粘りとなるべく、斯くては白に多少の缺陷が出来るけれどもソコで處を補つては居られぬから其の儘棄て置いて白(な)に尖み、黒(ら)に押へ、白轉じて▲印に曲り黒(む)に延びたる時白(る)に掛粘りが宜い。若し此の掛粘りを何時までも棄置いて黒に(る)に置かれると非常の損になるから此の場合此の掛粘りが一番大きいのである。然らば黒は遠く中の白を攻むる意味を含み且つ上邊の厚みを消す趣向に於て(う)に斜走する杯面白からん。白(え)に尖み黒(の)の押へとなつては最早や中の白を棄て置く譯に行かぬ。白(お)に突當り黒(く)に粘り、白(や)に覗きて活くる外なく黒(ま)に突當つて聯絡を全うしたる時白(け)に一子を切取るのが一番大きいのである。ソコで黒(て)にはね、白×印黒(あ)白(さ)の押へととなり、黒轉じて(き)に覗き白(ゆ)に粘り、(め)に下り白(み)に眼を持ちて全局面に於ける白兵戰は茲に一段落を告げて是れより愈々『ヨセ』に移るのである。

▲黑白の大勢

を説明する前に第三圖に就てドコをヨセるのが一番大きいのかと云ふと△印に迂り込むに如くは

ない、白(い)につけ、黒(ろ)に引いた時白(は)の押へは此の場合甚だ危険であるから(に)に控へねばならぬ。ソコで黒上方に轉じて(は)にあて、白(へ)、黒(と)、白(ち)、黒(り)、白

(圖三第)局十第



(ぬ)黒(る)の押へととなり、白右下隅(わ)にはね、黒(か)、白(よ)、黒(た)の粘りとなり、白左上隅に轉じて(れ)にはね、黒(そ)の延びとなる位のものなら

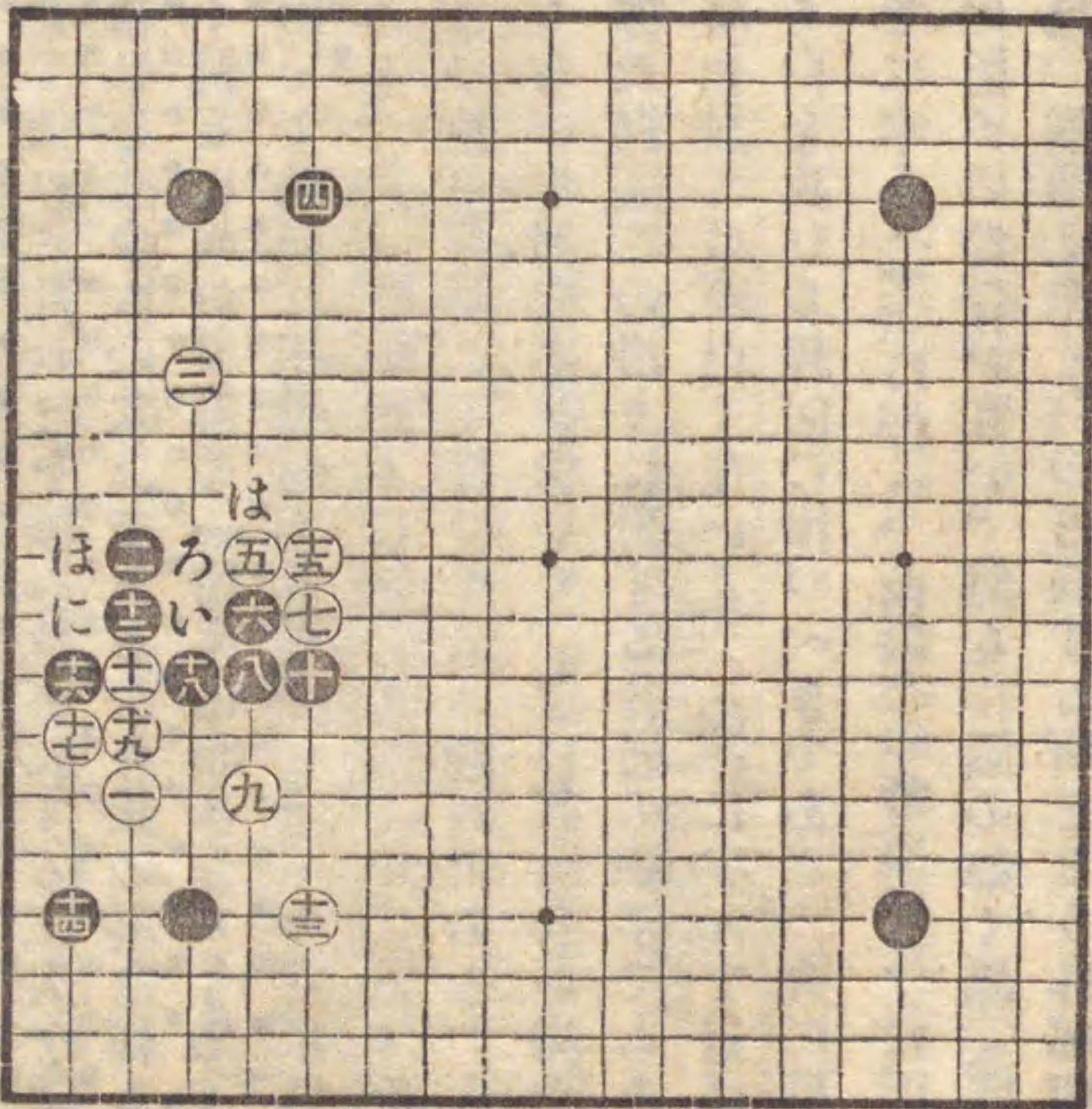
ん。而して黒白地域の比較如何と云ふに右下隅の黒地は約四十目餘で右上隅の黒地は約十五目、左下隅の黒地は約十二目、此の二隅は極く内輪に見積つた計算である。左上隅の黒地も十二目其の他中程に五日位の地が出来るから黒地は彼此合わせて八十目餘ある。然るに上邊の白地は二十六七目右邊の白地は約十目、左邊も亦約十目、中は僅に眼二ツ、合せて約四十八目に過ぎぬから先づ三十目以上の差がある。此の位の差を生ずるのが當然である。

●第十一局

▲黑白小手しらべ

黒(三)は即ち守勢を棄てて攻勢を取つたのである。故に白(三)を割打ちを試みたのも亦一策である。黒(四)と打つは實戦に於て能く見受けるのであるが是れは

第十一局(第一圖)

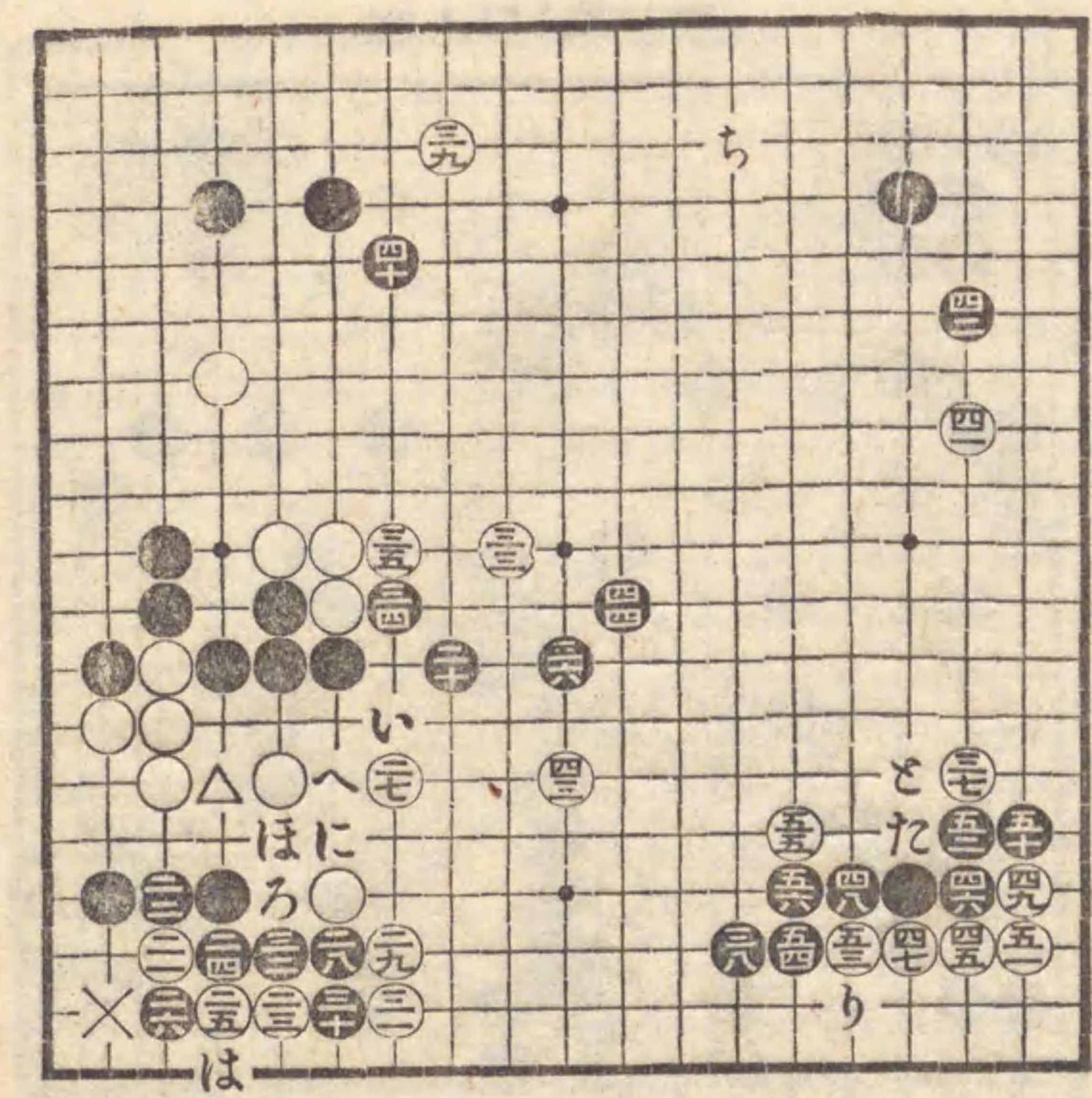


甚だ宜しくない。既に黒(三)と攻勢を取つた以上は白(三)の割打ちに對し黒(三)の意思を繼いで(五)に飛び敵を前後に中斷して飽くまで攻勢を取るべきである。抑も黒(五)の飛びは自己の發展に資するのみならず

其の威力は前後の敵に響いて上下兩隅を守る位の効力があるのである。然るに忽ち守勢に轉じて黒(四)と締つたのは單に一方を守るに過ぎずして黒(三)の意思を繼續せざる著子であると謂はねばならぬ。果せる哉白より(五)と冠せられて反對に攻めらるゝに至つては紛れを生じ易く黒の不利焉れより大なるはなしである。事コ、に至ては勢ひ止むことを得ず黒(三)につけ(は)に延びる外はない。扱て黒(四)の時白(七)の手で(い)に跳ね出さば黒は無論(ろ)に切るべく、白(五)に押し白(五)、白(七)、白(九)、白(十一)に押し白(十一)、白(十三)に押し白(十三)、白(十五)に押し白(十五)の跳ね出しは變態で圖の如く(七)と跳ねるのが普通である。黒(三)に曲る手(十一)に備へ白(十一)に押し白(十五)に切つて戰つても決して悪くはない。然るに其の手段に出でずして黒(三)に曲つ

た爲めに(十二)と急所を衝かれた黒の苦痛は想ひやるものであ
る。是れは即ち黒の眼を奪ひながら(一)の駄目に繋がらせや
うと云ふ趣向で所謂筋である。併し黒(十二)と曲つた以上は(十二)
と打たれるのは止むを得ないが(一)の駄目に聯絡するのは何
分にも辛いから黒(十二)と突當つた。以下白(十九)までは普通の
應手で説明を要する程の事も無い。黒(十三)の手で(一)に尖ん
で第一圖白(五)と(十三)の切目を窺ふのも一策である圖中黒(三)
及び(三)の手段は面白くない。コ、には色々手段のある所
あるが黒先づ(三)に尖み着けるが宜い、白(三)に押へなば黒
(三)に跳ね出すべく、この時白(三)に突込むのは無理である
が、弱敵と侮つて其の無理を敢てすれば黒は(五)に粘ぐが宜
い。騎虎の勢ひ、白は(三)に(三)の一子を抱へる外なく、黒

第十一局(第二圖)



(三)に切り白
(三)に取り、黒
(三)に跳ね出
し白(三)に切
つた時黒(一)
に押さば如
何。下の二目
を『してう』に
取られては堪
らぬ白は何と
か其の凌ぎを
せねばなら
ぬ。ソコで黒
が△印へ跳ね
込めば絞つて

上の六子を擒にすると出来る。夫故に白は(三)に突込むこ
とは出来ない。因つて白(三)に粘ぐと假定すれば黒は(三)へ
引いて樂々と活きて仕舞ふ。然るに圖の如く黒(三)と(三)
の一子を預つて居ると白に於ては(三)の附越しと(三)の附越
し此の兩附けの凌ぎさへ附けば何時にても△印へ著けて殺さ
れて仕舞ふから油断の出来ない丈け損である。即ち白が(三)
と飛んだのは先づ(三)の附越しを凌ぐ意味をも含んで居るの
である。故に黒は(三)へ附越し次いで(三)と二目を擒にして
安心したと云ふもの、後手になつた丈け割合ひが悪いのであ
る。白(三)以下黒(三)までは普通の應手で、白(三)の掛りに
對し黒(三)の大ケイマ締りは考慮を要する處である。試に見
よ左邊より中原に脱出せる黒は眼形未だ完からずして浮いて
居る姿ではないか。然るに圖の如く(三)と低く締ると白に機を
見て彼れと此れとを翳み攻めにする工夫を連らすであらう。
紛れを生ずるの基ひであるから此の場合締るとすれば一間高
く締るに如かず否な一間高に締るよりも黒(三)著けの定跡に
出で、彼れ相應援する姿勢を備ふる方が釣合ひが宜いので
ある。白(三)の掛りに對し黒(四)の尖みも亦た緩い。勿論上
下の敵を兩断して打つと云ふ趣向であるから悪いと云ふ程で
もないが通常手を抜いて(三)に打ちたい處である。黒(四)も
亦た白(四)の掛りに對する普通の應手であるが本局の如き碁
勢に於ては面白くない。先づ(四)に尖んで自己の備を立てなが
ら白を攻むる趣向に出づべきである。次に黒(四)は此の場合
では寧ろ(四)に押へ、白(四)の時黒(五)に延びて打つ方が中
の黒との釣合が宜い。然るに圖の如く黒(五)と應手したる結
果、隅地は悉く白の占領する所となり外部即ち左邊より上の
方には白の勢力が蔓つて居るから黒は内外に敵を控へた姿で

ある。况や白より(五)に覗かれた時黒(五)に跳ねること能は
ず(五)に粘かねばならぬ結果を來たしたは黒の不利たるや
固より言ふまでもない。普通の場合ならば毎度説明せし通り
白(五)の時黒(五)にはね白(五)に切つた時黒は(り)の跳ね粘
ぎを利用して容易に活きることが出来るけれども此の場合左
邊に堅壘を構へたる強敵を控へて居るから常用の戰略を應
用することが出来ぬ。辛くも仕方がない黒(五)に粘いで敵の注
文に嵌まる外はない。尙ほ其の上に彼れ此れして居る中に上
下搦み攻めの難に遇ふ恐れなことは謂はれない。併しながら
コ、に申し添へて置きたいのは白(五)に覗いた時、よじや此
の局面にせよ常用の如く黒強硬に(五)へ跳ねて(五)に切らせ
るか切らせぬかは其人の技倆によるのである。假令切られ
ても上下共に巧に凌ぐ手段ありと認むれば如何に強敵が附近
に控へて居やうとも切らして一向差支ないけれども併し何分
にも四子も置いて居ては其の力量に非常の相違がある爲めに
不利の結果を來たす事が多い例であるから(五)に粘いで無事
を圖る外はあるまい。本局に於ける白(四)の一隊は結局危地
に陥るがそれを凌ぐ妙手あることは次圖に於て詳しく説明す
る。



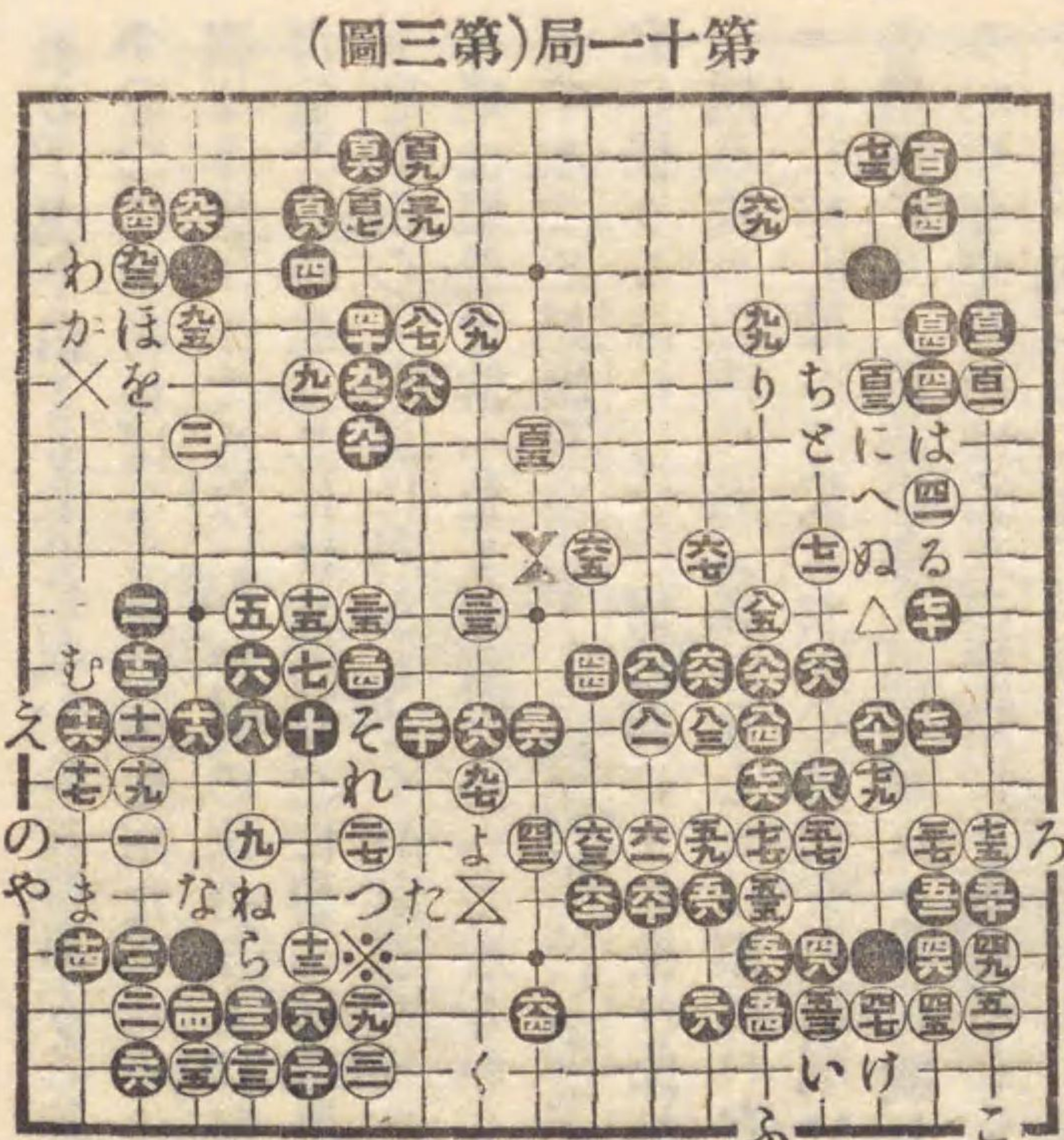
▲碁聖道策と一千四百目

本因坊道策身まかりて後は、井上因碩また一代の名人、碁
博士の上首たり。或人間ふ、たとへば故先生、世にぬまして
足下に競ひたまはば如何あらむといふ、因碩この事は予も年
來考ふる事にて候。予先を置なば、百戰百勝おそらくは相違
はあらじ。先生は此の道の聖にして、前に古人なく、後に來
者なく候へども予先だにせば、必ず負けじと存じ候なり。碁
の位はあらまし知れければ、さとりたまへといふに、其の人、
實に世人の評にもまた足下の申給ふやうに申候なりとほむれ
ば因碩これもまた年來思ひ考ふる事にて候。今先生と眞の勝
負を試み候はば、某三日弱かるべしと云ふ。其の人不審顔し
ければ、世の人いかでか予が碁の位を知り候はん、今の局は
十九道を縦横にして三百六十一目なり。此の局の上の手段は
予みな悟り居り候へば不覺は致すまじく、また此の局を四ツ
合せ候へば一千四百目となり候。もしこの局上にて戦はむと
き、某は望詳することも候はんすれども、先生は猶も廣かれ
とこそおぼすらめ、然れば三日にても覺つかなく候と答へし、
藝も智もかぎりなきものなり。

第十局 白窮寇を追はず

●實戦第十一局(第三圖)

▲第三圖 黑白小手しらべ 黒(五)までは前圖に於て詳解した。白(五)は先づ(五)と敵に一撃を加へ而して退いて自ら守つたので、黒は内外に敵を受けて殆ど裸體の姿であるから黒(五)以下(六)まで打つて置けば確かには違ひないが、その結果、黒(三六)の一子が、愚形に歸するのみならず、秣場とは云へ敵に堅固なる鐵壁を築かしたの黒の不利ではないが、かゝる處は寧ろ黒(五六)へ跳ねずして、單に(六四)に開き、(い)の跳粘ぎを含んで凌ぐ方が敵に鐵壁を築かせぬ丈け趣き



がある。コ、で白が中原に於ける追撃を暫く見合せ一轉して(六九)と掛つたのは戦略宜しきを得たものである。黒の身になつて見ると、(三)以下の一聯隊は殆ど眼なしで、中

原にブラついて居る姿だから誠に不安に堪へない。と云ふのを棄て置くのが、白の策略で、ドウセ取れもせぬ敵をドウセまでも追撃すると、あちら、こちらに障りを生ずるから、さほらぬ敵に祟りなしてソツと棄て置くに如かずである。然るに急に之を取らうとして活きられて仕舞つてから白(六九)と掛つた所が、眞ん中の黒はモウ安心、唯隅だけ守れば宜いと云ふことになる。碁が狭くなつて仕舞ふ。夫故に白は兵家の所謂窮寇は追はずと、コ、で一息ぬいて(六九)と掛り、アチラ、コチラと搦み掛けて黒を面喰はせ、ドウセを打つたら宜いかと途方に暮れる其の機に乗じて利を得よう云ふ策略である。黒も何だか薄氣味が悪から其の手は喰はぬと(七)と斜走し次いで(七三)と備へて眼形を作りイザと云へばドチラへか互らうと云ふ。是れなればまづ安心の形である。併し黒(七六)以下(六六)まで活くるに汲々として眼を持つたのは感心しない。矢張り手強(ろ)に跳ねて敵の聯絡を斷つが宜い。ナゼかと云ふに左岸より右岸に互る白ととも(三七)と(三三)の間に隙もあり且つ未だ確に收つて居る譯でないからソソナに恐れるに及ばない。故に自ら守らんよりは先づ敵を攻むれば則ち敵も何とかならねばならぬ。彼此れ攻合ふ機に自然と眼が出来るのである。然るに譜の如く退嬰主義を取つた爲めに白に(六七)と打越されたのは遺憾である。次に黒(六七)の掛粘ぎは悪い處ではないが、夫れよりは先づ(六九)に斜走して白の模様を消す手段に出づるが宜い。黒(六九)は少し手ぬるい。つら／＼全局の形勢を察するに、此の場合(五五)の處が最急の要處で、ココに打てば自ら白模様を消すのみか、△印の切目を狙ふ筋もあるから白も黙つては居られぬ。然るに此要處を閑却して黒(五)を押へた爲めに(五二)につけられ、黒(五三)、白(五三)の黒

(四)も亦何ぞ其れ緩なるや。此手で(は)に突當れ。左すれば白は(に)に押へる外はない。ソコで黒、手を抜いて(五五)の要處を占領すべきである。然るに事茲に出でずして反對に(五五)と圍はるゝに至つては十分白に打廻はされた姿である。

▲白印、駄目詰めの妙手

次に黒の打場如何といふに此の場合、黒は(五)に打つのが一番大きい。白(五)、黒(五八)、白(五九)に押へるのが普通である。ソコで黒(は)に(五三)の一子を切取るか(に)にはね出すかの二ヶ處あるが、先づ黒(に)にはね出したと假定せよ。デ白(へ)に押へなば黒(と)に出づべく、又白(と)に跳ねなば黒(ち)を切り、白(り)に押へた時黒(へ)に出切つて(四)の一子を擒にする。と云ふ譯であるから此の場合、白は(る)に突當るであらう。之を棄て置く△印に孕れて眼を潰ぶされるから黒△印に引いて無事を圖れば白も亦(ち)に引き、黒は(に)粘ぎ白(と)の押へとなる。ソコで黒左上隅に轉じて(は)に切り、白(を)、黒(わ)に一子を

取り白(か)のアテとなるも此の場合黒(五)に粘ぐを要せず、又△印を切つて劫争をするにも及ばず、其の儘棄て置いて黒△印に覗かば如何、白は果して活きあるや否や。兎に角白は(よ)に受ける外なかるべく黒(た)に伸び、白(れ)、黒(と)白(つ)、黒(ね)の尖みつけとならば如何。コ、ぞ生死の危機一髪、熱慮を要する處である。白先づ(な)にアテよ、黒(ら)に粘ぐ外なかるべく、ソコで白△印に粘ぐの妙手である、外の手では活きること出来ぬ。ソコで黒右側に轉じ(ろ)に互りを止めんか、白(む)に切り、黒(う)に押へ、白(え)に一子を取らば則ち(の)か(く)何れかに更に一眼を作り得るに非ずや。初心者の注意までに、白(え)に(十六)の一子を取つた時、黒若し(の)に眼を缺きに來たらば白(や)に附越す手ある

ことを忘れてはならぬ。ソコで黒(ま)に打たりとせば白は其の儘棄て(く)に飛び眼を作る準備をするが宜い。斯の如く到底白を擒にするのが出来ぬとすれば寧ろ黒(く)に尖み白をして(の)に眼を持たす方が利益である。次いで黒(い)に跳ね、白(け)、黒(ふ)、白(こ)の活きとなつて「ヨセ」も略々済んだ。

▲黑白兩軍の大勢如何

と云ふに黒の左下隅(約十三目)と右側中間(約十三目)と眞中の黒地とを合せて約三十目餘ある。夫れから左右上隅に於ける黒(五)の粘ぎと白(五)の一目は見合ひとして兩隅合して約二十五目、合計五十五目餘ある。然るに白の上邊は約三十七八目で其他は約十目、都合四十七八目であるから今の處では黒の方が少し地が多い。併し左上隅に切の關係が残つて居るが、白(三)と(五)の聯絡が完全でないから迂ッカリ劫に行く譯にもいかぬ。要するに黒の方が稍優勢であるけれども是れから先「ヨセ」の工合によつてはドウ變化するかも知れない。詰り左上隅の劫と白(三)と(五)の聯絡の關係によつて勝敗が定まるものを見るべきである。斯くの如き不利の結果を來したの黒の方に大分悪手もあり、緩手もあつた爲めであるが、最初(五)と「ボウシ」に懸けられて紛れを生じたのが大原因であるから前にも注意した通り黒(四)の手で(五)が飛ぶことを忘れてはならぬ。

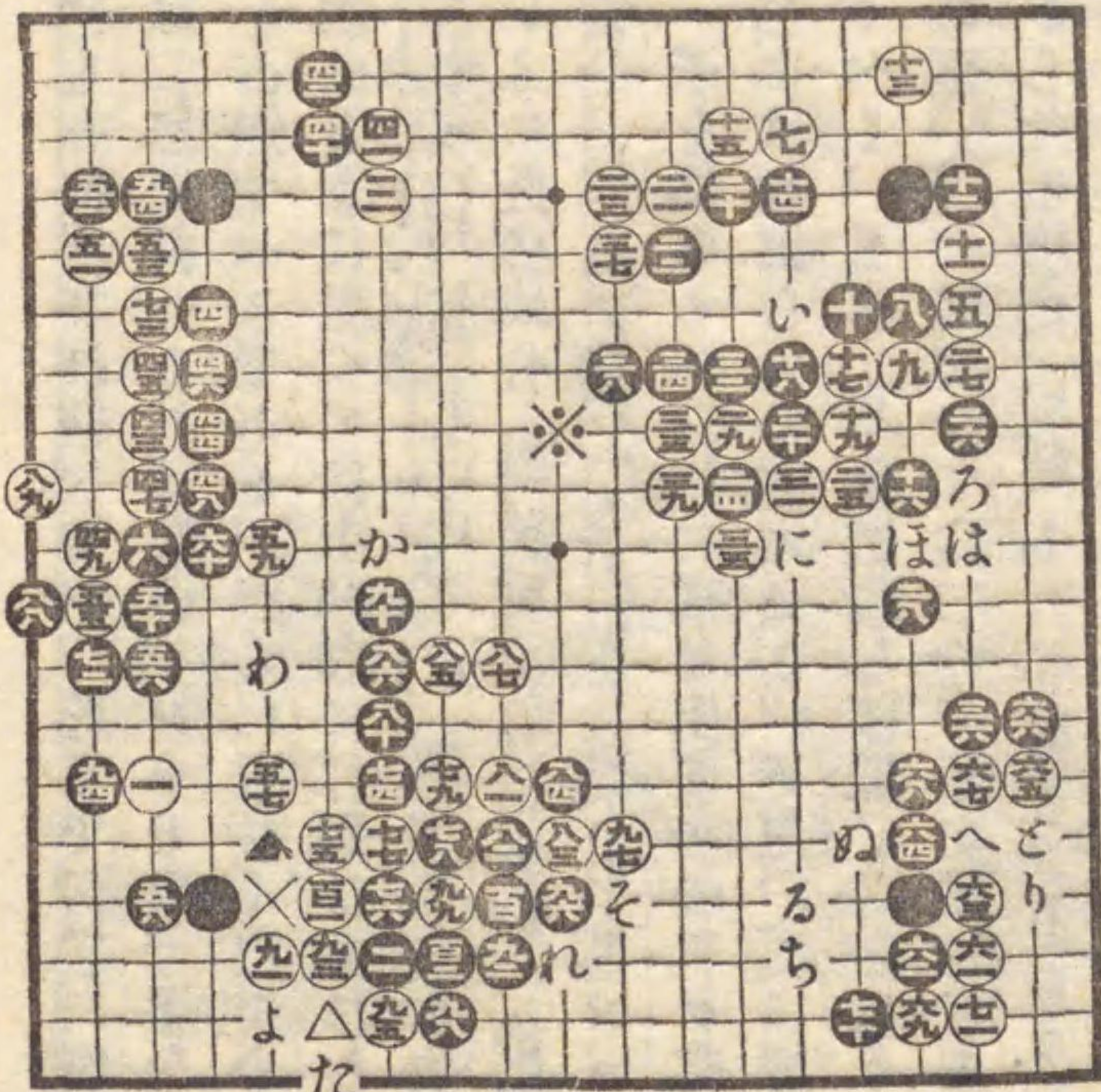
▲編者曰く 第一局より本局までは雁金先生が實戦に擬して一著子毎に詳解を加へたるものなれども第十二局よりは先生が實際四十の置碁を相手に對局したる實戦圖を掲げて詳評を試むることをせり閑餘靜に反覆玩味せば讀者諸君の力量増進益し喜に倍獲するものあらん。

●第十二局

▲第一 黒白小手しらす

黒△の處は攻守共に大場とする所であるが、併し白が右上隅に向つて(五)と機關砲を据ゑたのに、之れに對する戰闘準備を怠つて單に(六)と要處を占領したのには戰略宜しきを得たるものでない。矢張り(十五)の處に締つて置くのが普通である。然るに譜の如く白に(七)と兩掛りに掛られると(三)と(七)との間が廣い丈けに種々の趣向をされる手段を生ずる。黒(十二)以下は先づ敵を攻めて而して自らを治むる計であつて誠に適當の手である。コ、で白(十九)と三角に曲るのは随分辛いけれども、此の場合止むを得ぬ。若し此の手で白(三十)の處へ跳ねば黒(十九)に切れ、白(三三)に粘れば黒も亦(二)に粘ぐべきである。ソコで白が(九)に著ければ黒(三)に跳ね、白(元)に伸びた時黒(は)に跳ねて戰ふ手段もあるが、

(圖一第)局二十第



左すれば競合になつて紛れを生ずるか、好んで戦ひを求めるよりは黒(三九)に跳ね、白(三一)、黒(三四)、白(三)に切つた時黒(三六)へ跳ね返し(三七)の二子を棄てよ

打つ方が無事である。白がLの手に土手を築いて僅に二目を抱へ込んだ姿は如何にも不器用で少しも生動して居らぬでないか、だから辛いけれども是非がない、譜の如く(十九)と三角に曲る外はないのである。黒(三)の押しは如何にも重い手で宜しくない。同じ打つならば軽く(三三)に斜走するが宜い。黒(三)は時機尙早し、此の場合(三六)に備へて上下の聯絡を保つべきである。黒(三六)の覗きも亦早し、單に(三八)に飛んで居る方が軽くて宜い。黒(三三)は餘り凹み過ぎた手である。位高く(六)へ一間飛んで居る方が宜い。黒(四)は方向を誤つた手である。右上隅より中原に亘る(八)以下の黒は未だ十分に眼形を備へて居らぬではないか、何は兎もあれ(六)に尖んで落付いて居らねばならぬ處である。然るに黒(四)と邊境の小利を貪るのは(八)以下の大軍の利害を忘れた仕打である。然るに白(四)と打込んだのは失策であつた。實は譜の如く(四三)へ打込み、此處で押着を起して(八)以下の黒に搦みつける趣向であつたが、事志と違ひ、黒に(四)と著けられて其の趣向がマンマと外れて仕舞つた。寧ろ(四)へ著けて搦む方が面白かつた。黒(四)以下(四)まで押し著けて鐵壁を築いたのは上出来で、遙に(八)以下の黒を援護して居る姿勢である。然るに惜いかな黒(五)と引いたのは緩手と云はざるを得ない。何故に手強く(五)に二段跳ねせなんだであらうか。其の結果白(三)と(六)となつた時、黒が(三)に突んで居るのが本筋である。白も亦(五)に覗く手で實は(三)に亘つて置くのが本手であつた。譜の如く黒から(七)と先手に斷ち切られることになつては(二)の二子が浮いて仕舞つて後の運びが甚だ悪くなる。黒(六)は此場合甚だヌルイ、嚴しく(八)に跳ねるが宜い。白(七)、黒(六)、白(六)、黒(六七)、白(六九)、黒(七)、白(七)、黒(七)、白(七)を棄てよ

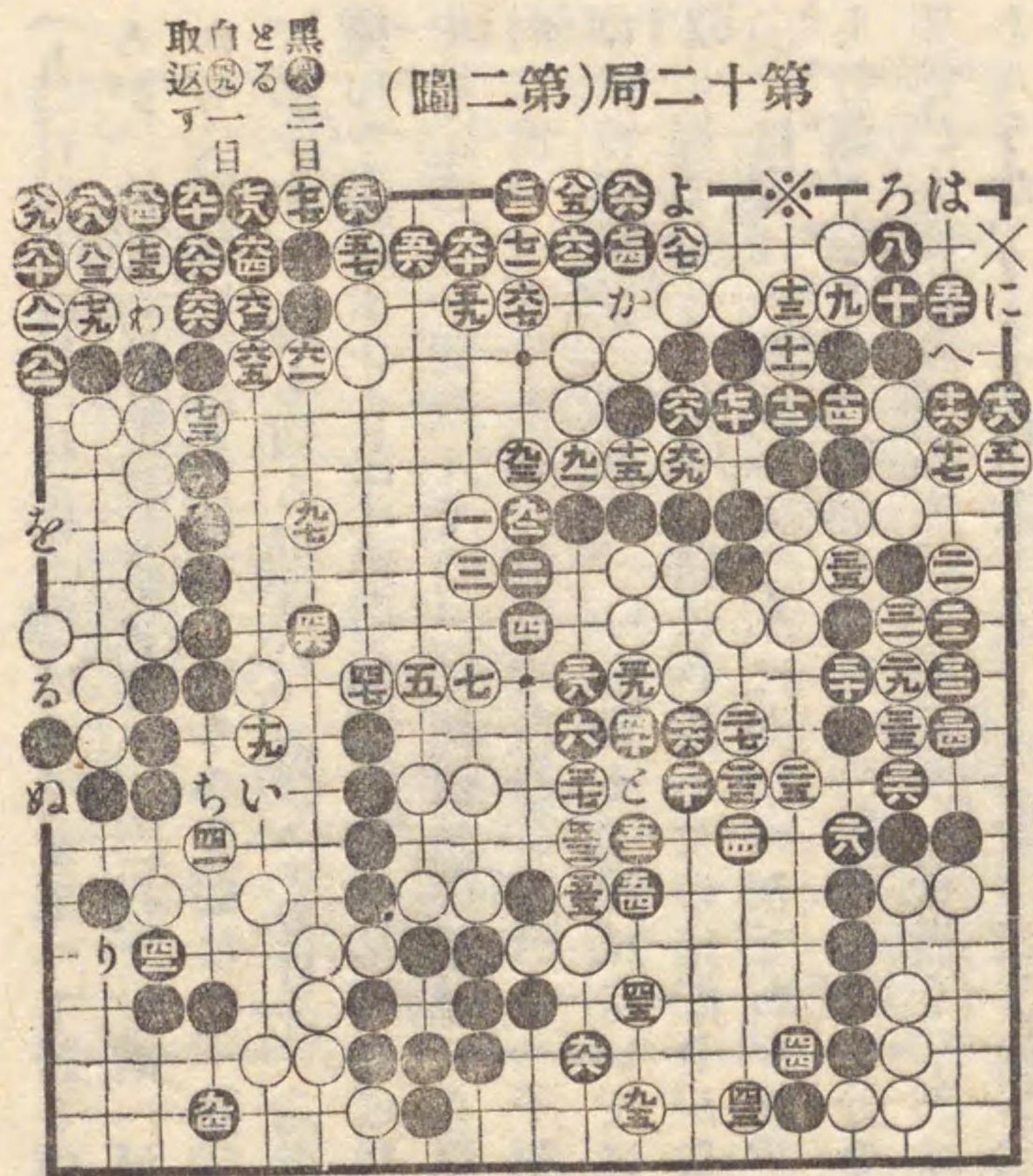
(り)に活た時黒(ぬ)に(六)の一子を抱へて居るのが普通であるが、此場合は右邊に於ける黒(十六)以下の備へが丈夫であるから(ぬ)杯に一子を抱へて居る必要はない。蓋然左邊に轉じて黒(三)に斷ち切るが宜い。棄てよ置けば(四)以下の白が死んで仕舞ふから白は譜の如く(七)に粘がねばならぬ。ソコで黒(七)へ一間飛んで自己の繩張を擴げながら白を攻める趣向に出づべきである。其の時白若し(六)の一子を(ぬ)に伸びなば黒は(る)に並ぶ、一向恐るゝ處はないではないか、然るに圖の如く普通の定跡に拘泥したのは働きがない。併し白(六)は實は一路控へて(七)に尖むべきであつた。黒(七)は即ち打過ぎである。穩かに(七)へ一間飛んで十分ではないか。黒(七)も亦緩みである、ナゼもう一層強く(七)に押へのぬであらうか、ソコで白(三)に著くれば黒(六)に粘ぎ、白又(三)に粘いだ時、黒(五)に下る方が面白くないか。然るに譜の如く白より(七)に突出されて(七)に切らるゝに至つては上下に種々の味を生ずるのみか、(八)以下の大軍が浮いて居るから搦み攻めの難に遇ふ恐れがある。黒(卒)の伸びは危険である。ナゼかと云ふに左下隅の戦ひの様様に依つては白は轉じて(六)に掛つて(八)以下の黒を宥めると云ふ敵本戦略を含んで居るのである。故に黒は(二)以下の白を擒にしよう杯い謀叛氣を棄てよ(六)に尖んで居なければならぬのである。(七)以下の三子は此の儘棄てよ置いたからとて容易に取られる氣遣ひはない。假に白が(わ)に飛ぶとせんか、黒も亦(か)に飛んで逃げ道があるではないか。黒(三)は本手であるが、併し劇しく(六)に遮斷して戰ふ手段もある。若し然らば白(三)と黒(三)の切となるべく、ソコで白(九)と黒(三)に出た時黒(九)に跳ねることを忘れてはならぬ。左すれば(九)の一子が右邊の三子か

ドチラかを換にすることが出来る。然るに黒(九)に跳ねる手段を知らずして若しも(よ)杯に(九)の一子を抱へると夫れこそ大變だ、白△印を切り黒(九)に下り白(九)に押し黒(九)に取つて筒抜けになつて仕舞ふ。だから黒(九)の跳ねを忽せにしてはならぬのである。尙ほ初心者の注意までに黒(九)に跳ね、白(九)と、黒(九)と、白(九)に押し黒(九)に伸びた時白轉じて(よ)に下らば黒は必ずキツチリ(五)に粘ぐことを忘れてはならぬ。左すれば左右何れかを擒にすることが出来る。併しながら黒が強硬に(六)に遮斷して(九)の一子を取掛ける來れば白にも亦手段なきに非ず。即ち白(六)の突出しを見合せて先づ(六)に掛つて(八)以下の黒を攻めて劫になるか其の結果を見たと云ふ魂膽もある。黒(九)の亘りはヌルイ、此手で(五)に下る方が面白い。一寸考へると圍中の二子が危いやうに見えるが白若し(九)に亘りを止めれば黒は△印へ尖みつけて切る手段もあり其他種々の味があるから決して取られる氣遣ひはない。黒(九)に跳ね、次いで黒(九)に押へたのは何たる拙手ぞ、ドウセ白から(三)のアテを利かされる處であるから黒(九)、白(九)と不利の交換をせずに單に(九)に押へる方がドノ位宜いか知れない。然るに圖の如く樹形に七目を費やしてヤット一目を取つたのは止むを得ずとするも尙ほ其上に寧にも(六)の駄目を曲り尙且つ(六)と押へて茲に一圍の「コ」を作つたのは何の状ぞ。更に圖を變へて説明する。

▲第二 黒、幾度か勝利の機會を逸す 扱て黒(十六)に跳ね(十六)に下るまでの趣向は宜いが、何故に黒は(三)の手で(い)に著けて中の四子を逃げなかつたであらうか、右上隅第一圖の(八)以下の黒は未だ完全に活きて居らぬと思ふて

か、併しながら白強ひて(ろ)に跳ね、黒は(に)押へた時白×印に置き、黒(に)に著け白(辛)に跳込み、黒(へ)となつて劫にはなるが併し白にも亦怖い處がある。と云ふのは白が劫を取つた時、黒は(へ)の粘りが出来たから先づ(三)の下りを利かせて白の眼を奪はん、白は是非とも其の巨りを止めずばなるまい。ソコで黒(と)に尖まば如何、黒を擒にする所ではない、却て自分の方が危くなるではないか、サウ云ふ危機が伏在して居るから白の方でも浮つかり取掛けに行くとは出来ないのである。故に(三)の手で(い)に著けるが宜いと云ふのである、或は白に(四)に尖まれると中か隅か、ドチラかを取られるではないかと謂はんか、否なコ、にも亦手がある。黒(い)の時假に白(四)に尖みたりとせよ、黒は宜しく(ち)に粘ぐべし、白(り)に跳ね出さんか、黒(ぬ)に粘ぐ手段があるではないか、棄て置けば(る)に差込まれて上の白が死で仕舞ふから白は(を)に活

第二十局(第二圖)



きて居なければならぬ、其時黒(四)に断ち切れば(り)に跳ね出した白一子を擒にすることが出来る又白が(を)に活

きずして(四)に粘れば隅と上と交換する迄の事である。然るに黒が(ぬ)の粘ぎを知らずしてムザ／＼中の四子を棄てたのは惜むべきであつた。扱て黒(い)につけて聯絡するとすれば白は第一圖(二)以下の一隊を活かすべからぬ。ソコで黒が先手を取つて(五)に尖み置かば黒の勝ちたることは明白である。サウでなくとも白(三)に跳ねた時、黒(三)にお接伴をせず(五)に尖んで二目を擒にすれば矢張勝ちに黒にあつた。次に黒(三)は何故に單に(四)に粘がぬのであらうか、左すれば白は眼を持つて居なければならぬ。此處の先手後手は勝敗に關する所である。然るに黒無意味に(三)と聯絡して後手を取つたのは重々の不覺である。又黒(四)の突當りは無駄である。(ぬ)に粘ぐが宜いではないか、前に言ふ通り白(を)に活きる外あるまい、ソコで手を抜いて(五)に尖んで居ればマダ勝ちに黒にあつたのである。然るに反對に、白に(四)に尖まるに至りては四子の置基としては殆ど勝敗が分らぬやうになつた。黒(三)の飛びは矢張り(五)に突當つて居る方が無事で又損でもない。黒(六)の粘ぎは悪手である、(七)に粘いで居なければならぬ處である。然るに白から(七)に突出された爲めに折角(六)へ飛んで地荒らしに來たのが無駄になつて粘ぎ落して取られるやうな結果になつた。黒(八)の手順頗る好し。白(八)の手で(八)に押へれば黒(わ)にあてる外なく、ソコで劫にはなるが、併し寄せ劫であるから白は見合せた。初心者の注意までに黒(八)の手で(か)に切れば白は單に(八)に押へても宜し或は又一旦(八)に打缺き黒(八)に取りし時(八)に押へても宜い。ソコで黒が(よ)に曲つて來たらば白には唯×印に尖むと云ふ手あることを知らねば黒を粘ぎ落して取ることが出来ぬ來ない。斯う云ふ手があるから黒は(か)に切ることが出来ぬ

のである。斯くて遂に白に(七)と打たるに至つては最早や黒の中押負けである。

▲總評 扱て、第一圖黒(六)までの運びは無難であつたが黒(三)に次いで(四)以下の失著があつた爲めに(八)以下の黒が浮いて仕舞つた。然るに白も亦(四)に打込で塗り着けられた爲めに敵の弱點に乗する手段を少くしたのは不覺であつた。所が黒も亦第一圖×印の尖みを忘つたのが此の基に於ける一大缺點である。夫れから黒(七)と打過ぎ、茲に戰鬥を起して遂に(七)以下の四子を失ふに至つたのは全く×印の尖みを缺如したる結果である。斯くて大分黒の形勢は悪くなつて來たが、併し第二圖黒(三)の手で(い)につけて中の四子を逃げるか或は(五)に尖んで白二子を取込めば黒の勝利は疑ひなかつたのであるが、之れをも逸し次に肝腎の處で(四)と遊び爲めに(四)と尖まれて(八)の二子を逸し最後に(六)の失著あり爲めに岸邊の黒を粘ぎ落して取らるゝに至りいよ／＼敗軍と確定したのであつた。

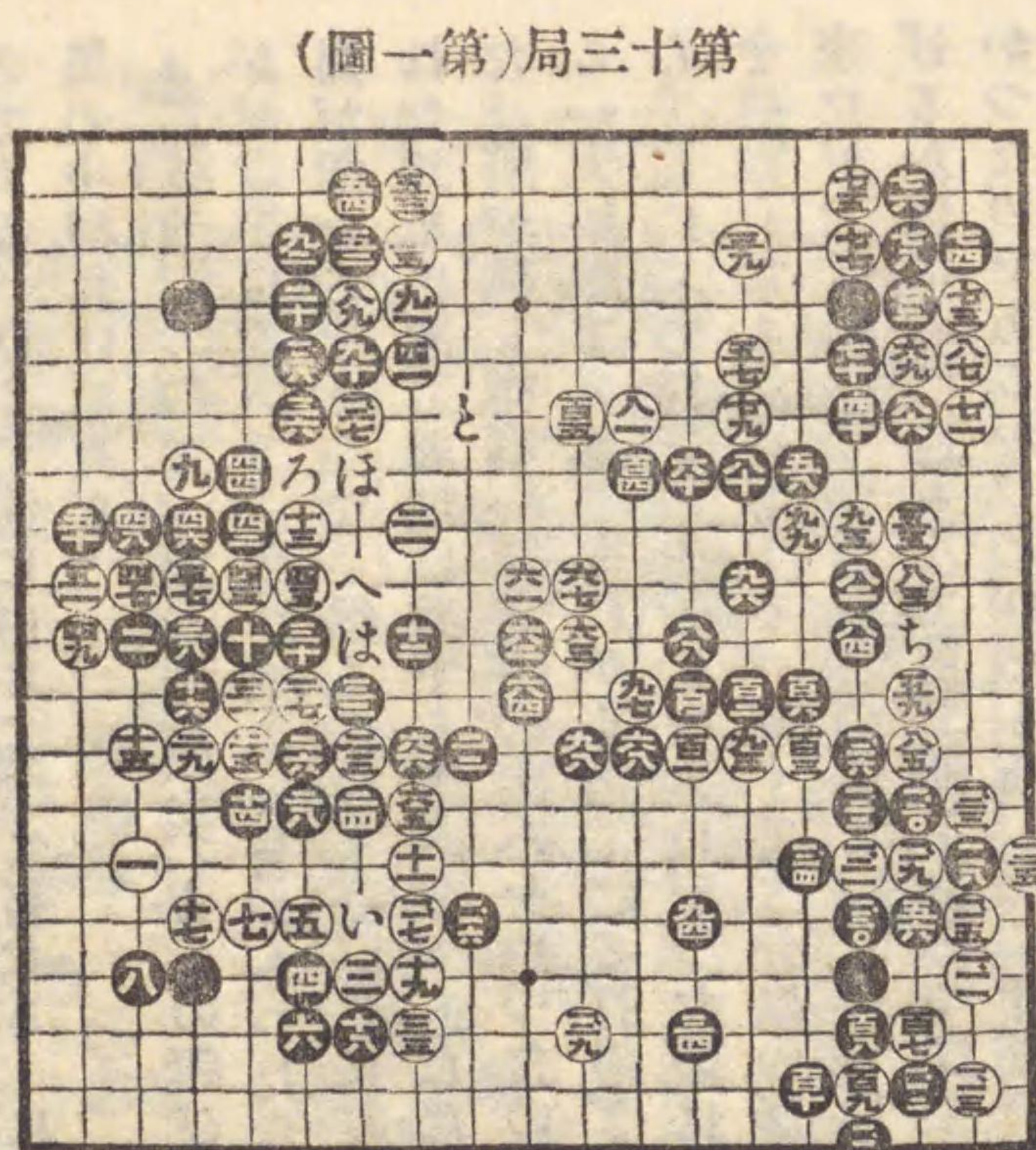


第十局 黒×印の及

第十三局

▲白の一大失策 ▲黒の自殺的悪手
▲砲彈距離外の砲臺 ▲黒三たび打込む機會を失す

▲黒白の小手しらべ 本圖も亦自分が或人と打つた實戰圖である。白(一)、(三)の兩掛りに對しては譜の如く黒(二)と著けるのが通形である。然るに白(四)以下(七)と封鎖したのは詰り(八)の一子に對し圖の如く(九)と打つて攻めようと云ふ戰略であつたが併し其の結果は餘り面白くなかつた。白(十)は若し之を棄て置いて(一)印を切られては堪らない。止むを得ず圖の如く粘ぐの一番働きの合外の粘ぎ方は總て宜しくないと了解するが宜い。黒(二)は何の意ぞ、白(九)の一着に對し前後三着を以て夾撃し居る場合にドチラの敵

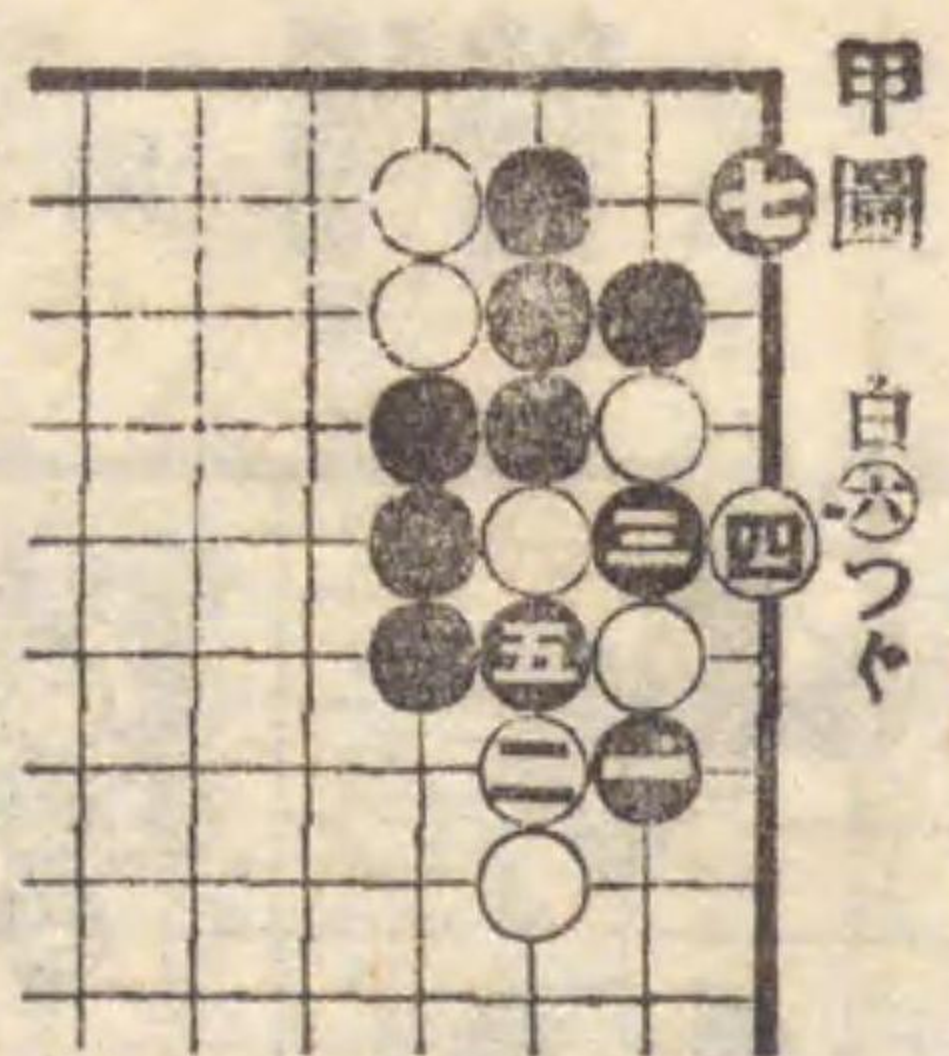


(圖一第)局三十第

にも餘り障らぬ處に逃げ越したの蓋し水禽の羽音に驚く風情に似ずや。此場合(九)に締るのが本手である。斯くて白が一間に飛ぶか二間に飛ぶか、動靜を窺ふが宜い。白若し(ろ)に一間飛ばんには黒も亦(は)に一間飛ばべく、又白(は)に二間飛ばば黒は(へ)に斜走すべきである。黒(は)は少しヌルイ、劇しく(ろ)につけるが宜い、左すればすぐに眼形が整ふではないか。黒(は)は調子外づれの手である。(九)に打つて確かにして置くが宜い。

▲白の一大失策

黒(九)の附越しは手筋である。白(九)の粘ぎは(九)に押し黒(十)の時白(十)に断ち切つて黒の紛れを待つ方が面白かつた。然に譜の如く(九)に(九)の一子を取込まれて固められたのは白の一大失策であつた。黒(九)は(九)の覗きの利いて繋がつて居る處だから宜しくない。單に(九)に尖んで居るが宜い。黒(九)の受けはヌルイ。(と)に上下の白を遮断して厳しく攻立つるが宜い。然るに策茲に出でずして白(十)と止められたのは惜むべきである。黒(九)以下(十)までの交換は暫く見合せて右邊に轉じ(ち)の大場を占領すべきである。黒(九)に著けて(九)に引いた形は餘り凝るではないか。單に(九)へ一間飛ぶの輕きに若くはない。黒(九)の押へは一向詰らない、左の据明の處を押へたからとて地にも何にもなるものでない。夫れよりは(九)に尖んで白模様を消すが宜い。(九)に押へる位ならば寧ろ(九)に飛ぶ方が利益である。黒(九)も亦た何ぞ其れ緩なるや、ドッセ地にならぬ處、隅は棄て置いて矢張(九)に尖むべきである。然るに片隅に僅か一眼を作る爲めに後手を取つたのは非常の損失である。黒(九)の掛けは單に(九)に聯絡するが宜い。と云ふのは右邊の白に對しては(九)へつける手やら其他種々の味のある處であるから譜の如く敵の備へを固めて了はぬ方が得



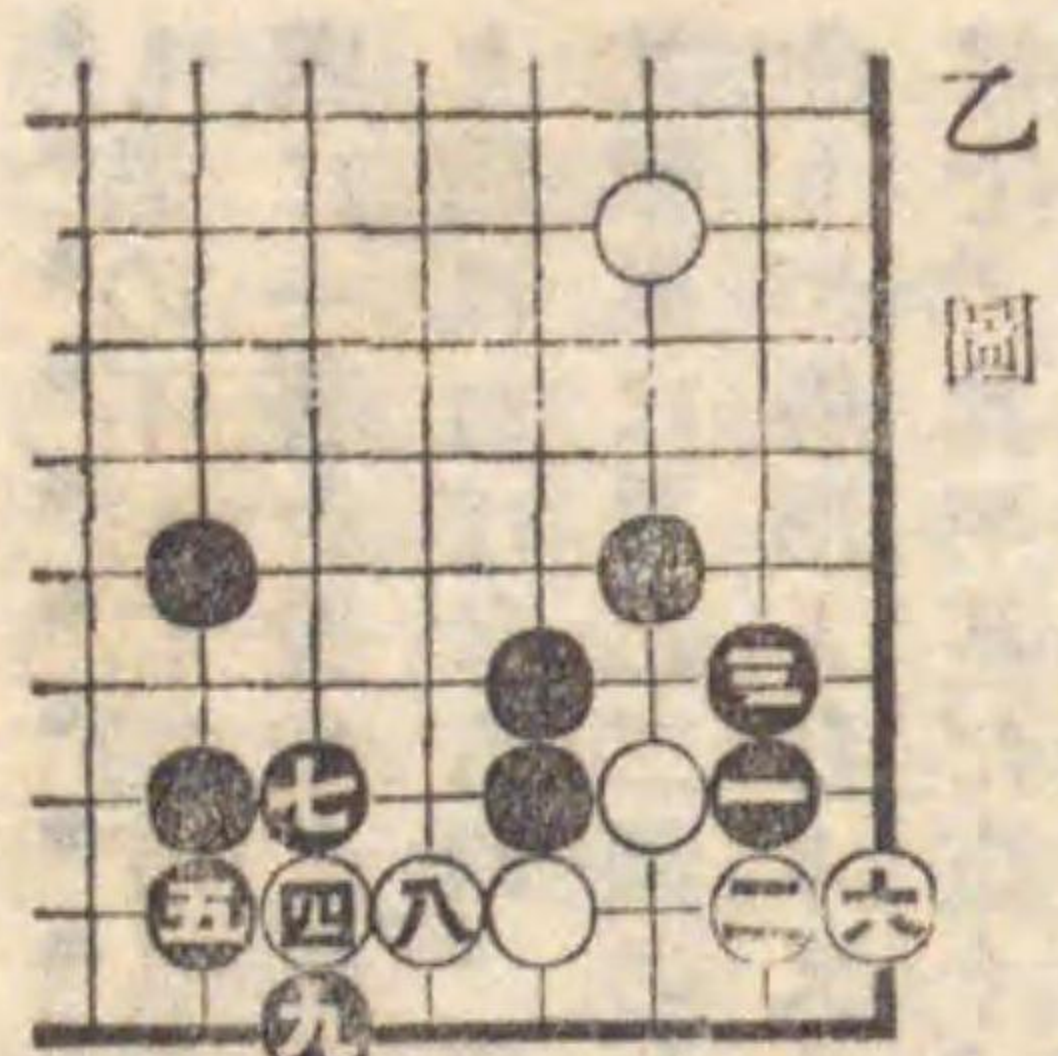
甲圖 白(一)つ

策である。▲黒の自殺的悪手 黒(九)も亦然り、右上隅の黒の外部の成行に由つては甲圖の如く打つて劫にするか活きるかと云ふ肝要の手筋の伏在して居る處だから、アテれば粘ぐと極まつた處へアテて求めて手をなくして了ふのは場合によると自殺に均しき悪手となる事がある。黒(九)は手筋である。此手で(九)杯に押へると白に(九)に置かれる筋があるから圖の如く打つが宜いのである。黒(九)は緩も亦甚だしい、何故に乙圖の如く取つて了はぬのであるか。圖の如く(九)とつけられては白は何として

も活きはないのである。此の場合中原の黒と彼此弱み攻めにされる氣遣ひはないから飽くまで強硬に打つて捕獲すれば白は投げざるを得ぬのである。黒(九)は悪い、先づ(九)に覗くが手順である。

▲總評

白(九)より(九)までの趣向は漠然として餘り實益がなかつた。黒の第一の失策は(九)の手である。然るに白(九)に飛込み黒より(九)と附越され、其結果黒の形が収まつて白として一向妙味のない碁になつたのは不覺であつた。黒(九)の手で(と)に兩断して攻立てたならば白は今一層急になつて苦んだであらう。然るに黒(一)一度茲に手を緩め(二)以下(三)と押へて左邊の大場占領の機會を逸し、尙ほ(四)の失著ありドウやら作り碁の形勢を現はしたが(五)の手で乙圖の如く取切られれば白は中押取に終るべきであつた。然るに之れをも活かし尙ほ(六)の押へに於て損をしたけ



乙圖

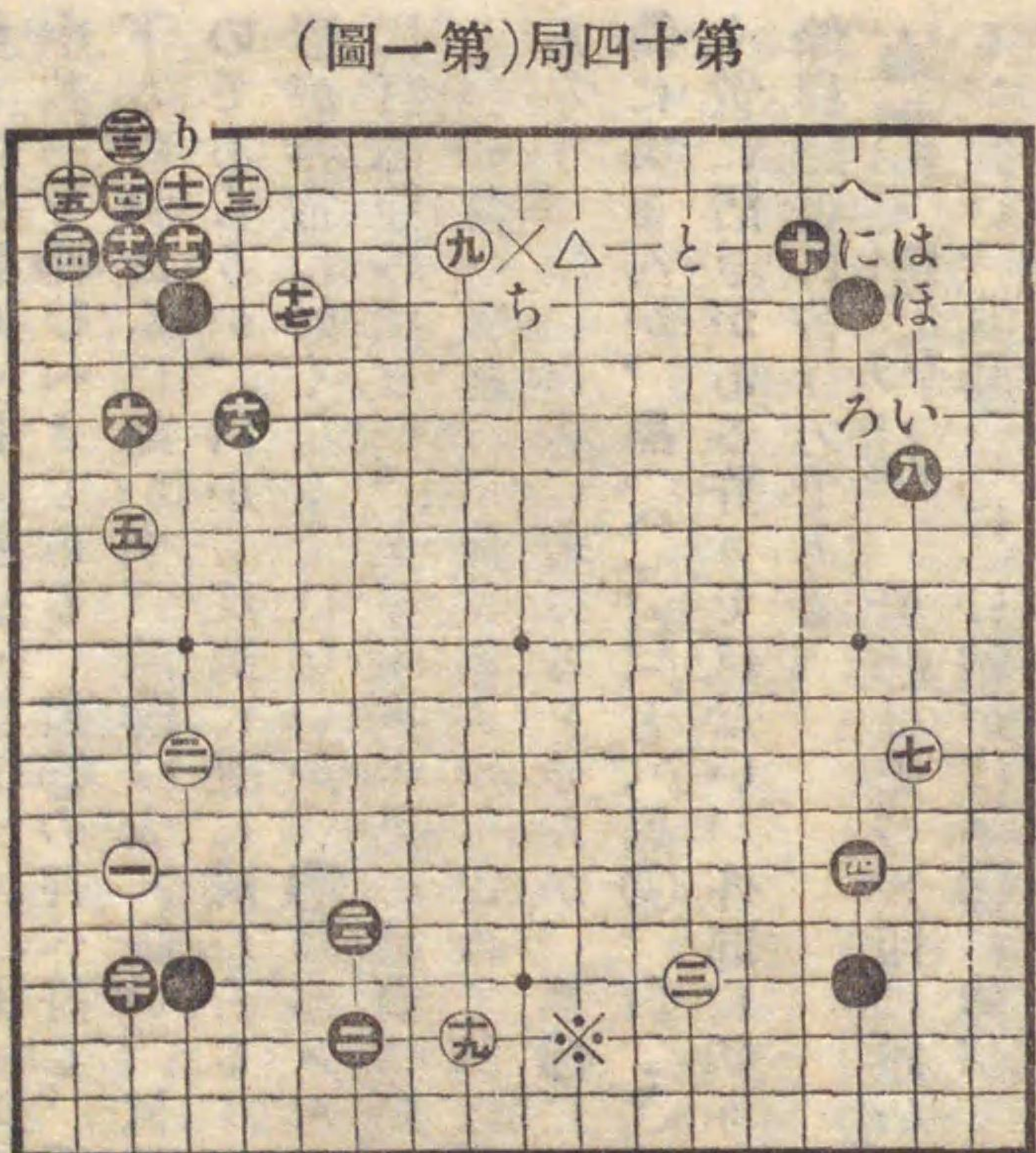
活かし尙ほ(六)の押へに於て損をしたけ

第十四局

▲黒白の小手しらべ

れども何分にも最初白(一)の大失著ありて黒の方が紛れのない形となつた爲めに遂に之を挽回する能はず白九目の敗となつたのは避け難い運命であつた。

黒(八)は通常の手であるが此場合×印の大場を占むるも亦一策である。其時白若し(一)に掛つて來たらば



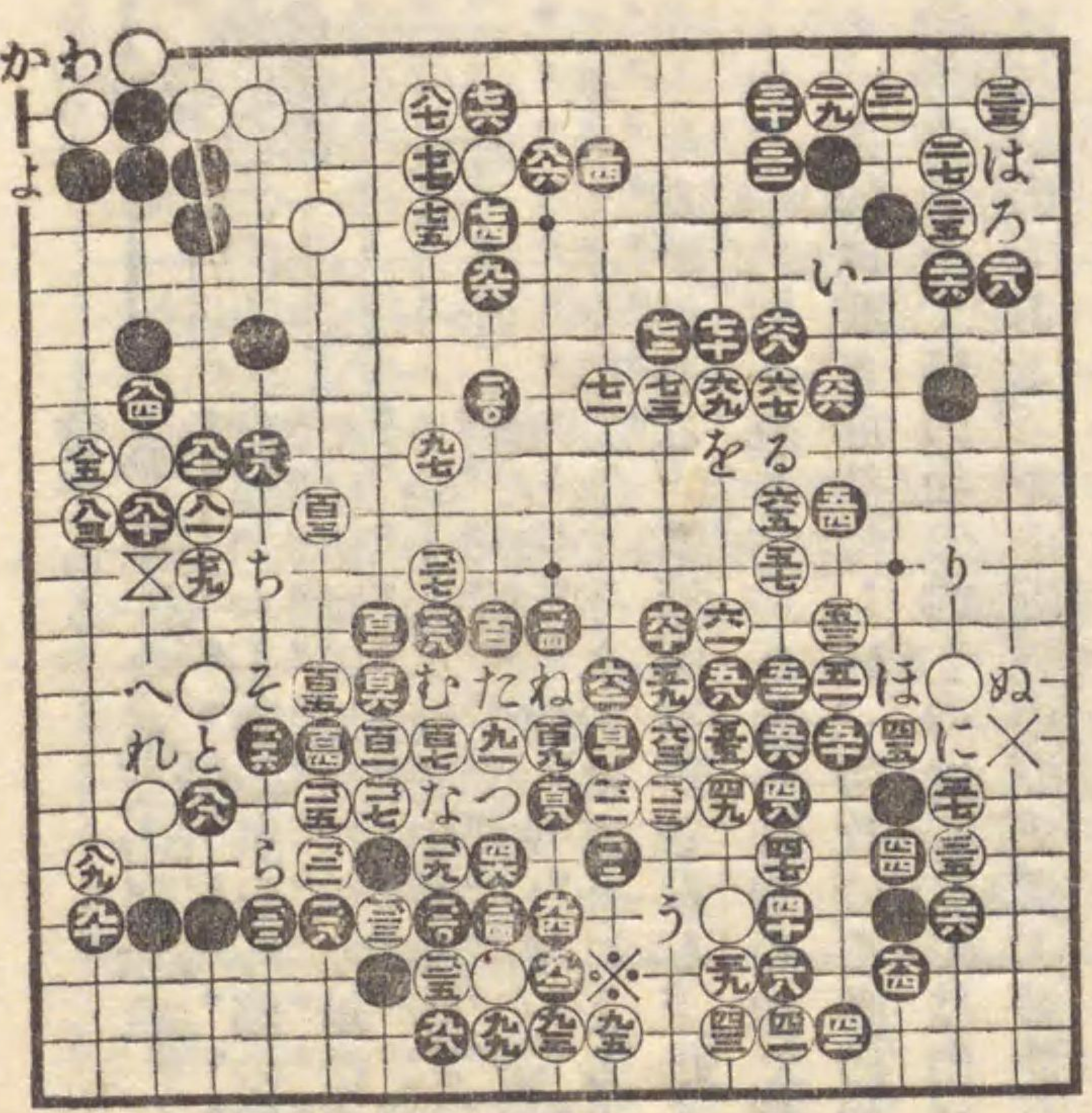
黒(ろ)「つけのび」の定跡に出で×印の一子を活動させる趣向に打つべきである。黒(七)は少しくヌルイ。手強く△印に迫るが宜い。ソコで白若し(は)に打込み

來らば黒(に)に押へ、白(は)に沿ふた時黒(へ)に下るとを忘れてはならぬ。又白(は)に打込まずして(と)に夾んで來たらば黒(ち)に突んで戦ふべきである。白(土)の迂り込みに對しては譜の如く(九)に突當るのが本筋である。黒(は)は(り)に跳ねて置く方がアトに得の残るだけ宜い。黒(九)は如何にもヌルイ、何故に×印に打込んで戦はぬのであらうか。衆を以て寡と戦ふ況や敵を左右に孤立せしめて攻合ふ場合、如何に變化すると

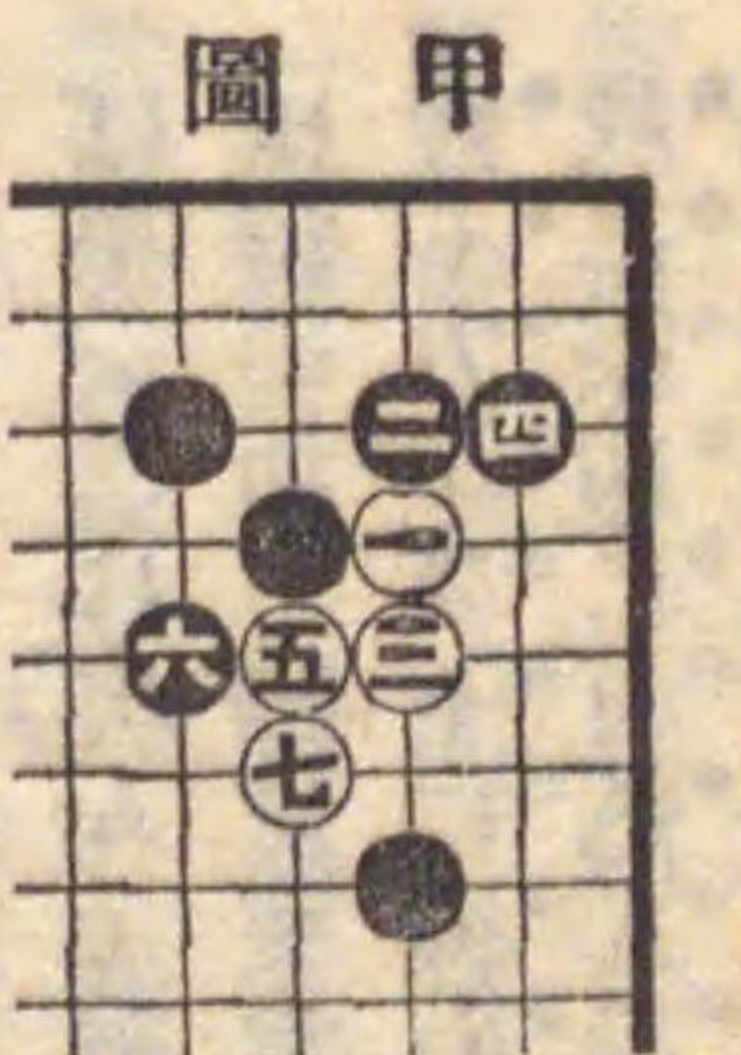
も黒の不利に歸する道理はない。然るに(三)と事極めて小なる處に一著を費やし爲めに(四)に先鞭を著けられたのは迂濶千萬と謂はねばならぬ。黒(五)は何故に(六)に押へぬのであらうか、其結果は甲乙二圖の如くなる外はない。甲圖に於ては白(七)の曲りが愚形となり又乙圖に於ては僅に黒地を掠めた云ふ丈けで、其形甚だ重く、裸體で秣場を逃げねばならぬ其の一方に白(一)子は愈々深間に孤立する結果を生ずるではないか。

▲砲彈距離外の砲臺 然に本圖に戻り(八)と上から押へた爲に(九)と優に隅地を占領せられ、而て黒は只上を塗り著けたと云ふ丈けで、第一圖の白(七)乃至(九)の所在甚だ遠く、恰も砲彈の届かぬ處に砲臺を築いた様な姿で之を利用する途は甚だ少ない。蓋し二つに分れるのを恐れたのであらうけれども敵兵必ずしも虎狼に非ず群羊の如く恐るゝに及ばぬのである。黒(一)も面白くない。(一)にかけつゝ方が働きがある。

(圖二第)局四十第

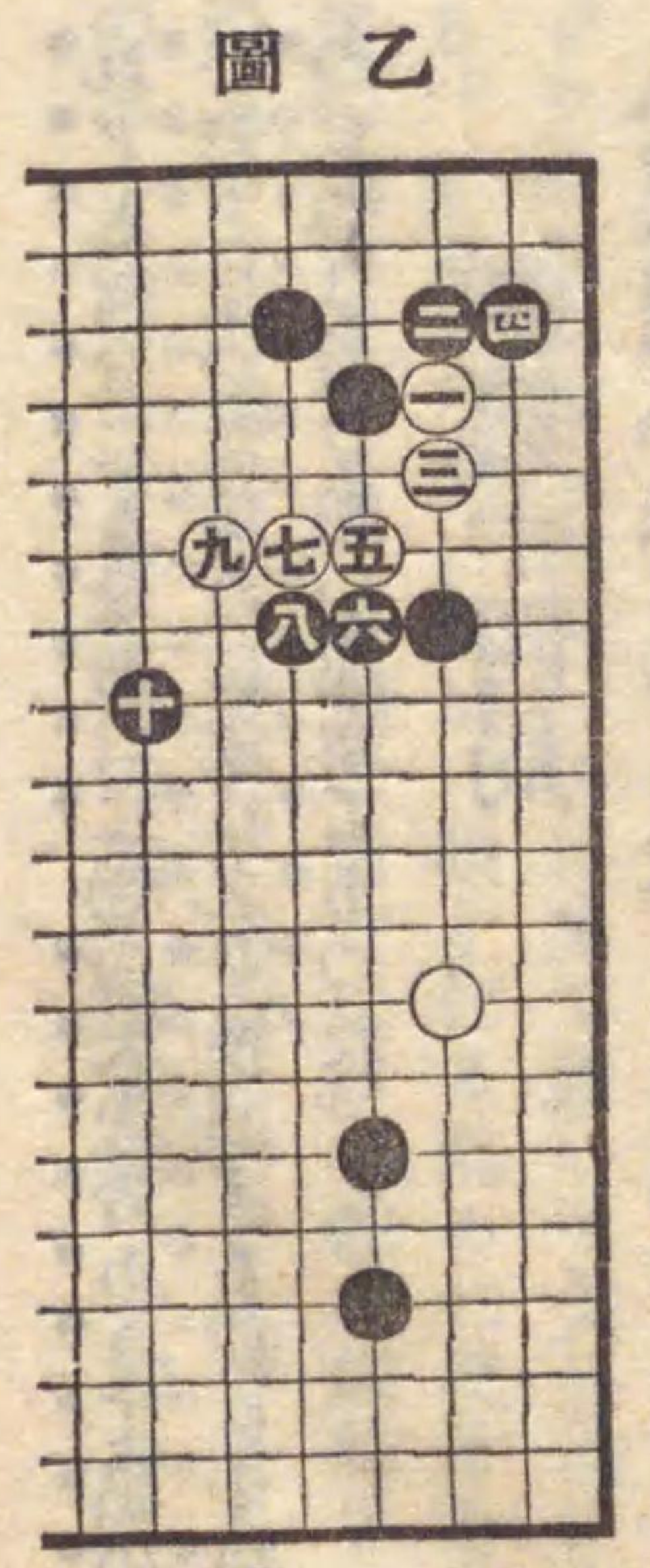


左すれば白は(一)に尖む外ない、黒(二)に押へ、白(三)に尖み、黒(四)に跳ね、白(五)に押へる外なく、ソコで黒手を抜いて



他に轉するが宜い。黒(一)は狭い。看よ黒の備へは鐵壁に非ずや。白から容易に攻めて來られる患のない處ではないか。然るに黒(二)と詰めた處で敵にも格別コタへないのである。此手で(三)印に

打込むか左なくば(四)に尖みつけ白(五)に伸びた時(六)に一間飛んで(七)印の打込を狙ふ一方に上の二騎を攻むるか、此二策中其一を擇むべきである。黒(八)の押へ好し。黒(九)は寧ろ(一〇)に下るの利あるに如かず。黒(一一)は太だ緩い。何故に(一二)に伸びぬのであらうか、白から反對に(一三)に跳ねらるゝに至つては其の形が非常に好くなるではないか。黒(一四)亦ヌルシ。此場合(一五)印に打込む外はない。上下兩隅の黒の兵備は頗る堅固なるに反し白の備へは甚だ手薄であるから定めて白は應手に窮するであらう。假に白(一六)に著けるとせんか、黒(一七)に突當るべく又白(一八)に尖まんか、黒(一九)、白(二〇)、黒(二一)、白(二二)、黒(二三)となるべく管に活きがある許りではない、外部に切りが残るから白は餘程進退に苦むのである。



▲黒×印の刃 黒(一)は先づ(二)印に置いて敵の應手を試るが宜い。其時白(三)に粘がば黒(四)に伸びて(五)に詰める機會を窺ふべく、又白(六)に粘がすして(七)に押へなば黒は單に(八)に伸びずして(九)に孕れたならば如何、然るに圖の如く單に(一〇)に孕れたのは如何にも働がない。黒(一一)は何の意ぞ、自己の缺陷を棄置いて

鋒先き鋭き敵を攻めると云ふのは無理である。(一)に孕れて居らねばならぬ處である。其時白(二)に伸びなば兎も角黒は一應(三)印に置くが宜い、白は(四)に粘ぐ外なくソコで(五)に詰める方が面白くないか。然るに譜の如く(六)に封鎖され後手で(七)と活きねばならぬ破目に陥つたのは非常の損害で、詰りに(八)に孕れ損つた祟りである。黒(九)も亦ヌルイ、何故に(一〇)印に打込まぬのであらうか、若し此處を打つとすれば手強(一)に跳ね、白(二)に跳ねなば黒(三)に二段跳ねするが宜い。然るに(四)と固んだのは餘り弱過ぎる。

▲黒三たび、打込の機會を逸す

白からず、此場合でも矢張(一)印に打込むべきである。前の場合は大分外部の様子が變つて居るけれども併し左上隅の黒はイザと云へば(二)に打込白(三)か(四)に取つた時(五)の下りを利かして活きを持つと云ふ手段のある處だから黒(六)印に打込んだからとして其反動で左上隅の味方が苦む様な事はない。然るに茲に三たび打込の機會を逸したのは甚だ遺憾である。(七)以下(八)まで左なきだに活きのある處なるに眼を持つに汲々として却て敵陣を固めてトウ／＼打込を無くして了つたのは不覺の極みである。(九)の著け亦た面白からず、敵の城廓の堅固なる處へ突撃を試みたからと云うて左程コタへるものではない。夫れより大分中原に白模様が出来て(一〇)の二子を抱込れる恐れがあるから(一一)か或は(一二)に聯絡を保ちさへすれば而して此後失著さへなくば凡ての黒は善く收まつて居るから白は容易に勝つことが出来ぬのである。然るに(一三)につけ(一四)に尖まれ(一五)と後手を取つて白に(一六)と打たるゝに至つては必勝を期し難き勢となつた。尙ほ黒(一七)の手で(一八)に突當り白(一九)に押へた時(二〇)に跳ね上げて遙に中原の二子に應援を與へるやう打て

▲黒軍、大敗の原因

ば此碁は確に黒の勝利である。(一)のつけは寧ろ見合はせて置くが宜い。斯かる場合に於ては聯絡を保ちつゝ單に(二)の邊から白の勢力範圍を踏み躪るを上策とするのである。黒(三)非なり。尙ほ(四)に打つて外側から敵地を縮めるが宜い。(五)は大惡手である。斯くて白(六)に粘いだ結果(七)に出切りを狙はるゝ缺陷が出来たではないか。其害甚だ少からぬのである。黒(八)何ぞ其れ冒險なるや、殆ど四面楚歌の裡に在る半死の捕虜の活を求むるは極めて無謀である。ソナナ危険を冒すよりは先づ(九)に突當つて様子を見るが宜い。白(一〇)は餘り慾が深かつたかも知れぬ。實は(一一)で(一二)に尖んで黒の動靜を窺ふが本手であつた。黒(一三)のつけは或は宜いかも知れぬがマア見込のない手である。いッそ(一四)へ尖みつけて白の應手を試むべきである。其時白(一五)へ跳ね出せば黒(一六)に切るべく、白(一七)にアテなば黒(一八)に突出して聯絡する手段がある。又白(一九)にアテすして(二〇)に孕れなば黒(二一)にアテ白(二二)に粘いだ時黒(二三)に粘がば如何、白(二四)の一子を逃げんか(二五)につけられて四子を失ふべく、左もなくば(二六)の一子を擒にされて聯絡されるのである。然るに(二七)と著けたのは頗る危険である。黒(二八)はヌルイ、どうせ劫であるから(二九)に孕れて一手でもダメを多く詰めて置く方が利益である。黒(三〇)と粘いだのは不覺である、劫に負けた時取られる數を多くすると云ふ道理はない。何處までも劫を争ふが宜い、黒(三一)も亦(三二)にダメを詰める方が宜い、其時白(三三)に劫を取らば(三四)に劫を立てよ。然らば白は詰り劫立に窮したであらう。然るに黒(三五)と打つて聯絡を謀り白に劫を粘がれた大敗を招いたのは惜むべきである因に(三六)は同じ打つならば(三七)に打つ方が利益である。

第十局 黒● 碁場の連壁

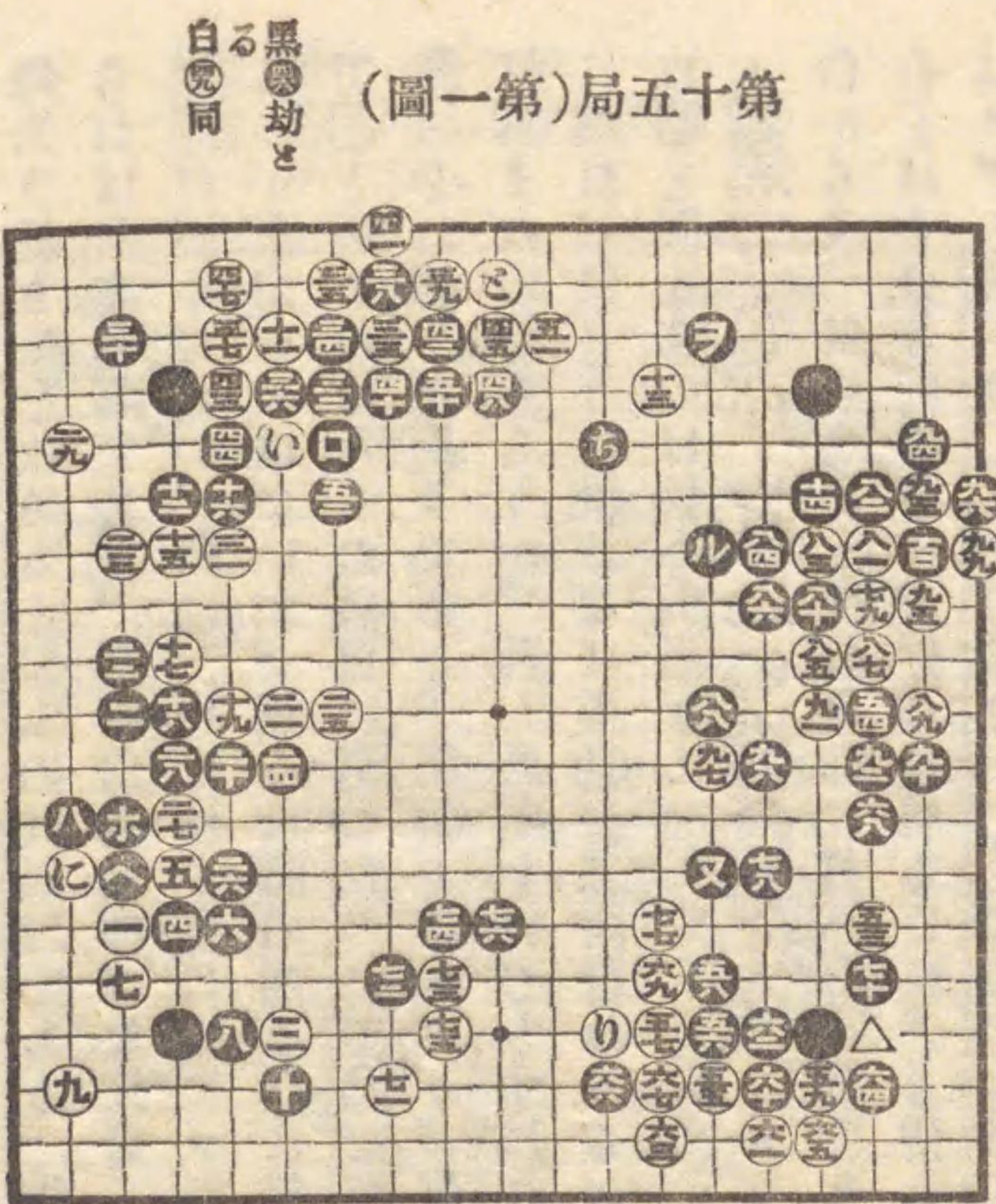
▲黒●は、藪蛇的悪手▲黒●一着、天下の形勢
▲黒●功成り名遂げた一將▲勝敗の決●の一手に在り

第十五局

▲黒●は藪蛇的悪手

黒白共に●までは普通の定石で更に間然する所がない。黒●は普通の受方であるが、併し此の場合に於ては●に著け白●、黒●、白●、黒●と打つ方が星下に於ける●の一子を活躍せしむる所以である。斯くて白若し●に粘れば黒●を切るべく、又白●に粘れば黒●に切り一子を擒にするが宜い。白●は聊か性急なる打方であつた。

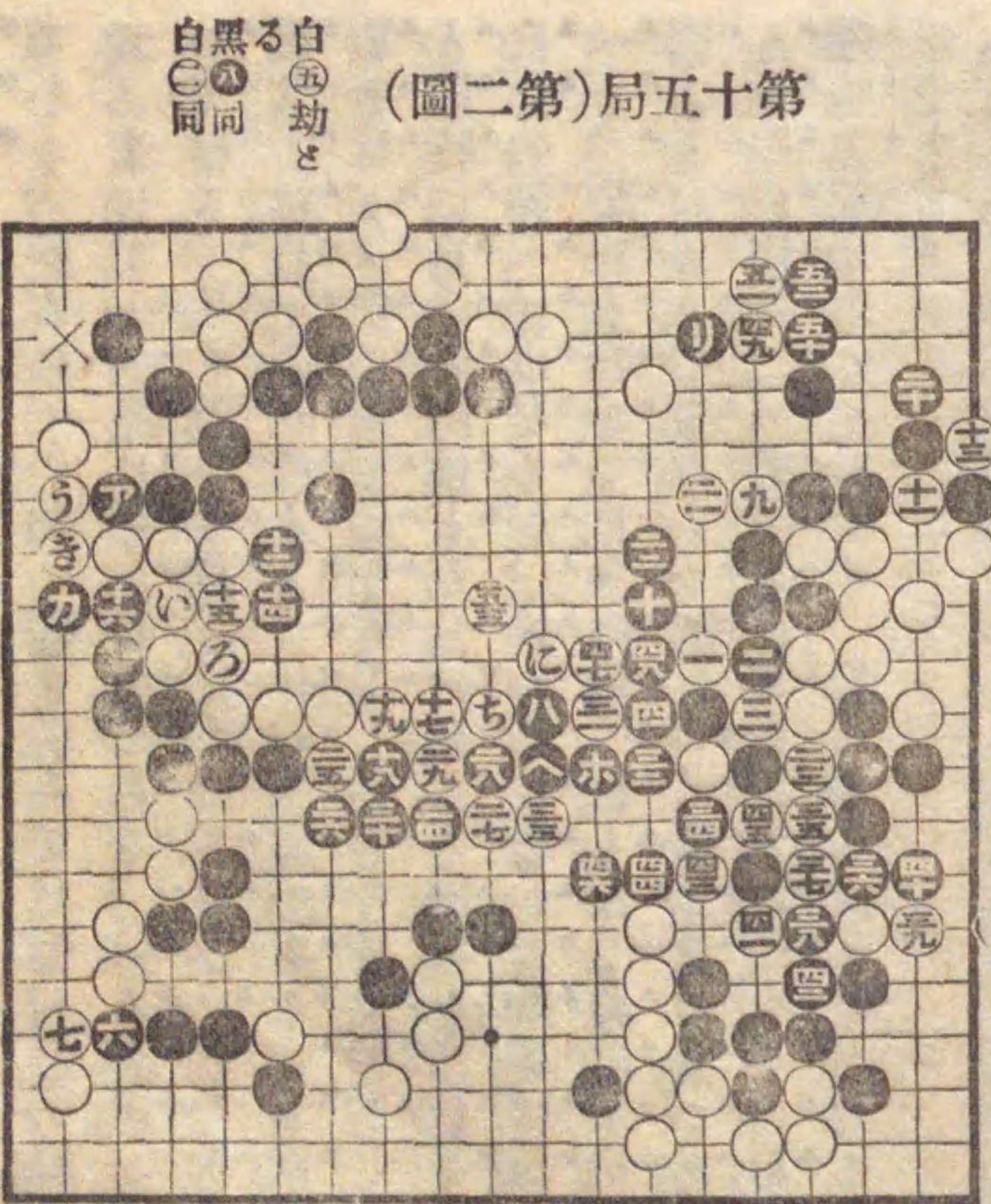
(圖一第)局五十第



此の場合右下隅方面に着手するのが穩當である。黒●と敵に撈ます逆らはず、ジツと伸びたのは堅實の手段である。

軍皆收まりて敵は如何とも策の施しやうなかるべく、黒の優勢たるを疑はぬのであつた。黒●の圍ひ甚だ小なり、矢張り●に圍ひ一着以て天下の形勢を定むべきである。黒●の著けは如何あらうか、試に全局の形勢を看よ。白は三方に頭を出して居るから最早や中原に地を作る望みはないのである。然るに圖の如く●と著けて中で活きられるやうな結果になりては詰り自己の勢力範圍は悉く敵の爲めに荒らされて、地にもならぬ碁場同様の處に長壁を築く姿になるではないか。だから此の場合●に尖みつけて敵を碁場に追出す工夫をするが肝要である。左れば白●に伸びる外なく、ソコで黒●に煽らば如何。自己の損する所少うして而して敵は追撃の窮地に陥るのみか、左側中間の白は未だ全く眼形を備へざるが故に或は弱み攻めの難に遇ふ虞れもあらう。扱又黒●に約へたのは最初●と約へた趣意に背くに非ずや。ナゼかと云ふに抑も黒●が●と約へたのは邊隅封鎖の手段たるべきに、然るに●と約へては逃げ出す外に途はないからである。併し本局に於ては右下隅方面の黒の備へが堅固であるから●と押へたからとて、強ち悪いと云ふこともないが、平生は決して打つべき手段ではない。黒●は●に下つてはドウか。白は如何にして逃げ出すべきか、頗る窮するであらう。然るに●と包圍の手段に出づる上は圖の如く●と●と兩跳ねを利かされて●と劫争ひに出られるは必然の勢で、劫となつては容易に白を擒にすることは出来ぬ。黒●の劫仕掛けも亦早計であつた。此處は何とか趣向をせねばならぬ處である。先づ●へでも斜走して隅地を擴張しながら劫を睨んで居られるのが白に取つて一番氣味が悪い。ソコで白尙ほ一手を費やして活きに廻はるとせば先手は黒に歸すべく左なきだに現在、黒の方が地が多いのである。

(圖二第)局五十第



打抜き白亦た●に●の一子を取る外はあるまい。然るに徒らに●に一子を打抜き其結果白に●へ先手で伸びを利かせ

黒●と曲り爲めに白をして●に下らしめたのは藪蛇であつた。何となれば白●の伸びに依つて左上隅の黒の被る損害は少からぬのである。單に●に押すに若くはない。夫れから●の粘ぎは先づ●に打ち、白●、黒●、白●に粘いた時●に粘る方が順當である。白●は悪手であつた。此處は棄て置いた所で黒から攻めやうのない處だから、實は●邊に備ふべきであつた。然るに白●と押し黒●と掛られて甚だ應手に苦んだ。此の掛けは頗る面白く●亦た可なり、以下●までは申分のない打方であつた。白は唯收まつたと云ふ丈けで、其形甚だ振はず、邊隅に壓迫されたのは全く●の閑手に基くのである。黒●の跳ねは早計である。單に●に備ふべきである。左すれば白の身になつて考へると、機を見て●に切つて劫争ひを仕掛けられるのは洵に氣味が悪いから一應劫を取る外なく黒●の粘ぎとなるべき處である。とすれば●と●の交換のない方が宜いではないか。然るに圖の如く彼此れ交換して●に利かする筋を失つたのは黒の不利と謂はねばならぬ。

▲一着、天下の形勢(●の) 黒●の覗きは面白くない、單に●に曲り白●に伸びた時●に尖みつけて居るのが通形である。黒●の手にも矢張り●に尖みつけて△印の切取を防ぐ手段、最も肝要である。然るに白●に押しされて●に尖みつけた形を看よ、黒●は實は●の處に在つて欲しき處なるに、餘り崖邊に回み過ぎた姿ではないか。黒●の伸びは大いに熟慮を要する處である。圖の如く●に伸びたからとて僅に白地を消すに止まりて、下邊の白は巖丈なり、聊かも痛痒を感ずるに非ず、又自己の地を作る足しになるかと云へば既に白●の伸びあるからは地にもならず、存外詰らぬ手を打たんよりは寧ろ●に圍ふに若かず。左らば四方八方の黒

▲第二 兎も角も●のハネ

黒●の劫立は果して取れるや否や目的のない處である、兎に角一先づ●に粘いで劫を争ふべきであつた。黒●の伸びはヌルイ。ナゼ●に跳ねぬのであらうか、白●に粘れば黒も亦た●に粘るべく、白●、黒●、白●、黒●の粘ぎとなつた時黒●印に並ぶは如何。兎も角白は眼なしになるではないか、ソコで劇しく攻立てなば縦しんば之を擒にし得ぬまでも相當に劫負けの損害を償ふことが出来たであらう。然るに圖の如く●と約へらるるに至つては眼形が一つ出来るから最早や容易に之を擒にすることは出来ない。黒●の覗きは面白くない。單に●に飛ぶが宜い。左すれば白はドコで眼が出来ると云ふのがないから随分苦むであらう。黒●の跳ね出しは悪手である。此の場合●は唯●に曲る位のものである。黒●に一目を取る手で●に尖みつけなば如何、白●へ跳ねなば黒●、白●、黒●に一子を

らるゝに至つては黒の損失は少からぬのである。夫れから黒
 白に引いた時黒に打つのは一向詰らない。寧ろ黒に孕れ
 對に白より黒に打たれ次いで黒に備へらるゝに至つては黒
 の形勢甚だ面白からず以下尙ほ悪手を重ねて竟に中押敗に終
 つたのは致方ない運命である。

▲總評 之を要するに最初黒の悪手却て我が不利とな
 るの地點に敵を誘ひ出し、爲めに白に攻め込まれる手段を
 生じ自己の陣形を崩されたるは如何にも不覺であつた。白も
 亦の失着ありし爲め以下の手で邊隅に壓縮せられ、白の
 氣勢揚らざるに反し黒の武者振は頗る振つて來た。中頃黒
 の手で白に固めて居らば地域確定し勝ちも亦明白であつ
 た。夫れを失した爲めに白より黒に打込まれて竟に戦ひとな
 り、二受方を仕損じて劫争ひとなり、取るものなき左邊中間
 の白に向つて劫立をなした爲めに竟に劫負けとなれるのみか
 折角劫立をした白をして優に活きを得せしむるに至つては全
 く劫に負け丈け大損害を被つた譯である。夫れから中原の
 戦ひに於て跳ね出しの失着に次いで尖みつけを逸し、
 爲めに白より先手で黒の伸びを利かされ次いで先に鞭を着
 けられと備へらるゝに至つては最早や挽回の策はない。

▲うち手の呼吸 白は通常の手ではない、唯敵に因
 つて變化を試みた迄の事である。之れに對し黒杯に受けす
 して打つたのは順當の手である。黒の尖みは方角違ひ
 の閑手ではないか。此の場合黒に詰めて背後から敵を攻め
 而して白が左下隅に向つて來る機みに、隅を固めるつ

第十七局

功成り名遂げたるの一將に苦勞を掛けずに、軽く之を捌く
 心得なうては、折角の手柄を零にして、爲めに全局の敗を醸す
 ことがないとも謂はれぬ、慎重の注意を肝要とする所以であ
 る。黒に跳ねに伸びたのは甚だ宜しくない、何故にに
 縋り旁のの一子と聯絡を通せぬのであらうか、若し然らば
 白は唯株場に逃げ出したと云ふ丈けで、地にも何にもならぬ
 のに、然るに圖の如く白よりと掛らるゝに至つては、功勞
 あるの一將は見す々々孤立して了ふではないか。と云つて
 前にも注意した通り既に戦ひ疲れて、根氣のないの一子を
 無理に引ツ張り出さんには、却て足手纏ひになつて敵に追躡
 れる憂へがあるから印に新手を繰出して勢援を與ふるに若
 くはないのである。黒は矢張り尋常に飛んで敵の動靜
 を窺ふ沈着の態度に出づるを可とすべく、何にも衆を以て寡
 に當る黒から危険を冒して戦ひを挑むに及ばぬのである。

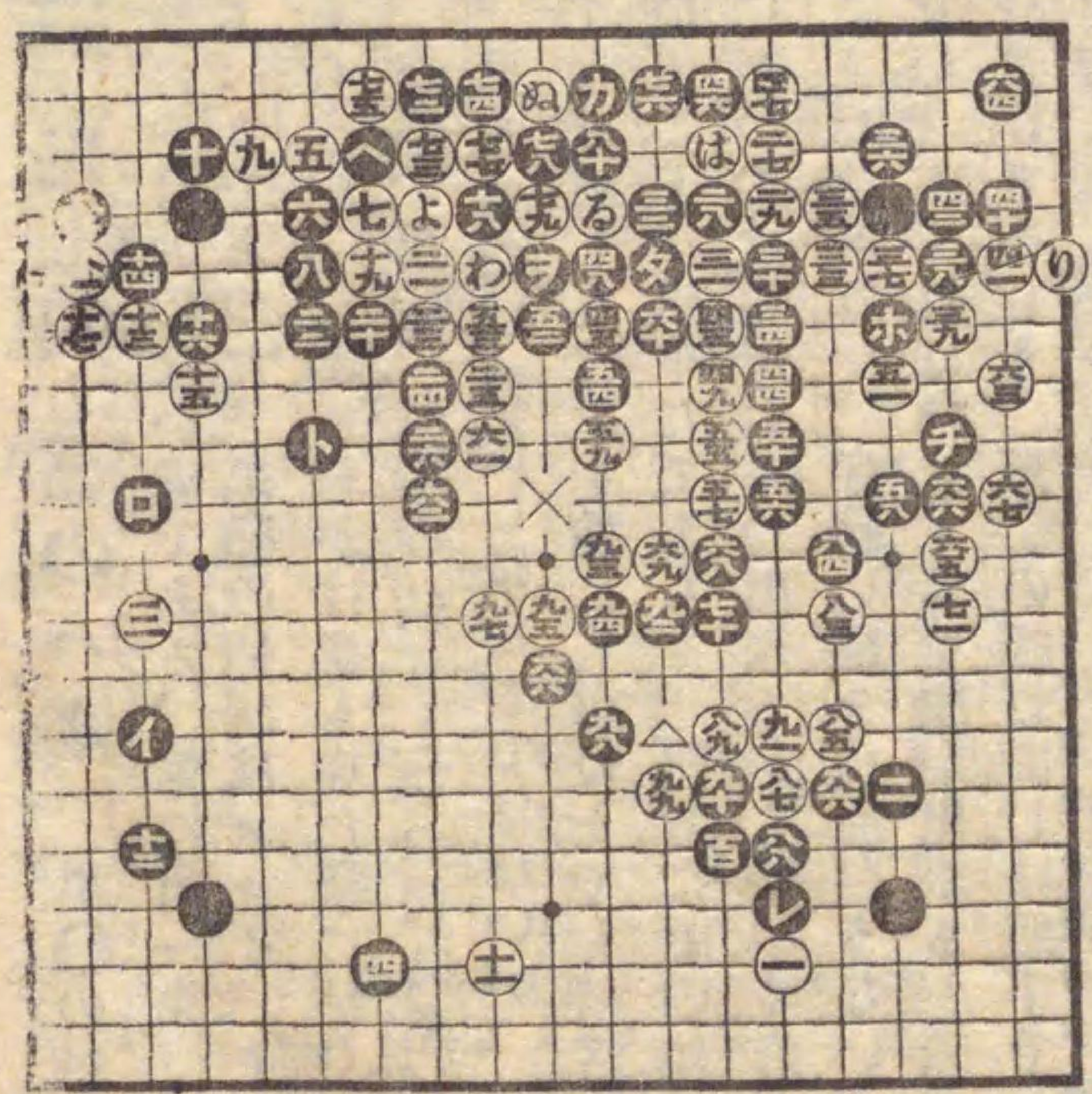
▲黒の戦略を誤る 黒の下りは餘りと云へば過
 慾、戦略宜しきを得たるものでない。先づに懸け、敵の一
 子を擒にして大軍の無事を圖り、而して敵が右上隅の番兵を
 擒に掛らば黒は以下白軍の征伐に着手するを以て上策とす
 るのである。扱て其征伐の手段如何と云ふに、先づに尖み
 白に粘いだ時曲つてはドウか、面白い形勢ではないか。
 黒の尖みつけは本形ちである。黒の伸びは大いにヌルイ。
 此の場合先づに尖み、白に粘いだ時黒に包圍せば如
 何。正に是れ鐵條網裡の白虎、活くるにしても餘程苦むであ
 らう。夫れから黒に伸びたらんには左側の四子亦た孤立の
 危地に陥り黒の軍勢は大いに振ふであらう。然るに印に包
 圍の機を逸したのは大いに惜むべきであつた。黒亦た甚だ
 ヌルシ。矢張り視きて後印に包圍すべきである。黒の

取りは悪手である。此處でも矢張り視いて夫れからに
 並んで居る方が確實である。黒も亦た悪い。ナゼの覗き
 を遠慮して居るであらうか、以下真中の黒は既に眼形を
 備へて居るから少しも心配はない。又左上隅以下の黒とて
 も縦に跳ねられたからと云つてに飛んで居ても善し
 又に約へても充分活きがあるではないか。其儘棄て置いて
 に尖んで取掛けに行かば如何、左れば白は活くるに窮する
 であらう。然るに黒と伸びたのは蓋し二目の頭は大切であ
 ると云ふ杓子定規を守つて印の急場を閉却したのは不覺で
 あつた。黒何ぞ夫れ憶病なるや。此場合でも矢張り視に視
 いて白を攻むべきである。隅の黒はの跳ねが利いて居る上
 は白から取掛けに行くのは餘程困難な處でもあり縦し攻合に
 なつても眼あり眼なしで到底白に勝算はないのである。黒
 はに視いて了ふ方が得である。白、黒共に輕卒であつ
 た。此場合白は他の急場に赴くべきであつたに遊びたる
 は何とも申譯がない。黒も亦た手を抜いても活きがある。白
 若しに切れば黒に引きて二目を棄つべく又、白に跳ね
 出せば則ち黒、白、黒、白、黒、白、黒の粘ぎとな
 つて活きすや。黒の押しはダメである。寧ろ軽くにつけ
 且つ伸びて以て隅を固めると同時に外部發展の途を開いて
 以下の黒に應援を與ふるに若くはない。黒に掛粘ぐ手で
 印に跳ねるのが本筋である。夫れでも矢張り粘ぎは利いて居
 る譯で、場合に依ればの二子を棄てて打つべきであつた。

▲第二 勝敗の決の一手に在り 黒は一應士に
 押す方が宜い。次に黒は宜しくない。僅に三目を愛むべき
 場合でない。須らくに曲るべきである。黒は先づに突
 當つて竹の節形に聯絡してに掛粘ぐ方が上下の聯絡が確實

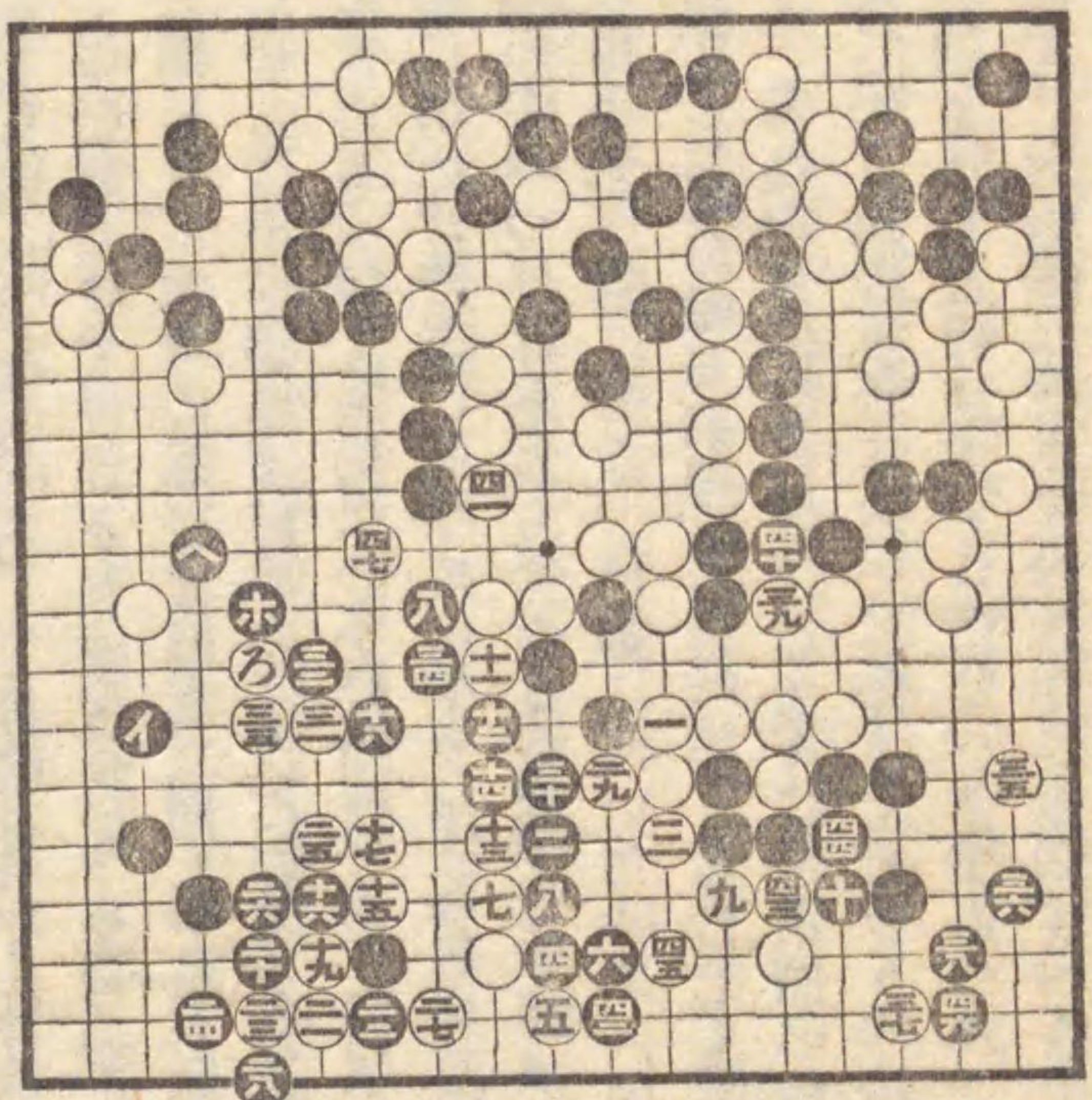
である。然るに圖の如くと尖みては唯自己の締りをする
 云ふ丈けで一向敵に響かぬのである。抑も碁の呼吸は茲に在
 つて存す。凡そ戦ひを爲すに方つては第一に今我が擲たんと
 欲するは自己の防備上下の價値があるか、又敵に及ぼす
 響きは下位であるかを考量し而して成丈け殿しく敵に響く
 と同時に自己の防備上充分價値ある擲手を擇むを上乘とし、
 自分の備へにはなるが、格別敵に響かぬ擲手は之を凡手とす
 べく、敵にも響かず自分の備へにもならぬ擲手の冗手たるは
 固より言ふまでもない。故に善く戦ふ者は先づ此意味を吞込
 んで局に臨み、一著子毎に考慮して打つやうになれば無限の
 趣味を感ずるに至るべく、然らずんば年越基たるを免かれぬ
 のである。

(圖一第)局六十第



▲功成り名遂げた一將(黒) 黒は頂け定跡の
 場合に能く用ひらるゝ手で、此處は白を攻むる隨一の急處
 である。併し
 圖の如く白
 黒と跳ね
 て、白をして
 と極めて因
 循姑息の愚手
 を餘儀なくせ
 しめ而して黒
 と粘いで自
 己の備へを整
 へたのは全く
 の手柄であ
 るからは此上

(圖二第)局六十第



である。黒は本局の勝敗に關する最も肝要の手で、熟慮を要する所である。然るに圖の如く白に約へたのは蓋し棄て置いては危いと思つたからであらうけれども、決して殺

される氣遣ひはない。試に之を圖解せんか、甲圖の如く白に視かば黒に附越すべく、其結果となつて活くるではないか、又乙圖の如く白と下の方へ匂へ込まば黒は反對に附越し白、黒の切となりて活きがあるから毫もに約へる必要なく、先づ本圖に飛んで隅地を擴げ白に曲つた時黒に押し聯絡すれば儘に黒の勝利であつた。或は又黒に打たずして尖み白をして飛ばしめ而して此處にはモット嚴しく擲つ手段もないではないけれども穩に尖んで白地を狭めながら中に地を作る趣向に出ても必勝疑ひないのである。然るに此の機を逸して却て白に飛出されて着ヨセられ竟に芻に終つたのは黒の爲め甚だ惜むべきであつた。

▲總評

黒初め(1)の失着ありて白に(2)に先鞭を着けら

第十局 黒以下の善戦

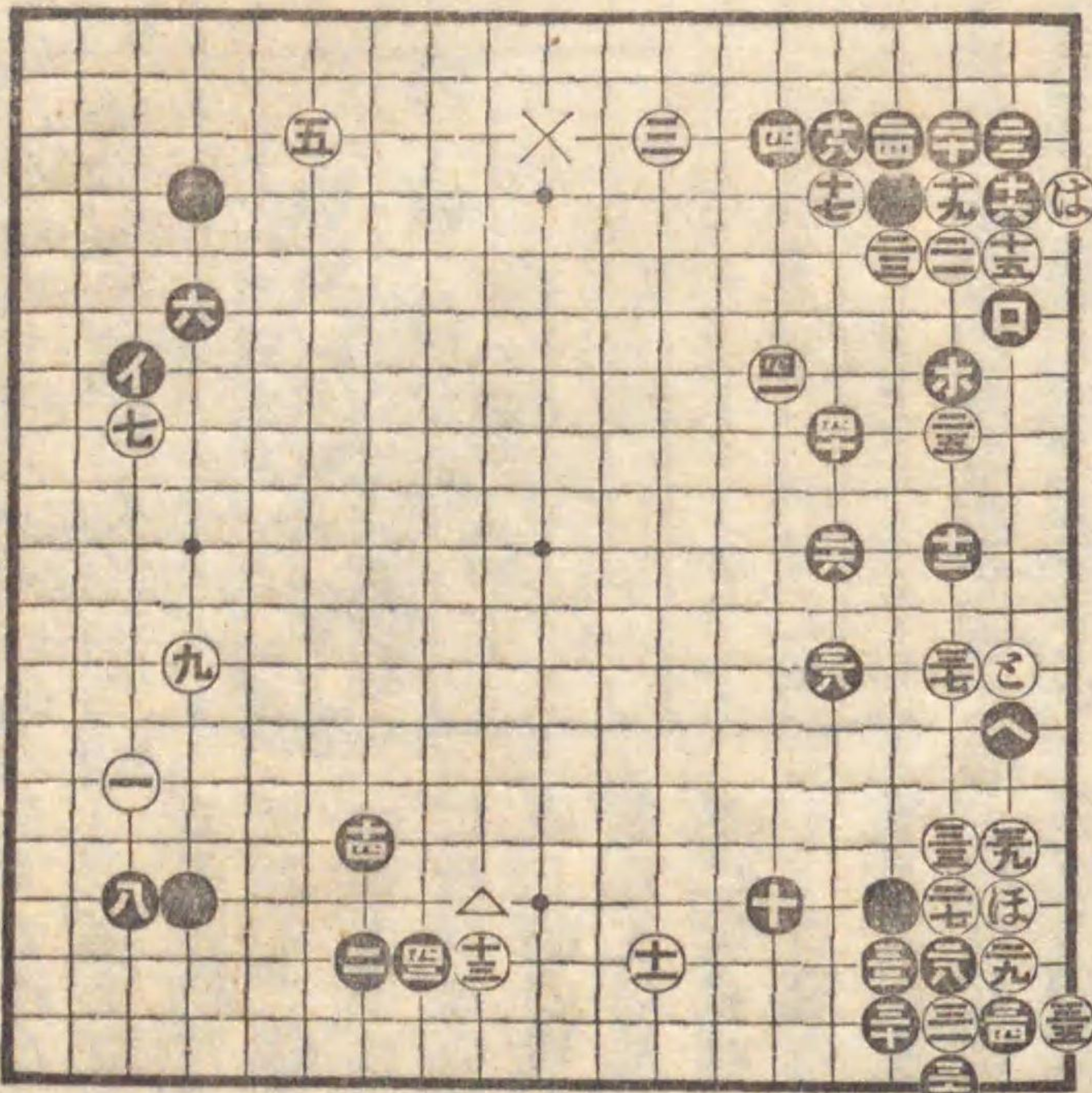
▲(1)の武者振り ▲(2)の狡兔狩出しの戦略 ▲(3)の擲み攻めの戦略 ▲黒の隅門をめぐりて味方を苦しむ

第十七局

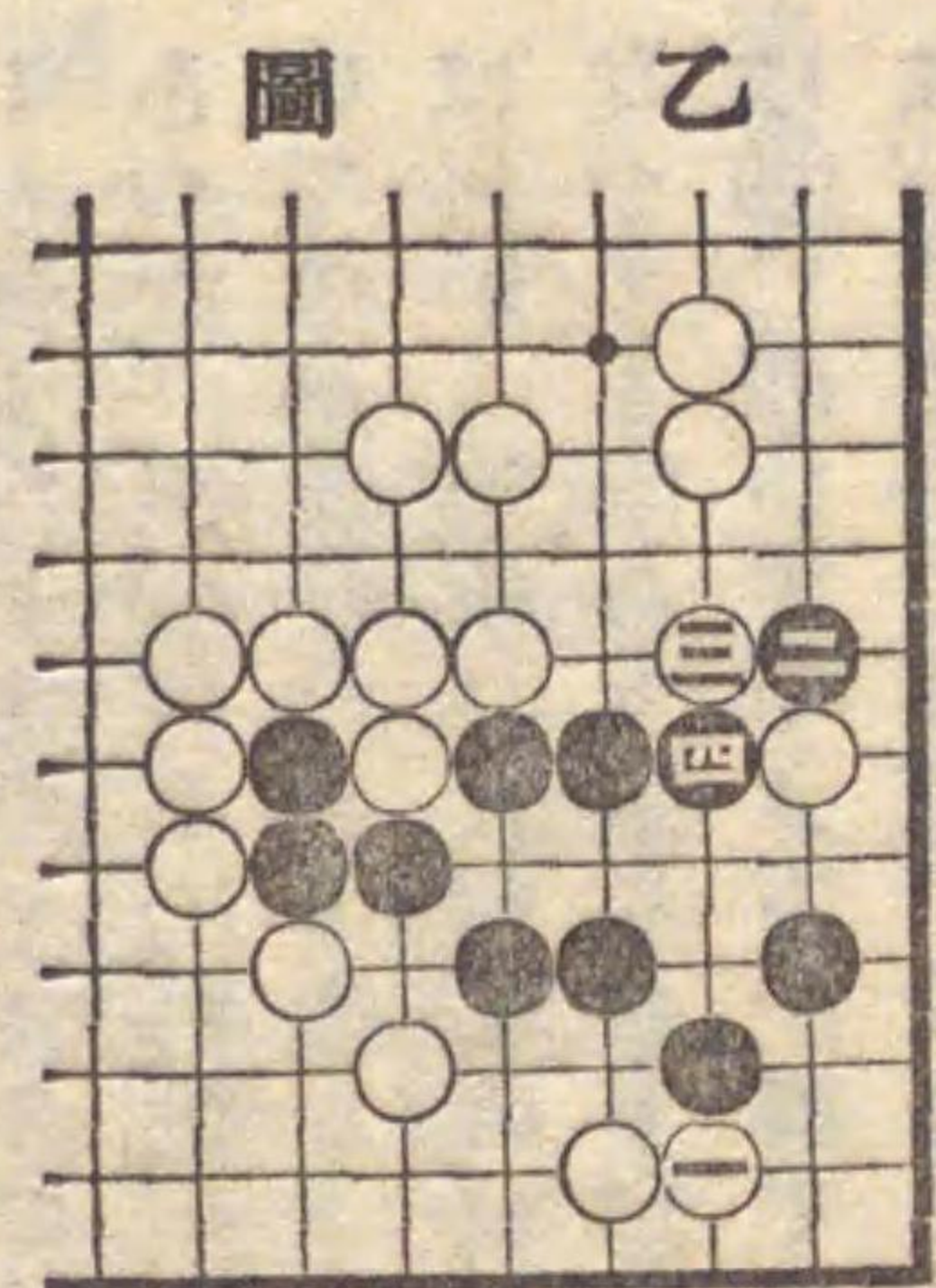
▲(1)の武者振り

▲(1)の手は此の場合に締る方が宜い。其の譯は圖の如く(7)と掛られると、(1)と(7)の間合が好くなるから(1)に締つて(7)の掛りを防ぐに若くはない。(1)の締りはチト調子が變ではないか。(1)の大場を占めて、一着以て上下兩方へ利かす方が宜い。棋家の所謂數の倍用と云ふのは即ち是れである。(1)はヌルイ。隅の打込を凌ぐ積りならば(1)と(1)の間は二間開きの狭い處で、一方には既に(1)の圍ひがあつて(1)へ飛んだ處が、少しも響かないから(1)へ突當るが宜い。白は△印に行びる外あるまい。ソコで手

(圖一第)局七十第



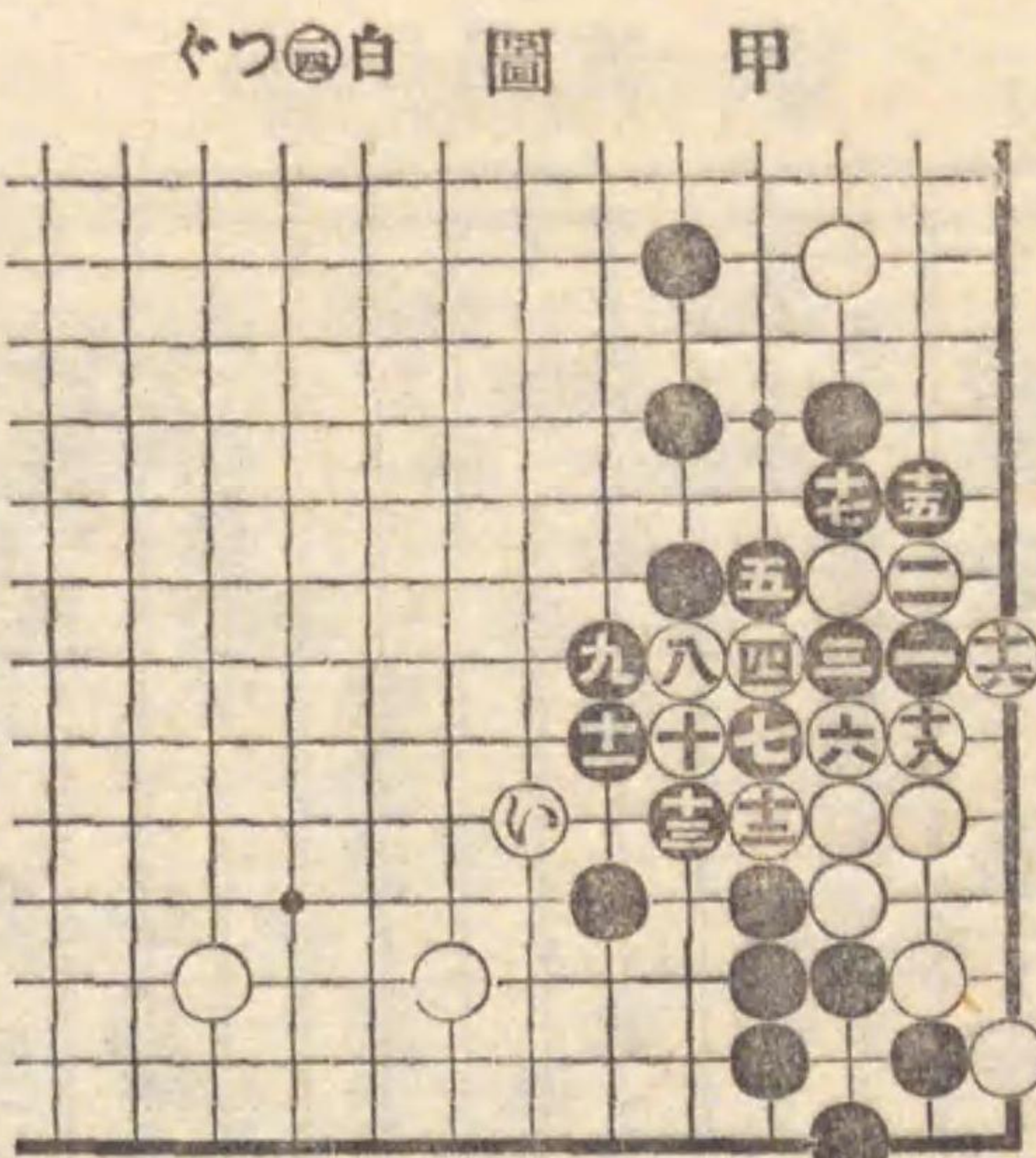
を抜いて(1)に飛ぶは如何、頗る振つた武者振ではないか。(1)亦たヌルイ。此の場合には(1)に切り白(1)、黒(1)、白(1)、黒(1)、白(1)、黒(1)と下から受けるは誠に位の低い手で、白の註文通りに服従した譯である。(1)のつけは面白くない。(1)に夾んで敵の動靜を窺ふべきである。然るに黒は何故に上から(1)に約へぬのであらうか、其時白が(1)に行びたらば黒は(1)に下るが宜い。左れば(1)の白と(1)の白とは路遠くして聯絡することが出来なから(1)の隅で小さく活さねばならぬ。其の結果黒の上の方に固まつて了ふから得失を償ふて餘りあるのである。然るに圖の如く下から(1)と約へた爲めに詰り(1)と運ばれて折角勢力範圍の大部分を荒らされて了つたのは惜むべきである。それでも隅の方が完全に黒の地にでもなれば、未だしもであるが、左方には既に敵(1)が迫つて居るから地も碌に出来ないのみか、折角繩張をして武者振勇ましかりし(1)の二子が孤立して左右に敵を受ける形勢を來たしたのは黒の不覺であつた。(1)のはねは打過ぎで、(1)に引いて居る方が穩かである。黒は何故に(1)に跳ねぬのであらうか、白(1)に粘れば黒も亦た(1)に粘るべく、左すれば白は後手で活きて居なければならぬ。ソコで黒が先手を取つて(1)の敵を攻める方が宜い。然るに單に(1)と掛粘いた爲めに(1)に引かれて竟に(1)と活きられて了つたのは非常に黒の損である。(1)の突當りは時機遅れである。此の手で右邊に轉じて(1)の急處を衝く筋がないでもない。其時白若し(1)に約へるとすれば結果は甲圖の如く塗りつけて一寸氣持は宜いやうであるが、併し白から(1)杯に覗かれる手があつて急に本圖に於ける(1)の白を攻める譯にも行かぬからマア此の場合(1)に置く意味を含んで×印に打込み、此の方面



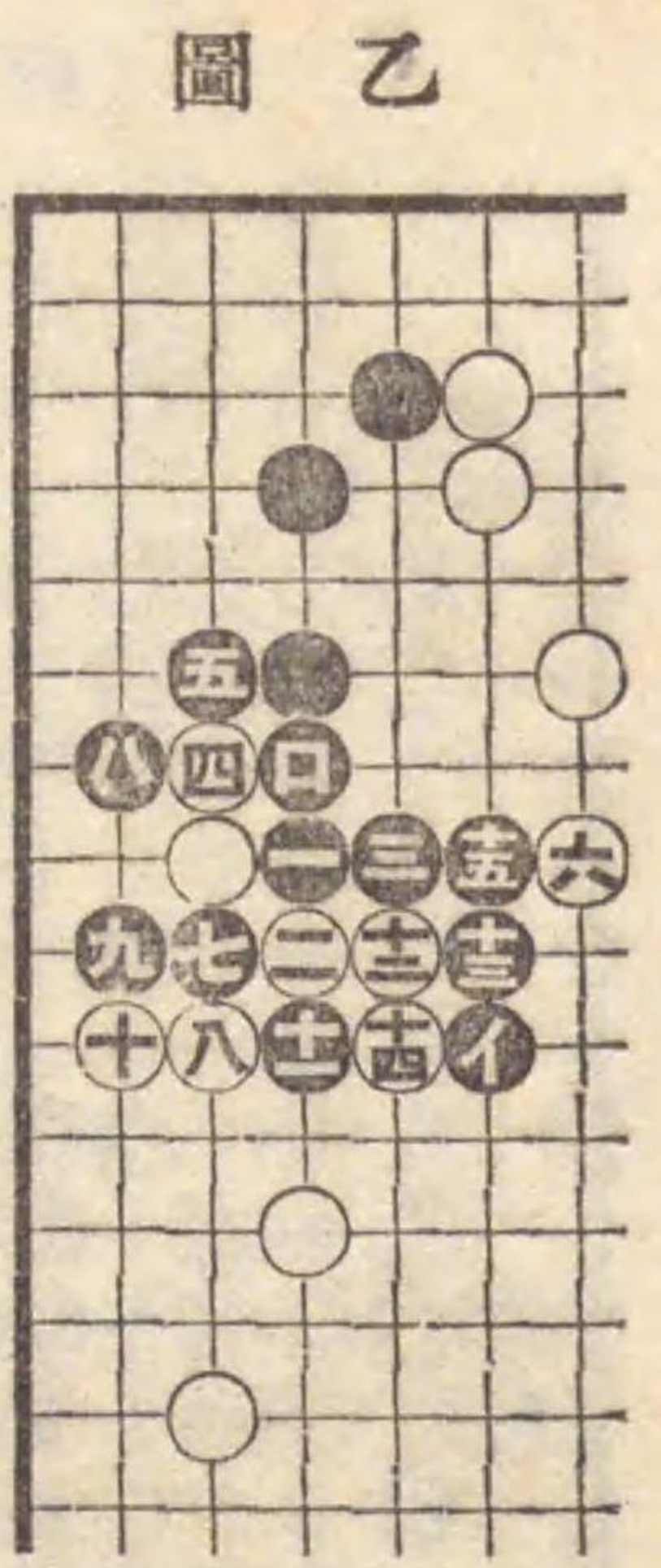
れ次いで(1)と戦ひを仕掛けて紛亂を醸したのは兎も角もとして(1)の手にて(1)に一子を擒にし而して白若し右上隅の黒を擒にする手段を運らせば左方の白を攻むべく、又白左方の始末をすれば黒は右上隅に着手すべき戰略に出づることを知らずして大軍を棄てて隅の一子を愛んだ爲めに更に混亂を大ならしめた譯である。夫れから(1)以下(1)までは宜かつたが(1)の手で左方の白を攻めなんだのは白の僥倖とする所であつた。次いで(1)の緩着あり爲めに白より(1)に運ばるゝに至つて白の氣勢は稍々昂つて來た。夫れから中原の戦ひに移つては黒も中々危険の状態であつたが力一ぱい戦つて兎も角も凌いで了つた爲めに大分形勢が振つて來た。然るに第二圖(1)の大緩着あり爲めに白から着々ヨセつけられて竟に芻に終つたのである。



から戦ひを始め、搦み攻めの趣向をする外なからう。
第二 狡兎狩出しの戦略 ④は誠にイヤな手である。矢張り⑤に打込むべき場合である。⑥の粘りは餘り堅過ぎるではないか。ナゼ⑦に行かないのであらうか。蓋し⑧の切りを畏れたのであらうが是れは少しも畏るに足らぬ。⑨は甚だヌルイ。右邊の黒は非常に堅固であるから逆に⑩へ這つてはドウか、然るに白の註文通り⑪と約へたは未だしも⑫に粘ぐに至つては緩も亦た甚だし。矢張り⑬に打込むべきである。其時白若し⑭に飛ばず黒⑮に尖みつけ、白⑯へ行ひ黒⑰に飛びて善し、又白⑱に飛ばずして⑲に尖まば黒⑳に押すべく、或は白㉑にも飛ばず⑳にも尖ますして㉒に斜走すれば黒㉓ナものに頓着せず先づ×印に覗け、白㉔に粘いだ時黒㉕に尖むと云ふ筋がある。故に此の場合白が㉖杯に迂り込むは無謀の仕打ちで、尋常に㉗に飛ぶ外はあるまい。左すれば今言つた通り黒㉘に尖みつけ、白㉙、黒㉚の飛びとなつたと假定して、白の動靜如何と云ふに、マア㉛に斜走する位のものであらう。ソコで黒に於ては㉜に飛ぶ手と㉝に尖む手とあるが、此の場合黒㉞に直る手があるとは云ふものゝ、それは退いて守る方であるから寧ろ穩かに㉟に發展すべきである。其時白㊱に懸けたらば黒は兎も角も㊲に押すが宜い。白㊳に引けば黒は×印に守るべく而して△印の附越しを狙つて攻めながら儲ける手段をすべく、又白㊴に引かすして㊵に突當

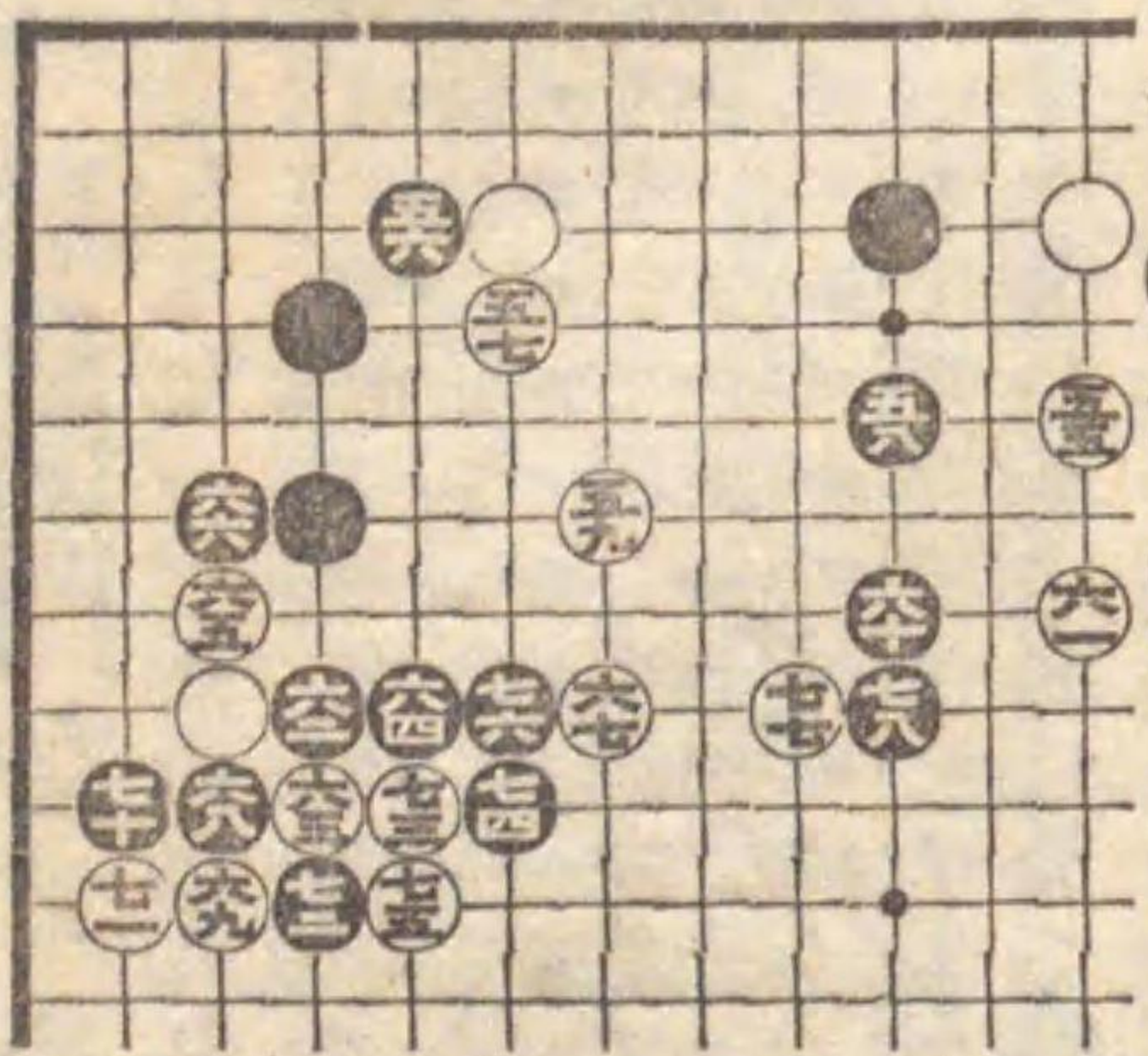


取らせられたと云ふ丈で、左程地は殖えて居らぬのである。故に黒㉞に尖ますして㉟につけて乙圖の如くなつたと假定し、白は如何に打つべきやと云ふに、印に尖むか、或は△印に凌ぐ外はあるまい。假に×印へ尖むとすれば黒㉞に飛ぶべく、又白▲印に飛べば黒㉟に押し出すべく、何れにしても黒の四方八方はみな固まつて更に後顧の患なく、敵を左右に縦断する一縦隊は白刃を眞甲に懸して左右の敵に當りながら味方の多い中原へ練り出すと云ふ凛々しい形勢である。



然として居るから確實の計算は出来ないが、見渡す所、左下隅(第二)の黒地と左側中部の白地とは略々對等で、右下隅の黒地と其外部の白地と稍々似たやうなものである。夫れから右上隅方面の白散兵は地になるか、ならぬか、未だ混沌として分らぬ形であるが、先づ右側の中間の黒の厚みと略々似たものと見做すべく、又第三圖に於ける(第二圖参照)以下一隊の黒と⑩以下の白とはドテラも秣場を走り合ふものと見れば残る所は下邊中間(第二)の白地と左右上隅の黒地で、此の白地と右上隅の黒地一ヶ所と比較しても黒地の方が多いのである。假に之を同じ位と見ても左上隅の黒地丈け多いのであるから此碁は無論黒の方が優勢であると云ふことは明白である。

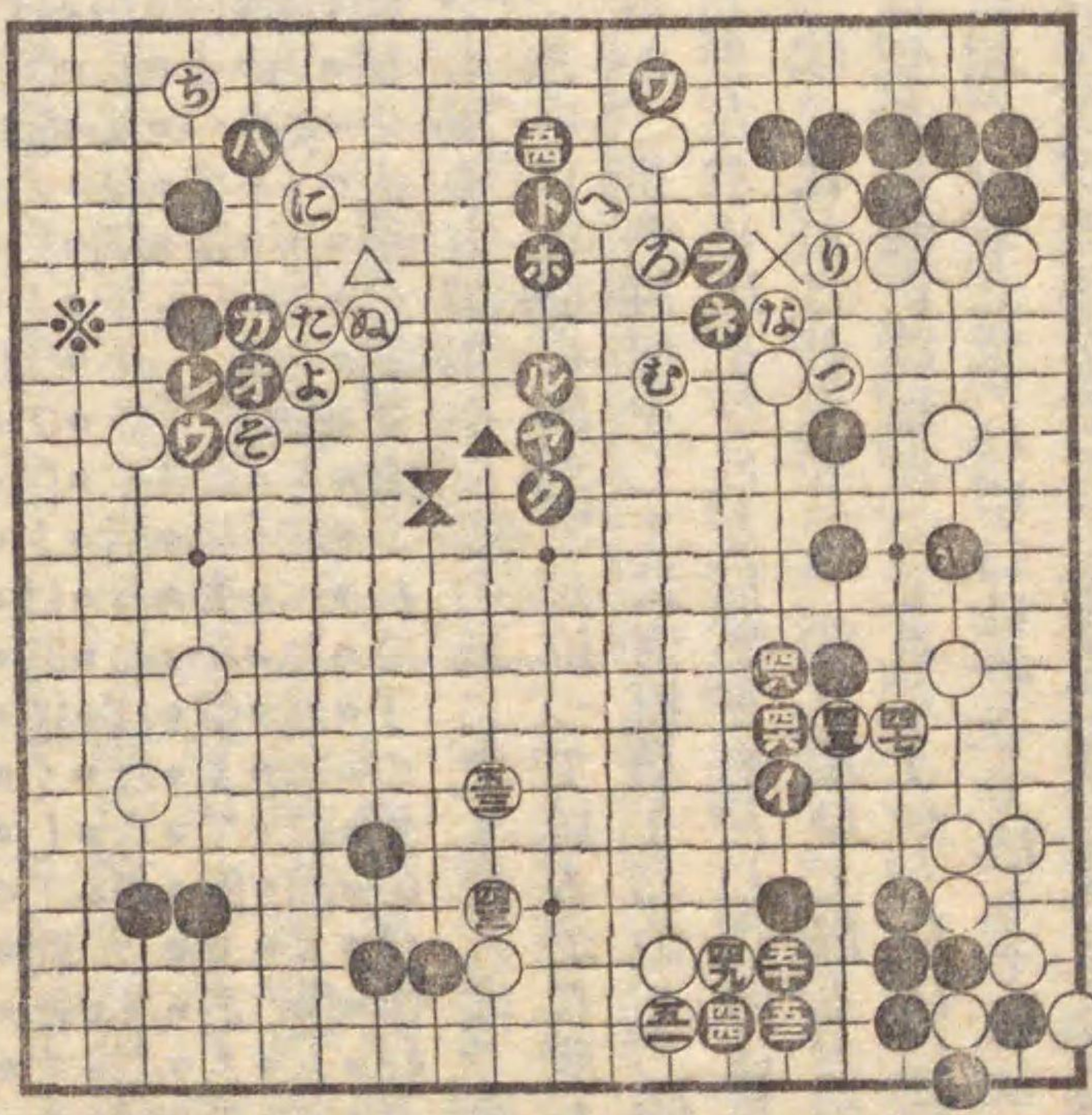
(圖三第)局七十第



即ち打過ぎである。只黙つて⑪に飛ぶが宜い。既に⑫と押したからは⑬の跳ねに對して兎も角も⑭に跳ねべき筋である。⑮は白の懸りを妨げながら隅の締りをしたと云ふに止まつて敵の陣處が堅固であるだけ、一向響がない手であるから此の場合黒⑯に尖みつけ白⑰に行ひた時黒⑱に來んで、⑲の二子が如何に進退するか、其の動靜を窺ひ而して其模様によつては⑳以下の三子と搦み攻めの趣向をすべきである。

らんか、黒は矢張り×印に守つて而して⑲に出切りの味を狙ふ筋がある。故に白⑳の懸けは一寸打ちにくい。だから此の出口を止めやうとすれば先づ㉑に緩めて飛ぶ位のものであるが、左すれば黒に×印の急所を衝かれる。其時白㉒に押せば黒は㉓の挟間に尖みて兩斷すべく、又白㉔に押さすして㉕に突當らんか、黒㉖に突當るべく、何れにしても兩斷されて了ふ。と云ふ缺陷が一方に残つて居るから、此の場合白痛し痒しでドウも⑳に飛ぶ杯と云ふ贅澤な事は出來ない。因つて×印の缺陷を癒すべく白㉗に飛ぶとすれば黒㉘に尖み出して、白三子を攻め合ひをせ、而して彼れ北ぐれば

(圖二第)局七十第



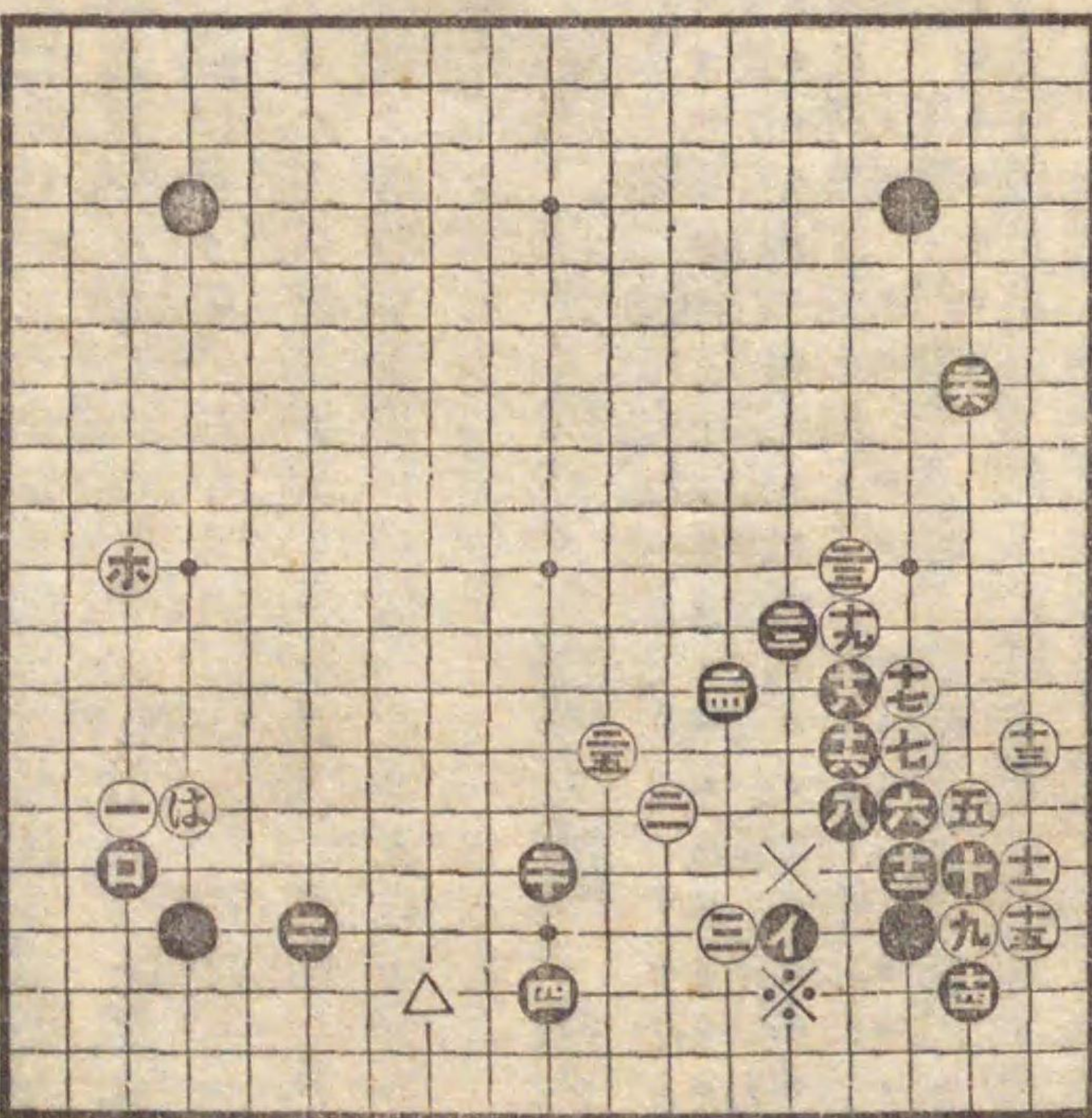
我れ亦た連れて⑳以下の三子を飛び出すと云ふ所謂狡兎狩出しの戦略に出づるが宜い。或は又黒㉑に尖ますして㉒につける手段もある。其の結果は乙圖の如く隅を固めて、而して外へ押出すことになる。斯くては黒は三目を犠牲に供したやうであるが、併し⑳のアテも利けば㉑のメめも利き、おマケに㉒のアテまで利いて居る上に、中の白四子を窘めると云ふ地の利を得て居るから一向損はない。否な白は唯三日の棄石を

第十八局

搦み攻めの戦略

④の處は即ち△印の進撃を防ぐ一方に⑤の白を攻めると云ふ所謂兩利きの好點であるから至極宜いが、併し普通に⑥に受けても悪いことはない。⑦の頂けも至極宜しい、此の手で⑧に頂けるのも亦た此の隅丈けで言へば矢張り定跡であるが、さうすると型の如く×印に壓迫されて※印へ下ることになる。⑨と⑩のアハヒが近く、而かも同線に位して重複する嫌ひがあるから成たけ近間の味方に累ひの及ばぬやう、圖の如く打つべきである。⑪は

(圖一第)局八十第

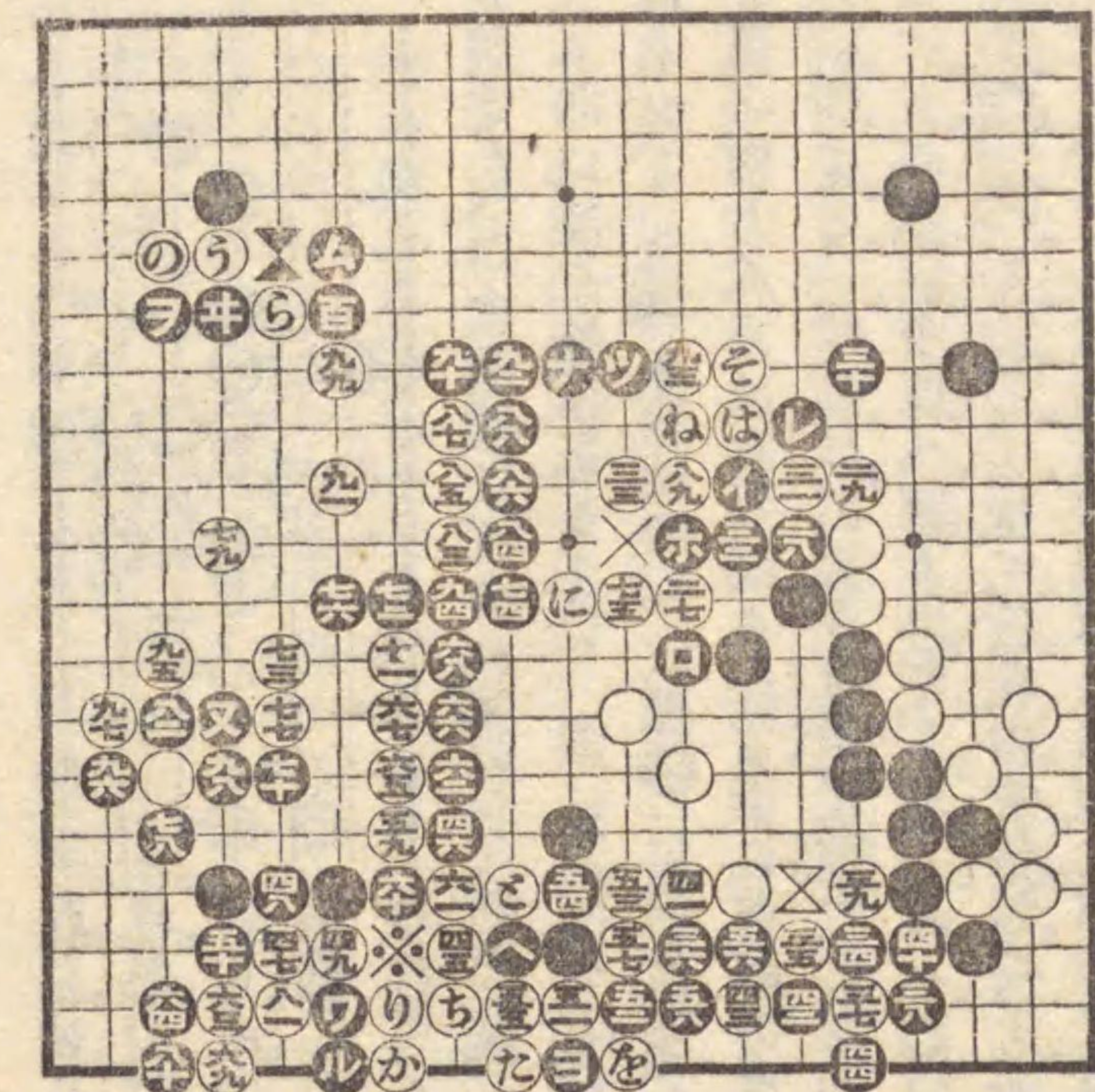


即ち打過ぎである。只黙つて⑪に飛ぶが宜い。既に⑫と押したからは⑬の跳ねに對して兎も角も⑭に跳ねべき筋である。⑮は白の懸りを妨げながら隅の締りをしたと云ふに止まつて敵の陣處が堅固であるだけ、一向響がない手であるから此の場合黒⑯に尖みつけ白⑰に行ひた時黒⑱に來んで、⑲の二子が如何に進退するか、其の動靜を窺ひ而して其模様によつては⑳以下の三子と搦み攻めの趣向をすべきである。

▲三 黒●閑門をノめて味方を苦む ●の飛

びは宜しくない。此の場合最も急なるは●一隊であるから●に押し、白●に飛んだ時、黒●に血路を開いて置かねばならぬ。然るに現在攻められて居る味方を保護せずして●と大手の締りをして而して白●に曲がることを餘儀なくせしめた結果、●の一手が泌々と味方に徹して形崩れとならしめたのは拙い打方であつた。●の曲りは如何にも働かない。武士の意地否な碁の筋に於て●に跳ねばならぬ處である。其時白若し●に切らば黒●に押し出すべく、又白●に切らずして●に跳ねば黒●に掛粘ぐ手があるではないか。●の尖みは甚だ卑屈である。此處は何か敵の圍を突破する手段を運らすべきである。兎も角黒●に曲り、白●に約へた時黒×印に附越す手段があるではないか。斯くて白の圍みを破るか、但しは戦ふか、何れにしても●に尖むよりは利益である。●の

(圖二第)局八十第



打込みは甚だ急に過ぎた。何とか他の處に轉じて徐々に趣向すべきであつた。●は無理も亦た甚だしい。●に引く外はない。然るに●に粘いだの●は何事ぞ、ナゼ●に跳ね出

して一子を擒にせぬのであらうか。其時●に突出さば黒●、白●、黒●、白●、黒●の粘ぎとなつて、白は如何とも手段がなからう。然るに●に粘いだ爲めに●に引いて活きられて了つたのは不覺である。●の附け出しも亦た無理であつた。圖の如くに突出されては●以下の眼形を失ふ恐れがある。因つて單に●に守るが本手であらうけれども急に●に打込み爲めに碁勢が不利になつたからは●に附越して戦争でも始めなければ間に合はないから無理に無理を重ねたに過ぎない。●の跳ねは單に●に行びて●の頂け切りを狙ふが宜い。左れば白は●に補ふの外なからう。ソコで黒●に飛び出して攻めながら中へ繰出す方が宜いのである。又●に出で●に突當らせ我れと我味方を隅に封鎖せしめたは拙策である。夫れよりは●に尖み出る方が宜い。

▲敵の懐ろに刃を置く筋 ●の下りも亦大悪手

である。單に●に夾むべきである。ナゼかと云ふに、●との交換がなければ●の急處に刃を置く筋があるのみか、白●から●に跳ねが利かぬとすれば黒先づ●印に突出し白●、黒●、白●、黒●、白●、黒●の時黒●に打込んで之を廢殺にする手段がある。然るに活くるに汲々として無造作に●に下り●に粘がして了つたのは惜むべきであつた。併し此の場合に於ては白から先手で●の跳ねを利かされるから、其の跳ねを利かされぬやう×印に一子を打抜くも亦た先手ではないか。だから●の約へは暫く見合せて、單に●に夾むが宜いと云ふのである。●の覗きも亦た無理であつた。先づ●に打つて、敵をブラ／＼中原に浮かして置いて、徐ろに趣向すべきであつた。●以下●までの押出しは頗る宜しいが、●の粘ぎは甚だヌルイ。兎も角も黒●に突出し白●、黒●、白●に行

びなば黒●に攻めつゝ●の粘ぎを間に合はせる方が働きである。又白●に行びずして●に掛粘がば黒●にあて白●に粘いだ時黒●に掛粘いで白を攻立てるが宜い。●の粘ぎはドウか單に●に飛ぶ方が宜いではないか。白はダメ詰まりになるから浮かと●に切ることが出来ぬのである。縦んば●の二子を取込まれた所が、四圍の工合によつては中手になるやうな氣味もあるから●に包んで了ふ趣向に打てば勝敗は早く確定するのであつた。●の間飛びは單に自己を守るに過ぎぬ手で感心しない。兎も角も●の處に中と隅の敵を遮断して上邊に荒れ出す趣向に打つべきであつた。而して都合によつては●以下の三子は棄てても宜いのに、然るに圖の如く黒から●に頂けらるゝに至つては最早や戦局の大勢は定まつたと云つて宜い。其の譯は白若し●にはねれば黒●に引いて上邊への出路が止まるべく、ソコで白が左邊を地に仕やう杯と云ふ考へで、固めて居るやうな事では大勢は去つて了ふ。左ればと云つて白が無謀にも挾間即ち×印杯に打てば黒●に出で白●、黒●、白●、黒●と何處までも押出して遮断すれば則ち中の白が危くなる。縦しや活きるとしても其の爲めに蒙る損害は中々容易の事ではない。折角遮断した×印以下の三子が却て厄介者になる結果を生ずるかも知れない。要するに黒から●に頂けらるゝに至つては白中押敗と斷定して誤りはない。斯かる結果を來したと云ふのは詰り白が無理に●に打込んで強ひて戦ひを起した暴虎的手段に因源するので、其後黒に多少の悪手はあつたけれども兎も角●以下の黒を紛れなく北へびらるゝに至つては最早や白に勝算なきことは明かである。

本因坊家の什寶

本因坊の家にて例年正月、松の内、床に掛る畫軸あり、養朴が筆にて楊貴山の肖像なり、又床の間の上面に、トコロの盤と稱するものを置く、盤上の碁筋は金梨子地菊桐の紋なり、左に置くは、浮木の盤と稱して形の厚きよりもおもひ合すれば甚だ輕きものゆえ名づけし成べし、右の方に置くは糸絛と唱ふる相の碁盤、蓋は極上の金なすぢにて葵の御紋なり、浮木の盤上に置く碁筋は黒漆金まき繪、櫻楓の寫眞なり、さくらの方は鷹司左大臣殿
君が代に逢ふべき春はおほけれど
ちるともさくらあくまでぞ見む
楓の方は近衛右大臣殿
色ふかきやしほの岡のみぢ菜は
こころをさえにそめて見るかな
右兩大臣仰せ合はされ、一雙づゝ一雙の碁筋なり、珍寶といひつべし、其籠遇のあつきを思ふべし。
右トコロの盤と菊桐紋の二具は始祖算砂法印本因坊へ豊臣太閤より賜るものなり、さくら楓一雙の碁筋は近衛、鷹司兩大臣より恩賜なり、金梨子地葵の御紋の碁筋は東照宮より賜ふとも或は臺徳廟よりたまふとも兩説ありて未だ詳ならず。

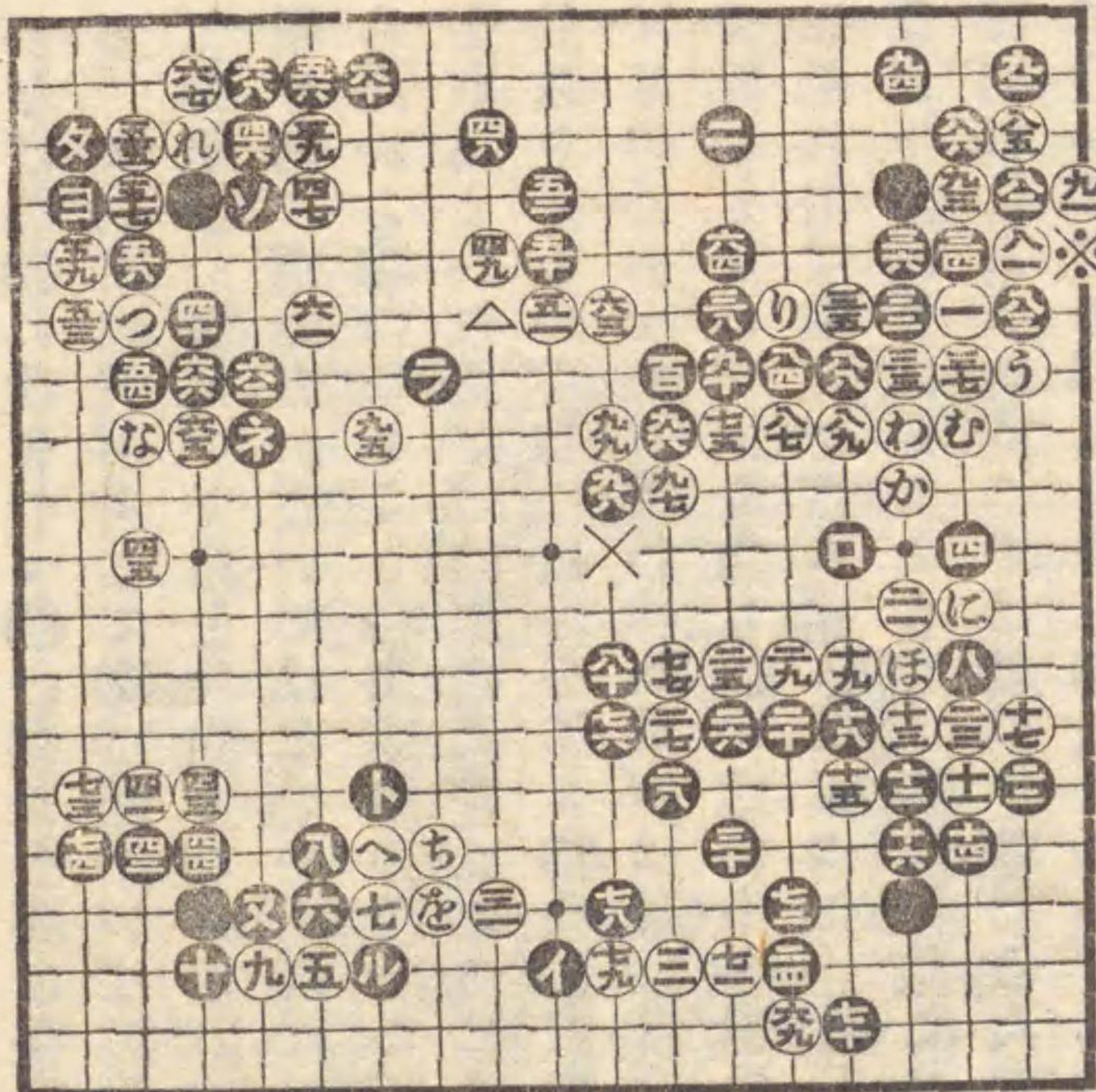
第二局 黒絶地弄兵

▲黒の切り三たび好機を逸す ▲黒の聯絡を閉殺す ▲黒敵を追立つ ▲黒敵膽を寒からしむ

第十九局

▲黒の切り三たび好機を逸す 黒は大場であるから敢て悪いと云ふ譯ではないが、兎に角と遠寄せに右下城に向つて砲門を据えたのに、其の防備をしないで、と陣取つた結果は詰り白に一と打たれてと右上隅の守備兵との間を割られた姿で、斯くては紛擾を起す基、置碁としては穩當の受手と云ふ譯に行かない、か或はに應ずるのが普通である。

(圖一第)局九十第



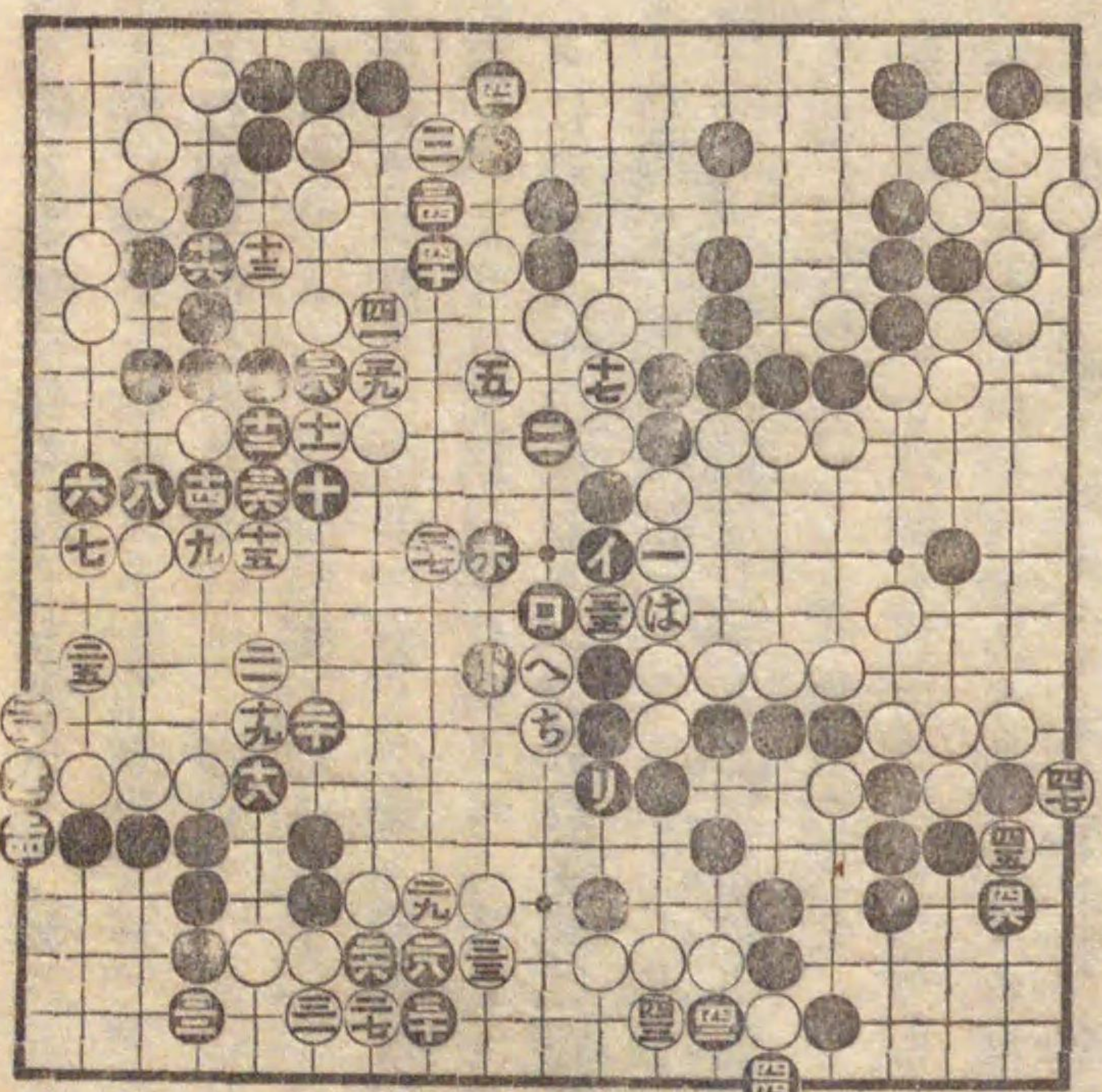
の頂けは何だか氣のない手である。一問高に飛んでの打込を狙ふに若くはない。是れ即ち先づ己れに備へて而して敵の虚を衝かん策略である。の趣

手となる、又白に跳ねずして一間飛べは黒はに行びてに突出す筋を狙ふべく、何れにしても先手での一子を擒にするのは此場合非常に大きい手で、夫れから上邊に着手しても遅くないのである。は甚だ悪手である。矢張り順當にに守るに若くはない。のはねも亦た悪い、兎も角に約へるが宜い、其時白にはねなば黒も亦にはね、白にあてた時黒に粘ぐ方が堅實である。然るに圖の如く白からに約へらるゝに至つては黒は所謂形崩れで、までの結果、隅と振變つたのは非常に黒の損たることは言ふまでもない。の尖みは、何ぞ夫れ卑屈なるや、此場合でも矢張りに切つて先手での一子を取込み而して△印を切つて戦ふべきであつた。左すれば白はに突込み切つての一子を抱込んで居る暇はない。縦しんばの一子を擒にされたからとて、得失を償うて餘りあるのである。も亦た大緩着である。丁度好機會、此機を逸せず切るべきであつた。の粘ぎは甚だヌルイ。に突んだ手並で大方に粘ぐであらうと讀めたから試にと覗いた迄の事、何故に黒はに抄さぬであらうか、其時白に約へなば黒に打つ筋を狙ふが宜い。に押しよりは先づに尖むが宜い。其時白に押しは黒に切り、白に約へ、黒を切り白に約へた時黒に跳ね、白に約へ、黒に粘ぐの即ち働きである。左すれば白は是非ともの切石を打援いて居らねばならぬからソコでに押しが宜い。のグズミは大悪手であつた。ナゼ※印に跳ねて居らぬのであらうか、同じ打つならば単に×印に飛んで居る方が餘程優つて居る。

▲第二 黒の聯絡を閉殺す 黒は單にはね出して白を攻める氣勢を示すに若くはない。夫は筋違ひであ

向は甚だ面白くない。斯くてはのの一子を見殺しにするやうなものではないか。此場合先づに尖みつけ、白に行びた時に飛ぶか、又は單にに打つ方が宜い。夫の切りは手順甚だ宜しい。のあては時機に非ず、兎も角もに置いて敵の應手を試むべきである。ソコで白に突出さば黒に曲るべく、又白に突出さずしてに粘がば黒は其儘棄置いてに守つて居るが宜い。左すればの切りの残る丈け利益であらう。の押しは白の趣向に籍つた姿である。兎も角もの急處に打つて敵の應手を試みてはドウか、其時白若し常の如く(に)押しは黒に跳ね、白に曲つた時黒轉じてに押し方が面白い。以下までは至極宜いが、は抑も何の著手ぞや、一向無意味である。既にと頂けと約へた以上は其意を繼いでドウしてもに切つて戦はねばならぬ處である。白若し(に)行びるとせんか、黒に行びなば如何、白は甚だ應手に苦むのである。場合に依ればの切石を棄てても損はないのであるから兎も角一本切りを試むべきであつた。は即ち定跡で、確かな趣向ではあるが、併し圖の如く(に)開かれる手順になつては白の意向通りになつた譯である。斯かる場合に於ては定跡に泥まず、白の打たんと欲する(に)先鞭を着けて敵の趣向を挫くに若くはない。は緩着であつた。矢張り普通の如く(に)あて(に)の切りを狙ふが宜い。と云ふのは(に)の白は一間飛びで上が一問透いて居るからで、是れが若し(に)に並んで居るとすれば勿論(に)印を切る手はないから其時こそ圖の如く竹節に粘ぐべきであつた。に尖みつけ次いで(に)夾んだ趣向は頗る振つてるが、の頂けはヌルイ、何故に(に)切らぬのであらうか、白に跳ねなば黒に行るべく、左すれば白は尙ほの切りを防がねばならぬから黒が先

(圖二第)局九十第



る、此處は(に)飛ぶか或は(に)飛ぶのが手筋でもあり又利益であるから暫く見合はして置くべきである。の切りは悪手であつた。此場合は(に)聯絡を保つのが一番大きい。其時白若し(に)へ跳ね込まば黒、白、黒、白、黒、白、黒、白、黒、の粘ぎとなつて中の黒は上下孰れへか聯絡することが出来る。(に)へ跳出すよりも矢張前述の如く中の二子を助けるや(に)に約へる方が宜かつた。の粘ぎは時機尙早し、(に)飛ぶが宜い。の切りとは見合ひの處であるが、黒としては(に)切取るよりは(に)粘ぐ方が大きいのである。

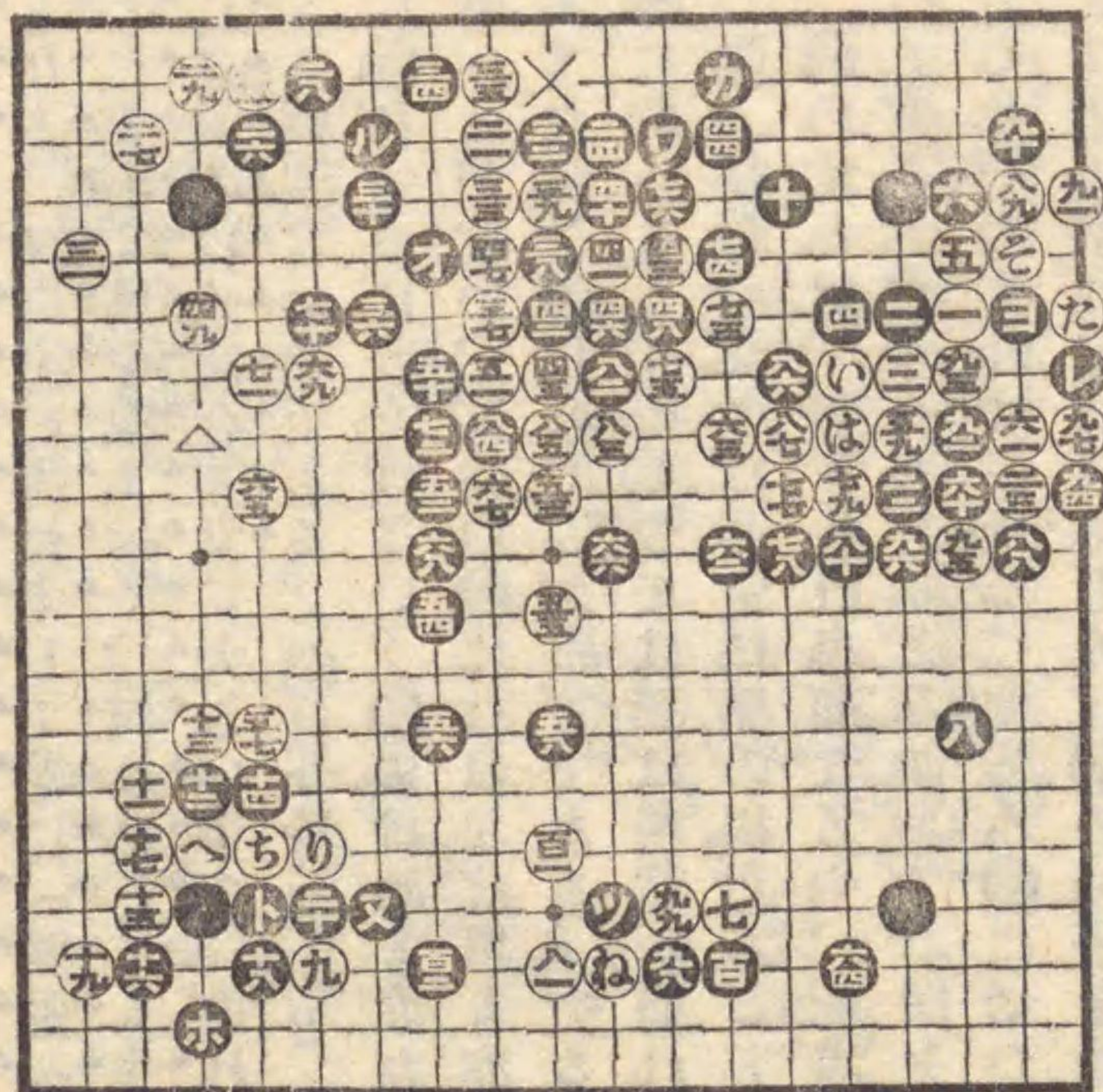
▲黒白の大勢 第一圖黒以下三たびの切りを失したの一大失策であつた。次に以下左上隅に於ける戦ひに於て白に全然隅を占領せられたのは非常の損害であつた。夫れからの一目を切取らるゝことを怖れてと尖んだのは最後の大失着で大分細碁になりさうな形勢になつた。夫れでも順當に行けば無論黒の勝に歸すべき形勢であつたが「ヨセ」に於てポツポツ損をした爲めに竟に黒が一目の敗に

終つたのは惜むべきであつた。

第二十局

▲黒○の手順を誤る ⑩は不急の著子である。敵は⑨と左下城に向つて攻寄せて来たのであるから先づ⑧と守備を固ふするのが戦ひの常法である。⑧に打つ積りならば先づ⑧と打つて敵を攻め白⑨、黒⑩と愚形になつた所で、退いで⑪に守るのが本筋である。然るに先きに⑩と締つて後の急處に打つた所が、白は敵の備へは堅固であるから黒の豫算通りの杯に押しは呉れない。「不若則能避之」の極意を守つて軽く⑩に去されて了ふ。斯う云ふ呼吸があるから手順と云ふものは大切なのである。⑫は矢張り⑩にはね込んで通形の如く打つに若くはない。⑬は随分苦しい手である。白より⑭に跳ねらるゝに至つては其損害は無數である。寧ろ⑮

第十二局



にかけ粘ぐが宜い、其時白⑮に突出さば黒⑯に行ひ、白尙ほ⑰に出づれば黒⑱と上下振變はつて少しも割合が惡くないのみか、此一局部に於ける彼我の形勢が

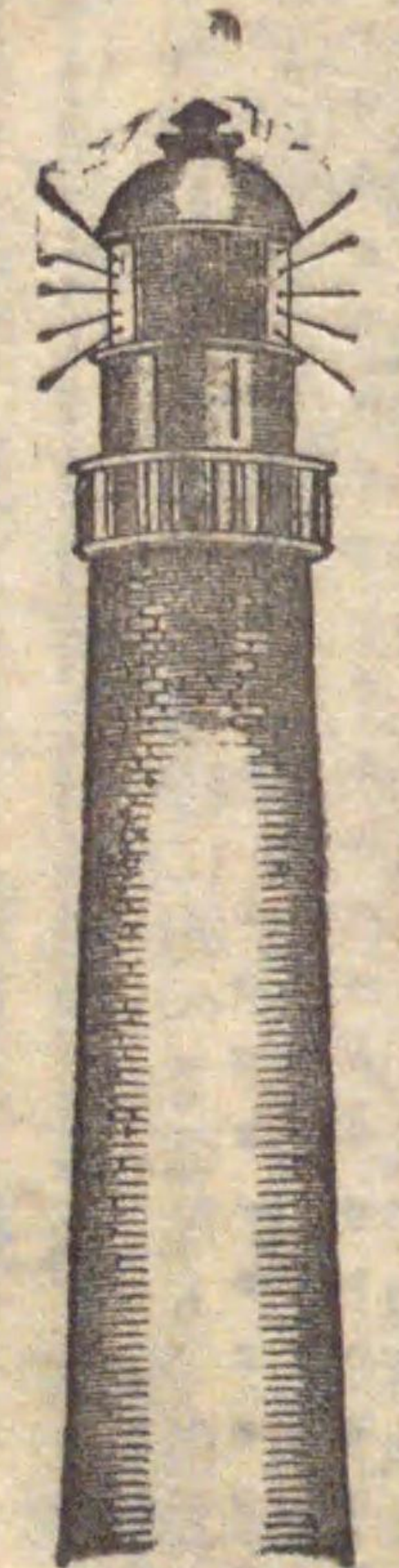
る氣遣ひではない。左邊△印に反撃を加ふべき好機會である。然るに此機會を逸したのは惜むべきであつた。
▲黒○の敵膽を寒からしむ ⑮の一着は何だか漠然とした手ではあるが至極適當の位地に居るので。自分はその意味を知るに苦んで頗る應手に窮した。蓋し兵法に所謂「先處戰地」而待敵の手段なるか、情々考ふるに下邊に於ける⑰の味方を目掛けて北げ出せば黒は必ず之を遮断すべく、自然弱み攻めに遇ふの厄があるから止むを得ず圖の如く連絡を保つたのであるが、斯くては詰り先づ黒から⑱と視かれて下邊への出路を工合好く堰止めながら大模様を作られて了ふ。斯う云ふイキサツがあるので⑲の一着には殆ど應手に苦んだのである。⑳は時機尙ほ早し、先づ㉑の意思を繼いで㉒に覗きを試みよ、左すれば白は㉓の間を断たれる恐れがあるから何とか其凌ぎをせねばならぬ、夫を機會に下方への出路を塞くが宜い。㉒に尖む位ならば寧ろ㉓に約へて置く方が安全である。㉒以下は即ち白の出路を塞いで其備へを厚壯にしたのであるから決して悪い事はないが、併し㉔の手で㉕の要衝に白㉖の活路を止むると同時に自己の地域を定めては如何、白㉗は四面皆楚歌の聲、下邊には到底活路に就く餘地がないから、中原の味方の居る方へ引還へさねばならぬ。其時之を遮断して戦ふも亦た一策である。或は白直ちに㉘の逃げに著手せずして㉙の方面から行ひ出して來たらば多少棄てよも㉚の一子を擒にして勝つ趣向もあつた。㉛と覗き㉜と約へたのは誠に好い手順で、白は甚だ苦んだ。㉝は蓋し思ひ違ひであつたらう。死は跳ねに在りと斯く打つたかは知らぬけれども㉞に一本の切りを入れらるゝ利があるので却て活かして了つたのは惜むべきであつた。㉟に跳ねる手で㊱印に置き、白は㊲

(七〇)

劃然と定まる丈け打ち易くもあらう。㊳は前に言つた通り風に柳と㊴に北げられて了ふから此場合は一路低く㊵に攻寄せて之を追立て而して成るべく。㊶の一子を活躍せしむる趣向に出づべきであつた。㊷は誠に洒落た手のやうであるが、ドウも是れでは收まりが惡いから矢張り順當に㊸に掛粘いで居るが宜い。左すれば白は㊹に斜走するであらう。其時黒㊺にボウシに冠する手段もあるが、夫れよりは㊻に煽つて攻立てる方が穩當で、隅を敵に與へても決して損はない。
▲黒○の敵を追立て ㊼と突當つたのは何の意ぞ、左なきだに白は北げたくて堪らぬ矢先、ワザ／＼突當つてサアお北げなさいと催促したやうなものである。ナゼ此手で㊽へボウシに冠せぬのであらうか、左すれば白は随分應手に窮したであらう。㊾は抑も何と云ふ手ぞや、敵は今中原に向つて北げやうと此機に乗じて、之を攻立てながら大いに形勢を張るべきであつたのに、場所もあらうに亘らるゝ氣遣ひのない崖邊の絶地へ廻つて㊿と兵を弄ぶこそ情けなけれ、棄置けば亘る了簡かは知らぬが、白は決して棄置く氣遣ひはない、㊿と下られては却て右方に種々の損が残るではないか。單に㊿に煽つて敵を攻立つるが宜い。㊿も亦たヌルイ。㊿に煽るべきである。白は一寸北げ方に困るだらう、白㊿の出切りは無理であつた。單に㊿に粘ぐ外はない。㊿亦た甚だ無理であつた。矢張り㊿に粘ぐ外はないのである。黒は何故に㊿の手で㊿に突出さなかつたであらうか、其時白㊿に飛込まば黒は單に×に約へて居るが宜い、又白㊿に飛込ますして㊿に曲り込まば黒㊿に受け白㊿、黒㊿のはねとなり、何れにしても黒の方が手数が宜いのであつた。㊿と駈足で北げて繋がつたのは餘りに憶病である。モウ㊿まで北げ延びれば決して取られ

に夾む外なく、其時黒㊿白㊿と劫に打つより外に手段がない。斯くては一層ヒドイ負けになつたであらう。㊿甚だ善し、併し㊿に引く手にて兎も角も㊿に跳ね出し白㊿に切つた時㊿に引いて居るも亦た面白。圖の如く黒に㊿と運ばるゝに至つては到底白に勝算がないから潔く白旗を掲げたのであつた。

▲總評 本局の前半に於ては黒㊿以下大分惡手があり爲めにドウやら物になり掛けて來た。所が後半に至り㊿以下着々適當な處に打たれて白に大勢を制する機會を與へず竟に白旗を掲げしむるに至つたのは天晴の手柄で、就中㊿の一着は儘に金鶏動章に値ひする好着であつた。



第廿三局 黑▲ 啊呷の呼吸

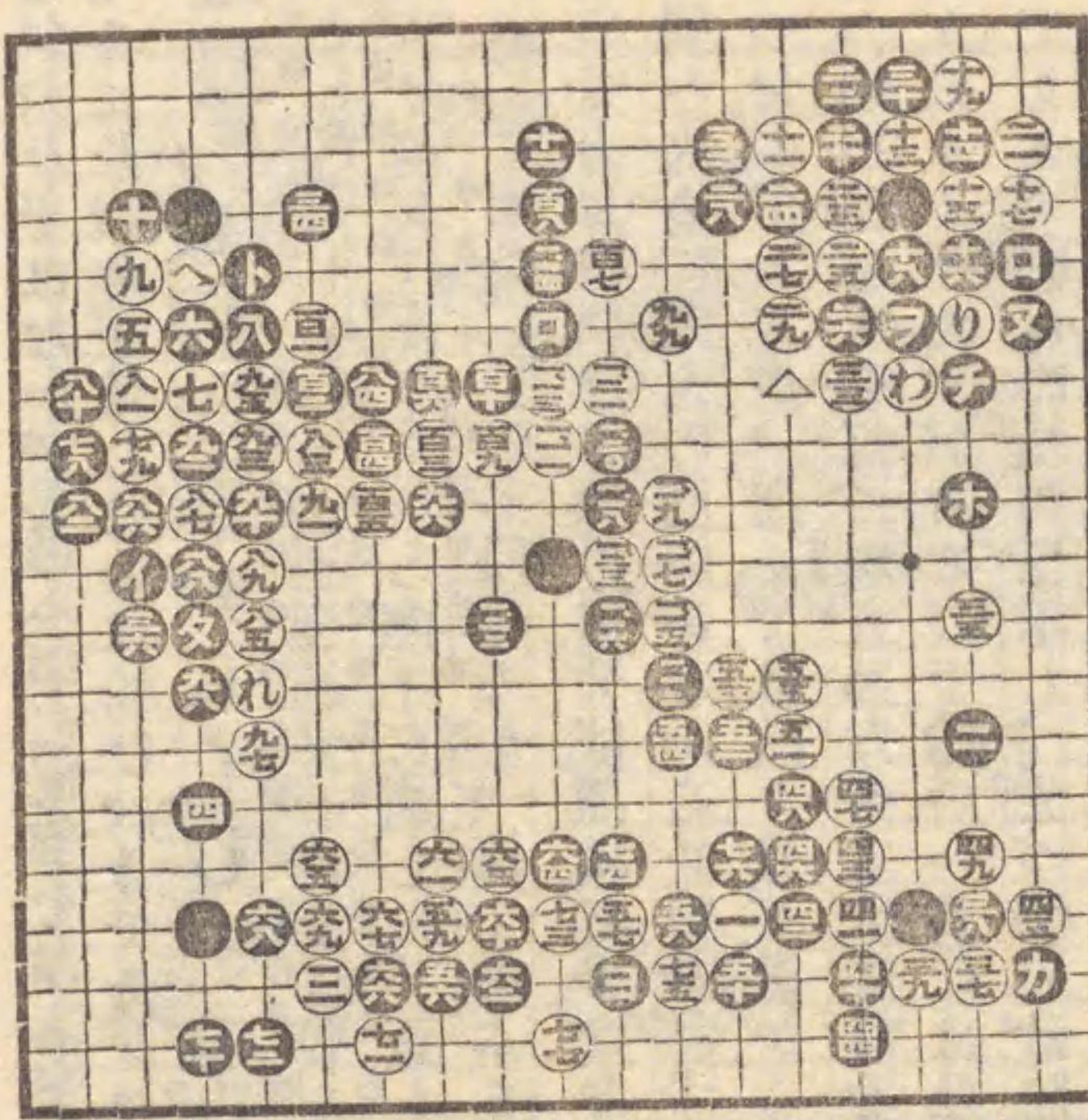
▲三十六計應用の場合 ▲藪蛇を驅り出す
▲▲の跳ねと隅の死活

第廿一局

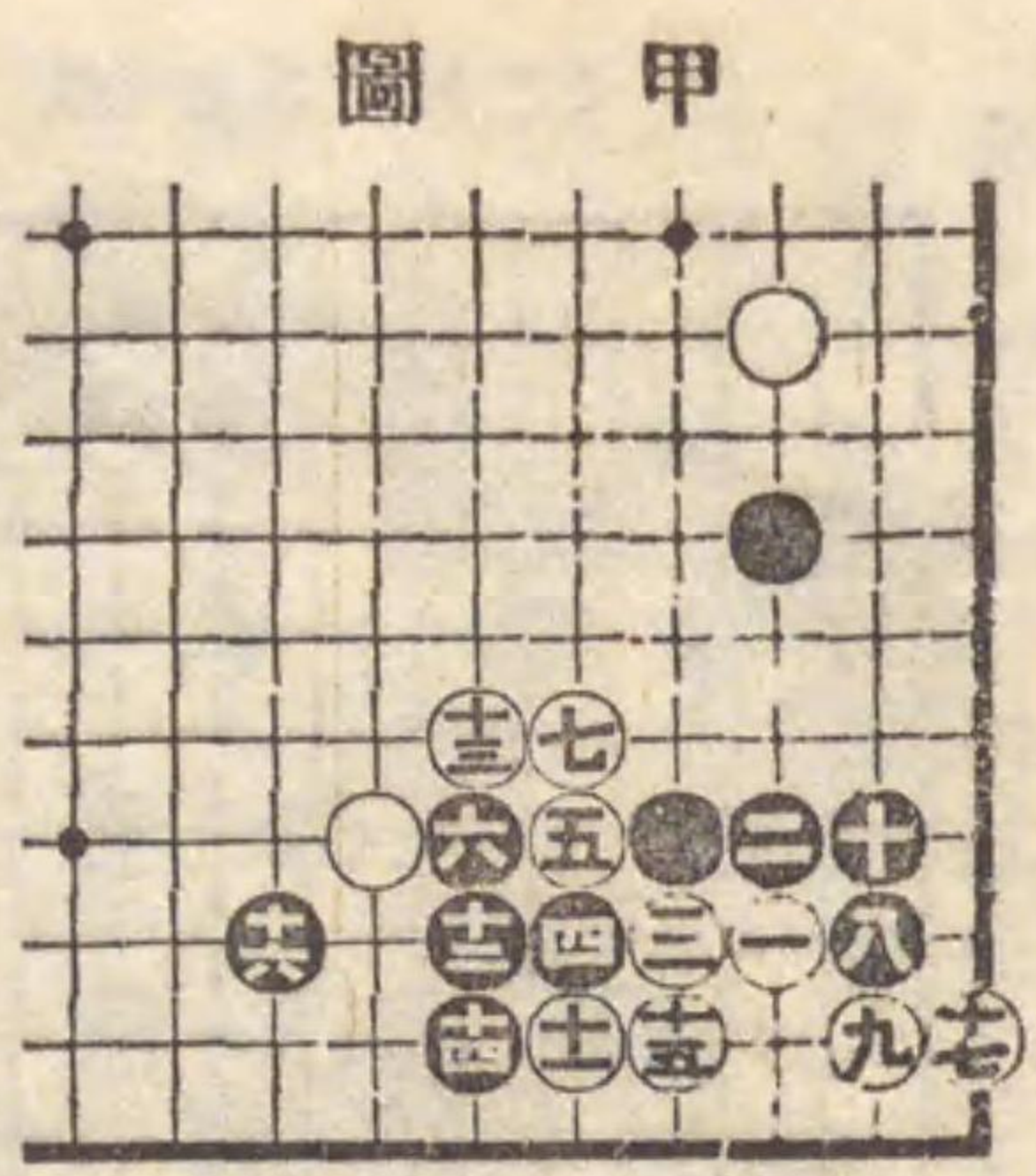
▲黑三十六計應用の場合

合甚だ當を得ない。●に夾むのが布石法の通形である。▲は普通の如く隅に應じて居るよりは斯く夾む方が遙かに優つて居る。其譯は左上隅は即ち頂け定跡で、構へが高いから其釣合を取るには是非共●の要點を占領せねばならぬ。斯かれば壘壁高く深き趣きがある。▲の粘ぎは手順を誤つて居る。

▲▲ (圖一第)局一十二第



何故に▲へはね込み白●に行びた時に粘がぬのであらうか。然らば白は▲に曲る外はあるまい。ソコで黒●、白●の時黒●に備ふべきであつた。頗る優勢ではないか。又今



呼是れ何の手ぞや。何故に▲に跳ねないか。其結果は甲圖の如くなつて上の黒を先手で捌くことが出来るから本圖の如く振變るよりは餘程利益である。▲までの結果は非常に黒の不利であつた。▲は時機尙早し、先づ左上隅の白軍に向ひ▲に迫つて此白を追立つるが宜い。左すれば此碁は未だ黒の落膽すべき形勢ではない。

▲▲藪蛇を驅り出す ▲は非常の大悪手であつた。蓋し白に▲と切られ▲と打つて擒にされる手を見損じたのであらう。▲に約へて確かにして置くに若くはない。然るに▲の藪を覗いて▲に蛇を驅出した以上はモウ仕方がない。損でも▲にはねて涉つて居る外はない。然るに圖の如く四子を擒にさるゝに至つては最初▲と突出し▲以下の三子を棄て、振變つた左側中邊の勢力範圍の大半は反對に敵に占領された譯で、詰り▲以下の三子は犬死をした譯である。▲以下▲と切り僅に▲の棄石一子を取つて却て敵の備へを堅固にしたのは甚だ拙策であつた。夫れよりは▲の手にて▲に突當れ、白は▲に行びる外なかるべく、ソコで手を抜いて▲の要處に先鞭を着くれば未だ勝敗は分らぬのである。▲の手でも尙ほ▲に備ふるの優れるに若くはない。然るに此の要衝を閉却して白から▲と飛ばれるに至つては黒の形勢漸く非なりと謂はねばならぬ。▲は單に▲に突んで居る方が宜い。兎に角▲へはねて大封域を確定されて了つては黒地も可なりあるけれども多少の敗は免かれ難い形勢である。

▲總評 此碁は第一着に右上隅に於て▲のはね込みを逸

(七二)

の手順中白▲に曲る手で、●に曲つて來たらば黒●に下り白▲に曲つた時黒●にはねて内外振變りとなるべく、斯くては黒の形勢は益々優勢である。然るに惜いかな黒●のはね込みを逸した爲めに▲にはねられて▲に只取られては少しく損をした譯である。▲は緩みである。事茲に至つては勢ひ止むを得ぬ。▲にあて、戦ふ外はない。其時白若し▲に切つて來たらば黒●に劫を取れ。此の場合白は劫立てとして左上隅●に突出す外あるまい。左すれば黒●に約へて可なり、白劫を取つた時黒●に切つて劫を敵に譲り、▲以下の三子と振變るも善し、或は又▲に受けずして劫を粘りでも打てぬ事はない。然るに單に▲と下つたのは如何にも働きがない。爲めに▲と切られ以下▲までの結果、茲に縛を生じたのは甚だ黒の不利である。況や▲以下の四子をムザ／＼見殺しにしたのは洵に惜むべきであつた。兎も角▲に飛んで敵の應手を試るが宜い。其時白●に打込まば黒●、白●、黒●、白●、黒●の粘ぎとなるべく、斯くては散々圍子にされて崖邊を北げる姿で、不斷は好まぬけれども、此の場合に於ては敵には▲印の截創あるのみか、隅の一圍は未だ完全に生きて居ないのであるから、旬う位の損は仕方がない、何でも三十六計北げるに若かずと虎口を遁れて了へば敵は跡辰りをして後手で活きて居なければならぬ場合である。ソコで他に先鞭を着ける方がムザ／＼見殺しにするよりは優しではないか。若夫れ▲以下の四子を棄て、他に轉ずる位ならば、▲と只自分の固めをするよりは寧ろ▲の急處に攻寄せて敵を攻め立てつゝ上邊の締りを爲すべく、働き掛くべきである。▲は閑手である。何もソコに遠慮するに及ばぬ。此の場合▲に詰めて成べく自分の繩張を擴げると同時に敵に痛切に響くやう打つべきであつた。▲鳴

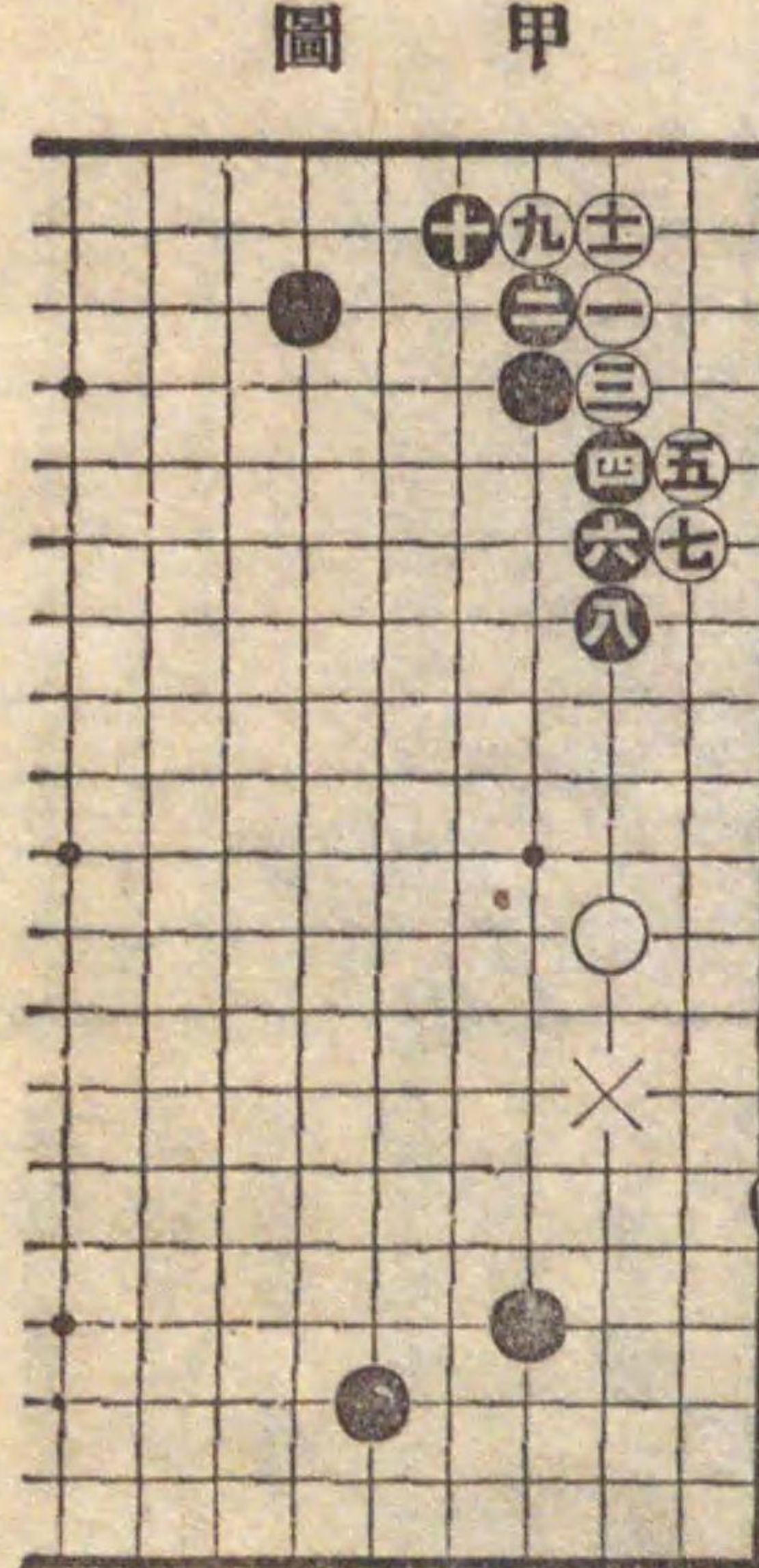
第廿二局

▲▲の跳ねと隅の死活

し、爲めに此振變りに於て多少の損を爲し、第二に右下隅の戦ひに於て▲と下り此の振變りに於て又幾分の損を招きたる上は、下邊の戦ひに於て其の償ひを取らねばならぬ碁勢であつた。然るに黒●と藪を突いて遂に四子を失つたのは第三の失策で、事茲に至つては最早や置碁として先づ勝つ見込はないと云つて宜い。夫れでも早く▲の要點に先鞭を着けたらば尙ほ勝敗を争ひ得たかも知れぬが是れ又敵の占領する所となつて到頭負けと確定して了つた。

▲▲の跳ねと隅の死活 本圖▲の締りは布石の當を得たものでない。圖の如く▲と掛られた姿を見よ。●と▲との間合よくなるのみか▲の夾みは遠いながらも左上隅に響いて居るではないか、換言すれば左上隅に向つて▲と遠寄せに攻め掛りたるにも拘はらず、其の防備を急いで▲と右上隅の締りをした姿である。同じ締るならば▲の手で▲に締る方が釣合ひが宜いのである。▲亦た面白くない。斯くの如く大手、捌手共に樞明の姿勢に構へると云ふのは思むべきである。同じ打つならば▲に締る方が宜いのであるが、此の場合寧ろ手を抜いて他の要處に據るに若くはない。▲は此の場合▲に約へて甲

▲▲の跳ねと隅の死活 本圖▲の締りは布石の當を得たものでない。圖の如く▲と掛られた姿を見よ。●と▲との間合よくなるのみか▲の夾みは遠いながらも左上隅に響いて居るではないか、換言すれば左上隅に向つて▲と遠寄せに攻め掛りたるにも拘はらず、其の防備を急いで▲と右上隅の締りをした姿である。同じ締るならば▲の手で▲に締る方が釣合ひが宜いのである。▲亦た面白くない。斯くの如く大手、捌手共に樞明の姿勢に構へると云ふのは思むべきである。同じ打つならば▲に締る方が宜いのであるが、此の場合寧ろ手を抜いて他の要處に據るに若くはない。▲は此の場合▲に約へて甲

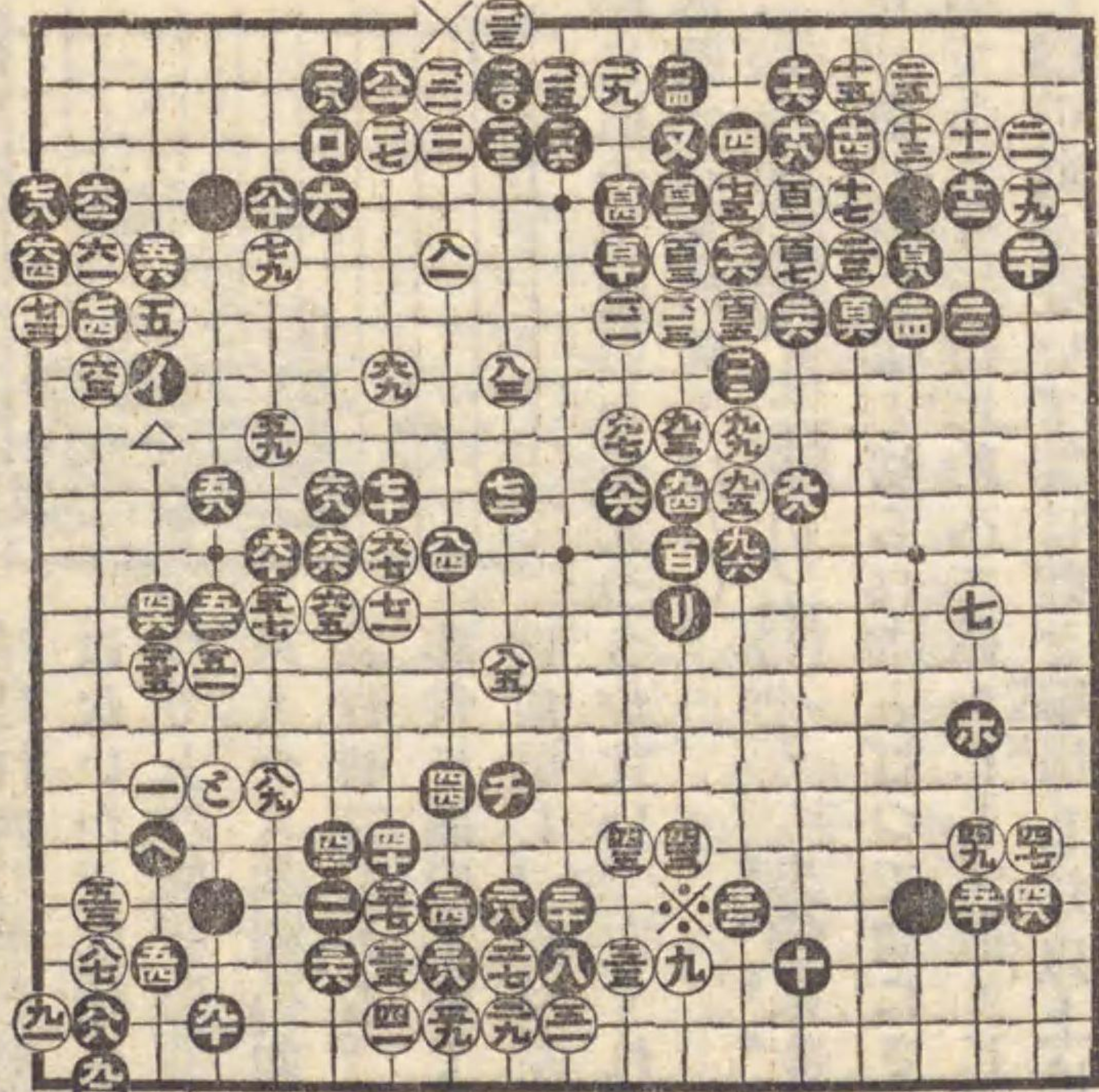


▲に約へて甲圖の如く打つが宜い。夫れは詰り黒が先手になつて×印へ詰める手が非常に宜い

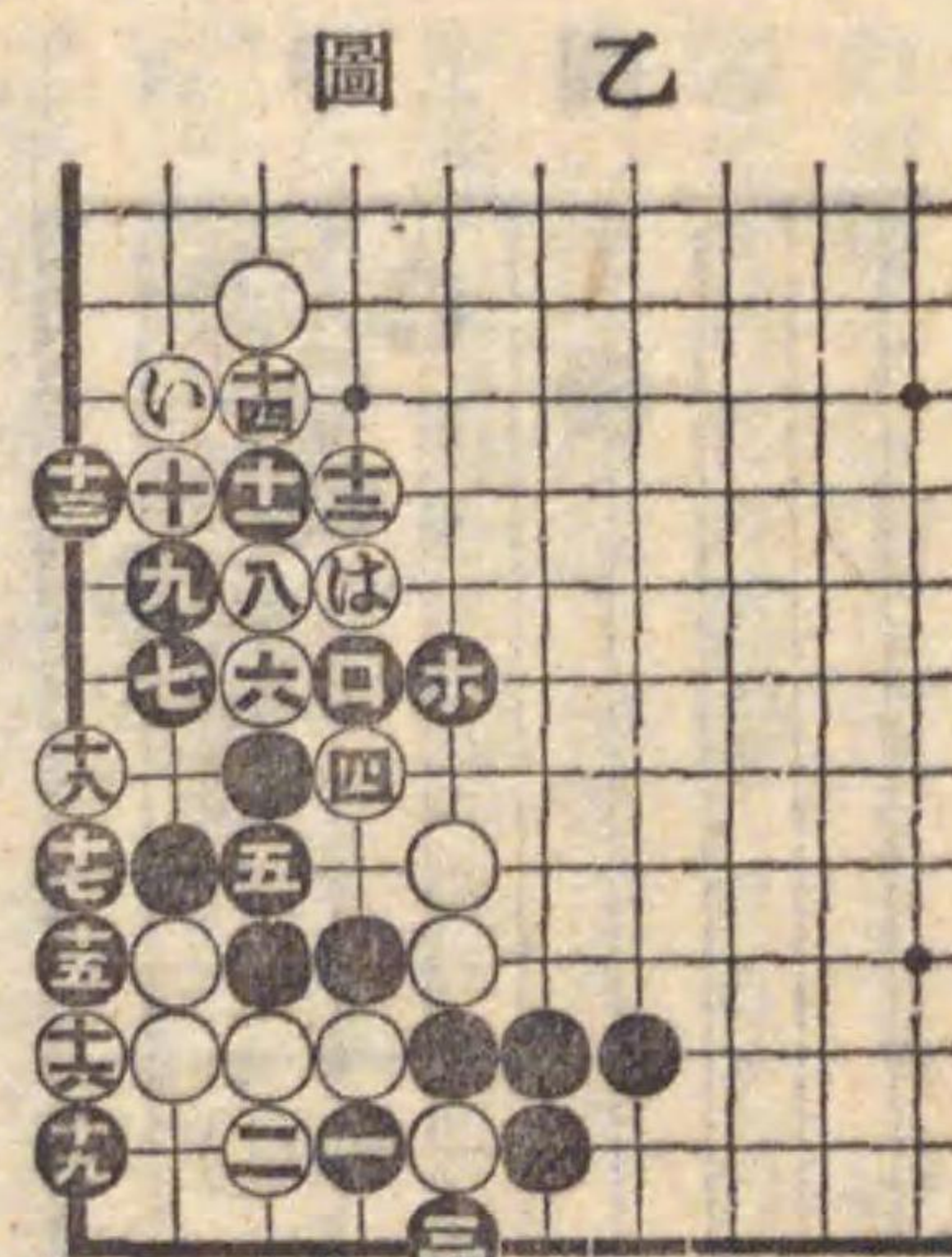
(七三)

からである。●の行びは甚だ無理であつた。何故に黒は直ちに●に取込んで行かぬのであらうか、其結果乙圖の如く隅の白を擒にすることが出来るのである。併し茲に注意を要するは●のはねが利いたから擒にすることが出来たのであるけれども白が若しも此はねを利かさぬやうに行びたならば黒●に切るべく、白●、黒●となりて●以下の三子を「してう」に取るか、下の三子か何れかを擒にすることが出来るのである。然るに本圖の如く●と掛けて取るに至つては●の二子は尙ほ多少の味を存して居る丈け黒の方が不利である。●は單に行びて敵を兩斷し而して先手を取つて●の急場に打つ趣向に出づべきであつた。●の粘りは如何あらうか、コ、では●に下る方が宜い。其時白●に切らば丙圖の如く二目を棄てて左側を固め而して本圖●の急場に先鞭を着くべく、又白●の手にて●に飛ばし黒●に粘ぐべく、ソコで白●印に押さば

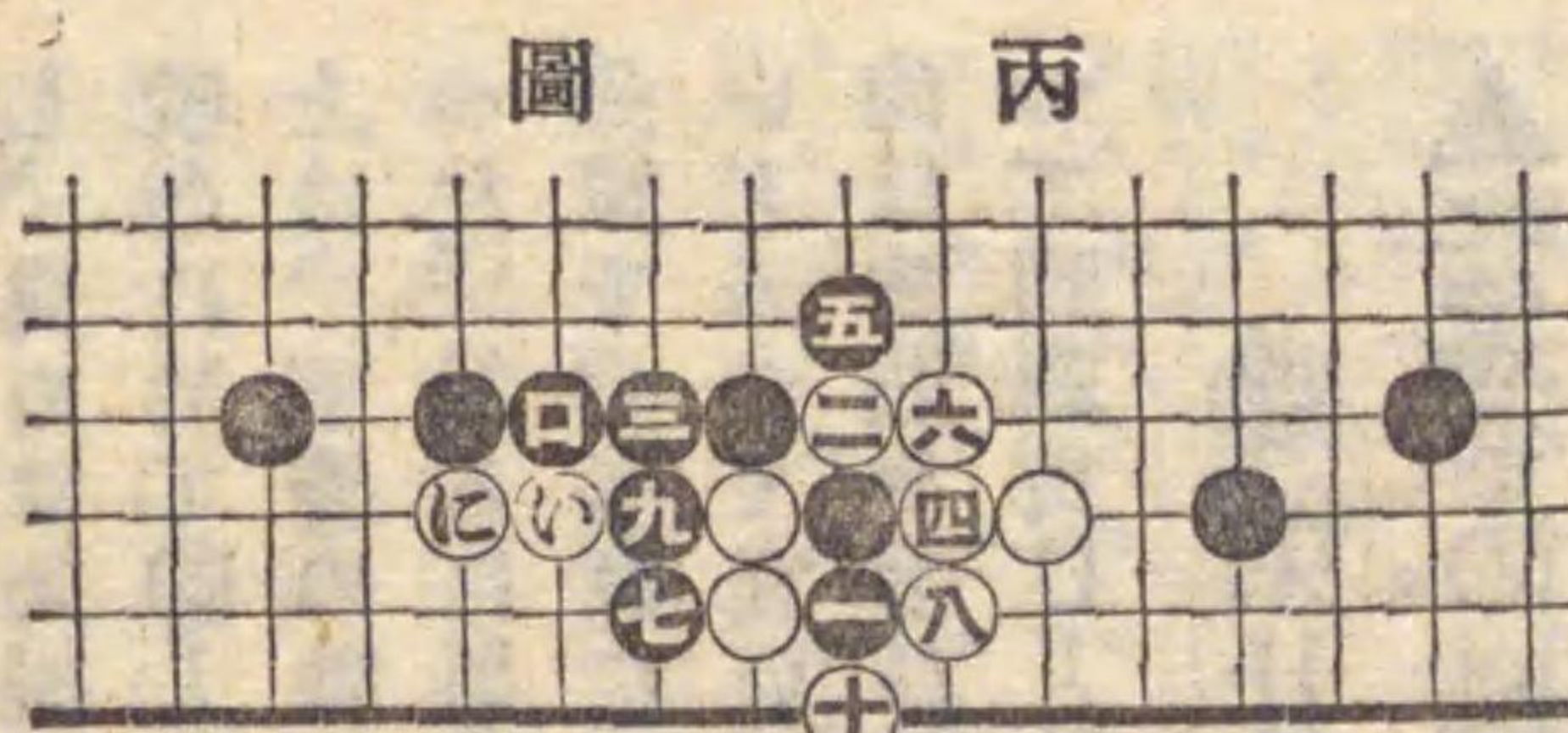
局二十二第



黒は手を抜いて●にはね出して可なり、或は又白●印に押さずして●に打たば黒は矢張り●にはね、次いで●に突出して●と同じく二目を棄てて打つ方が宜いではないか。●



は何の手ぞ、一向敵にコタへないではないか。同じ打つならば●印に頂くべきである。●、斯くの如くダメを詰めるは宜しくない。何故かと云に本圖の如く●へ飛出された時に●のダメが透いて居れば四圍の模様によつては●に突出し、次いで●に切斷して了ふことも出来るのである。然るに●と態々ダメを詰めては出切りの味が失くなつて了ふから單に●に約へるが宜い。●の粘りはヌルイ、先づ●に尖みつけ白●に行びた機みに●に粘ぐのが手順でもあり、又後に黒が●に打込んだ時白●の一子が二目になつて重くなつて居る丈け黒の利益である。●の掛粘ぎは●に打つのが形である。●は下邊の黒は非常に堅固であるから、●に押して白の眼を奪ひながら我が堅壁の方へ押し付けて打つべきであるのに、然るに圖の如く我が堅壁間際で●と約へて悠々活形を備へられたのは甚だ不用意であつた。●は此の場合必ずしも跳ねるに及ばぬ。單に●へ飛んで居る方が軽くて宜い。●の手は先づ白の薄みを狙つて●に打つが宜い。左すれば白は何とか其の補ひをせずばなるまい。ソコで●に打つべきであつた。●は此の場合●に打つて三子を取切るの安全なるに若かずである。其時白●に押へなば黒●、白●、黒●に飛んで眼形を成すことを得べく、左側にも△印に尖む手筋があつて直ぐに一眼を作り得るユトリが



ら況して此の場合に於ては尙更らである。夫れは宜いが●以下●まで押し付けたのは時機尙ほ早い。先づ●に斜走し而して白が如何に此の模様を消しに来るかを窺つて而して後●と押すか押さぬかを決すべき●の呼吸の存する所である。殊に●の處は黑白共に極めて大切なる急場であるから圖の如く●と押しながら●の急場を顧みなければならぬと云ふ後顧の患あつて、碁が急になるから●の押しは暫く見合せが宜い。然らば白から●と押されたらドウかと云ふに●にはね、白●、黒●となつて益々黒地を固めて了ふ結果を生ずるから白から●と押す手は萬々ない筈である。左すれば何も黒が●と急いで押すに及ばぬと云ふ道理が分るであらう。●の侵掠手段は頗る六ヶしい處で、能く考へて見ると●の方から減らして行く手段に出た方が宜かつたやうに思はれる。其譯は黒軍左右の兵備中ドチラが薄弱であるかと云へば無論右邊の方が手薄であるからである。●と頂け●と切つたのは劇しくて至極宜しい。白は殆ど打ちやうに困つた。●の粘ぎは重い。穩當に●に粘ぐべきである。左すれば白は甲圖の如く打つ積りであつた。此白兵戦は如何なる結果を齎すべきかは次圖に譲る。

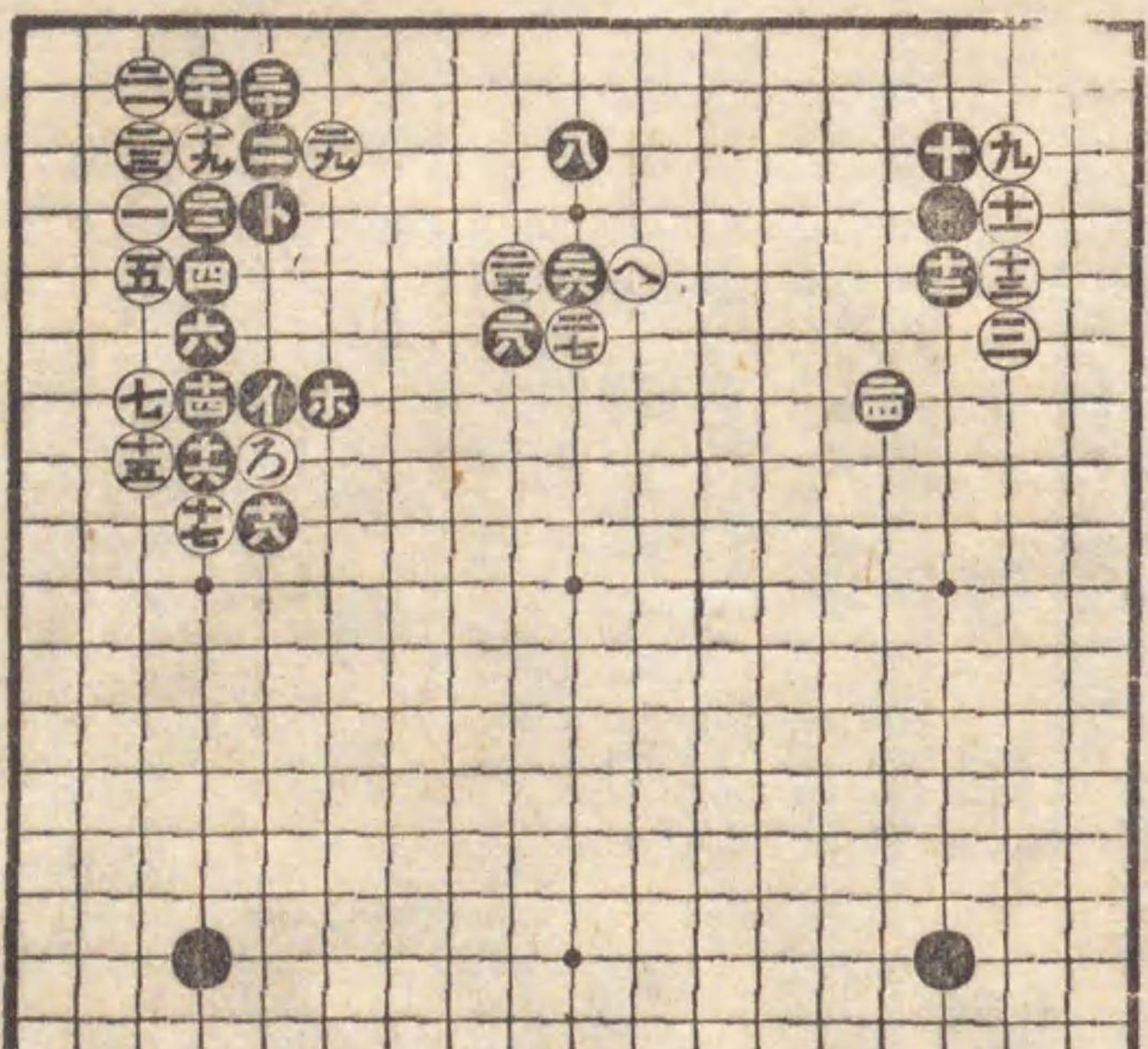
あるから中の黒は少しも怖るゝに足らぬ。然るに圖の如く黒●までの結果●と粘がれて北げられたのが抑も紛れの基であつた。●の手で●に打ち白●の時●に打てば確かに活きである。若し白●に下らずして先きに●に置かば黒●に粘ぐべく、ソコで白●に下らば黒●に尖みつけて活きである。●の時モウ斯うなつては致方がないから×印に直る外はない。然るに圖の如く●に亘つて擒にされては黒の大敗である。蓋し是れは思ひ違ひであつたらう。

第二十三局

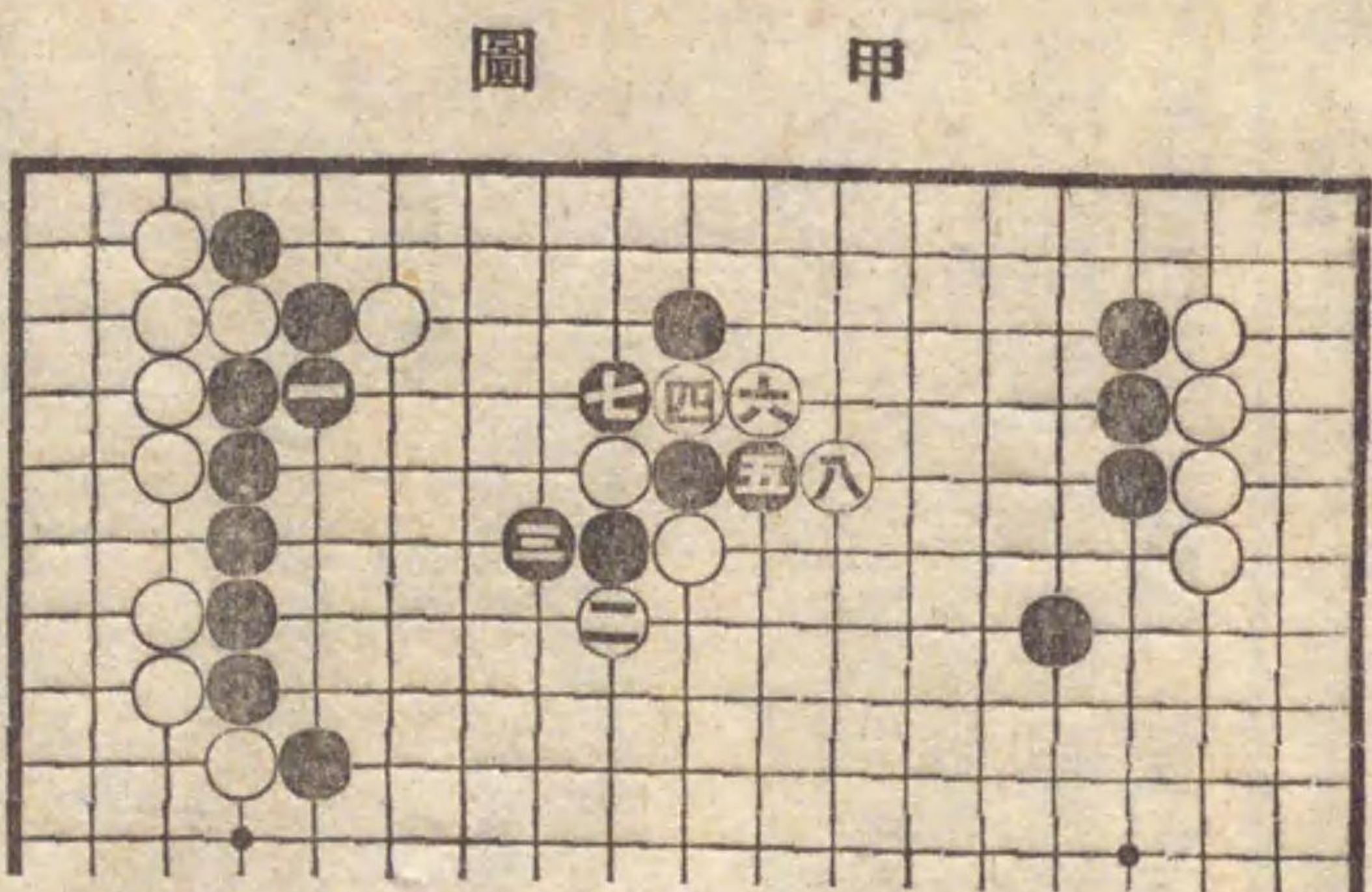
▲●は啊伝の吸呼の存する處

●の黒に對し一間より三間までの夾みに打つのが置碁に對する普通の形であるが、其形は屢々現はれて居るから通形に泥ますして本圖の如く試みたのである。之れに對して●以下●

第二十三局(第一圖)



までは紛れのない打方であつた。●の打込に對して黒●以下●と打つて敵を一方に集中せしめて、左方に於ける味方との釣合ひを取つたのは機宜の措置であつた。「もくした」に●の一子丈けある時ですら斯く打つて宜いのであるか



ら況して此の場合に於ては尙更らである。夫れは宜いが●以下●まで押し付けたのは時機尙ほ早い。先づ●に斜走し而して白が如何に此の模様を消しに来るかを窺つて而して後●と押すか押さぬかを決すべき●の呼吸の存する所である。殊に●の處は黑白共に極めて大切なる急場であるから圖の如く●と押しながら●の急場を顧みなければならぬと云ふ後顧の患あつて、碁が急になるから●の押しは暫く見合せが宜い。然らば白から●と押されたらドウかと云ふに●にはね、白●、黒●となつて益々黒地を固めて了ふ結果を生ずるから白から●と押す手は萬々ない筈である。左すれば何も黒が●と急いで押すに及ばぬと云ふ道理が分るであらう。●の侵掠手段は頗る六ヶしい處で、能く考へて見ると●の方から減らして行く手段に出た方が宜かつたやうに思はれる。其譯は黒軍左右の兵備中ドチラが薄弱であるかと云へば無論右邊の方が手薄であるからである。●と頂け●と切つたのは劇しくて至極宜しい。白は殆ど打ちやうに困つた。●の粘ぎは重い。穩當に●に粘ぐべきである。左すれば白は甲圖の如く打つ積りであつた。此白兵戦は如何なる結果を齎すべきかは次圖に譲る。

村瀬師定石 方圓新法 和裝金壹圓八拾錢 二冊 送本料拾八錢 五段 著 實力養成新式死活研究 棋盤なくとも自由自在に研究和裝美本箱入二冊 金貳圓四拾錢送十八錢

方圓社社長七段中川龜三郎師著

八版 圖 布石攻合法 和裝美本箱入二冊 定價金貳圓四拾錢 送本料金十八錢

再版 圖 布陣挑戰法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓八拾錢 送本料金十八錢

四版 圖 先定石新法全

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓四拾錢 送本料金十八錢

新刊 大斜定石法

和裝美本箱入二冊 定價金貳圓四拾錢 送本料金十八錢

五版 打碁と要領

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓八拾錢 送本料金十八錢

重版 極意新圍碁寶典

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓四拾錢 送本料金十八錢

重版 科學式新圍碁寶典

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓四拾錢 送本料金十八錢

四版 圖 碁一週間速進法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓四拾錢 送本料金十八錢

新刊 瀨越著 新進爭霸戰

定價九拾錢送本料四錢

再版 瀨越著 圍碁戰術秘鍵

定價九拾錢送本料四錢

再版 瀨越著 圍碁戰術秘鍵

定價九拾錢送本料四錢

再版 瀨越著 圍碁戰術秘鍵

定價九拾錢送本料四錢

名人本因坊秀哉師諱評

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

再版 舊幕府御秘藏碁戰

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

朝報社 名家碁戰

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

六版 圖 碁全集

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

七版 圖 碁定石講話

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

五版 圖 碁中の定石

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

五版 碁置碁必勝法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

四版 圍碁勝敗此の一手

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

三版 圍碁實力養成法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

五版 圍碁襲擊戰法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

五版 圍碁襲擊戰法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

五版 圍碁襲擊戰法

和裝美本箱入二冊 定價金壹圓六拾錢 送本料金十八錢

